

京都府遺跡調査概報

第 86 冊

1. 森垣外遺跡第 2 次
2. 成勝寺跡・岡崎遺跡
3. 畑ノ前遺跡

1 9 9 9

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成9・10年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部・京都府教育委員会の依頼を受けて行った森垣外遺跡、成勝寺跡・岡崎遺跡、畑ノ前遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、精華町教育委員会・京都府木津土木事務所・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年1月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 森垣外遺跡第2次
 2. 成勝寺跡・岡崎遺跡
 3. 畑ノ前遺跡
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

| 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|--------------|---------------------|-------------------------------|----------|-----------------------|
| 1. 森垣外遺跡第2次 | 相楽郡精華町南稲八妻 森垣外 | 平9.11.11～ 平10.3.11 | 京都府土木建築部 | 小池 寛 中村 周平 野島 永 |
| 2. 成勝寺跡・岡崎遺跡 | 京都市左京区岡崎成勝 寺町9番地 | 平10.1.9～3.18 平10.4.22～6.10 | 京都府教育委員会 | 有井 広幸 |
| 3. 畑ノ前遺跡 | 相楽郡精華町大字植田 地内 | 平10.5.1～6.24 | 京都府土木建築部 | 岩松 保 |

本文目次

| | |
|-------------------------|----|
| 1. 森垣外遺跡第2次発掘調査概要----- | 1 |
| 2. 成勝寺跡・岡崎遺跡発掘調査概要----- | 55 |
| 3. 畑ノ前遺跡発掘調査概要----- | 91 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------------|----|
| 1. 森垣外遺跡第2次 | |
| 第1図 調査地位置図----- | 2 |
| 第2図 地区設定およびA1地区・試掘坑位置----- | 4 |
| 第3図 土層断面実測図----- | 4 |
| 第4図 A1地区遺構実測図----- | 5 |
| 第5図 方墳・大壁住居跡・溝・土坑分布図----- | 6 |
| 第6図 方墳10実測図----- | 7 |
| 第7図 土坑135・溝136実測図----- | 7 |
| 第8図 大壁住居跡639実測図----- | 8 |
| 第9図 土坑196実測図----- | 9 |
| 第10図 土坑209実測図----- | 9 |
| 第11図 土坑204実測図----- | 9 |
| 第12図 土器埋納土坑116実測図----- | 10 |
| 第13図 土坑131実測図----- | 10 |
| 第14図 出土遺物実測図----- | 11 |
| 第15図 出土遺物実測図----- | 12 |
| 第16図 出土遺物実測図----- | 14 |
| 第17図 出土遺物実測図----- | 15 |
| 第18図 出土遺物実測図----- | 16 |
| 第19図 出土遺物実測図----- | 17 |
| 第20図 掘立柱建物跡分布図----- | 18 |
| 第21図 掘立柱建物跡1・2・3・4実測図----- | 19 |
| 第22図 掘立柱建物跡5・7・8・9・10・16・17実測図----- | 20 |

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第23図 | 掘立柱建物跡11・12・18・21・26実測図 | 21 |
| 第24図 | 掘立柱建物跡6・23・24・25実測図 | 22 |
| 第25図 | 掘立柱建物跡19・27・28・29実測図 | 23 |
| 第26図 | 柱穴653復原実測図 | 24 |
| 第27図 | 出土遺物実測図 | 25 |
| 第28図 | 竪穴式住居跡分布図 | 26 |
| 第29図 | 竪穴式住居跡17実測図 | 27 |
| 第30図 | 竪穴式住居跡18実測図 | 27 |
| 第31図 | 竪穴式住居跡120・205実測図 | 28 |
| 第32図 | 竪穴式住居跡171・656実測図 | 29 |
| 第33図 | 出土遺物実測図 | 30 |
| 第34図 | 出土遺物実測図 | 31 |
| 第35図 | 出土遺物実測図 | 32 |
| 第36図 | 出土遺物実測図 | 33 |
| 第37図 | 出土遺物実測図 | 34 |
| 第38図 | 出土遺物実測図 | 35 |
| 第39図 | 出土遺物実測図 | 36 |
| 第40図 | 出土遺物実測図 | 37 |
| 第41図 | 出土遺物実測図 | 37 |
| 第42図 | 鎌倉～江戸時代遺構分布図 | 38 |
| 第43図 | 土壙墓192実測図 | 38 |
| 第44図 | 掘立柱建物跡30実測図 | 39 |
| 第45図 | 掘立柱建物跡31・32実測図 | 40 |
| 第46図 | 出土遺物実測図 | 40 |
| 第47図 | B地区以南の試掘坑平板測量図 | 41 |
| 第48図 | B地区以南の試掘坑土層断面実測図 | 42 |
| 第49図 | 掘立柱建物跡主軸方位 | 44 |
| 第50図 | 森垣外遺跡範囲想定図 | 46 |

2. 成勝寺跡・岡崎遺跡

| | | |
|------|-------------|----|
| 第51図 | 調査地位置図 | 56 |
| 第52図 | トレンチ位置図 | 57 |
| 第53図 | 遺構配置図・土層柱状図 | 59 |
| 第54図 | 遺構実測図 | 61 |
| 第55図 | 出土遺物実測図 | 62 |
| 第56図 | 遺構実測図 | 65 |

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 第57図 | S E 531・S K 166・167・196平・断面図 | 66 |
| 第58図 | 出土遺物実測図 | 68 |
| 第59図 | 出土遺物実測図 | 69 |
| 第60図 | 出土遺物実測図 | 70 |
| 第61図 | 出土遺物実測図 | 71 |
| 第62図 | 出土遺物実測図 | 72 |
| 第63図 | 出土遺物実測図 | 73 |
| 第64図 | 出土遺物実測図 | 74 |
| 第65図 | 出土遺物実測図 | 75 |
| 第66図 | 出土遺物実測図 | 76 |
| 第67図 | 出土遺物実測図 | 77 |
| 第68図 | 出土遺物実測図 | 78 |
| 第69図 | 出土遺物実測図 | 79 |
| 第70図 | 出土遺物実測図 | 80 |
| 第71図 | 出土遺物実測図 | 81 |
| 第72図 | 出土遺物実測図 | 82 |
| 第73図 | 出土遺物実測図 | 84 |
| 第74図 | 出土遺物実測図 | 85 |
| 第75図 | 出土遺物実測図 | 87 |
| 第76図 | 出土遺物実測図 | 88 |

3. 畑ノ前遺跡

| | | |
|------|--------------------|-----|
| 第77図 | 調査地位置図 | 91 |
| 第78図 | 調査地位置図 | 92 |
| 第79図 | 調査トレンチ位置図 | 93 |
| 第80図 | 1 トレンチ検出遺構平面図 | 94 |
| 第81図 | 2 トレンチ土層柱状図 | 94 |
| 第82図 | 3・4 トレンチ検出遺構平面図 | 95 |
| 第83図 | 3・4 トレンチ南壁土層柱状図 | 96 |
| 第84図 | 谷内土層実測図 | 96 |
| 第85図 | S K 18実測図 | 96 |
| 第86図 | 土坑・土壇墓実測図 | 97 |
| 第87図 | 3・4 トレンチ出土遺物実測図(1) | 98 |
| 第88図 | 3・4 トレンチ出土遺物実測図(2) | 99 |
| 第89図 | 3・4 トレンチ出土遺物実測図(3) | 100 |
| 第90図 | 3・4 トレンチ出土遺物実測図(4) | 101 |

| | | |
|------|------------------------|-----|
| 第91図 | 3・4トレンチ出土遺物実測図(5)----- | 102 |
| 第92図 | 3・4トレンチ出土遺物実測図(6)----- | 103 |
| 第93図 | 3・4トレンチ出土遺物実測図(7)----- | 103 |
| 第94図 | 3・4トレンチ出土遺物実測図(8)----- | 104 |

付 表 目 次

3. 畑ノ前遺跡

| | | |
|-----|-----------------------------|-----|
| 付表1 | 畑ノ前遺跡3・4トレンチ出土土器観察表----- | 105 |
| 付表2 | 畑ノ前遺跡3・4トレンチ出土瓦類・石器観察表----- | 106 |

図 版 目 次

1. 森垣外遺跡第2次

| | | |
|------|-----------------------------|---------------------|
| 図版第1 | (1)調査地遠景(空中写真、南から) | (2)調査地遠景(空中写真、南西から) |
| 図版第2 | (1)調査地遠景(空中写真、東から) | (2)調査地遠景(空中写真、西から) |
| 図版第3 | (1)調査地遠景(空中写真、上方が東) | (2)検出遺構立体視画 |
| 図版第4 | (1)調査地全景(西から) | (2)調査地南半全景(北東から) |
| | (3)調査地南半全景(北東から) | |
| 図版第5 | (1)方墳10完掘状況(南東から) | |
| | (2)方墳10西辺南壁土層堆積状況(北から) | |
| | (3)方墳10北辺東壁土師器出土状況(西から) | |
| 図版第6 | (1)大壁住居跡639完掘状況(南から) | |
| | (2)大壁住居跡639北辺柱穴完掘状況(東から) | |
| | (3)大壁住居跡639北東隅柱穴完掘状況(南西から) | |
| 図版第7 | (1)大壁住居跡639南辺柱穴完掘状況(東から) | |
| | (2)大壁住居跡639北辺柱穴完掘状況(西から) | |
| | (3)大壁住居跡639北辺柱穴完掘状況(東から) | |
| 図版第8 | (1)大壁住居跡639南東隅柱穴完掘状況(北西から) | |
| | (2)大壁住居跡639北東隅柱穴完掘状況(南西から) | |
| | (3)大壁住居跡639北東隅西側柱穴完掘状況(南から) | |

- 図版第9 (1)土坑204土層堆積状況(北西から)
(2)土坑196土層堆積状況(西から)
(3)土坑206土層堆積状況(南西から)
- 図版第10 (1)土坑131遺物出土状況(南東から)
(2)土坑131遺物出土状況(南西から)
(3)土坑131砥石出土状況(北から)
- 図版第11 (1)掘立柱建物跡4・5および溝127・129・130検出状況(北東から)
(2)掘立柱建物跡1～4検出状況(北東から)
(3)掘立柱建物跡3検出状況(北東から)
- 図版第12 (1)土器埋納土坑116須恵器・甕出土状況(東から)
(2)土器埋納土坑116須恵器・甕出土状況(東から)
(3)柱穴58土師器埋納状況(西から)
- 図版第13 (1)馬歯埋納坑8検出状況(北から) (2)馬歯埋納坑8馬歯接写
(3)柱穴155土師器・壺出土状況(西から)
- 図版第14 (1)柱穴154柱根検出状況 (2)柱穴63礎板検出状況(南東から)
(3)柱穴64礎板検出状況(南東から)
- 図版第15 (1)柱穴653臚出土状況(東から) (2)柱穴653高杯出土状況(東から)
(3)土坑132遺物出土状況(東から)
- 図版第16 (1)竪穴式住居跡17・18・171・656検出状況(北東から)
(2)竪穴式住居跡17検出状況(北西から)
(3)竪穴式住居跡17遺物出土状況(南西から)
- 図版第17 (1)竪穴式住居跡18検出状況(北東から)
(2)竪穴式住居跡171・656検出状況(北東から)
(3)竪穴式住居跡171炭化材出土状況(北東から)
- 図版第18 (1)竪穴式住居跡120・205検出状況(北東から)
(2)竪穴式住居跡120南西突出部遺物出土状況(北東から)
(3)竪穴式住居跡120南西突出部移動式竈出土状況(北東から)
- 図版第19 (1)掘立柱建物跡30検出状況(北から) (2)土坑145磔検出状況(東から)
(3)土壙墓192遺物出土状況(東から)
- 図版第20 (1)試掘1トレンチ遺構検出状況(西から)
(2)試掘5トレンチ遺構検出状況(西から)
(3)試掘6トレンチ遺構検出状況(東から)
- 図版第21 (1)試掘7トレンチ遺構検出状況(東から)
(2)試掘9トレンチ断ち割り状況(東から)
(3)試掘11トレンチ第4層南限検出状況(北東から)

- 図版第22 出土遺物(1)
 図版第23 出土遺物(2)
 図版第24 出土遺物(3)
 図版第25 出土遺物(4)
 図版第26 出土遺物(5)
 図版第27 出土遺物(6)
 図版第28 森垣外遺跡の花粉化石

2. 成勝寺跡・岡崎遺跡

- 図版第29 (1)調査地周辺(上が北) (2)トレンチ全景(平成9年度、上が東)
- 図版第30 (1)調査前風景(平成9年度、東から) (2)調査前風景(平成10年度、東から)
 (3)調査地遠景(南から) (4)調査地遠景(西から)
- 図版第31 (1)平成10年度全景(東部分・北から) (2)平成10年度全景(南東部分・南から)
 (3)平成10年度全景(南部分・東から) (4)平成10年度(北側部分・東から)
- 図版第32 (1)平成9年度北壁東側(南西から) (2)平成10年度東壁中央(南西から)
 (3)平成10年度南壁中央上層(北東から) (4)平成10年度南壁中央下層(北から)
- 図版第33 (1)竪穴式住居跡群全景(南から) (2)SH197完掘状況(北東から)
 (3)SH204掘削状況(南西から) (4)SH198完掘状況(西から)
- 図版第34 (1)SH169完掘状況(南から) (2)SH169竈東側遺物出土状況(南から)
 (3)SH157掘削状況(南から) (4)SH177掘削状況(東から)
- 図版第35 (1)SB11掘削状況(西から) (2)SB43全景(南から)
 (3)SB80全景(東から) (4)SB631全景(東から)
- 図版第36 (1)SE165完掘状況(東から) (2)SE165井戸枠出土状況(西から)
 (3)SE01完掘状況(南から) (4)SE01底付近竹出土状況(南から)
- 図版第37 (1)SE01井戸枠断面(南から) (2)SE531完掘状況(東から)
 (3)SK166掘削状況(東から) (4)SK160遺物出土状況(西から)
- 図版第38 (1)沼状地形全景(南から) (2)沼状地形断面(北西から)
 (3)沼状地形遺物出土状況(南東から) (4)沼状地形遺物出土状況(南から)
- 図版第39 (1)SK532完掘状況(南から) (2)SD516・517断面(南から)
 (3)試掘トレンチ全景(北から) (4)試掘トレンチ完掘状況(北から)
- 図版第40 出土遺物(1)
 図版第41 出土遺物(2)
 図版第42 出土遺物(3)
 図版第43 出土遺物(4)
 図版第44 出土遺物(5)
 図版第45 出土遺物(6)

- 図版第46 出土遺物(7)
 図版第47 出土遺物(8)
 図版第48 出土遺物(9)
 図版第49 出土遺物(10)
 図版第50 出土遺物(11)
 図版第51 出土遺物(12)
 図版第52 出土遺物(13)
 図版第53 出土遺物(14)
 図版第54 出土遺物(15)

3. 畑ノ前遺跡

- 図版第55 (1) 1 トレンチ全景(南から) (2) 2 トレンチ北壁土層(南から)
 (3) 3 トレンチ内検出流路(南から)
- 図版第56 (1) 3・4 トレンチ全景(東から) (2) 3・4 トレンチ全景(北西から)
 (3) 3・4 トレンチ谷部全景(北北東から)
- 図版第57 (1) 3・4 トレンチ S K02検出状況
 (2) 3・4 トレンチ S K24検出状況(南南東から)
 (3) 3・4 トレンチ S K08検出状況(北から)
- 図版第58 (1) 3・4 トレンチ S K22検出状況(北東から)
 (2) 3・4 トレンチ S K18検出状況(北東から)
 (3) 3・4 トレンチ平坦部西半遺構検出状況
- 図版第59 (1) 3・4 トレンチ S D23検出状況(北西から)
 (2) 3・4 トレンチ S D23検出状況(東から)
 (3) 3・4 トレンチ谷部上端部(北東から)
- 図版第60 畑ノ前遺跡出土遺物

1. 森垣外遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町南稲八妻森垣外に所在する古墳時代中期後半から後期にかけての集落遺跡である。この遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部が施工する山手幹線街路整備事業に伴う事前調査であり、範囲を確認するために平成8年度に第1次調査が実施された。

ここに報告する森垣外遺跡の第2次調査では、面的調査を実施したA1地区と遺跡の範囲を確定する目的で設定した試掘坑の合計約1800㎡の調査を行った。また、発掘調査は、平成9年11月11日から平成10年3月11日にかけて実施するとともに、平成10年2月20日に雨天ではあったが現地説明会を開催し、30名の参加者を得た。

森垣外遺跡の第2次調査については、当調査研究センター刊行の『京都府埋蔵文化財情報』第68号に調査成果と問題点の指摘を行った。また、各検出遺構に付した番号は、現地調査時点に付した遺構番号を踏襲している。なお、掘立柱建物跡については、建物跡として復原した過程により、わずかながら修正を加えており、本概要報告において使用する番号を今後も踏襲する。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同調査員小池寛、中村周平、野島 永が担当した。一方、遺物整理は、小池、野島が担当し、同4係調査員松尾史子の協力があつた。また、本概要報告は、地理的・歴史的環境を中村・小池が執筆し、他を小池が執筆し、これを野島が補佐し、総括・編集は小池が担当した。

本概要報告の巻末には、当該遺跡から出土した陶質土器及び須恵器の産地同定の分析結果と花粉分析についての報告を掲載した。花粉分析は、(株)パレオ・ラボに業務委託を行い、提出された報告文の一部について、小池が補足説明を挿入した。

最後に、調査期間中、木津土木事務所及び精華町教育委員会をはじめ、多くの関係者の方々からご協力を得た。特に、奈良教育大学、三辻利一教授には、公務ご多忙の中、早々に分析データと玉稿を賜わった。記して御礼を申し述べたい。

2. 位置と環境

(1) 地理的環境(図版第1・2)

森垣外遺跡は、西方の田辺丘陵と東方を北流する木津川に挟まれた低地帯のほぼ中間に位置する。木津川の左岸流域一帯は、河川の氾濫により形成された狭小な平野部が広がり、丘陵より流れ込む小河川により扇状地形が形成されている。森垣外遺跡は、南東から北東にかけて緩やかに傾斜する傾斜地上に位置している。

本遺跡周辺の地形は、遺跡の北端には南西から北東にかけて流れる旧流路の存在が確認されており、南端では東方に派生するに丘陵に沿って谷状の地形が観察できる。森垣外遺跡の最高所は、

C地区中央部で標高45mを測り、最も低い遺跡北端部では標高39mを測る。比高差は概ね6mであり、遺跡の最高所から城陽市域の南半部を含む南山城一帯を一望することができる。古代において集落を営む条件としては好条件であったことが容易に推測できる。

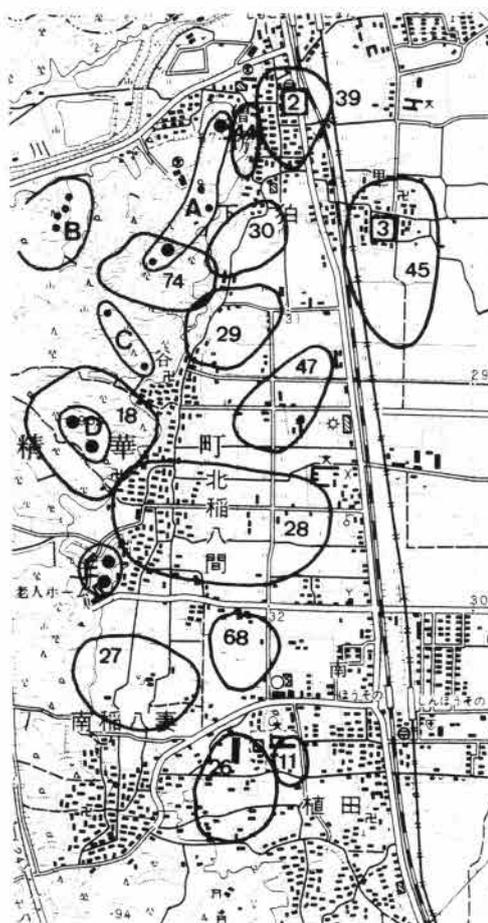
(2) 歴史的環境(第1図)

森垣外遺跡の北西丘陵部には、大谷古墳群、鞍岡山古墳群、城山古墳群、国名平古墳群などが所在し、南方には畑ノ前古墳群、畑ノ前東古墳群などが点在している。大谷古墳群が所在する菓師山では、川西編年Ⅱ期の円筒埴輪が採取されており、4世紀後半の古墳の存在を示唆している。また、鞍岡山3号墳からは亀龍鏡が出土しており、鞍岡山古墳群が所在する丘陵からは、土師質亀甲形の陶棺が出土している。一方、城山古墳からは、陶邑編年MT15型式に比定できる須恵器が出土しており、森垣外遺跡と時期的に併存する。

国名平1号墳では、滑石製刀子が出土しており、中期古墳の存在が確認されている。また、畑ノ前古墳群では、丘陵に7基の古墳群が確認されており、TK209からTK217に比定できる須恵器が出土するとともに、7号墳からは鉄鉾が出土している。

以上が、森垣外遺跡周辺の古墳の概観であるが、八幡市域や城陽市域及び木津町域のように古墳群が集中的に築造される地域ではないことが理解される。なお、森垣外遺跡の北東には、野見宿禰の墳墓推定地である丸山古墳伝承地が所在している。詳細については、『精華町史』^(注1)に詳述されているが、考古学的調査の結果、古墳ではないことが確認されている。

一方、森垣外遺跡と同じ古墳時代の集落遺跡としては、北稲遺跡、柿添遺跡、北尻遺跡が挙げられる。北稲遺跡は、古墳時代前期末から中期にかけての集落跡で、数基の竪穴式住居跡や土坑・溝から布留式土器が出土している。特に、赤褐色で軟質焼成の格子叩き目をもつ韓式系の土師器が出土しており、外来系遺物として重要である。^(注2) 柿添遺跡は、古墳時代前期末から中期にかけての集落跡で、小規模な掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、土坑、溝などが確認されている。中でも古墳時代中期末の竪穴式住居跡内とそれに隣接する溝から4点の琥珀製繫玉が出土している。^(注3) また、2点の滑石製有孔円板とミニチュアの手捏ね土器は、集落内において行われた宗教的行為^(注4)を示唆している。最後に、



第1図 調査地位位置図(1/25,000)

- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 26: 森垣外遺跡 | 2: 下粕廃寺 | 3: 里廃寺 |
| 11: 祝園遺跡 | 18: 城山遺跡 | 27: 南稲遺跡 |
| 28: 北稲遺跡 | 29: 片山遺跡 | 30: 下馬遺跡 |
| 31: 拝殿遺跡 | 44: 鞍岡山遺跡 | |
| 45: 里遺跡 | 47: 柿添遺跡 | 68: 北尻遺跡 |
| 74: 大福寺遺跡 | A: 鞍岡山古墳群 | |
| B: 大谷古墳群 | C: 石塚古墳群 | |
| D: 城山古墳群 | E: 国名平古墳群 | |

(古墳以外、『京都府遺跡地図』第5分冊に準拠)

北尻遺跡は、古墳時代前期から中期にかけての遺跡であり、自然流路から布留式土器が出土している。流路の南辺では礫敷の溝状遺構を確認しており、水辺で行われた宗教的行為に関する遺構である可能性も指摘されている^(注5)。

なお、南山城南半部には、上狛(かみこま)、下狛(しもこま)の地名があり、また、高麗寺(こまでら)など、高句麗を示す狛(こま)の名が見える。当該地域は、『和名抄』郡郷部に、山城国相楽郡大狛郷、下狛郷と見え、古代、高句麗系氏族狛氏の拠点であったと推測されるところである。南山城と高句麗系渡来人との関係については、『新撰姓氏録』山城国諸蕃に、黄文連、高井造、狛造など、南山城との関係を窺わせる高句麗系氏族の名が見え、古代、南山城一帯に、高句麗を中心とする渡来系氏族が居住していたことを推察させる。また、『日本書紀』欽明天皇31年条には山城国の相楽館の記事が、同欽明天皇26年5月条、『三代実録』貞観3年8月19日条には、6世紀代、高句麗系渡来人が、山城国に居住していたことを窺わせる記事が見え、両者の関わりが、6世紀代にまで遡り得る可能性があることを推察させる。

3. A 1 地区の調査の概要(第2図・図版第3・4)

森垣外遺跡の発掘調査は、道路建設に伴う事前調査であるため、調査対象地は、南北に細長く、やや湾曲している。個々の調査地を示しやすいように地区の呼称は、便宜的に町道で区画された3地域を北からA・B・C地区とした。

森垣外遺跡の発掘調査は、後述する試掘結果などから、A～C地区のほぼ全面に広がりを見ることが把握できており、単年度において発掘調査を終了することができない状況である。そのため各地区での調査年度が簡便に把握できるように、トレンチ名称は、A～C地区の末尾に枝番号を付して表示した。また、トレンチが、複数の筆に及ぶ場合は、さらに、枝番号を付した。

平成9年度の発掘調査は、A1地区を対象として調査を実施した。A1地区は、16・17・18・23・26番地に分割されているが、各番地で区画された範囲が不整形であることから、本概要では、特に、番地名での記述は行わなかった。

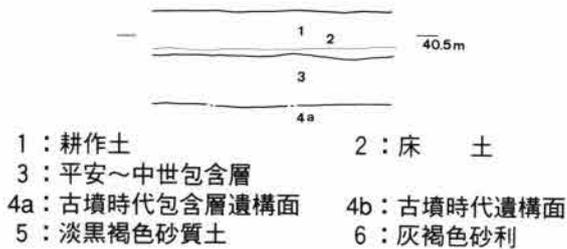
なお、試掘調査については、主に、B・C地区の遺構・遺物の広がりを確認する目的で、総計11か所に3×3mないしは4×4mの試掘坑を設定し実施した。その結果、古墳時代の包含層及び遺構検出面である暗茶褐色土(第4層)の広がりが、11トレンチ中央部以北において確認できた。このことは、遺跡の範囲を確定することと、次年度以降の調査計画を設計する根拠にもなった。この試掘調査結果については京都府教育委員会指導部文化財保護課技師により確認済みである。

(1) 層位(第3図)

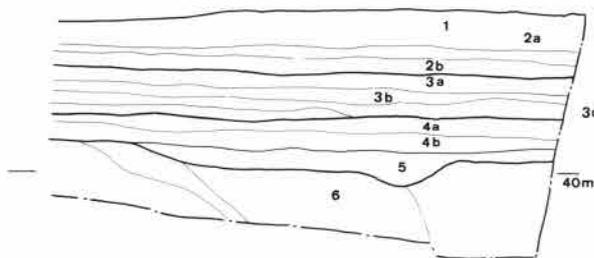
A1地区は北東にゆるやかに傾斜しており、19世紀に行われた新田開発による平坦化により、各筆毎の南半の削平は著しく、北半の遺物包含層の残存状況は良好である。基本的には、水田耕作の耕作土(第1層)が均一に堆積し、直下に、床土(第2層)が堆積している。また、床土下には、中世の遺物包含層である第3層が、約20～30cm堆積している。古墳時代の遺物包含層及び遺構検



第2図 地区設定およびA1地区・試掘坑位置図



断面A



断面B



第3図 土層断面実測図

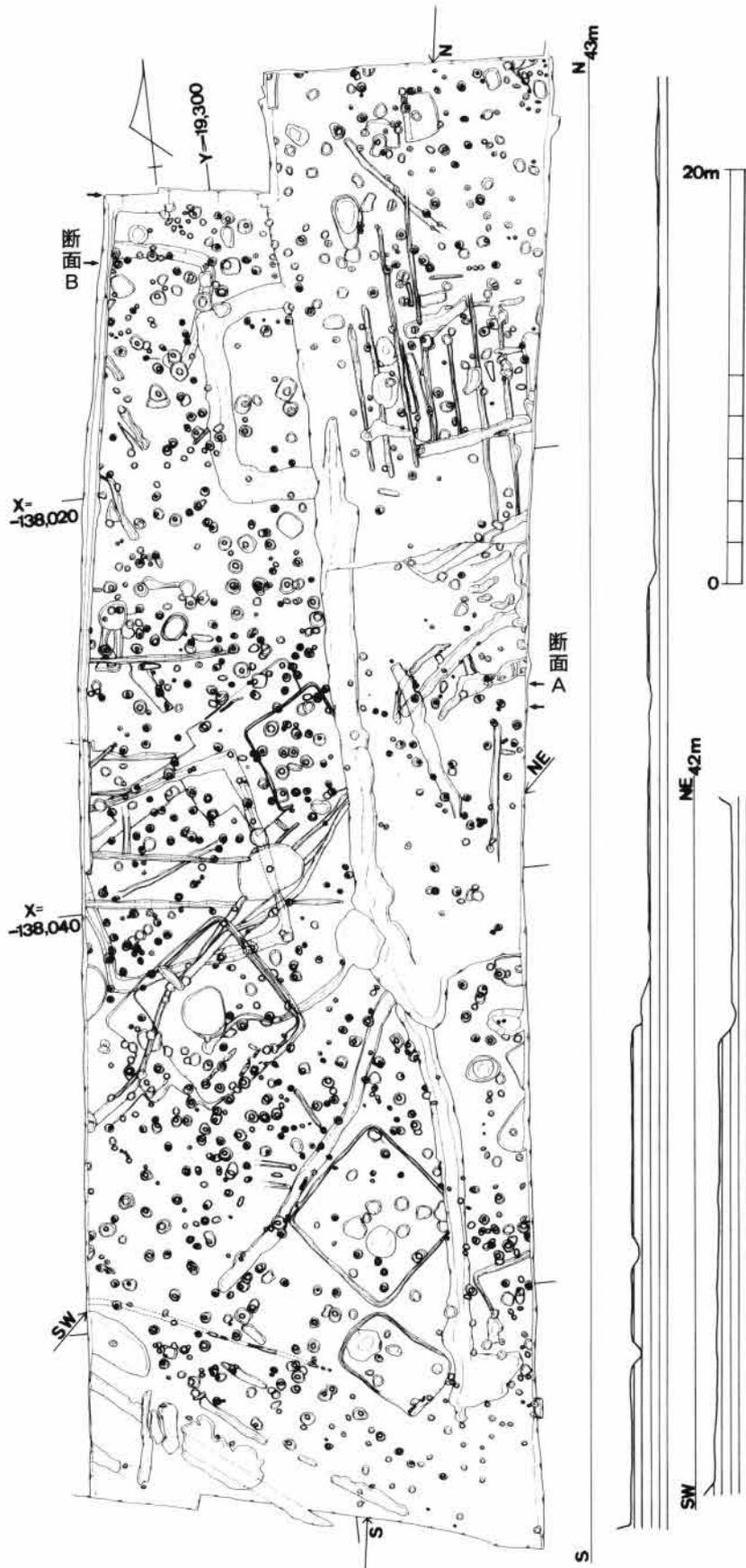
出面である暗茶褐色土(第4層)は、第3層下に不均一に堆積している。先述したように、新田開発による削平を受けた部分では、既に第4層は堆積しておらず、トレンチ北西部分では、厚いところで30~40cm堆積している。特に、第4層は、暗茶褐色土が上層に堆積し、それよりやや明るい色調を呈する層に分層することができる。前者を第4a層、後者を第4b層として認識した。第4a層には、多量の遺物を包含しており、遺構の一部を検出したが、多くの遺構は、第4b層において検出した。第4a層及び第4b層は、堆積時期の新旧関係を示すが、双方にほぼ同型式の須恵器を含んでいることから、堆積した環境は異なるものの、堆積時期は、かなり接近していたと考えておきたい。

なお、第4b層下には、茶褐色砂層が堆積し、部分的には還元粘土の堆積も見られるが、地表下0.8~1mには、淡黒褐色粘土が、約0.3m程度堆積している。遺構・遺物の有無を確認するために、面的調査を実施したが、結果的には、遺構検出はできなかった。層中から磨滅した土器細片がわずかに出土しており、弥生時代の堆積層として認識した。特に、第4b層では、弥生中期の高杯形土器312が出土していることから、それ以前の堆積である可能性が指摘

できる。なお、淡黒褐色粘土層下には河川による砂・砂利・礫の互層の堆積が確認できたが、これは、遺跡の北限を東流する流路内の流水による堆積と考えられる。

(2) 古墳時代の遺構・遺物(第4図)

今回の森垣外遺跡の発掘調査では、極めて多くの遺構が密集することが把握できた。しかし、大壁住居跡・竪穴式住居跡・土坑・溝・方墳からは概ね年代を把握できる土器資料を確認することができ、700を数える柱穴からは、TK216型式に比定できる窟が出土しており、また、TK208～TK47型式に比定できる資料もわずかではあるが出土している。他方、MT15・TK10～TK209型式に比定できる須恵器も出土しており、各掘立柱建物跡の構築年代を正確に把握できない状況下にある。そのため、掘立柱建物跡と同時併存する竪穴式住居跡・土坑・溝を明確に提示できないのが現況であるた



第4図 A1地区遺構実測図

め、遺構の記述については、方墳・大壁住居跡・土坑・溝を先ず概観し、次に、掘立柱建物跡群について記述していきたい。また、竪穴式住居跡についての記述の後、中近世関係の遺構・遺物を概観することにする。なお、掘立柱建物跡と他の遺構の並行関係については、次年度以降の調査成果と合わせて詳細に検討する課題としておきたい。

A1地区において検出した遺構は、古墳時代前期末から中期初頭に築造された方墳10、古墳時代中期の大壁住居跡639、古墳時代中期から後期に比定できる柱穴群、古墳時代後期を中心とする

竪穴式住居跡17・18・120・133・134・171・205・208・398・656と土坑・溝などである。

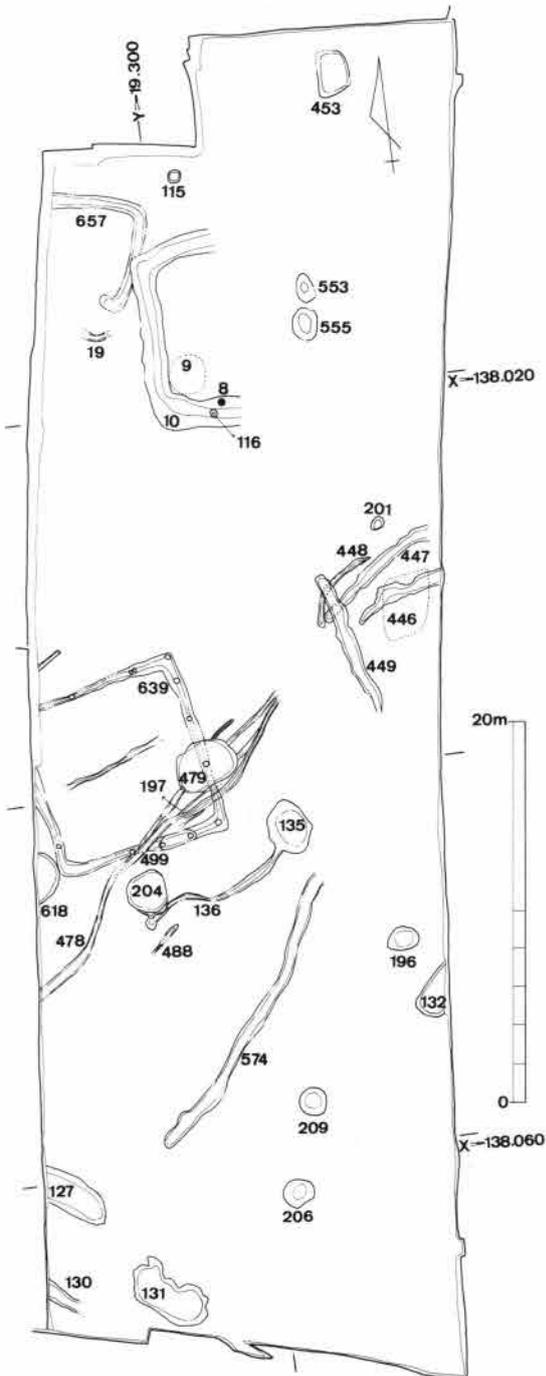
まず、第5図に集約した遺構群と遺物について概観する。

a. 方墳(第5・6図、図版第5)

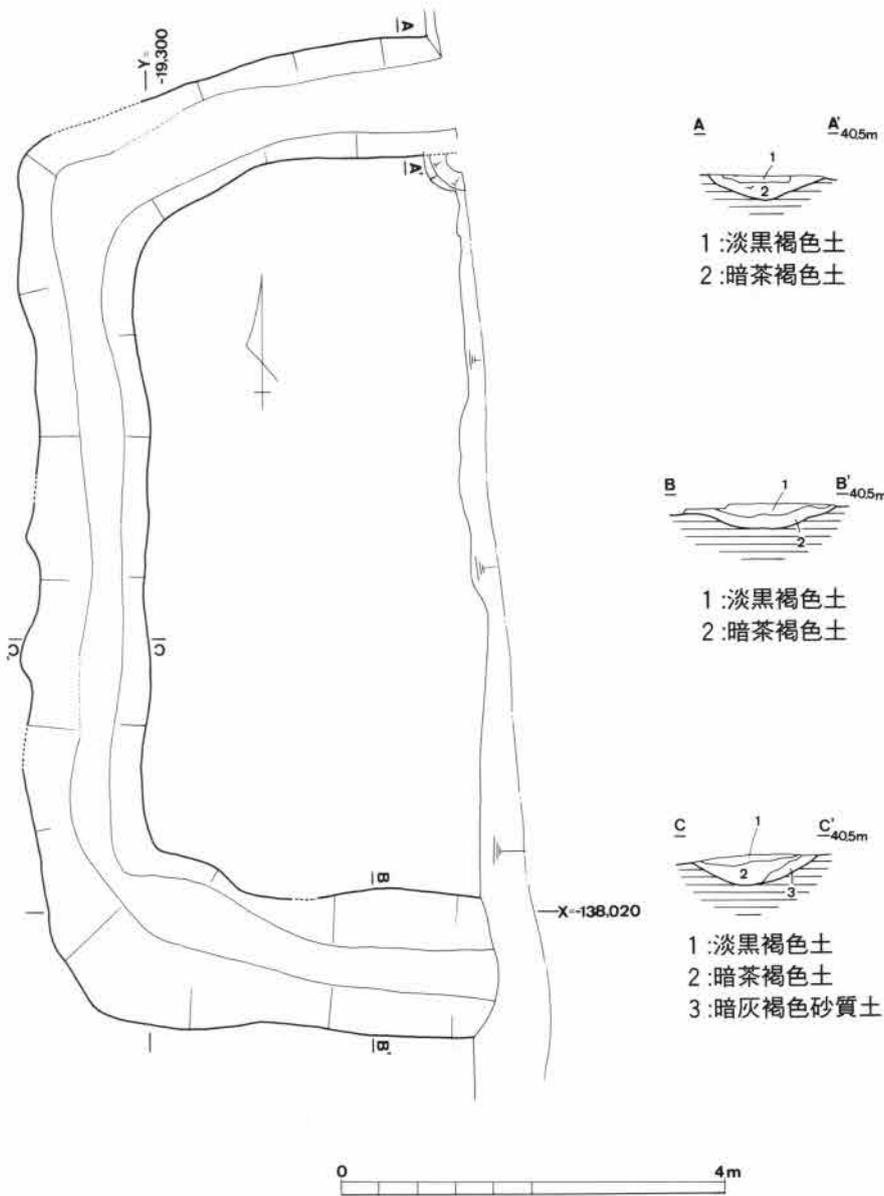
調査地北方では、小型丸底壺の系譜を引く土師器が出土した方墳10とそれに切られる方形溝657を検出した。方墳10は、北辺溝と南辺溝の最深部間で約9.5mを測り、深さは、0.3~0.4mを測る。元来、9.5m四方の方形溝を呈すると見られるが、筆界の溝と江戸時代の新田開発により、東半は、既に消失している。溝は、舟底状を呈しており、基本的には、最下層に暗茶褐色土層が堆積し、最上層には淡黒褐色土が堆積している。北辺溝の下層から土師器(第14図1・2)が出土した。溝内から須恵器は出土しておらず、また、土師器の形態から中期初頭に築造されたと考えておきたい。一方、方形溝657は、溝10に一部切られて検出しており、東辺で5mを測る。北辺には溝を検出し得たが、南辺には溝が存在しないことから、積極的に方墳と規定できない状況である。溝内からの出土遺物は確認できなかったため、溝の掘削時期は不明である。

b. 溝(第5・7図)

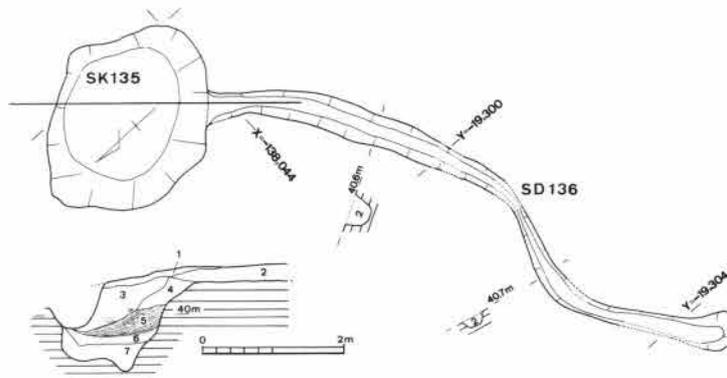
古墳時代に比定できる溝は、概ね地形の傾斜に沿った主軸をもち、一時的に集落内に溜まった雨水を排水する目的で開削されたと考えられる。中でも、溝136(第7図)は、竪穴式住居跡171ないし656の床面において検出した蛇行する溝である。



第5図 方墳・大壁住居跡・溝・土坑分布図



第6図 方墳10実測図



第7図 土坑135・溝136実測図

- 1: 濁茶褐色砂質土 2: 淡黒褐色土 3: 暗灰褐色粘土 4: 濁暗灰褐色土
5: 灰褐色砂・淡黒褐色粘土の互層 6: 濁黒褐色粘土 7: 淡黒褐色粘土

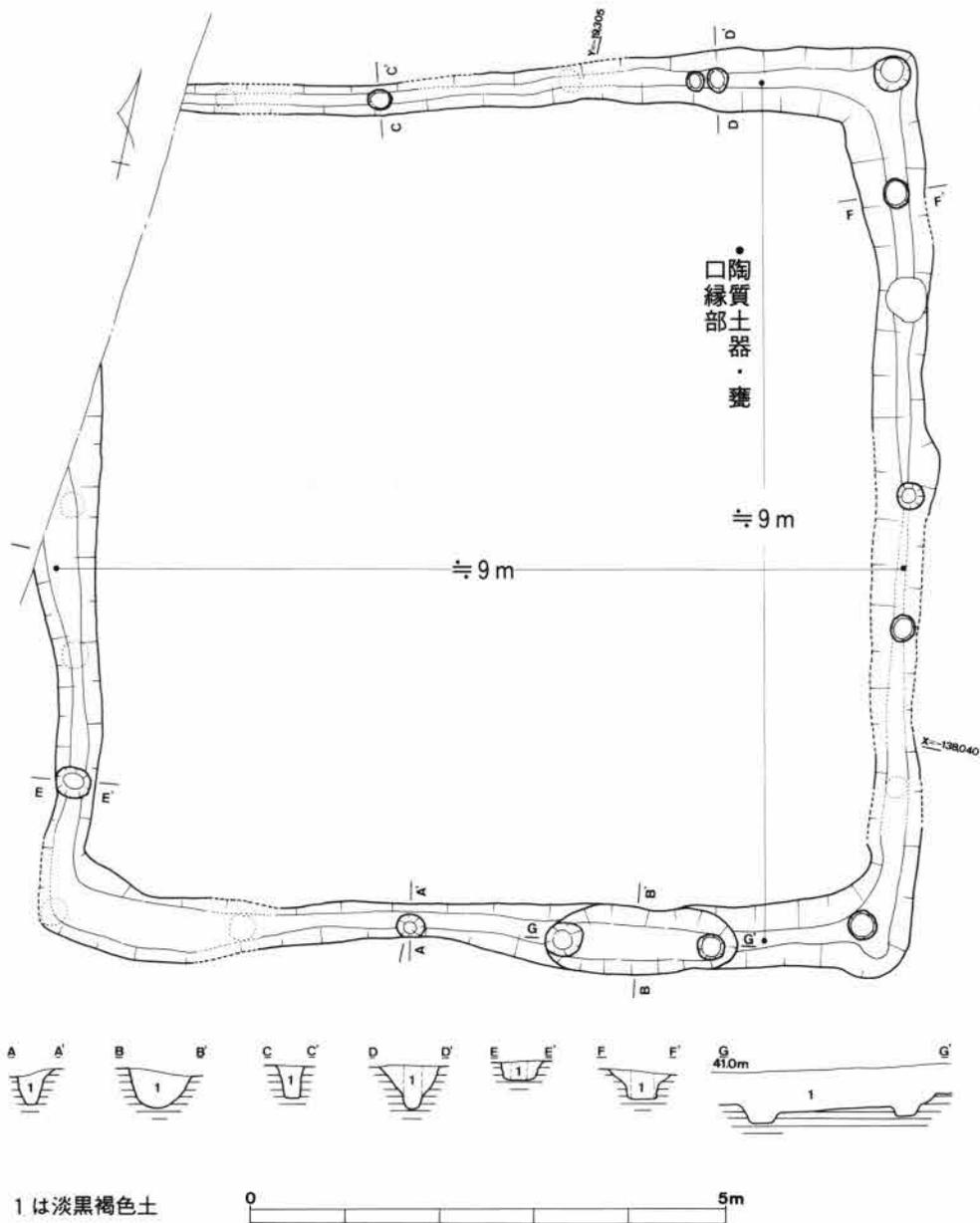
最大幅は0.4mで、深さは0.2~0.3mを測る。溝は、直径約2m・深さ約1.5mの不整な円形の土坑135に流れ込んでい

る。土坑135は、粘土と粘土に挟まれるように細砂層が0.3m堆積しており、その細砂層は、少なくとも十数層に分層することができる。土層断面の観察から溝136と土坑135は、一連の施設であった可能性が高い。現時点では、明確な出土遺物が確認できていないが、竪穴式住居跡171ないし656の付属施設であった可能性も指摘できる。今後、類例を修正する必要がある。なお、溝574からは、第14図31の須恵器の器台が出土している。

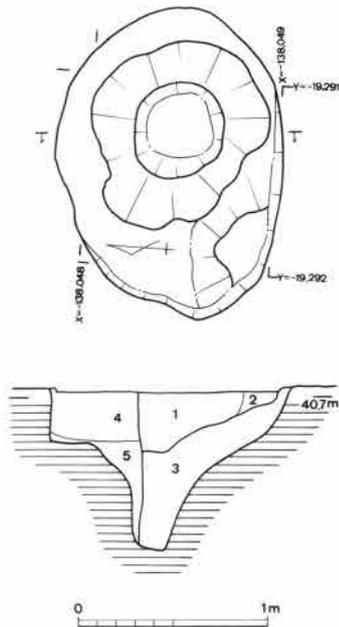
c. 大壁住居跡639(第8図、図版第6~8)

先述した第4b層において検出した遺構で、一辺約9m・深さ0.4mの方形の

基礎の布掘り溝がめぐっている。溝には淡黒褐色土が単一で堆積しており、人為的に埋められたと考えられる。一方、溝内底部には南北辺5間・東西辺6間の柱穴が等間隔に穿たれており、特に、南辺東隅から2間目部分が深く掘り込まれていることから、扉などの重量のある施設が付設されていた可能性が高い。なお、布掘り溝で囲まれた内側には、わずかな盛り土が観察でき、第14図22～27の須恵器群が出土している。また、基礎の布掘り溝内の柱穴上位から土師器の壺(第27図140)が出土している。仮に、これら須恵器群に年代設定の根拠を求めた場合、TK47～MT15型式に比定できる。しかし、大壁住居跡639は、確実に竪穴式住居跡120・171・656の下層において検出した遺構であり、これらの竪穴式住居跡群からも、ほぼ同型式の須恵器が出土していることから、少なくともMT15型式以前に構築された遺構とすべきである。なお、盛り土から出土

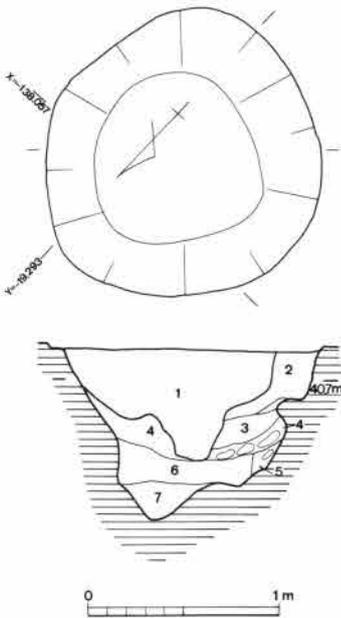


第8図 大壁住居跡639実測図



第9図 土坑196実測図

- 1: 暗茶褐色土
- 2: 暗灰褐色土
- 3: 濁淡黒褐色粘質土
- 4: 暗茶褐色砂質土
- 5: 濁暗茶褐色土



第10図 土坑209実測図

- 1: 濁暗茶褐色土
- 2: 濁淡黒褐色粘土
- 3: 淡黒褐色粘土
- 4: 濁暗茶褐色土
- 5: 4層より明るい
- 6: 淡黒褐色粘土
- 7: 黒褐色粘土

した須恵器群が、年代設定の最大の根拠である。ここでは、大壁住居跡639南隣接地点で検出した土坑204の出土遺物に注目しておきたい。土坑204からは、基本的にMT15～TK10型式に比定できる須恵器が主体を占めているが、第15図34のみTK23型式に比定できる。この土器は、土坑を掘り込む際、原位置から移動した可能性があり、元来、大壁住居跡639の構築時期を示す可能性も視野に入れておきたい。

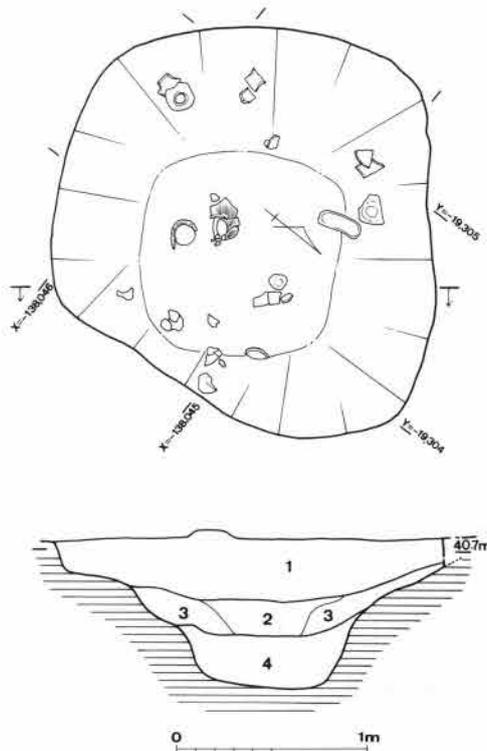
d. 土坑

調査地内では多くの土坑を検出したが、中でも特徴的な6基の土坑について概観しておきたい。

土坑196(第9図、図版第9-(2)) 長径1.7m・短径1.2mの不整な楕円形を呈しており、中央部には、直径約0.2m・深さ0.8mの円形の掘り込みがある。中央部北側は、直線的に掘り込まれており、南側は傾斜していることから、柱などを抜き取った可能性が指摘できる。土坑内から須恵器・土師器が出土している。第15図49の須恵器の杯蓋からTK10～TK43型式に比定できる。

土坑209(第10図) 直径約1.5mの不整な円形土坑であり、最も

深い部分は約0.9mを測る。埋土中には、黄褐色土の地山ブロックが混入していることから、人為的に埋め戻されたと考えられるが、その後、中央部を0.6mに掘り窪めた跡が断面観察から認められる。土坑内からMT15型式に比定できる第15図48の須恵器の杯蓋が出土している。この土坑の用途については、不明な点が多いが、出土遺物もわずかであることから、廃棄を目的とした土坑とは考えら

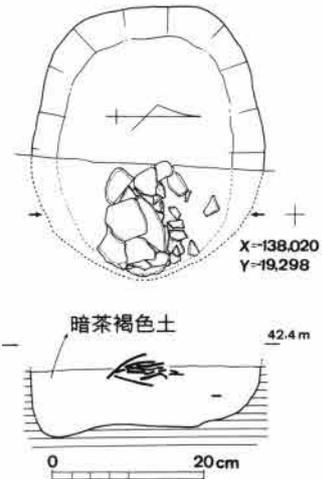


第11図 土坑204実測図

- 1: 暗茶褐色粘質土
- 2: 濁淡黒褐色粘質土
- 3: 濁暗茶褐色土
- 4: 淡黒褐色粘土

れず、井戸などの施設であった可能性が高い。

土坑204(第11図、図版第9-(1)) 南北2m・東西2.1mを測る隅丸の方形土坑である。最も深い部分で0.8mを測り、土坑底部は、0.7m四方の隅丸方形に掘り込まれている。土坑の堆積状況は、最深部に約0.3mの淡黒褐色粘土が単一で堆積し、その上層には、中央部が窪むように2層が堆積しており、さらに最上層には、0.4mの暗茶褐色粘質土が堆積している。土坑内からは、須恵器や土師器(第15図32~46)が出土している。出土遺物は、主に最上層からの出土が多く、当初は、井戸などの機能があったとも考えられる。出土遺物中、TK23型式に比定できる須恵器の杯34も見られるが、それ以外は、概ね、TK10型式に比定できる。

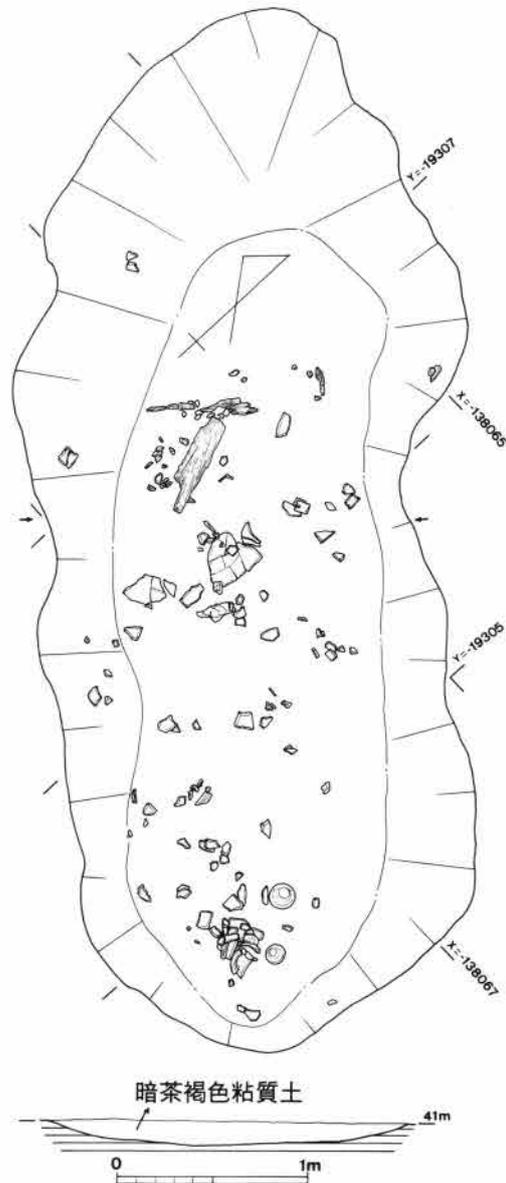


第12図 土器埋納土坑116実測図

土器埋納土坑116(第12図、図版第12-(1)・(2))

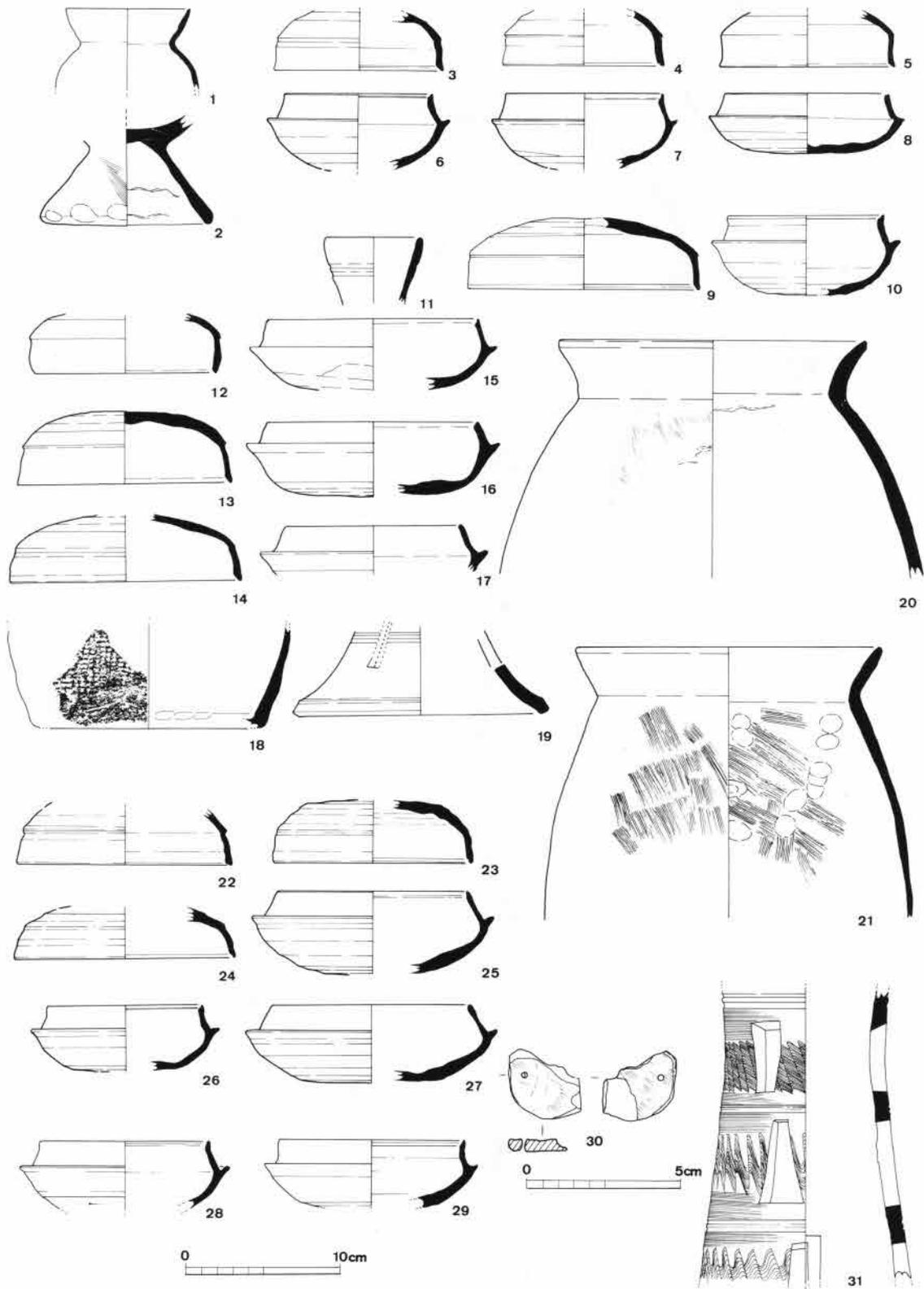
先述した方墳10の最上層に穿たれた土坑である。復原長径0.35m、短径0.3mの規模を測り、深さは8cmである。土坑の埋土は、暗茶褐色土の単一層であり、陶質土器と思しき甕(第15図51)が、埋納されていた。甕の口縁部は、土坑内からは出土しておらず、故意に打ち欠いた後に埋納されたと考えられる甕の胴体部は土圧により重なり合って出土している。

土坑131(第13図、図版第10) トレンチの最南端で検出した不整形な土坑である。基本的な平面プランは、不整な楕円形を呈しており、長軸5.5m・短軸2mを測る。土坑の深さは、わずか0.1mを測るに過ぎない。土坑の埋土は、基本的には暗茶褐色粘質土の単一層であるが、色調が黒色化している部分も見られる。土坑内には、遺物が点在しており、土坑底面には加工を施した木板が出土している。土坑内から杯・短頸壺・甕・高杯・甕などの須恵器とともに、陶質土器の中でも縄文土器と呼ばれる甕やと扁平で穿孔部をもつ砥石が出土している(第17図99)。遺物の出土状況から廃棄を目的とした土坑と考えて良い状況である。



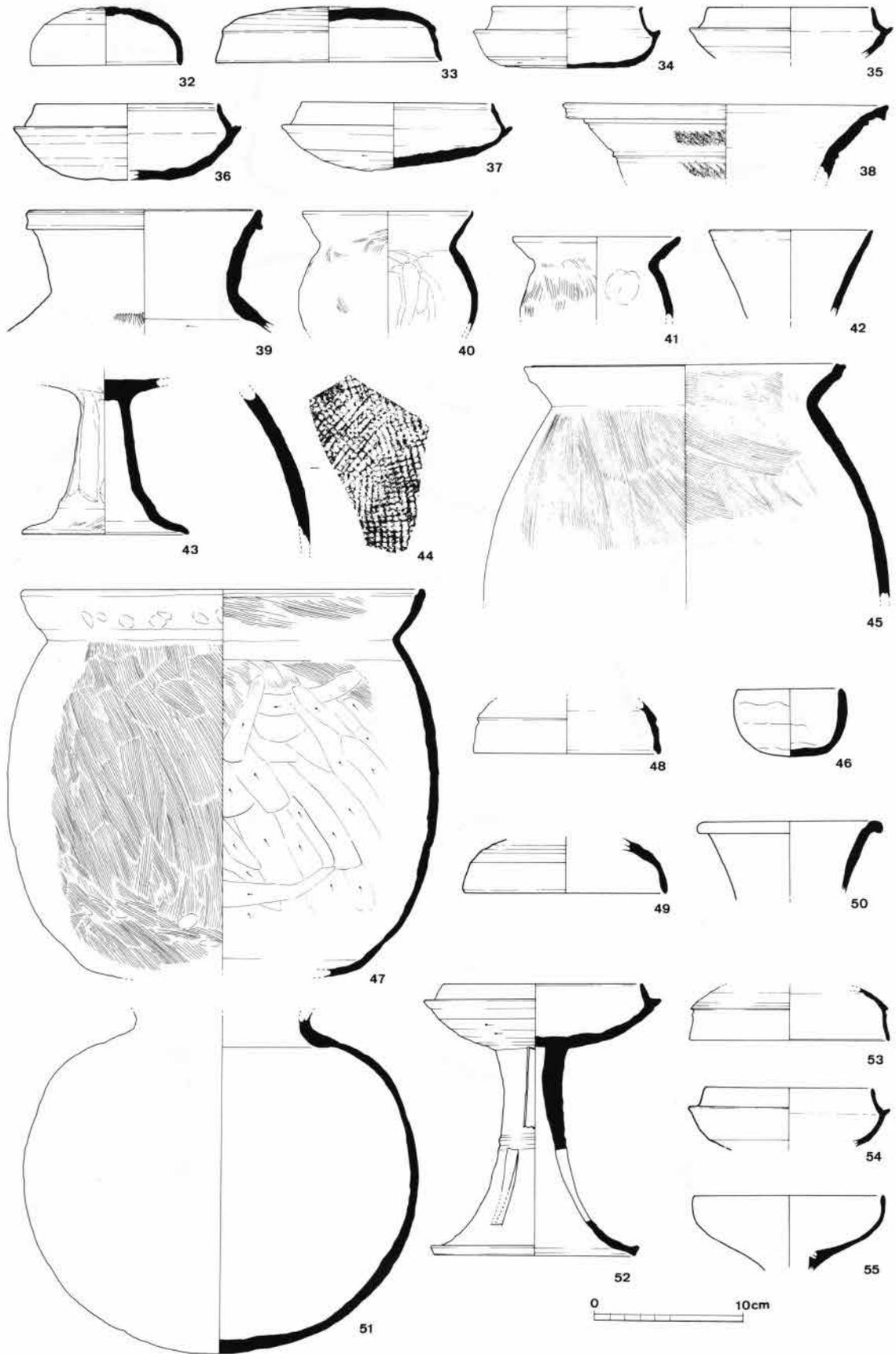
第13図 土坑131実測図

馬歯埋納坑8(図版第13(1)・(2)) 方墳10の南辺溝最上層に掘り込まれたピットで、直径約0.3mを測る。A1地区において馬歯の埋納が唯一確認でき



第14図 出土遺物実測図

1・2:方墳10 3～8:溝447 9:溝448 10:溝488 11～20:溝130 21:溝499 22～27:大壁住居跡639
28:溝19 29・30:溝197 31:溝574



第15図 出土遺物実測図

32~46:土坑204 47・48:土坑209 49・50:土坑196 51:土器埋納土坑116 52:溝127 53:土坑453
54:土坑618 55:土坑206

たピットであり、何らかの宗教的行為に伴う遺構である。その他、図化できる遺物が出土している土坑として、115・132(図版第15(3))・201・453・479・553・555・618などがある。土坑の配置は第5図を参照頂きたい。

次に、第5図に掲載した遺構出土の主な遺物について概観しておきたい。

方墳10出土遺物(第14図1・2) 1は、口径8cmの小型丸底土器の系譜を引く土師器の小型壺である。2は、台付甕あるいは鉢の脚台である。須恵器が出土していないが、典型的な小型丸底壺ではないことから、須恵器出現前後の時期に比定しておきたい。

溝447出土遺物(第14図3～8) 須恵器の杯蓋は、口径11～11.6cmを測る。稜は鈍く、内傾する口縁端部は沈線化する。一方、杯は、口径が9.6～10.4cmを測る。内傾する口縁端部は、沈線化する6・7と丸く仕上げる8に分類できる。蓋5と杯8のセット関係を復原しうる。MT15型式に比定できる。

溝448出土遺物(第14図9) 須恵器の蓋9は口径15.2cmを測り、TK10型式に比定できる。

溝488出土遺物(第14図10) 須恵器の杯10は口径10.2cmを測り、TK47型式に比定できる。

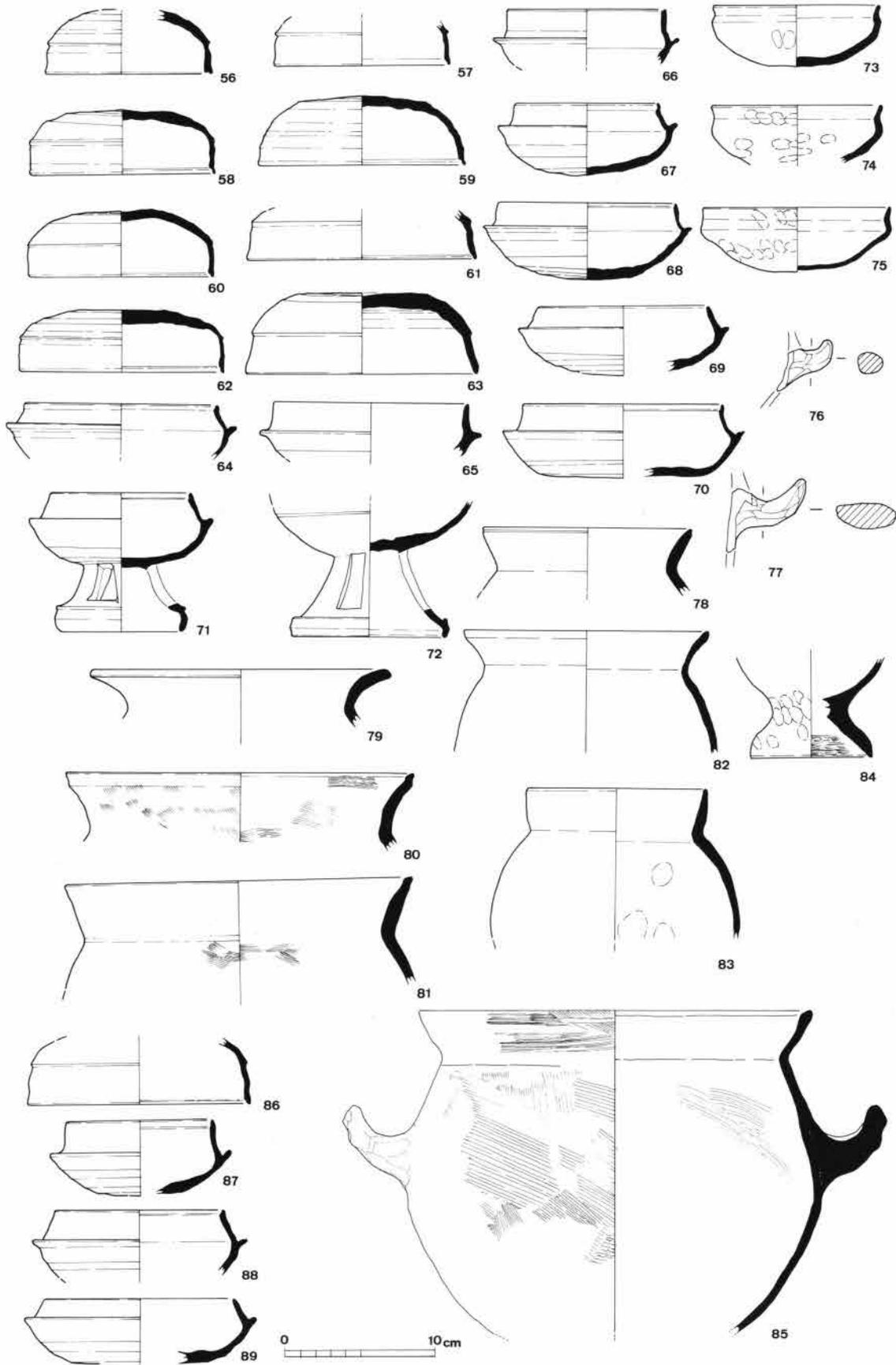
溝130出土遺物(第14図11～20) 須恵器の杯蓋は、口径11.6～14.8cmを測り、稜は鈍く、口縁端部は沈線化する。一方、杯は、口径が11.6～13.6cmを測る。口縁端部は沈線化する15と丸く仕上げる16・17に分類できる。18は、正格子叩き目を外面に観察することができる、いわゆる韓式系土師器の甑である。内面底部の屈曲部には指頭圧痕が観察できる。須恵器の型式からMT15～TK10型式に比定できる。

大壁住居跡639出土遺物(第14図22～27・第27図140) 須恵器の蓋は口径12.8～14.4cm、杯は10～12.8cmを各々測る。形態的特徴から23・26がMT15型式、他がTK10型式に比定できる。これらの須恵器群は、わずかながら残存した大壁住居跡639の方形区画内の盛り土から出土しているが、溝内の柱穴上位からは土師器の壺(第27図140)が出土している。なお、遺構検出状況などから第15図34の須恵器の蓋が、本来の大壁住居跡639の構築時期を表出しうる可能性の指摘については、既に記述した。

溝499出土遺物(第14図21) 口径20cmの土師器の甕である。口縁部と肩部の形状は、溝130出土の土師器の甕21に酷似し、MT15～TK10型式に併行する時期の土師器であろう。

土坑204出土遺物(第15図32～46) 須恵器の杯34はTK23型式に比定でき、33・35～37はTK10型式に比定できる。全体的にはTK10型式に比定できる資料群であることから、34の杯が混入している可能性については既に指摘した。なお、34は、陶邑古窯址群で焼成された須恵器である。土師器の甕には、口径11cm前後の40・41と口径21cmを測る45に分類できる。なお、44は、外面に格子目の叩きが観察できる硬質の韓式系土器の甕である。外面は淡黒褐色、胎土は粗く、焼成は不良である。同一の特徴を有する破片を産地同定の胎土分析資料5・6として供出した。

土器埋納土坑116出土遺物(第15図51) 陶質土器と思しき甕である。体部外面には、わずかに無文の叩き具で成形した痕が残存するのみであり、内面には青海波文を全く観察し得ない。通常、初期須恵器には、叩き痕や青海波文は、丁寧に撫で消される個体が多いが、熟視すると凹部には

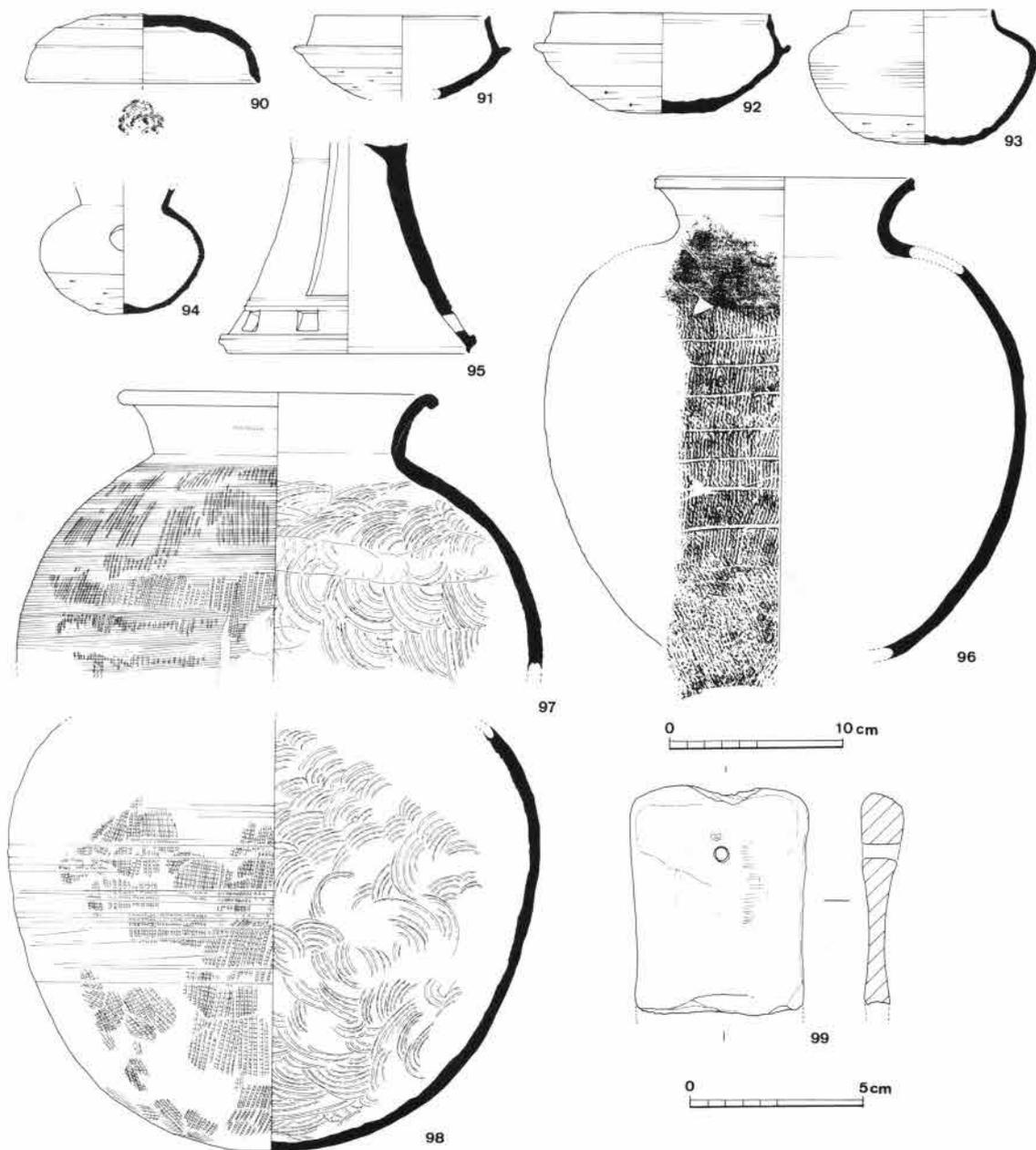


第16図 出土遺物実測図
 56~85:土坑132 86~89:土坑132上面

微かに叩き目ないしは青海波文が観察できる個体が多い。しかし、当該土器には、全く観察できないことと、円形の当て具痕が確認できることから、無文叩き具によって成形された陶質土器の可能性を示唆しておきたい。なお、後述するように三辻教授の産地同定分析結果(試料4)によると、陶質土器である可能性が指摘されているが、判然としない。

土坑132出土遺物(第16図) 須恵器の杯蓋からTK47型式に比定できる個体が多い。しかし、64など、MT15型式に比定できる個体も含まれている。土師器の鉢73~75は、口縁部で屈曲する共通する特徴をもっているが、法量・壁厚・胎土などから相違点も多く見られる。須恵器の杯70は、陶邑古窯址群内において焼成された特徴をもつ。

土坑131出土遺物(第17図) 蓋杯からTK47~MT15型式に比定できる遺物である。95は、脚



第17図 出土遺物実測図 土坑131

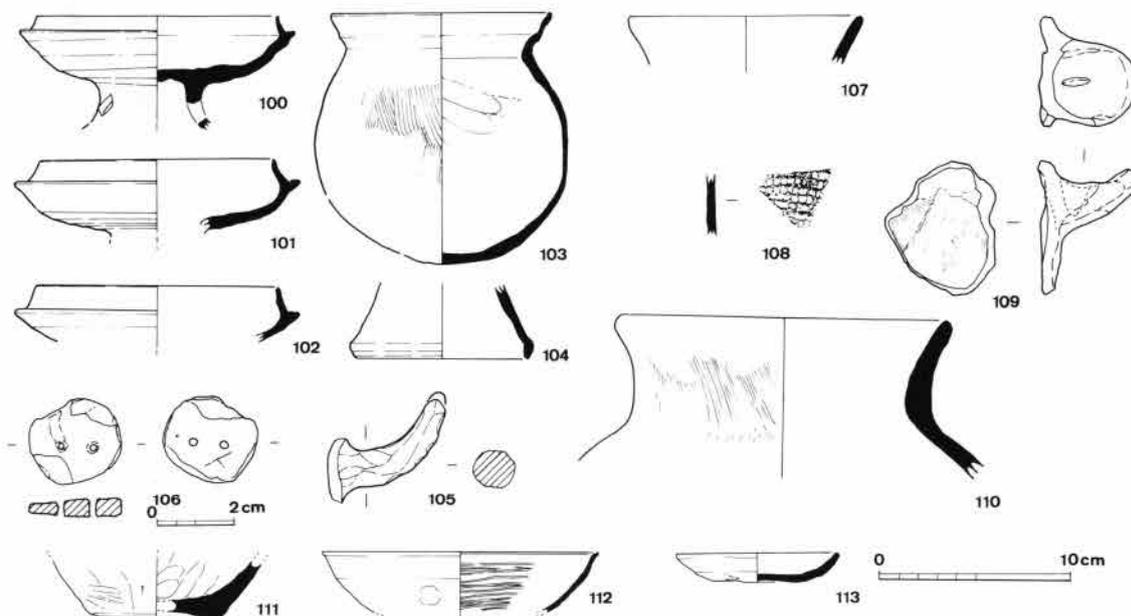
部の中央に縦長長方形の2方透かし孔を穿ち、さらにその下方に1cm四方の方形透かし孔を8か所に穿っている。高杯ないしは器台の脚部である。類例に乏しいが、大阪府富木車塚古墳出土須恵器に類似する出土例がある。96は、口径14.8cm・復元器高30cm、体部最大径は27cmを測る陶質土器の甕である。全体的に焼き歪みが著しく、胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は暗灰褐色ないしは暗茶褐色である。胴体部外面には、細かな縄目叩き目が施されており、9条の螺旋状沈線がめぐる、いわゆる縄蓆文土器である。肩部には、無文の円形叩き具痕が顕著に残存している。口縁部の形状と螺旋状沈線の条数から5世紀前半に比定でき、肉眼観察では、朝鮮半島の南部(全羅道～慶尚道)で焼成された可能性が極めて高い。胎土分析(試料2)では釜山・金海周辺との見解が見られる。99は、幅5.2cm・残存長6.6cm・最大厚1.2cmを測る砂岩製砥石である。上端部を打ち欠き、上端部から2cm下方の中央部に吊り上げ用の穿孔がある。使用時の擦痕が顕著である。形態的には同時期の砥石としては、希有な類例であろう。

土坑201から出土した第18図108は、格子叩き目をもつ韓式土器の胴体部片であり、109は、篋工具による刺突痕をもつ甑の把手である。

e. 掘立柱建物跡(第20図、図版第11)

A1地区では総計700前後の柱穴を検出した。柱穴の埋土は、炭混じりの暗茶褐色土を主体とする一群とやや明るい色調を呈する一群、そして、暗灰褐色土を主体とする一群に分類できる。掘立柱建物跡の復元にあたっては、柱穴埋土を基準に分類を行ったが、北半部は、削平が著しい部分もあり、掘立柱建物跡の復元に多少の問題を含んでいる

掘立柱建物跡の主軸は、基本的に地形の傾斜に並行ないし直交しているが、傾斜度が緩やかになる北半の掘立柱建物跡群の主軸は、やや不統一になる傾向がある(第49図)。なお、掘立柱建物跡群の南限を区画する柵1とそれに直交ないし斜交する柵2及び柵3は、調査地南半の主要な建



第18図 出土遺物実測図

(100~106:土坑479 107~110:土坑201 111:土坑115 112:土坑555 113:土坑553)

物跡群に伴う施設と考えられる。また、柵1の南隣接地には、溝127・129・130の3条の溝が穿たれている。以下、主要な掘立柱建物跡について概観しておきたい。

掘立柱建物跡1 (第21図) 梁間2間(2.4m)×桁行2間(3.3m)の規模を有し、北から東へ38°の主軸をもつ。小規模であるが、比較的安定した柱痕を検出した。

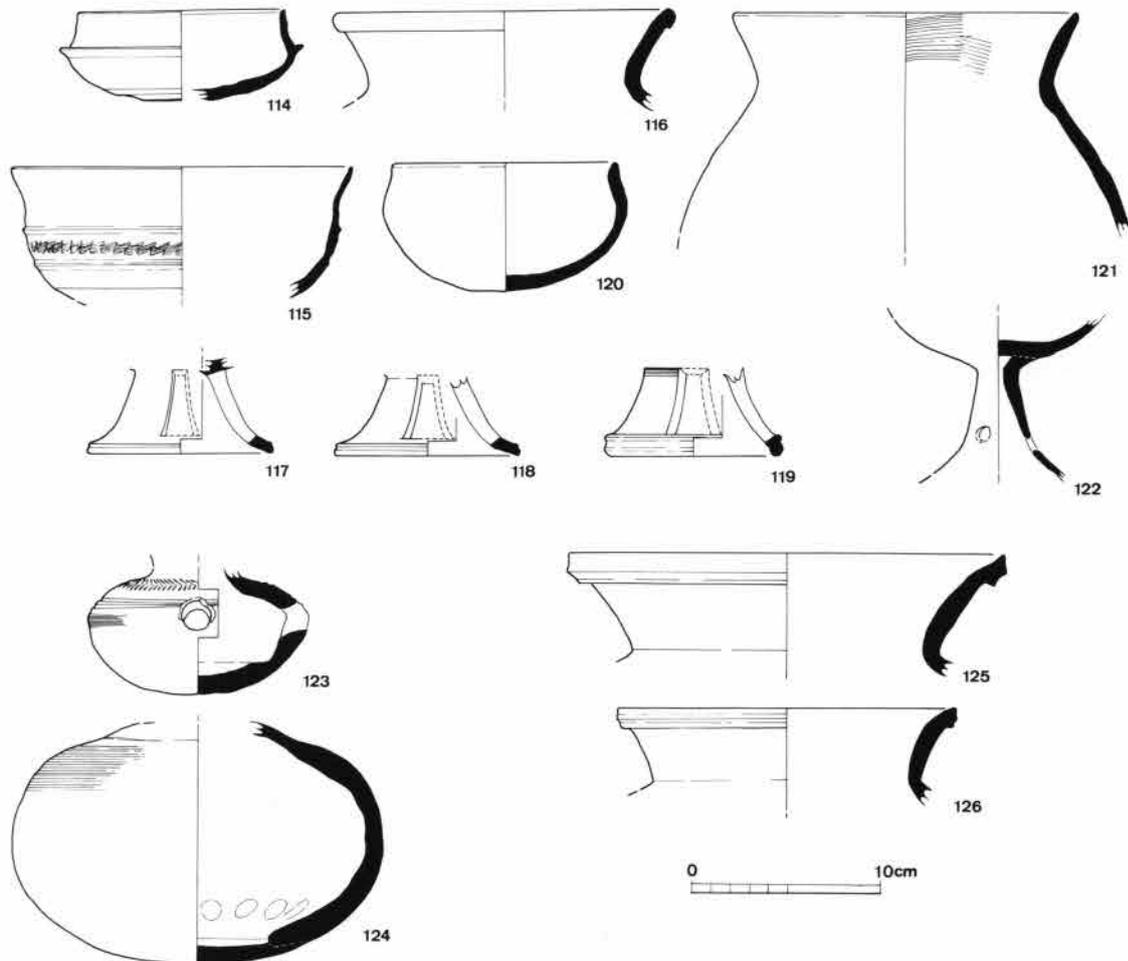
掘立柱建物跡2 (第21図) 梁間2間(3.6m)×桁行2間(3.3m)の総柱の建物跡であり、北から東へ43°の主軸をもつ。柱穴の規模は直径0.2mと小規模である。

掘立柱建物跡3 (第21図) 梁間2間(1.8m)×桁行3間(3.5m)の総柱の建物跡であり、北から東へ43°の主軸をもつ。先述した掘立柱建物跡2とは建物の一部が重なることから、新旧関係がある。しかし、柱穴内からの遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

掘立柱建物跡4 (第21図) 梁間2間(3.4m)×桁行3間(5.0m)の総柱の建物跡であり、北から東へ41°の主軸をもつ。南側の梁間は柵1に接している。

掘立柱建物跡5 (第22図) 梁間1間(1.8~2.1m)×桁行2間(3.4~3.5m)の小規模な建物跡であり、北から東へ41°の主軸をもつ。柵1と一部重なる。

掘立柱建物跡6 (第24図) 梁間3間×桁行4間(5.7m)以上の規模を有し、北から東へ50°の主



第19図 出土遺物実測図
(114~122:土坑9 123~126:用途不明土坑446)

軸をもつ。西半はトレンチ外へ広がっており、正確な構造は不明である。

掘立柱建物跡 7 (第22図) 梁間2間(2.6m)×桁行2間(3.1m)の規模を有し、北から東へ55°の主軸をもつ小規模な総柱建物跡である。

掘立柱建物跡 8 (第22図) 梁間2間(2.1m)×桁行1間(2.2m)の小規模な建物跡であり、北から東へ52°の主軸をもつ。桁行には削平を受けた浅い柱穴を想定しなければ、掘立柱建物跡としては成り立たず、復元は今後検討を要する。

掘立柱建物跡 9・10 (第22図) 9は、梁間1間(1.7m)×桁行2間以上、10は、梁間2間(4.4m)×桁行4間以上(7.3m以上)の規模を有し、各々北から東へ46°の主軸をもつ。掘立柱建物跡10の中央に掘立柱建物跡9が配置されていることから、掘立柱建物跡10は掘立柱建物跡9を囲む施設の可能性を考慮する必要がある。

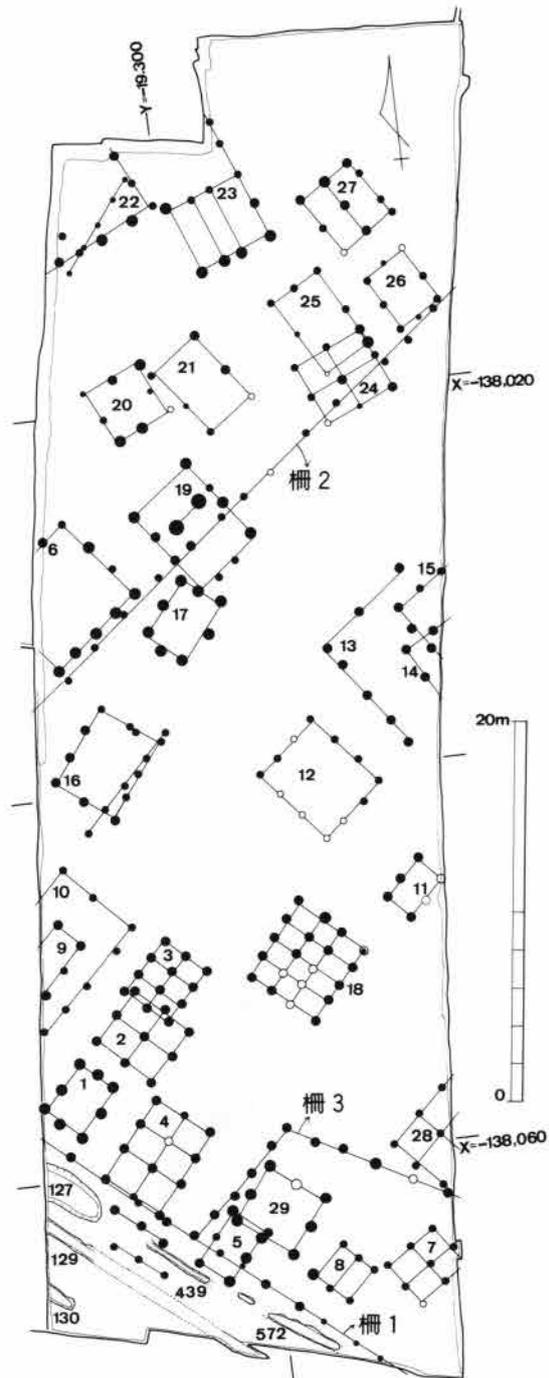
掘立柱建物跡11 (第23図) 梁間1間(1.7m)×桁行2間(2.6m)の小規模な建物跡であり、北から東へ47°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡12 (第23図) 梁間3間(1.7m)×桁行3間(2.6m)の建物跡であり、北から東へ47°の主軸をもつ。建物跡を構成する柱穴は、比較的小さく、居住を目的とした掘立柱建物跡ではなく、簡易な倉庫である可能性が高い。

掘立柱建物跡16 (第22図) 梁間2間(3.4m)×桁行3間(4.8m)の規模を有し、北から東へ37°の主軸をもつ。北側梁間の中央柱穴には、2か所の柱痕がある。

掘立柱建物跡17 (第22図) 梁間1間(2.3m)×桁行2間(3.3~3.8m)の規模を有し、北から東へ40°の主軸をもつ。柱穴が不均一であり、建物跡の復元にはやや疑義が残る。

掘立柱建物跡18 (第23図) 梁間3間(4.3m)×桁行4間(4.5~4.8m)の規模を有し、北から東へ41°の主軸をもつ総柱建物跡である。検出した掘立柱建物跡群中もっとも規模が大きく、中核的な施設である可能性が高い。しかし、中世の耕作溝などにより一部の柱穴はすでに消失している。

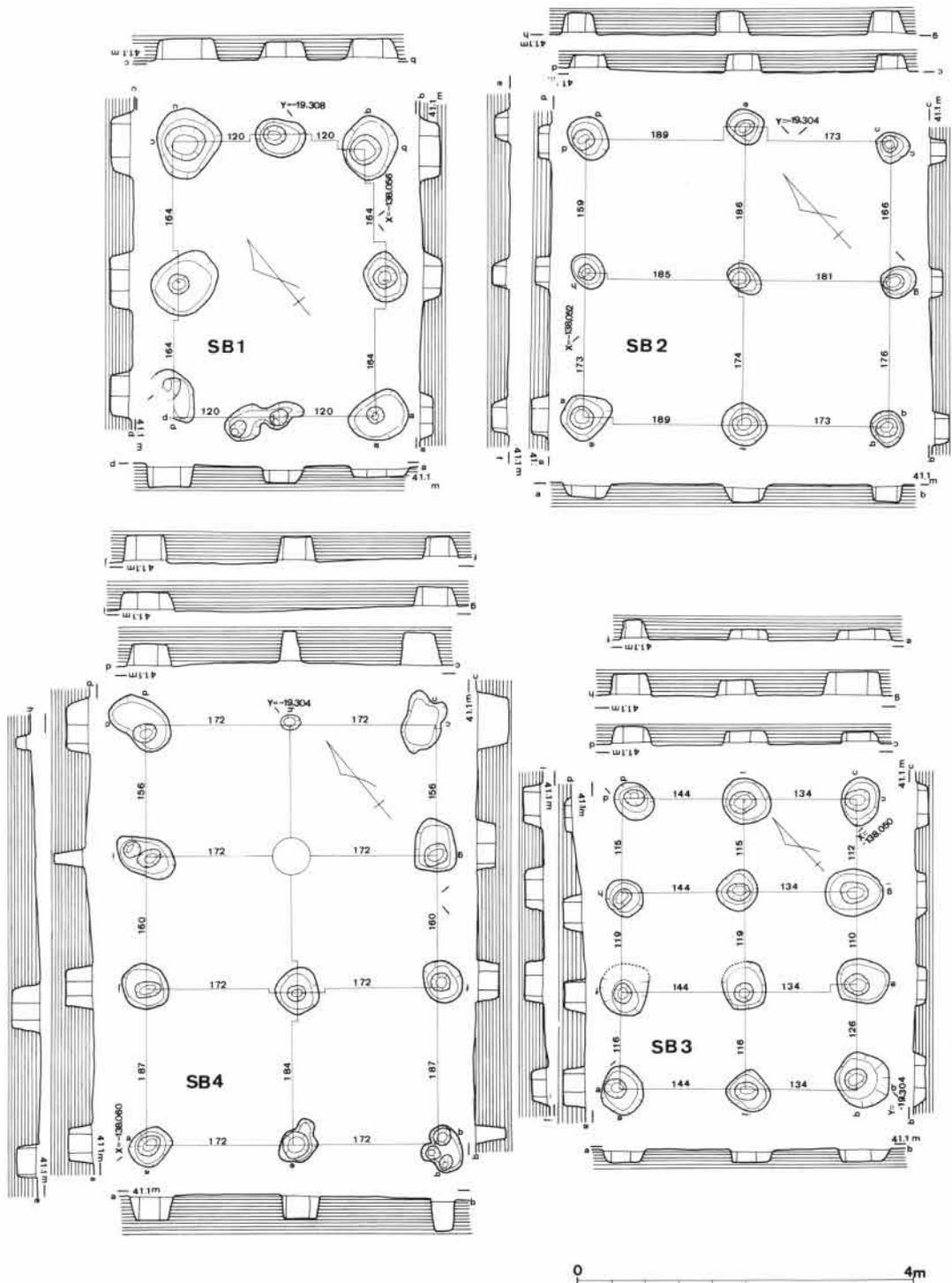


第20図 掘立柱建物跡分布図

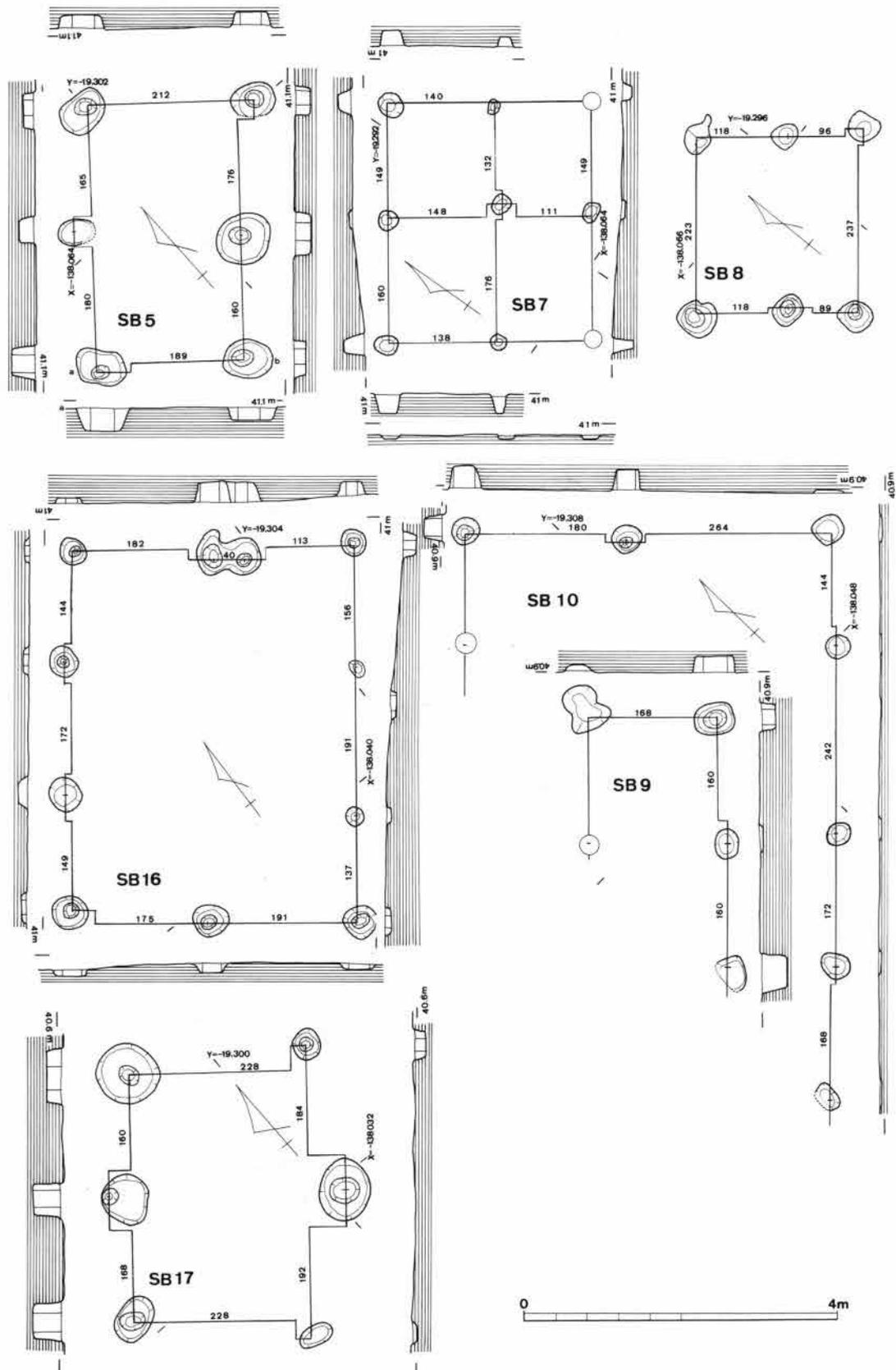
掘立柱建物跡19(第25図) 梁間3間(3.8~4.4m)×桁行3間(4.9m)の規模を有し、北から西へ38°の主軸をもつ。四隅の柱穴は、比較的規模が大きく、南東面の中央部に位置する柱穴は、著しく小規模である。

掘立柱建物跡21(第23図) 梁間1間(3.0~3.1m)×桁行2間(4.3m)の小規模な建物跡であり、北から西へ38°の主軸をもつ。

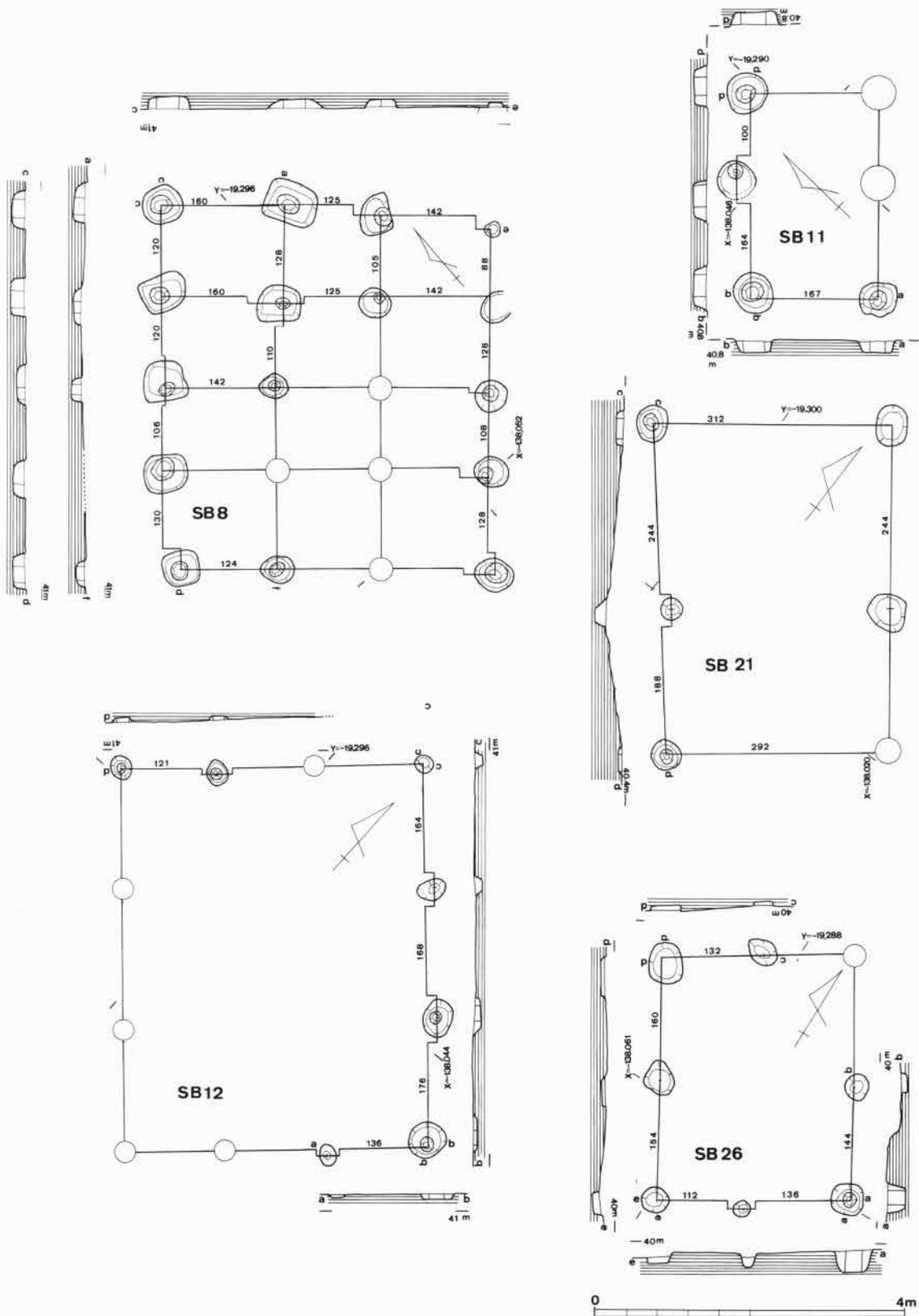
掘立柱建物跡23(第24図) 梁間2間(3.6m)×桁行3間(4.2m)の小規模な建物跡であり、北か



第21図 掘立柱建物跡1・2・3・4実測図



第22図 掘立柱建物跡 5・7・8・9・10・16・17実測図



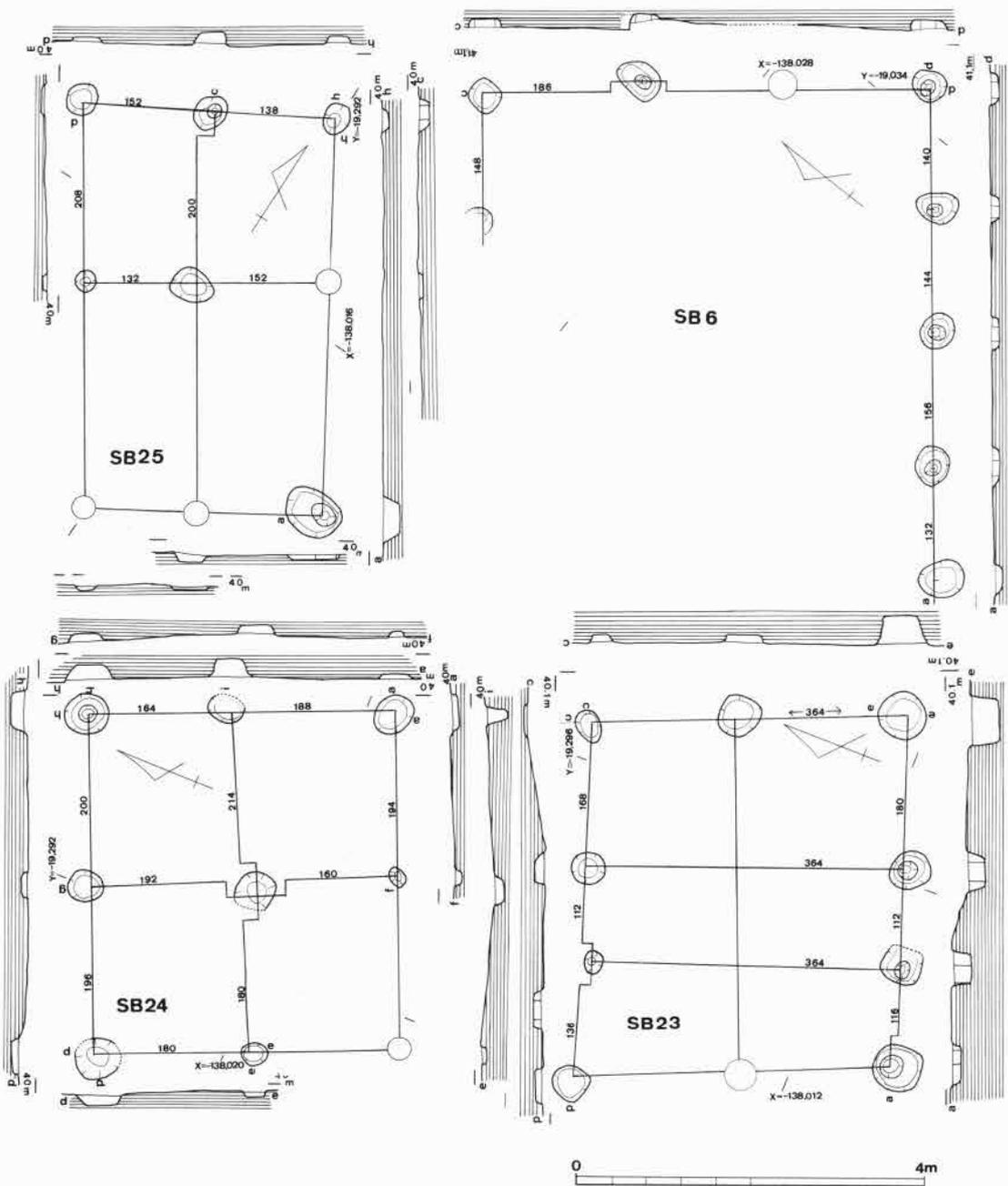
第23図 掘立柱建物跡11・12・18・21・26実測図

ら東へ70°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡24(第24図) 梁間2間(3.5m)×桁行2間(4.0m)の総柱の建物跡であり、北から東へ67°の主軸をもつ。平面プランがほぼ正方形に近似しており、居住施設ではなく、倉庫としての機能を想定できる。

掘立柱建物跡25(第24図) 梁間2間(2.8m)×桁行2間(4.7m)の小規模な建物跡であり、北から西へ33°の主軸をもつ。梁間、桁行の柱間の距離は著しく異なっている。

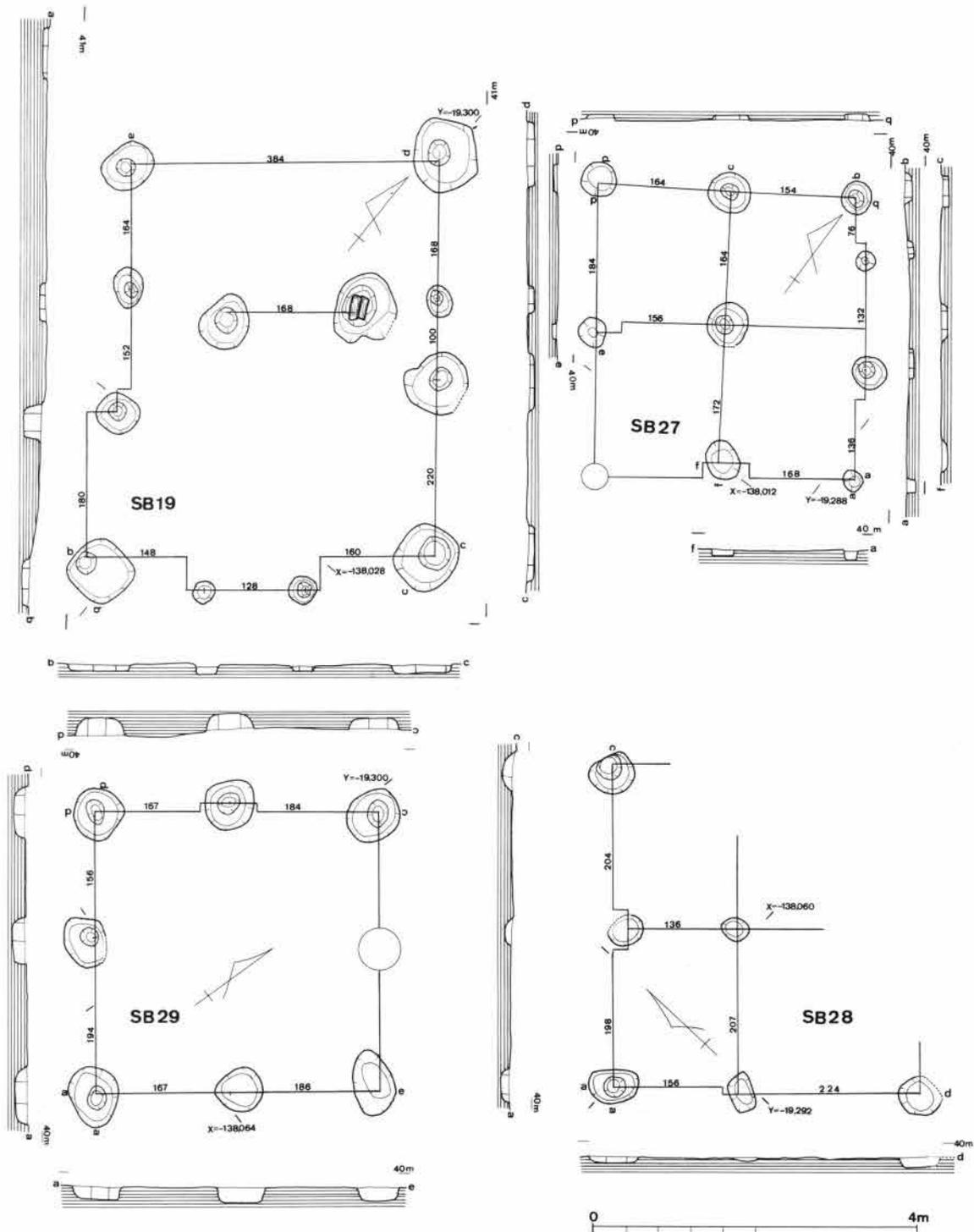
掘立柱建物跡26(第23図) 梁間2間(2.5m)×桁行2間(3.1m)の小規模な建物跡であり、北から西へ31°の主軸をもつ。



第24図 掘立柱建物跡6・23・24・25実測図

掘立柱建物跡27(第25図) 基本的には梁間2間(3.2m)×桁行2間(3.4m)の小規模な建物跡であり、北から西へ36°の主軸をもつ。他の掘立柱建物跡と最も異なる点は、北東面のみ3間に柱穴を配置しており、扉などの施設が、設置された可能性も考慮すべきである。

掘立柱建物跡28(第25図) 梁間2間(3.8m)×桁行2間(4.0m)に復元できる小規模な建物跡であり、北から東へ47°の主軸をもつ。



第25図 掘立柱建物跡19・27・28・29実測図

掘立柱建物跡29(第25図) 梁間2間(3.5m)×桁行2間(3.5m)の小規模な総柱の建物跡であり、北から西へ54°の主軸をもつ。北東面の中央部に位置する柱穴は、検出できなかった。

以上が、各掘立柱建物跡の概観であるが、特異な状況で遺物が出土している柱穴について図面と写真図版で見ておきたい。

柱穴653(第26図、図版第15-(1)・(2)) 復元直径が約0.6m、深さが0.4m、柱痕直径が0.2mを測る。柱痕底部には、須恵器の甕(第27図133)が横位の状態で埋納され、その直上に土師器の高杯が、同じく横位の状態で埋納されていた。柱を抜き取った後に何らかの宗教的行為に使用した土器を埋納したのであろう。

柱穴58(図版第12-(3)) 直径が約0.35m、深さが0.1m、柱痕直径が0.15mを測る。柱の抜き取り跡から口縁部を下位に据えた状態の土師器の甕が出土した。

柱穴155(図版第13-(3)) 直径が約0.5m、深さが0.3m、柱痕直径が0.25mを測る。柱の掘形から土師器の鉢(第27図138)が出土しており、建物を構築する際に執り行われた宗教的行為に伴う土器と考えられる。

柱穴63・64(図版第14-(2)・(3)) 両柱穴からは、柱穴底部に据えた檜材とみられる礎板が出土している。また、柱穴154(図版第14-(1))には、直径20cmの柱根の残存している。

なお、図示しなかったが、柱穴内からは、鉄滓や製塩土器などが出土しており、A1区周辺域において鍛冶などが行われたことを示唆している。また、包含層から輪の羽口が出土していることも、その可能性を傍証している。

次に、柱穴内出土遺物について概観しておきたい(第27図)。

127は、口径10.8cmを測る須恵器の杯蓋である。肩部の稜と口縁端部の形態からTK47型式に比定できる資料である。128は、口径12.8cmを測る須恵器の杯蓋である。肩部の稜は明瞭であり、また、口縁端部もシャープに仕上げられていることからTK208型式に比定できる資料である。その他、129はMT15型式に、130はTK10型式に、また、131・132は、各々TK43型式に比定できよう。

一方、土師器では、135が口径12.6cmを測る鉢である。先述した土坑132からも同型式の鉢が出土していることから、概ねTK47～MT15型式に比定して大過ないであろう。土師器の高杯は、杯底部を丸く成形するタイプ136～138が柱穴から出土しており、概ねTK47～MT15型式に比定できる。133は、土師器の小型壺に近似する須恵器の甕である。形態的特徴からTK216型式に比定できる。また、共伴する土師器の高杯は、甕と共伴して出土していることから、編年的価値は高い。

f. 竪穴式住居跡(第28図、図版第16-(1))

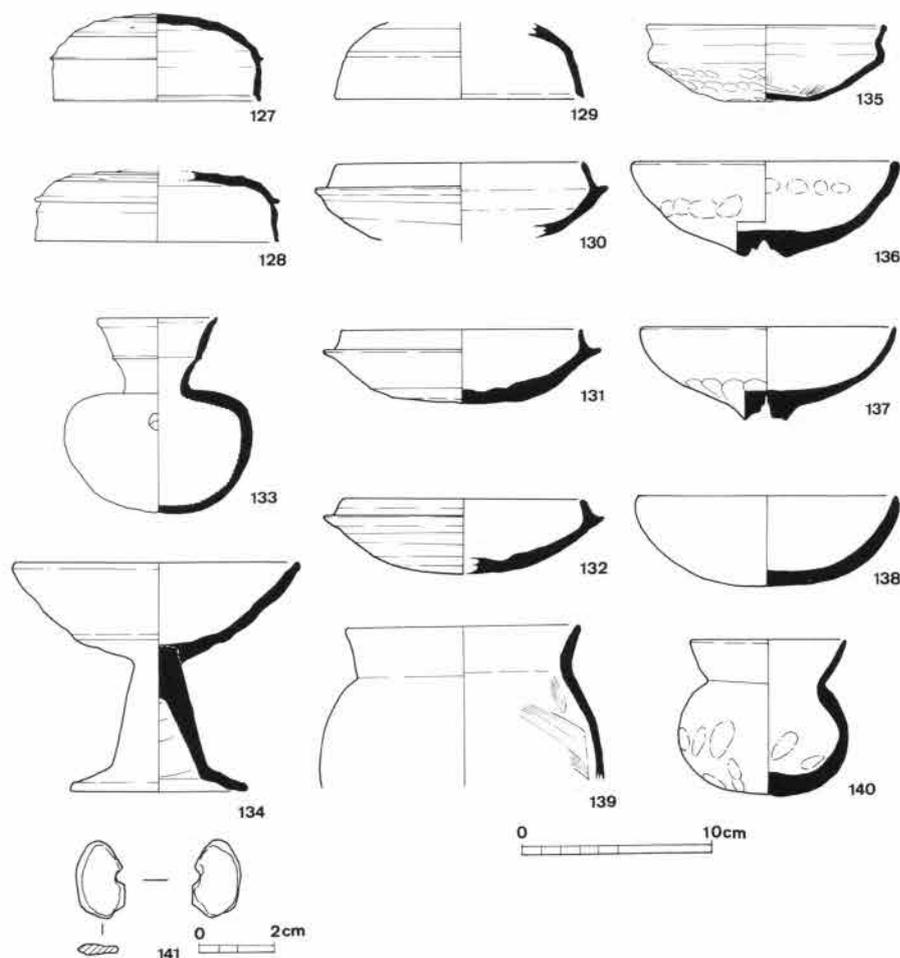
検出した竪穴式住居跡は、総計9基であり、竪穴式住居跡171と第26図 柱穴653復原実測図



656は、建て替えによると考えられる切り合い関係にある。最も南に位置する竪穴式住居跡133とそれに隣接する竪穴式住居跡17は、竪穴式住居跡の主軸が異なっていることから、併存しなかった可能性がある。竪穴式住居跡の主軸によって同時に併存したか否かについては、即断できないが、竪穴式住居跡133から398を起点とする線状配置と竪穴式住居跡398から208を起点とする線状配置を想定することが可能である。おそらく直交する竪穴式住居跡の線状配置は、集落を形成する段階から計画的に施行されたと考えられる。

なお、調査区域の北半は、江戸時代後期の新田開発により遺構の残存状況は不良であり、竪穴式住居跡の検出はできなかった。また、南半においても水田一筆の段差付近で検出した竪穴式住居跡208は、大半が削り取られており、平面プランなどの詳細については把握できなかった。ここでは、遺存状態が比較的良好な竪穴式住居跡17・18・120・171・205・656を中心に概観し、竪穴式住居跡の大半が調査区域外に広がりを見せる竪穴式住居跡133・134・398については、簡単に出土遺物について見ておきたい。

竪穴式住居跡17(第29図、図版第16-(2)(3)) 長軸5.2m・短軸3.3mの長方形の平面プランを



呈している。竪穴式住居跡の床面までの深さは、最も深い部分で0.1mを測り、残存状況は不良である。非常に浅い幅0.1mの周壁溝を南東辺を除く3辺において検出できた。しかし、竪穴式住居跡の外郭線は四方において検出していることから本来は、南東辺にも掘り込まれていたと考えられる。一方、上部の構造物を支える四柱穴についても検出し得なかった。このことから平坦な床面上に木板な

第27図 出土遺物実測図

- | | | | | |
|-----------|---------------|----------------|-----------|-----------|
| 127:柱穴440 | 128:柱穴57 | 129:柱穴502 | 130:柱穴628 | 131:柱穴651 |
| 132:柱穴114 | 133・134:柱穴653 | 135:柱穴193 | 136:柱穴246 | 137:柱穴539 |
| 138:柱穴138 | 139:柱穴629 | 140:大壁住居跡639柱穴 | | |

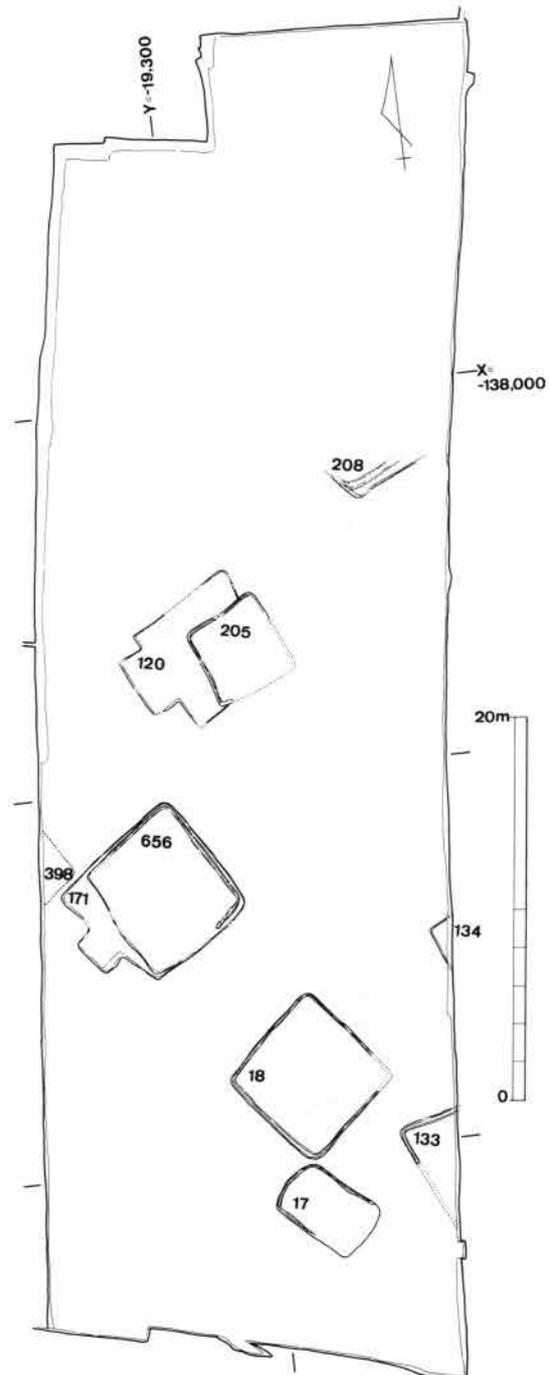
どの礎板を敷き、そこに四柱を立てる構造を想定したい。

住居跡に伴う遺物は、全て南西部の床面から出土しており、床面に散乱する状況は見られなかった。出土状況は、比較的完形率の高い土器が南西部に集中している。遺物には須恵器の蓋杯や土師器の甕、製塩土器、滑石製有孔円板などがある。TK10型式に比定できる。

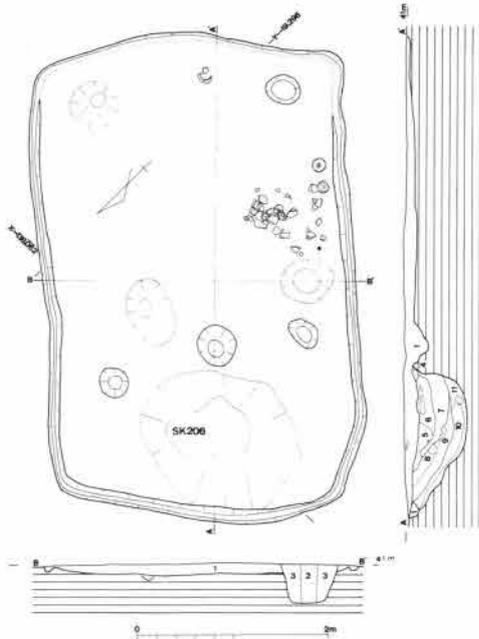
なお、床面の北西において直径1.6mの不整円形の土坑206(図版第9-(3))を検出した。床面において検出したため竪穴式住居跡に伴うか、あるいはそれ以前の可能性が高い。土坑の埋土は、地山ブロックが混入し、10余層にも及ぶ堆積が見られるので、人為的に埋め戻したと考えられる。この土坑を床下土坑と考えることもでき、今後の類例調査によってその用途について検討しなければならない。土坑206からは、年代設定ができる土器は出土していない。

竪穴式住居跡18(第30図、図版第17-(1)) 一辺約6.5mを測り、床面積は42㎡の正方形プランを呈している。竪穴式住居跡の検出面から床面までの深さはわずかで、幅0.2m・深さ0.1mの周壁溝がめぐっている。上部の構造物を支える四柱穴は概ね3m間隔に穿たれている。住居跡に伴う遺物は、床面に散乱する状況で検出した。出土状況は比較的完形率の低い土器が散乱していた。遺物には須恵器の蓋杯や土師器の甕・甌、製塩土器がある。MT15型式に比定できる竪穴式住居跡である。なお、入り口部を想定するには至っていない。

竪穴式住居跡120(第31図、図版第18-(2)(3)) 一部、竪穴式住居跡205と切り合っており、切り合い部分での新旧関係は、残存状況が著しいため不明である。平面プランは、やや歪な方形プランを呈しており、南北6m・東西6m、床面積は50㎡の規模を有している。この住居跡には、地形の傾斜の上部にあたる部分、換言すれば南西辺中央部に幅3.4m×奥行き1.6mの長形状の張り出しをもっている。この部分は、住居跡内の床面と同じ面であることから、床面の拡張を目的にした施設と解釈できる。この長形状の張り出し部には、炭や焼土などは検出していないが、第34図175の移

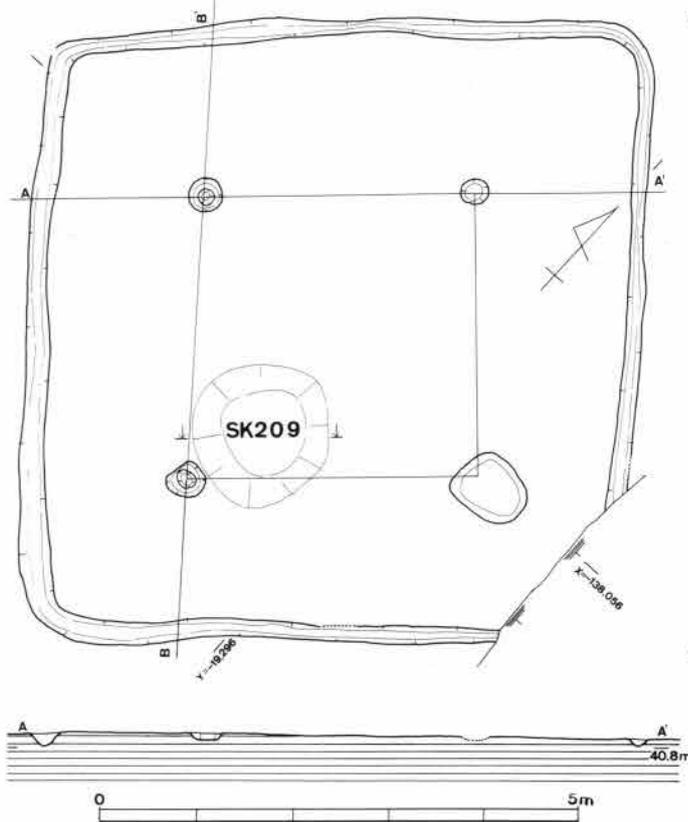


第28図 竪穴式住居跡分布図



第29図 竪穴式住居跡17実測図

- 1:濁暗茶褐色土 2:濁暗茶褐色粘質土
- 3:濁暗茶褐色土 4:淡茶褐色土
- 5:濁暗茶褐色粘質土
- 6:5層よりわずかに明るい
- 7:濁淡黒褐色粘土 8:濁暗茶褐色土
- 9:濁淡黒褐色粘質土 10:濁黒褐色粘質土
- 11:濁黒褐色粘土



第30図 竪穴式住居跡18実測図

動式竈の部材が集中的に散乱していた。なお、後で検討を加える奈良県南郷遺跡における竪穴式住居跡の検出例では、入り口部を想定する同様な張り出し部が確認されている。今回検出した、竪穴式住居跡120の張り出し部は、南郷遺跡での類例と同じ構造であるが、移動式竈175が出土していることから、何らかの宗教的行為を行う空間と考えておきたい。

竪穴式住居跡の床面までの深さは、最も深い部分で0.1mを測る。また、幅0.1m・深さ0.05mの周壁溝が部分的に残存している。一方、上部の構造物を支える四柱穴は、東西3.4m、南北3mの間隔で穿たれている。

住居跡に伴う遺物は、床面に散乱する状況で検出した。遺物には、須恵器の蓋杯(第34図166~170)や土師器の甕(同172~174)移動式竈175、製塩土器、鉄製品の釘や砥石などがある。MT15型式に比定できる。

竪穴式住居跡205(第31図、図版第18-(1)) 一辺4.4mの正方形プランを呈している。残存状況が不良のため幅0.15m・深さ0.1mの周壁溝によって竪穴式住居跡

の輪郭を認識できた。上部の構造物を支える四柱穴は、周壁溝に近接しており、東西2.6m・南北3.8mを測る。住居跡に伴う遺物は、小破片の出土は確認できたが、年代を決めるに足る資料の出土は見られない。竪穴式住居跡120より後出する可能性を指摘しておきたい。

竪穴式住居跡171(第32図、図版第17-(2)(3)) 後述する竪穴式住居跡656の床面拡張に伴う建て替え住居である。そのため竪穴式住居跡656の南北辺と東辺は、竪穴式住居跡171と共有している。平面プランは、やや歪な方形プランを呈しており、南北

6 m・東西6 m、床面積は43m²の規模を有している。この住居跡には、地形の傾斜の上部にあたる一辺の中央部に幅2.4m×奥行き1.2mの長形状の張り出しを付設している。この長形状の張り出し部には、竪穴式住居跡120のように移動式竈の出土は見られないが、形態的に酷似することから、竪穴式住居跡住居120同様、何らかの宗教的行為を行う空間として捉えておきたい。なお、竪穴式住居跡の床面までの深さは、最も深い部分で0.15mを測る。また、上部の構造物を支える四柱穴は、床面の精査をくり返したが検出できなかった。床面の南端には直径0.1m・最長1 m前後の炭化材が出土した。しかし、床全面には広がっておらず、焼土なども検出していない。

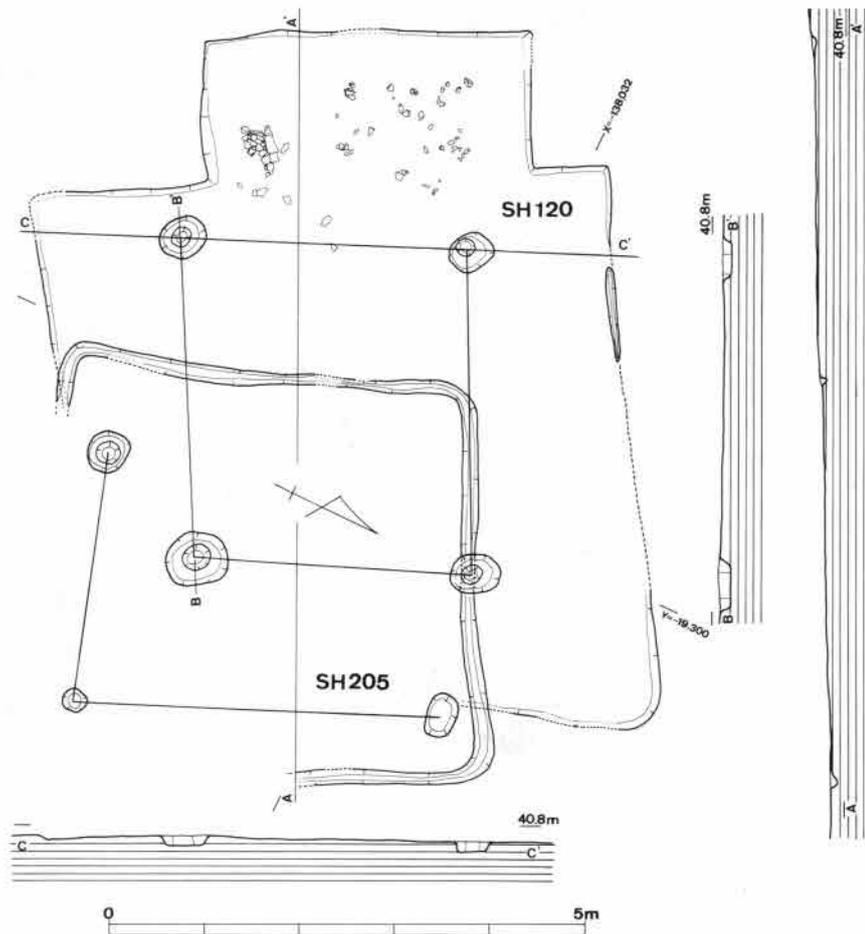
出土遺物は、1基の竪穴式住居跡の出土量としては極めて多く、第35～37図に図示した。内容は、須恵器の杯蓋・高杯・甕・壺、土師器の高杯・鉢・甕・壺・ミニチュア土器、製塩土器そして、滑石製紡錘車・砂岩製台石・花崗岩製磨石などである。

長形状の張り出し部を有し、多量の土器が出土し、ミニチュア土器、製塩土器、滑石製紡錘車、砂岩製台石、花崗岩製磨石の出土は、この竪穴式住居跡が一般的な居住を目的にしたとは規定できず、特別な目的のために建造された可能性を示唆している。なお、出土した須恵器は、TK47～TK10型式に比定できるが、絶対数はMT15型式の個体が多い傾向にある。

竪穴式住居跡656(第32図、図版第17-(2)) 南北7.1m・東西6.3m、床面積約45m²の正方形プランを呈している。幅0.1m・深さ0.1mの周壁溝が、ほぼ全周している。上部の構造物を支える

四柱穴は、南北3.7 m・東西3.5mを測る。住居跡に伴う遺物は小破片の出土は確認できたが、年代を決められる資料の出土は見られない。竪穴式住居跡171より先行する竪穴式住居跡であろう。

竪穴式住居跡208(第28図) 南隅部を検出したに過ぎず、規模及び平面プランについては不明である。幅0.2 m・深さ0.2mの周壁溝の一部検出した。住居跡に伴う遺物は、須恵器の高杯(第38図248・249)と土師器の



第31図 竪穴式住居跡120・205実測図

甕(同250)であり、概ねMT15型式に比定できる。

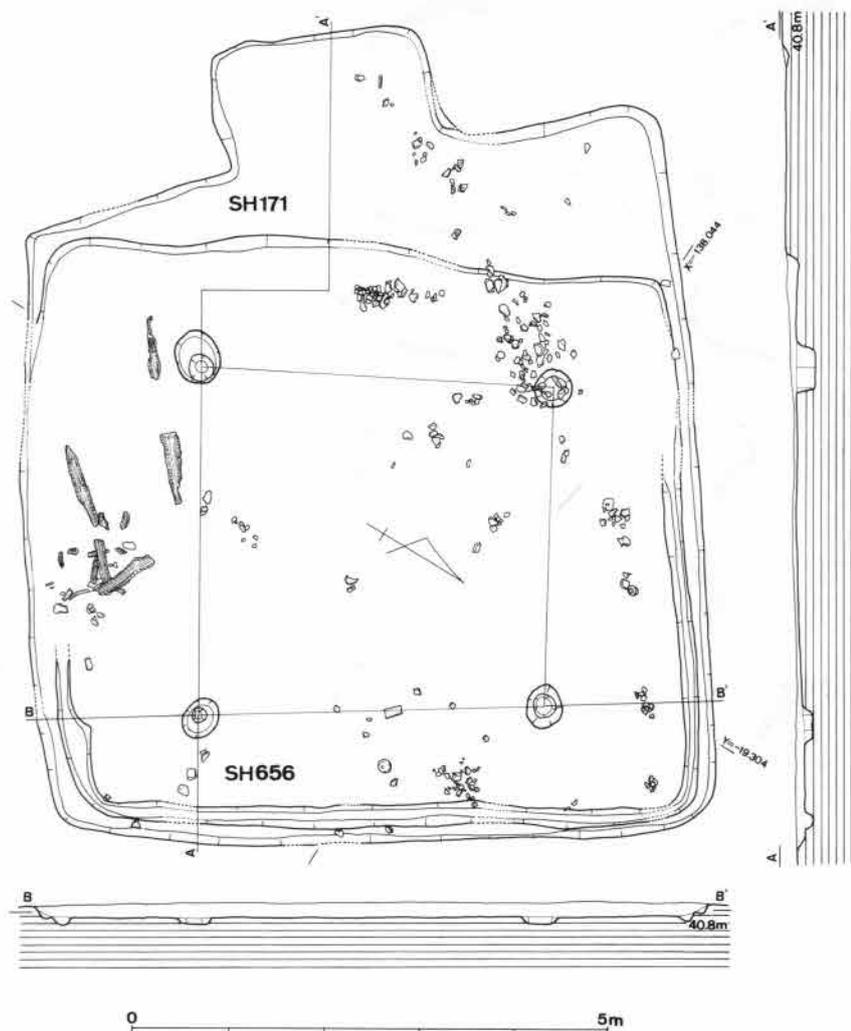
竪穴式住居跡133(第28図) 西隅部を検出したに過ぎず、規模などは不明である。幅0.2m・深さ0.1mの周壁溝を検出した。住居跡に伴う遺物は、須恵器の高杯(第38図252)と滑石製有孔円板(同253)である。低脚高杯の脚端部から概ねMT15型式に比定しておきたい。

竪穴式住居跡134(第28図) 西隅部を検出したに過ぎず、規模などは不明である。幅0.1m・深さ0.1mの周壁溝を検出した。住居跡に伴う遺物は、滑石製紡錘車(第38図251)である。時期設定を行うに足る土器の出土は見られないが、竪穴式住居跡133と同時期であろう。

竪穴式住居跡398(第28図) 東隅部を検出したに過ぎず、規模などは不明である。また、周壁溝も検出できなかった。しかし、わずかに方形の区画が見られ、その部分から須恵器の蓋(第38図254)や土師器の甕(同257)等がまとまって出土した。概ねMT15型式に比定できる。

以上が、検出した竪穴式住居跡の概観である。次に、出土遺物について見ておきたい。

竪穴式住居跡17出土遺物(第33図) 口径15.2cm前後の杯蓋142・143は、肩部の稜線もほとんど見られない。また、杯は、口径14cm前後で、立ち上がり端部にはほとんど面をもたず、丸く仕上

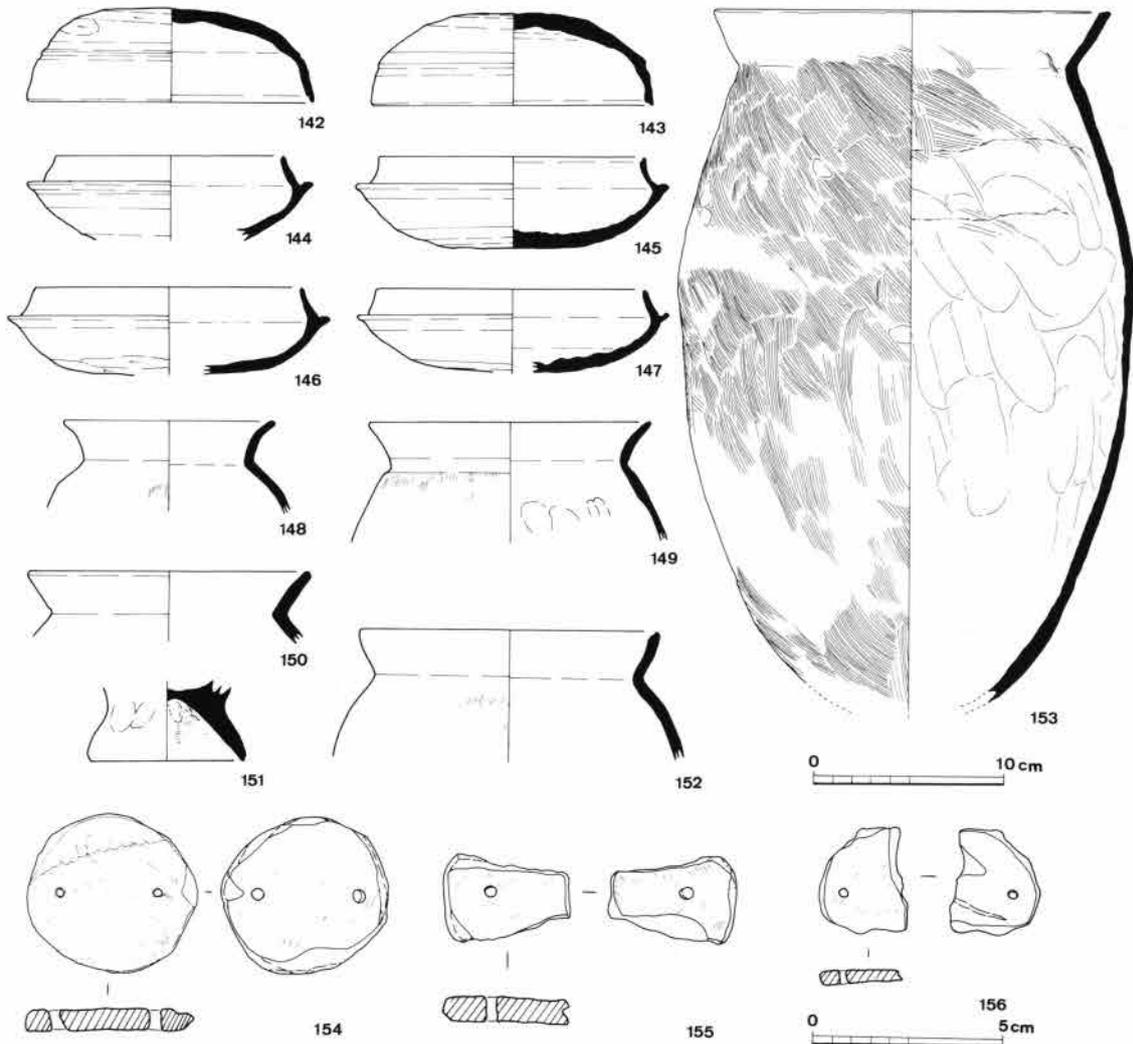


第32図 竪穴式住居跡171・656実測図

げている。一方、土師器の甕には、口縁部が外反する148・149、直線的に開く150、内彎し端部に面をもつ153に分類できる。当該時期の甕の口縁部形態を把握する上で良好な一括資料である。なお、滑石製有孔円板が3点出土しているが、154は、直径4.4cm・厚さ0.5cmを測る。同時期の滑石製有孔円板としては、稚拙ではあるが、大型品である。出土した須恵器の蓋杯の形態からTK10型式前後に比定できる資料群であり、他の竪穴式住居跡とは異なり、それ以前の型式に比定できる土器は含んでいない。

竪穴式住居跡18出土遺物(第34図) 口径11cm前後の須恵器の蓋杯157・158と口径15cm前後の160が混在する。肩部の稜や口縁端部の形態に相違点がみられるので、MT15型式に比定できる。164は、中央に円形の穿孔、その周囲に隅丸長方形の穿孔を4穴穿つ甕底部である。

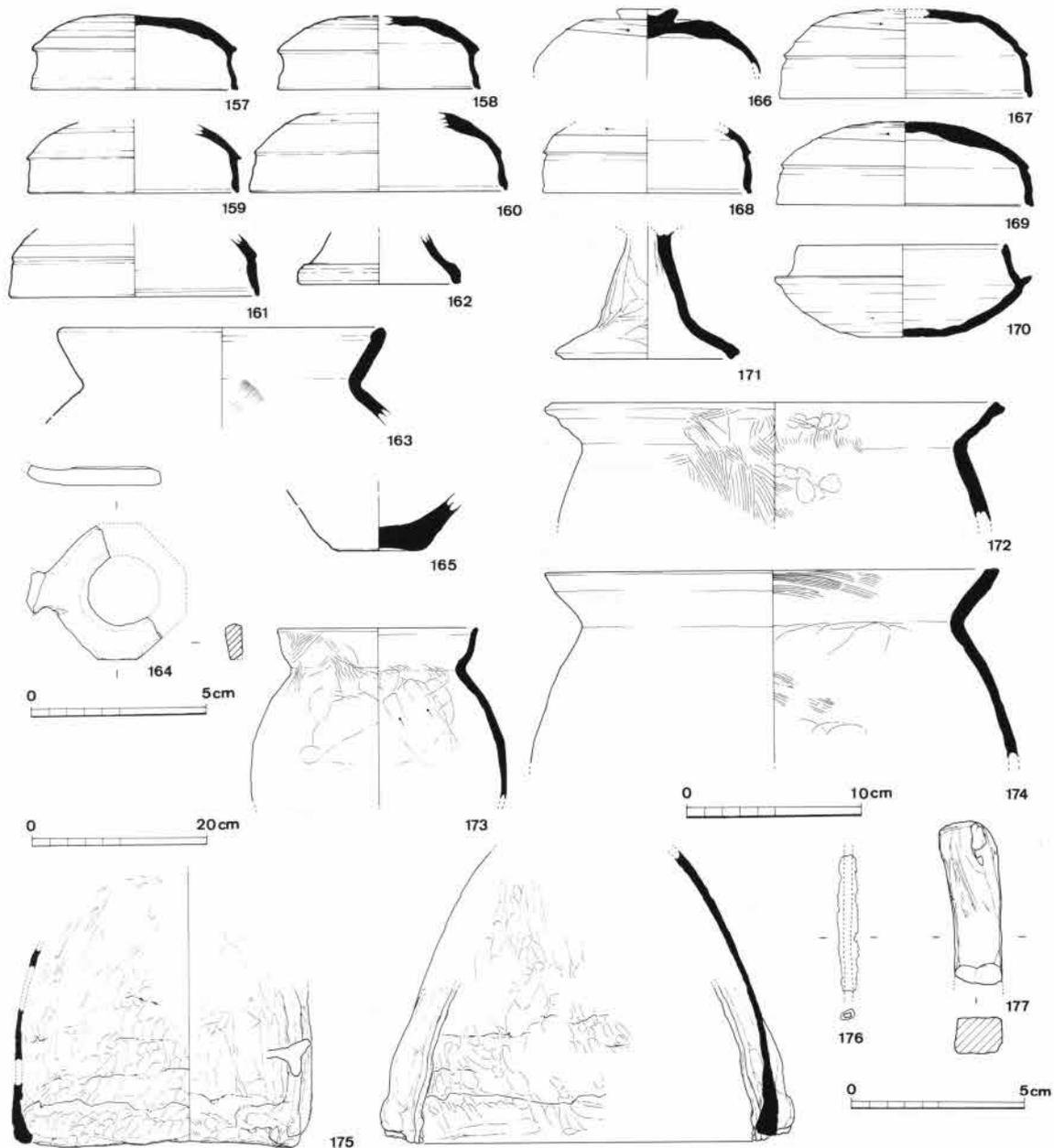
竪穴式住居跡120出土遺物(第34図) 口径12cm前後の須恵器の蓋杯170と口径15cm前後の167・168が混在している。肩部の稜や口縁端部の形態から、MT15型式に比定できる。なお、土師器の甕には、口縁端部に面をもつ172・174と丸く仕上げる173に分類することができる。また、土師器の移動式竈175は、残存率が40%であり、全体の形態を復元し得ないが竈正面の炊口部には



第33図 出土遺物実測図 竪穴式住居跡17

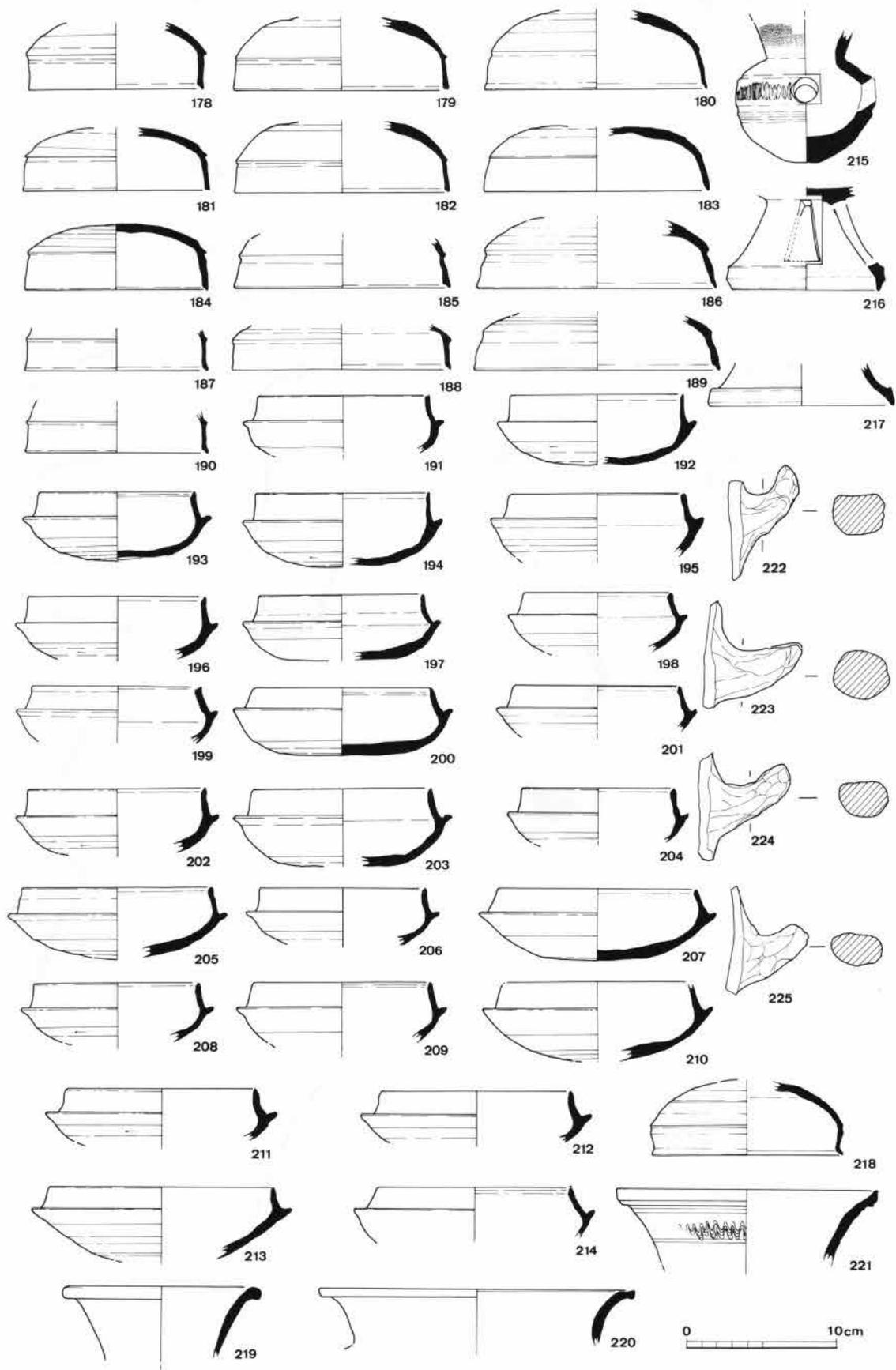
突帯がめぐり、内外面は、基本的には縦方向の撫でが顕著に見られる。出現期の移動式竈として重要である。

竪穴式住居跡171出土遺物(第35～37図) 須恵器の蓋杯には、肩部の稜が明瞭で、口縁端部が内傾する178・181・184と稜が沈線化する個体に分類できる。この傾向は杯についても同様である。先述したようにTK47～TK10型式の範疇に比定できるが、絶対数はMT15型式の個体が最も多い。須恵器の器形としては、甕・高杯・甕・短頸壺の蓋などが出土している。また、土師器には鉢226・227、高杯228～231、甕236～241・246、甌222～225・247などが出土しており、242は口径7.2cmの土師器のミニチュア土器、243は最大直径4.4cmの滑石製紡錘車である。特に、床



第34図 出土遺物実測図

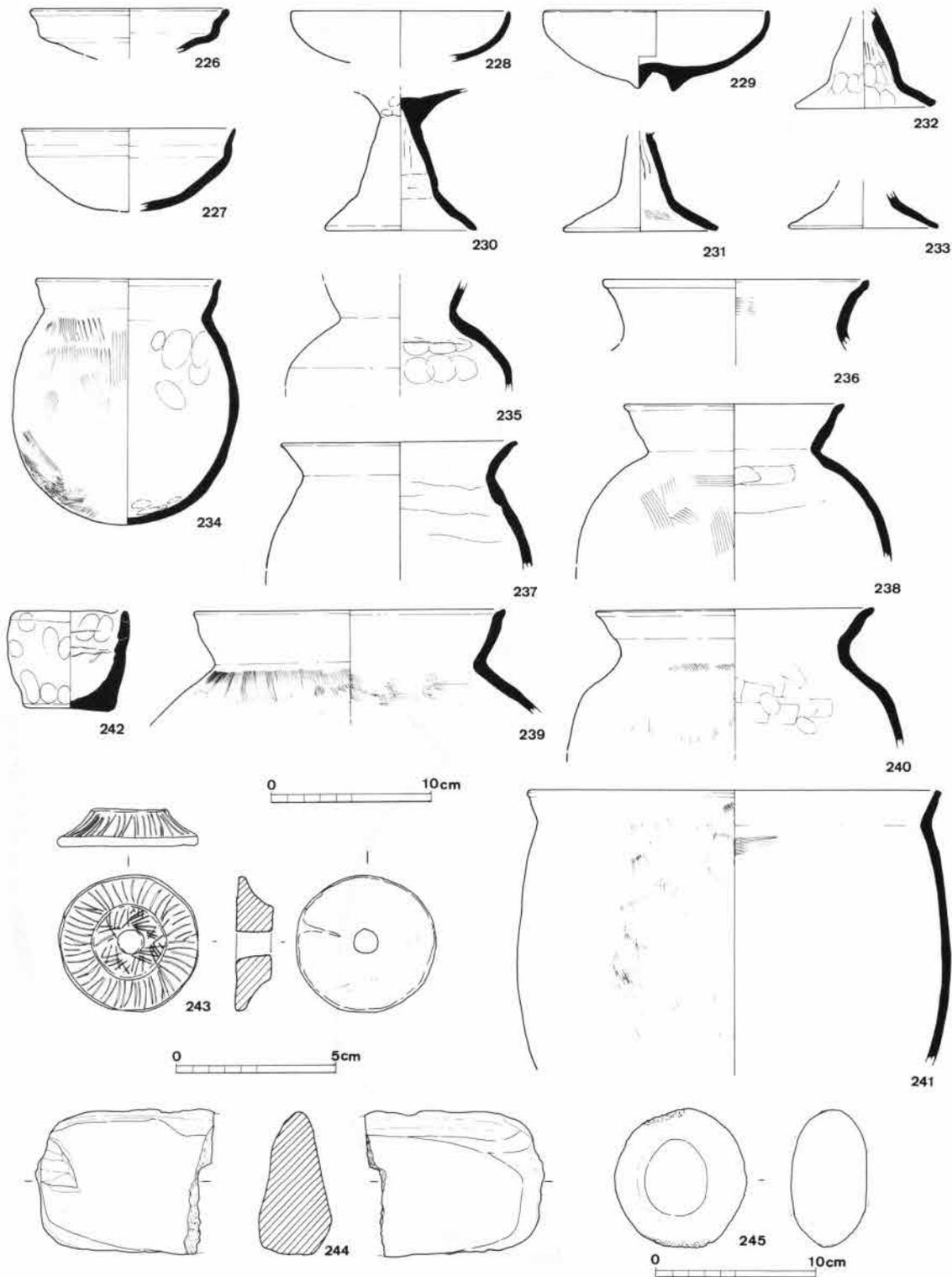
157～165:竪穴式住居跡18 166～177:竪穴式住居跡120



第35図 出土遺物実測図 竪穴式住居跡171

面から出した砂岩製台石(第36図244)と花崗岩製磨石(第36図245)の出土は、当該時期の竪穴式住居跡では、極めて希有な類例であろう。

以上が竪穴式住居跡群の概観である。大半の竪穴式住居跡は、MT15型式に比定できる。しかし、1基の竪穴式住居跡から出土する須恵器の型式が、MT15型式を中心とする住居跡と複数型



第36図 出土遺物実測図 竪穴式住居跡171

式を認定できる住居跡が存在しており、今後の検討を要している。

(3)調査地包含層出土遺物(第39～41図)

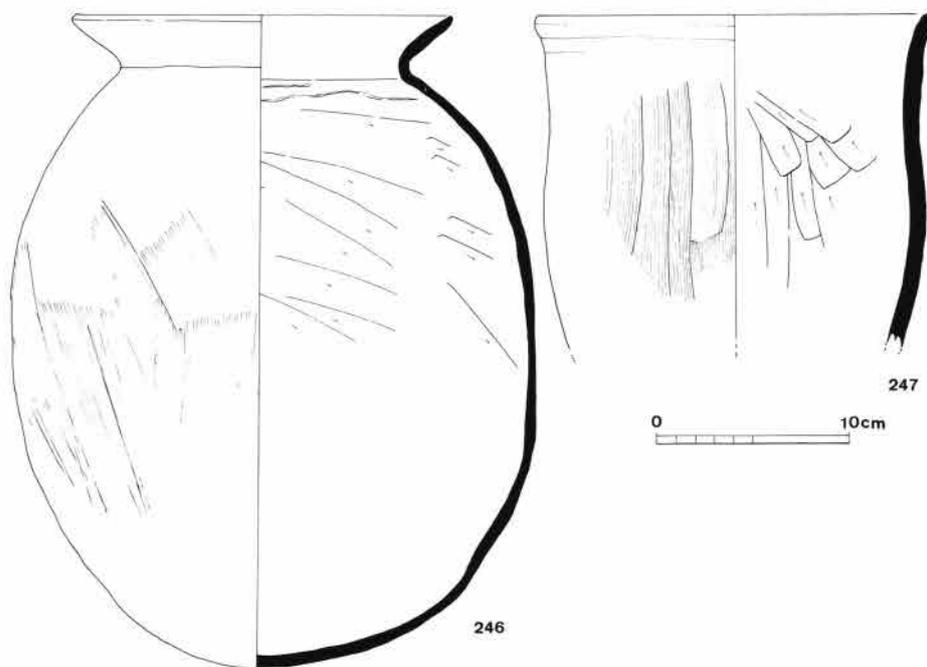
第4 b層からは、第41図303～312の遺物が出土しており、他は、第4 a層からの出土である。包含層からはT K 47型式に比定できる須恵器の蓋杯258やM T 15～T K 10型式に比定できる土器が出土している。これらの土器は、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の時期と同時期である。一方、T K 43～T K 209型式に比定できる須恵器の蓋杯270などは、掘立柱建物跡の存続時期を示す土器として認識することができる。また、甌の把手283～291や土師器ミニチュア土器295、有孔円板298～300や製塩土器・鉄滓などが出土している。なお、鞆の羽口301は、先端部分に溶着した金属槐が付着しており、先端部から3 cmあたりに幅0.8cmの凹部が観察できる。この凹部は、炉壁の装填部にあたる。312は弥生時代中期の高杯形土器、313は鉈の先端部、316は土錘、317は一部に穿孔部をもつ軽石で、漁具に使用していたのであろうか。古墳時代に比定できる遺物として鹿角小片は注意すべき遺物であろう。326～328は土師器の羽釜であり、14世紀に比定できる。

(4)鎌倉・江戸時代の遺構・遺物(第42～46図)

鎌倉時代に比定できる遺構としては、掘立柱建物跡、土壙墓、礫充填土坑145(図版第19-(2))、中世耕作溝群などである。掘立柱建物跡は、北端において小規模な建物跡を2棟、トレンチ南方において1棟検出した。また、古墳時代の遺構面である第4 a層に掘り込まれた中世耕作溝は、第42図に見られるように、概ね3か所に集中する傾向がある。

a. 土壙墓192(第43図、図版第19-(3)) 長軸0.95m×短軸0.6mを測り、平面形態は、南端がやや突出する不整の多角形を呈している。土壙墓底部までの深さは、0.15mであり、中国製磁器や棺材の一部と思われる木製の円形板が出土している。

墓壙底部には、北端の墓壙輪郭に接するように円形の板材が据えられてお



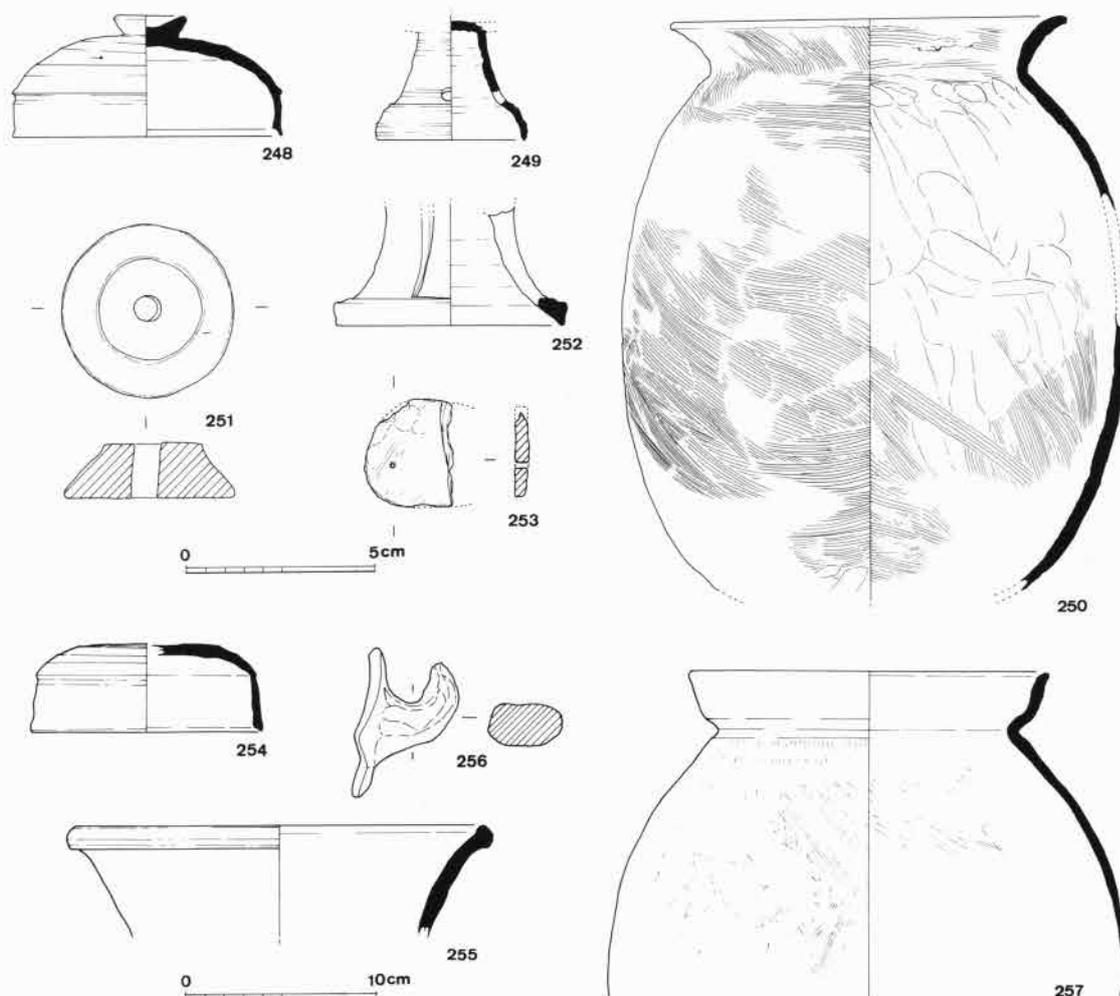
第37図 出土遺物実測図 竪穴式住居跡171

り、棺材の底板と考えられる。一方、底板よりは小さな直径をもつ円形の板材は、底板と接する位置から出土しており、副葬品の一部と考えられる。

第46図に見られる中国製磁器は、底板の北端で重なり合うような状態で検出している。これらの磁器は、別個体の皿ないし碗が、約50%の残存率を保った状態で出土していることから、破碎された磁器の副葬例として認識できる。第46図330は、直径10cm・器高2cmを測る中国同安窯製の青磁の皿である。底部内面には削り込みによる華文が施されている。331は、直径11.8cm・器高2.8cmを測る中国同安窯製の青磁の皿である。底部内面には削り込みによる華文が施されており、基本的には330と同意匠である。332は、口径16.8cmを測る中国龍泉窯製の青磁の碗である。内面には、形骸化した劃花文が施されている。

b. 掘立柱建物跡 鎌倉時代の掘立柱建物跡を総計3棟検出した。

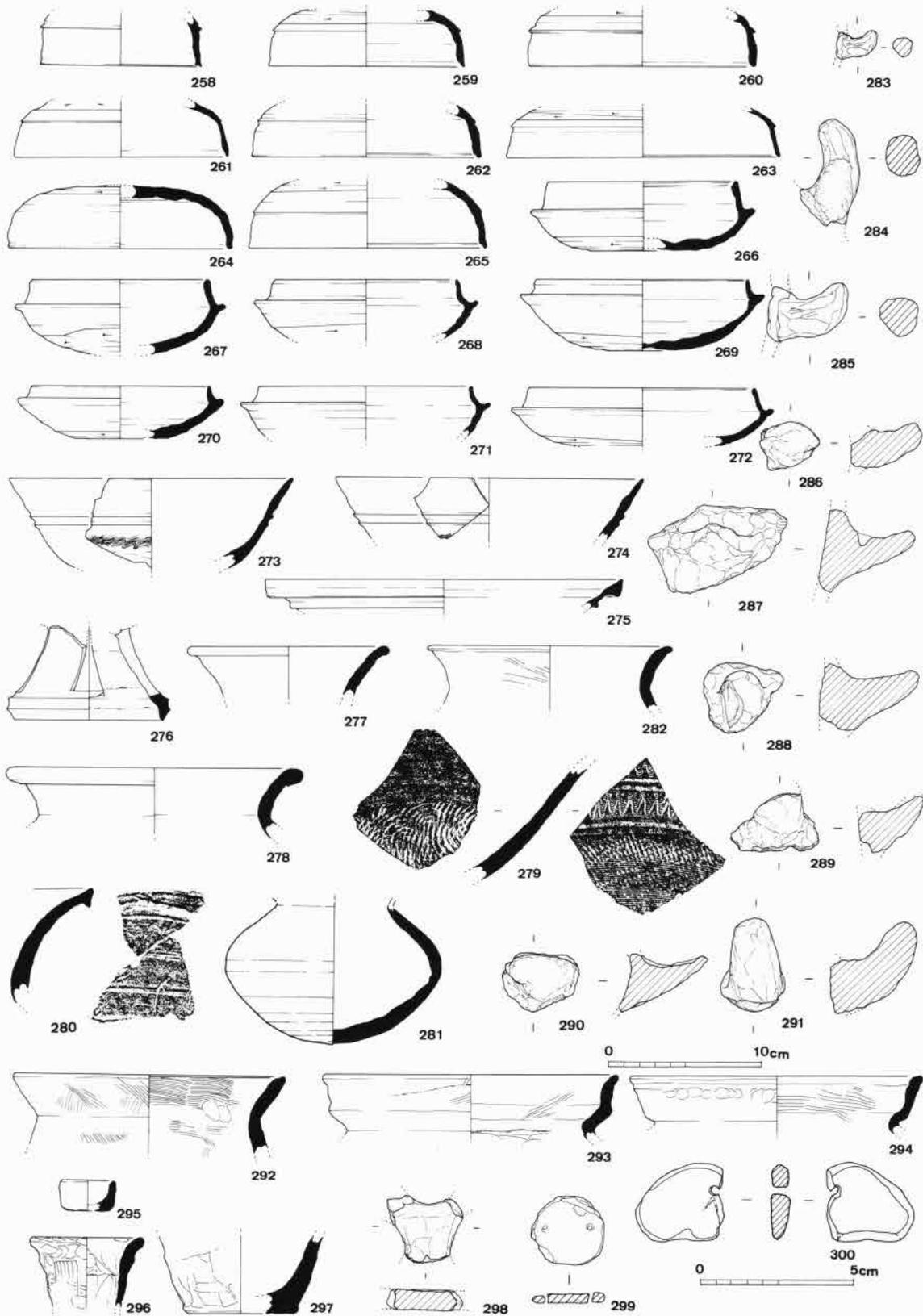
掘立柱建物跡30(第44図、図版第19-(1)) 各柱筋は直線的であるものの、柱筋毎の主軸がわずかにずれており、全体的に不均衡な柱穴配置を呈している。規模は、南北4間(7.7m)×東西4間(7.0m)であり、総柱の建物跡である。柱穴の埋土は、暗灰褐色砂質土であり、古墳の柱穴と



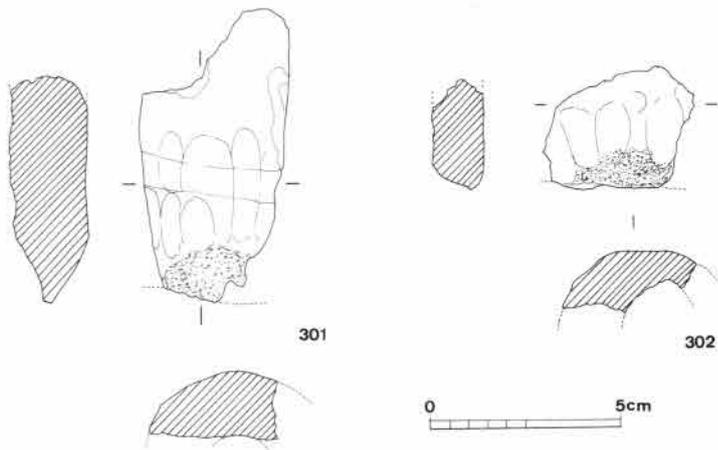
第38図 出土遺物実測図

248~250: 竪穴式住居跡208 251: 竪穴式住居跡134 252・253: 竪穴式住居跡133 254~257: 竪穴式住居跡398

は、比較的簡単に識別できる。概ね14世紀前後に比定できる。なお、掘立柱建物跡30の北方には、同じ埋土をもつ柱穴が斜行するように配置されている。掘立柱建物跡の付属施設である可能性が高いものの、用途は不明である。



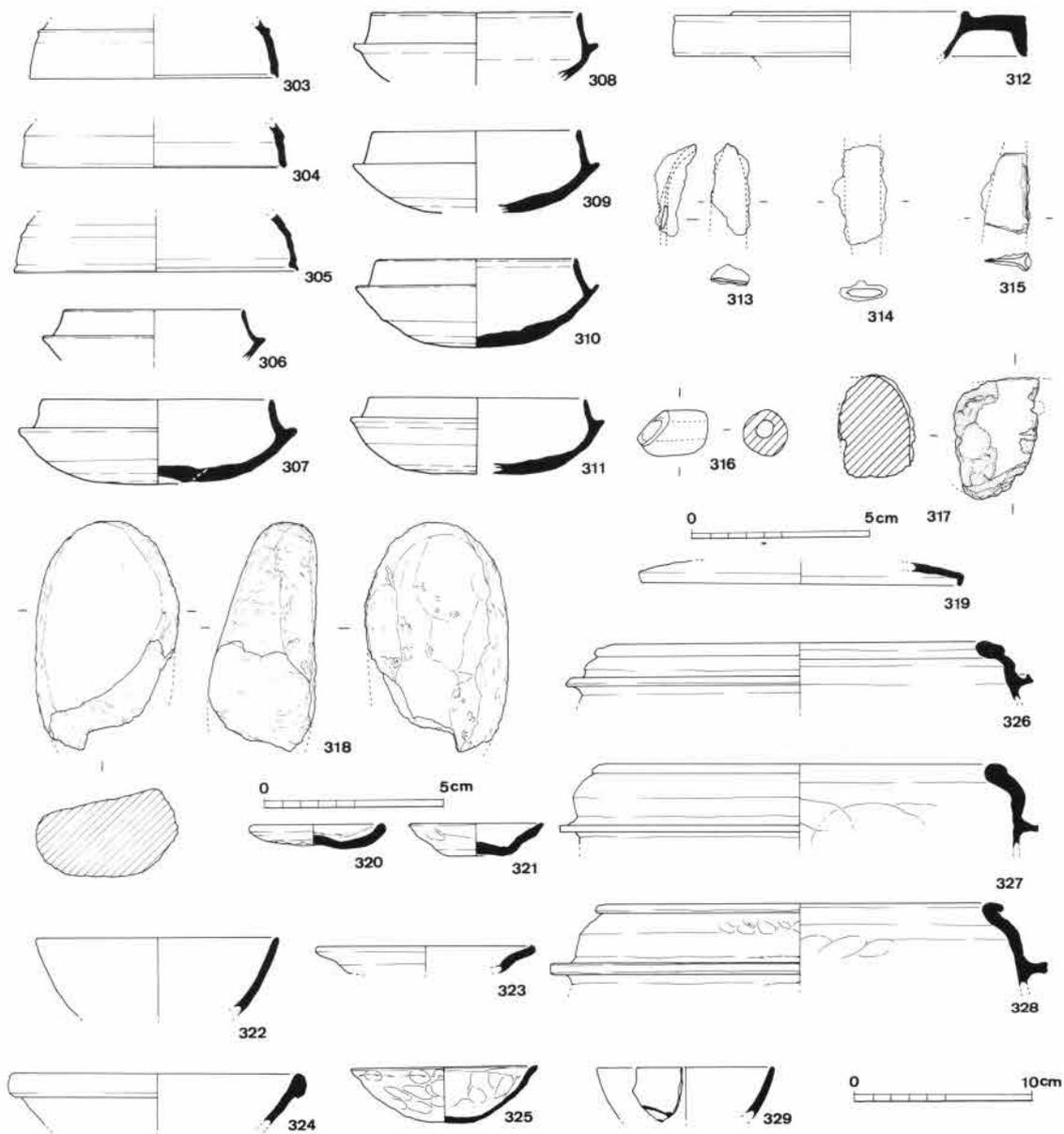
第39図 出土遺物実測図 第4 a層



第40図 出土遺物実測図 第4 a層

掘立柱建物跡31(第45図) 梁間1間(2.5~2.6m)×桁行2間(3.8~4.2m)の小規模な掘立柱建物跡である。主軸は北方に対して概ね直角である。建物跡を構成する柱穴から瓦器細片が出土しており、埋土は、掘立柱建物跡30と同じく暗灰褐色砂質土である。

掘立柱建物跡32(第45図) 掘立柱建物跡の北半は、調査地外へ広がっており、全容は不明である。



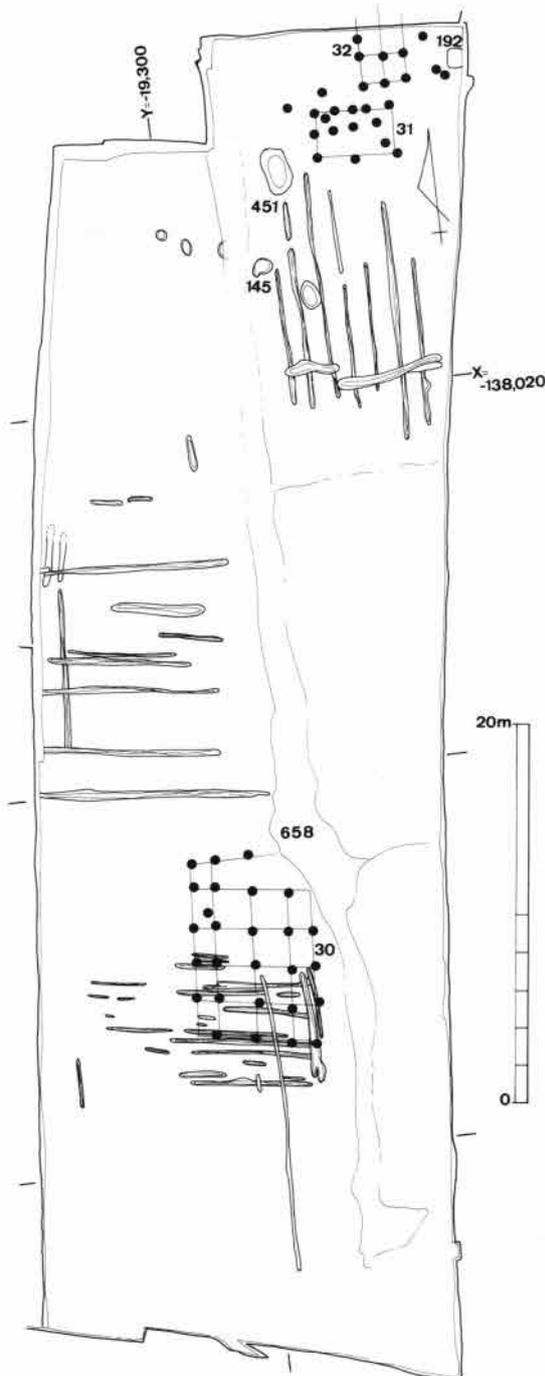
第41図 出土遺物実測図 第4 b層

梁間2間(1.6~1.8m)×桁行2間(1.3m)以上の小規模な掘立柱建物跡であろう。主軸は概ね磁北に一致する。柱穴から瓦器細片が出土し、埋土は暗灰褐色砂質土である。

礫充填土坑145(図版第19-(2)) 直径0.3m・深さ0.2mの規模で、拳大の礫とともに東播系の播鉢片が出土している

c. 中世耕作溝(第42図) 掘立柱建物跡31・32の南側で検出した南北方向の中世耕作溝は1.6m間隔で規則的に穿たれる。また、さらに南側の東西方向の耕作溝は、概ね等間隔に穿たれている。規則的な耕作溝の主軸が異なる要因には、地形の傾斜角が大きく作用していると考えられる。

d. 近世溝658(第42図) 調査地は、5筆の水田からなっていることは先述したが、南北の水田を区画する溝は、地形の段差により明確ではない。調査地中央部を縦貫する溝658は、部分的には杭を打ち込んで水路を確保している。その水路からは広東碗や端反りの磁器碗などが出土していることから、19世紀前半以降の造作であることが把握できた。周辺一帯の水田の景観が、江戸時代の新田開発によることは、周知の事実であるが、具体的に考古資料で確認でき、さらに、時期を特定できたことは、貴重な調査成果である。

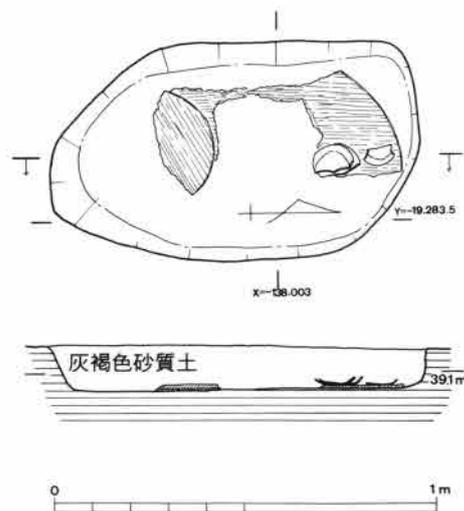


第42図 鎌倉～江戸時代遺構分布図

4. 試掘調査の概要

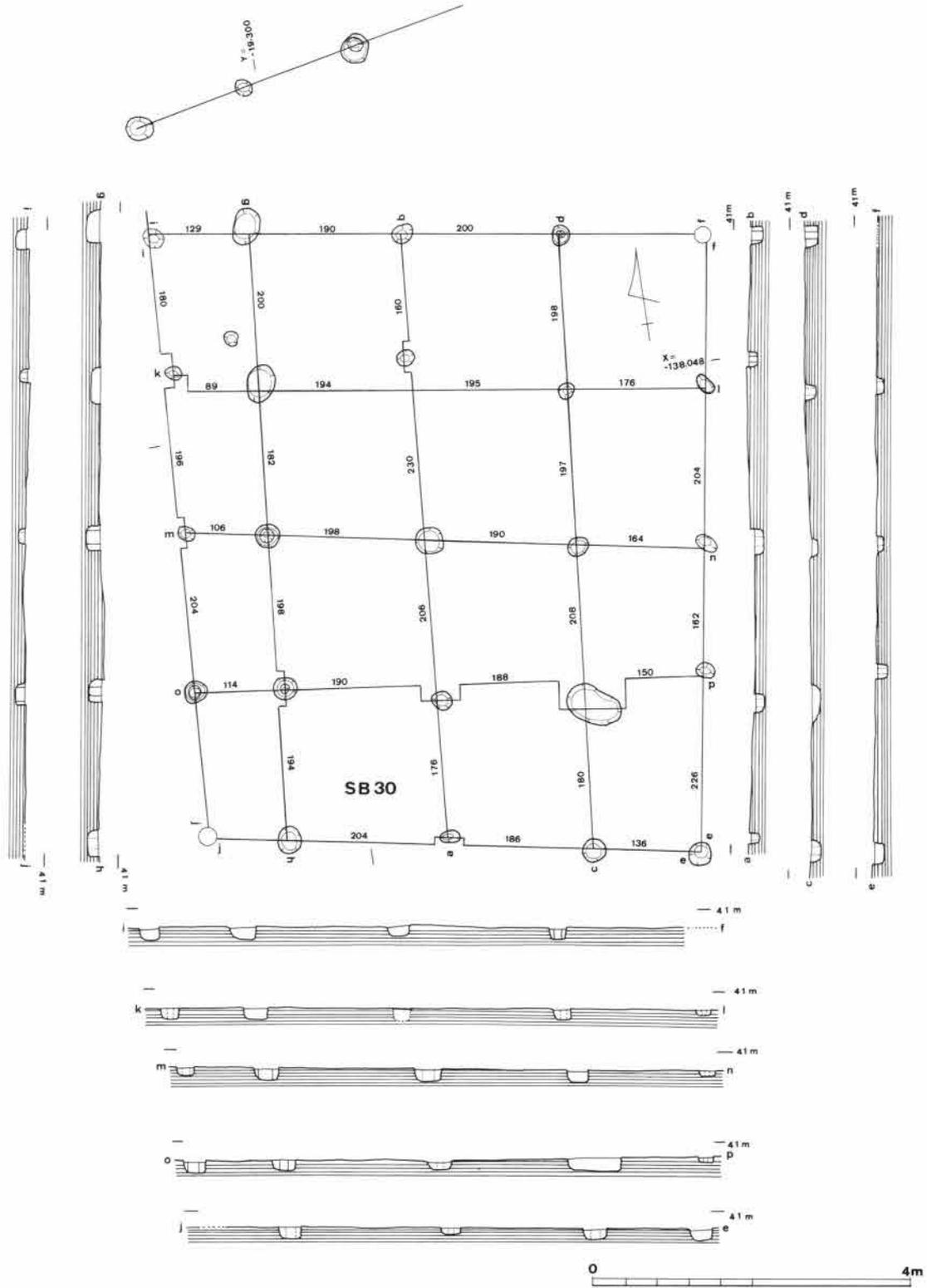
(第47・48図、図版第20・21)

平成9年度は、A1地区の面的調査とともに、遺跡の範囲、特に南限を確定するための試掘調査



第43図 土壙墓192実測図

を京都府教育委員会指導部文化財保護課の調整を受けて実施した。なお、試掘調査成果は、調査の進行上、2回に分割して同保護課技師による確認を依頼し、遺跡の範囲を確定した。以下、各試掘坑を簡潔に概観しておきたい。



第44図 掘立柱建物跡30実測図

第1トレンチ B地区の北限に設定した。溝や柱穴を検出し、須恵器・土師器が出土している。古墳時代の包含層及び遺構検出面である第4 a層は、標高43.3mにおいて確認した。

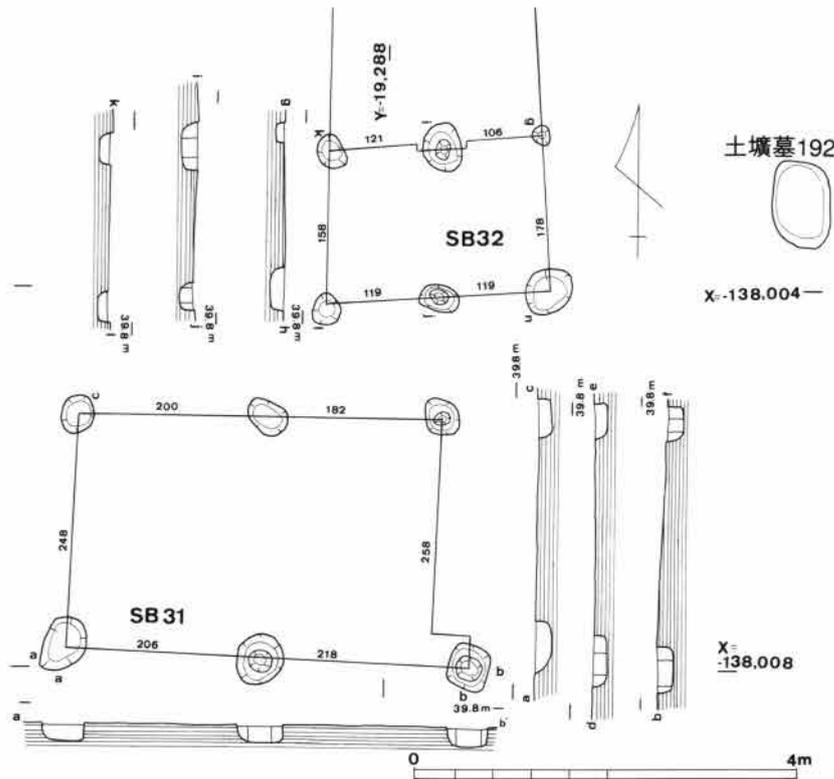
第2トレンチ B地区中央部に設定した。土坑・柱穴・竪穴式住居跡の一部かと思しき直線的な変色部を検出し、須恵器・土師器が出土した。第4 a層は、標高43.5mにおいて確認した。

第3トレンチ 第2トレンチ南方に設定した。溝・大型土坑などを検出し、須恵器・土師器が出土した。第4 a層は、概ね標高44mにおいて確認した。

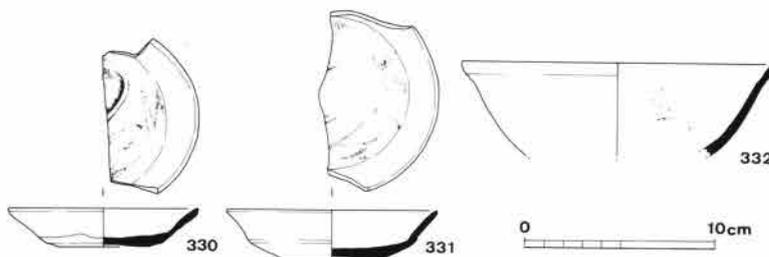
第4トレンチ B地区南端に設定した。溝と柱穴を検出し、須恵器・土師器が出土した。第4 a層は、概ね標高44.3mにおいて確認した。

第5トレンチ C地区北西端に設定した。溝と柱穴を検出し、須恵器・土師器が出土した。第4 a層は、概ね標高44.5mにおいて確認した。なお、第3層が5～6層堆積しており、古墳時代以降の堆積環境が異なる。

第6トレンチ C地区北東端に設定した。多数の柱穴と円形の土色の変色部を検出した。須恵器・土師器が出土



第45図 掘立柱建物跡31・32実測図



第46図 出土遺物実測図 土墳墓192

器・土師器が出土し、第4 a層は、標高44.5mにおいて確認した。

第7トレンチ C地区中央部に設定した。V字形の土色の変色部を検出した。須恵器・土師器が出土し、第4 a層は、標高45mにおいて確認した。

第8トレンチ 全面において溝と柱穴を検出し、須恵器・土師器が出土した。第4 a層は、標高45.2mで確認した。

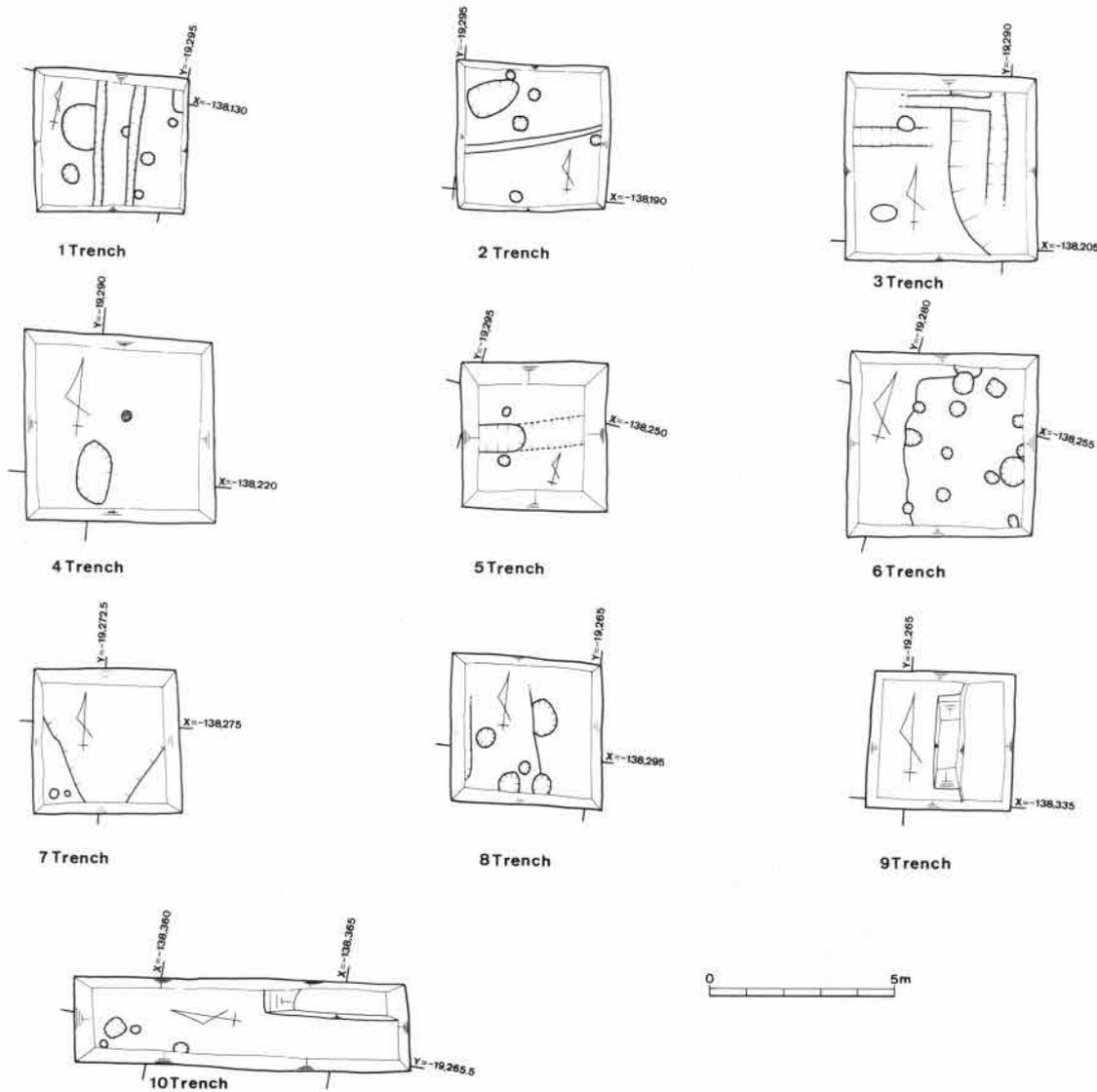
第9トレンチ C地区南端に設定した。顕著な遺構及び第4 a層も確認できなかった。

第10トレンチ 近世ピット以外には顕著な遺構は検出できず、第4 a層も確認できなかった。

第11トレンチ 第8・9トレンチ間に設定した幅1mのトレンチである。トレンチ中央部で、若干の遺構と第4 a層を確認した。よって、第11トレンチ中央部以北が、森垣外遺跡の範囲であることが把握できた。今後、発掘調査対象域を設定する際の根拠となろう。

5. 小 結

森垣外遺跡第2次の発掘調査では、以上のように古墳時代中期後半から後期にかけての集落を確認できた。検出した遺構群から集落構造を解明する手だてとしては、各遺構の時期を正確に把握し、遺構の変遷を把握する必要がある。竪穴式住居跡や溝・土坑の場合は、比較的一括資料が得易い状況であるが、掘立柱建物跡の場合は、建物を構成する柱穴からの遺物がわずかなこともあり、また、下層の包含層中の遺物を掘立柱建物を造営する際に掘り起こし、2次的に混入する可能性もあるため、建物の正確な年代を確定することは、困難な条件下にある。当該遺跡の集落



第47図 B地区以南の試掘坑平板測量図

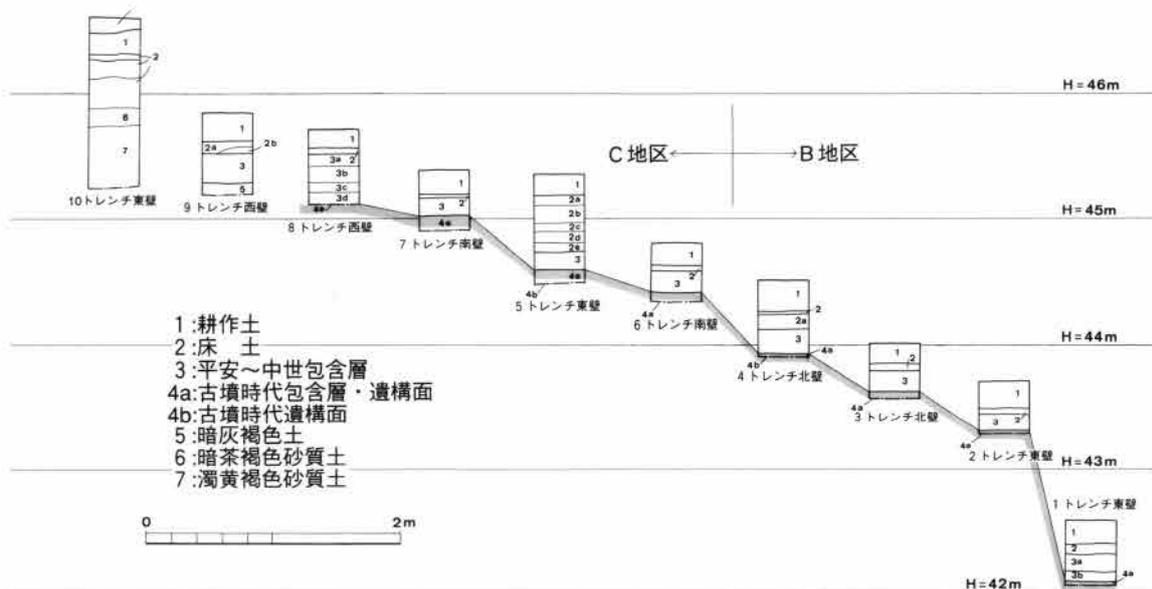
構造を解明する上で、掘立柱建物跡と他の遺構の併存関係の把握は、最も重要な課題といえる。

概要報告作成にあたり、本来ならば、遺構の変遷を整理した上で年代順に概観する必要があるが、掘立柱建物跡の時期を正確に把握できないため、遺構の種別毎にその概要を記述せざるを得なかった。そのため、集落構造の変遷については、不鮮明になった部分もあるが、今後、予想される当該遺跡での発掘調査の成果をまって、再考する必要がある。

ここでは、まず、当該遺跡の調査成果が提起する問題点を各遺構毎に整理したいと思う。

方墳 A1トレンチの北方で検出した一辺9.5mの方墳10とL字形に屈曲する溝657確認した。方墳10の東半は、新田開発による削平を受けている。そのことを勘案すると、周辺域に既に消失した方墳が存在する可能性が高い。おそらく、地形的要素から調査地北方に広がりを見せる可能性が指摘できる。周辺地域では、森垣外遺跡の北方100m地点で一辺17mの古墳時代前期末の方墳が検出されており、ほぼ同時期の古墳として認識できる。これらの古墳は、古墳時代前期末から中期初頭に築造されたにも係わらず、伝統的な方形墳を採用していることから、いわゆる低墳丘方形墓の系譜上に位置付けられ、在地勢力の自立的発展が古墳築造の背景にあると考えられる。

大壁住居跡639 調査区のほぼ中央で確認した大壁住居跡639は、一辺約9mの方形の基礎布掘り溝の底部に、南北辺5間×東西辺6間の柱穴が等間隔に穿たれている。築造時期は、基礎の布掘り溝で囲まれたわずかな盛り土からMT15型式に比定できる第14図22～27の須恵器群が出土している。しかし、確実に竪穴式住居跡120・171・656の下層において検出した遺構であり、これらの竪穴式住居跡群からも、ほぼ同型式の須恵器が出土していることから、少なくともMT15型式以前に構築された遺構とすべきである。可能性としては、先述したように大壁住居跡639に隣接する土坑204からは、TK23型式に唯一比定できる須恵器の杯蓋(第15図34)が出土しており、この土器が、大壁住居跡639の構築時期を示す可能性も視野に入れておきたい。基本的には、MT15型式以前に比定できるが、他の遺構との関係も勘案すべきである。今後の課題であろう。



第48図 B地区以南の試掘坑土層断面実測図

壁立式の大壁住居跡は、奈良県南郷遺跡(古墳時代中期)、滋賀県穴太遺跡(古墳時代後期)、大阪市桑津遺跡(古墳時代中期)、神戸市寒鳳遺跡(古墳時代中期)、神戸市上沢遺跡(古墳時代中期)、愛知県矢迫遺跡(古墳時代後期)などで検出されている。南郷遺跡の大壁住居跡S D01は、東西7m×南北9.7m以上のコ字形を呈している。基礎の布掘り溝より直径の大きい柱穴も見られる。桑津遺跡の大壁住居跡S B03は、梁間4.11m×桁行11.5mの長方形プランをもち、溝内には柱痕は確認されていない。寒鳳遺跡^(注6)の大壁住居跡1は、東西6.5m×南北4.7の規模をもち、梁間4間×桁行5間の柱穴をもつ。また、大壁住居跡2は、東西3m×南北3.4mの規模をもち、梁間3間×桁行3間の柱穴をもつ。矢迫遺跡では3棟の大壁住居跡が切り合い関係をもって確認されている。特に、穴太遺跡^(注7)では森垣外遺跡の大壁住居跡639と同じく、一辺9mを測り、不規則ではあるが柱穴が見られるA型、東西13.4m×南北6mの低い土壇上に礎石を配するB型、一辺5mの低い土壇上に礎石を配するC型、一辺7mの方形プランを有し、南面が入り口部として基礎の布掘り溝が断絶する大壁住居跡と5.5m×6.5mの基礎の布掘り溝内に梁間3間×桁行3間の柱穴を穿ち、庇をもつD型、いわゆるオンドル付き住居であるE型に分類されている。

大壁住居跡は、滋賀県下之郷遺跡24次調査において弥生時代に比定できる「壁立式の平地建物」が確認されているが、一般的には、古墳時代中期に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされた建築様式と考えられている。これを傍証するかのように当該遺跡からは、縄文土器96や無文の叩き具や当て具によって成形された陶質土器の甕51、そして、韓式系土師器18及び携帯用扁平砥石98などが出土している。これらから森垣外遺跡における渡来人の存在は、ほぼ確定できる条件が揃ったと言える。なお、出土した陶質土器は、考古学的検討においては、ほぼ断定しうる要素をもっているが、蛍光X線分析結果からも陶質土器である可能性が指摘されており、今後、数量的な分析による検討が急がれる。

京都府内において大壁住居跡に類似する遺構の検出は、古墳時代後期末に比定される舞鶴市志高遺跡において類例が知られている。周溝内に柱穴を穿ち、区画内部に四柱穴をもつ構造を呈しているが、周溝内の柱穴と四柱穴の併存は、いわゆる壁立式の大壁住居跡の構造としては、やや問題点も指摘できるところである。また、大壁住居跡が検出される遺跡の多くが、陶質土器の出土や渡来人の存在を示唆する遺構・遺物が確認されている場合が多い。しかし、志高遺跡ではそれらの要件は確認されていないことから、当該遺構を大壁住居跡と規定するには、多方面からの検証が必要である。なお、大壁住居跡は、現時点では確認されていないが、陶質土器などの出土が確認されている乙訓地域においては、今後、検出される可能性は高いことが指摘できよう^(注8)。

掘立柱建物跡 検出した柱穴は概ね700を数え、復元できた掘立柱建物跡は、現時点で28棟である。掘立柱建物跡の主軸は、地形の傾斜軸を基準としており、必ずしも磁北からの振り角によって掘立柱建物跡の時期設定ができないことを示している。個別の掘立柱建物跡の表記はしなかったが、建物跡の主軸を表わしたのが第49図である。主軸方位が北から東へ振る角度も40°～70°の範疇に入り、また、北から西へ振る角度も25°～40°の範疇に入る。このことから微妙な振り角に違いはあっても、概ね、直交する方向に建物跡の主軸をとっていることが理解される。

掘立柱建物跡の建造時期は、柱穴653からTK216型式に比定できる須恵器(第27図133)が出土しており、掘立柱建物跡が成立する時期を示す一括埋納の遺物として重要である。また、TK208～TK209型式の須恵器も出土していることから、比較的長期にわたって掘立柱建物跡が存続していたことが把握できた。その中であって最も中心になる時期は、竪穴式住居跡がMT15～TK10型式を中心時期とすることと掘立柱建物跡と竪穴式住居跡の切り合い関係から、TK47～MT15型式が掘立柱建物跡の中心時期として認識できる。なお、竪穴式住居跡と併存する掘立柱建物跡の存在と竪穴式住居跡が廃絶した後の掘立柱建物跡の存在も考慮する必要があるが、各時期の掘立柱建物跡を分類することは、現状では極めて困難である。しかし、柵1とその北側に建造されている掘立柱建物跡1～4、9・10・18及び柵1と柵2に囲まれた空間などは、中心的な時期を構成する掘立柱建物跡群と考えておきたい。

竪穴式住居跡 検出した竪穴式住居跡は、総計10基を数える。各竪穴式住居跡の主軸は、掘立柱建物跡と同じく地形の傾斜軸と一致している。竪穴式住居跡の中心時期は、MT15～TK10型式に比定でき、古墳時代後期前半の集落として位置付けられる。

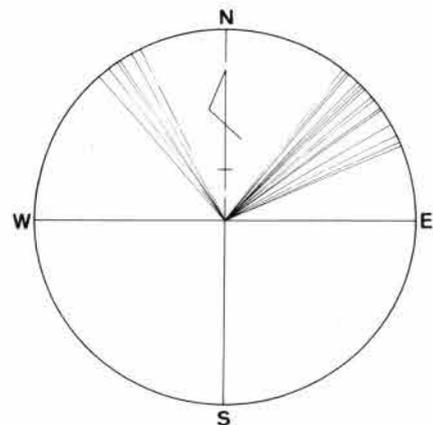
竪穴式住居跡120・171の南西辺には、長形状の張り出し部をもつことが確認できており、他の住居跡には確認できない特徴である。同様な施設をもつ類例としては、奈良県南郷遺跡SB06(古墳時代中期)があるが、報告によると入り口部が想定されている。また、朝鮮半島の忠清南道扶餘郡扶蘇山城第3号建物址(百濟、泗泚時代)では、入り口が想定されており、岡山県高塚遺跡・福岡県上々浦遺跡16号竪穴式住居跡・同金武城田遺跡SC04・同大道端遺跡C区34・35号住居などにも類例がある。明確な用途を提示する遺跡は少ないが、入り口ないしは竈を想定する報告が多い。系譜と用途については、今後の検討課題であるが、朝鮮半島を視野に入れる必要もある。

以上を各遺構毎の総括としておきたい。最後に、今回実施した森垣外遺跡の調査成果から提起できる問題点について簡潔にふれておきたい。

近年、陶質土器などの外来系遺物の出土は、増加する傾向にあるが、明確な遺構から共伴遺物を伴って出土する事例は限定される。更に、出土遺構の集落内での機能や集落構造がある程度明らかにされた遺跡からの出土事例となると、かなり限定される傾向がある。今後は、集落構造が把握され、なおかつ陶質土器が出土した奈良県布留遺跡や岡山県山陽町斎富遺跡などとの比較により、渡来人が居住した集落の共通要素を抽出し、立地条件や集落構造を類型化する必要がある。その上で外来系遺物を捉え直す作業が急がれる。当該調査では、まず、その基礎資料として重要な成果を得ることができた。

最後に、森垣外遺跡が南山城地域において有する歴史的意義について、私見を提示しておきたいと思う。

京都府内において、古墳時代中期から後期にかけての集落遺跡は、乙訓地域や京都市域で確認されているが、



第49図 掘立柱建物跡主軸方位

特に、南山城地域に限定すれば、八幡市新田遺跡や同内里八丁遺跡などが知られている。しかし、これらの集落の成立時期については、森垣外遺跡とほぼ同時期に比定できるが、竪穴式住居跡が主体を占めており、掘立柱建物跡や大壁住居跡は検出されていない。また、韓式土器の出土は内里八丁遺跡においてわずかに確認されているが、基本的には、朝鮮半島系の遺物の出土は見られないのが現状である。新田遺跡や内里八丁遺跡の成立は、森垣外遺跡とほぼ同時期ではあるが、遺構・遺物の考古学的所見から両者を比較すれば、集落が成立した歴史的背景は著しく異なっており、森垣外遺跡における先進性を読みとることができるのである。

また、乙訓地域には、韓式土器などの出土が知られる遺跡も確認されているが、調査面積が狭小なため、集落構造については不明な点が多いのが現状である。乙訓地域には、向日市元稻荷古墳などのように前期の前方後方墳などが点在することが知られており、おそらく、古墳時代前期からの自立的発展が、前期古墳成立の背景にあると推測される。しかし、森垣外遺跡の周囲には、わずかな前・中期古墳の所在は知られていても、大型前方後方墳などは確認されていないことから、やはり、両者の集落が成立した背景にも、大きな相違が見受けられる。一方、八幡市域や乙訓地域および森垣外遺跡には、淀川に流れ込む木津川・桂川流域に立地する共通の要素もあり、交通の拠点上に立地していることが把握できる。

現時点で、各集落の成立要因の詳細は不明だが、考古学的調査の進展により、一定の基準作りが可能になりつつある。その意味で、この調査成果は、新しい要素を提示したと考えられる。

さらに、南山城地域では、全長180mの城陽市久津川車塚古墳が古墳時代中期中葉に築造され、中期後半には、首長墓系譜を引く全長110mの芭蕉塚古墳が築造される^(注9)。それ以後、首長系譜を引く大型の前方後円墳が見られないことから、この時期に南山城地域に基盤をおく首長層の政治的再編成が行われたと考えられる。また、河内や大和・近江において外来系の遺構・遺物が集落内で増加する時期も中期以降であり、森垣外遺跡の中心的な時期も中期末～後期中葉である。

大型前方後円墳の消失と外来系の遺構・遺物を有する集落の増加は、直接的に結びつく現象ではないが、畿内政権によって掌握されていた渡来人が、やがて、斎富遺跡や森垣外遺跡のような畿内周辺域の先進的な集落に参入するような変化は、重要であると思われる。しかし、奈良盆地のように、有力な国造によって形成された南郷遺跡・布留遺跡などの拠点集落の様相とは、集落が成立した歴史的背景が異なるため、同一視することは厳に戒めなければならない。

今回の調査地は、渡来人を中心に形成された集落の一部と考えられ、鞆の羽口や鉄滓などの出土から鍛冶などを行った作業空間及び住居域と推定できる。一方、当調査地以南の試掘調査では、同時期の遺構・遺物を検出しており、標高も45mと高いことから、集落の立地条件は、A1地区よりも良好である。このことから標高45mを測るB・C地区一帯には、今回、検出した渡来人集落を実質的に運営した有力者が住まう中核的施設の存在を想定することができる。この有力者と渡来工人集団の関係については、今後の調査成果を待たなければならないが、「トモ」と「ベ」^(注10)としての関係で捉えられる可能性も消極的ながら指摘しておきたい。

なお、森垣外遺跡の範囲(第50図)は、路線上で南北範囲は確認できたが、東限は、今回の遺

構面が傾斜しながらも連続している範囲に想定できる。また、西限は、丘陵基部まで広がる可能性を想定できよう。周辺における調査の事例により、その範囲はさらに限定できるであろう。

6. おわりに

以上、森垣外遺跡の調査成果について概観した。本来ならば、各遺構から出土した遺物を統計学的手法を用いて、資料化する必要があったが、膨大な出土点数に及ぶため、年代設定が可能な資料についてのみ図化した。図化し得た資料は、わずか330余点に過ぎないが、遺跡全体の年代設定を行う上では、一定の標準に達したと考えている。一方、検出した遺構は、極めて多岐に及んでいるが、南山城において、以上のような調査成果を有する当該時期の集落遺跡は他に見られず、南山城の古墳時代の動態を墳墓以外の観点から検証できる遺跡として重要である。これは、従来、墳墓調査が主流を占め、それを通して古墳時代の政治史が検討されてきた経過を踏まえて



第50図 森垣外遺跡範囲想定図
(アミ矢印は、地形から想定される旧流路を示す)

の問題点の指摘であるが、集落構造を詳細に検証する作業こそが、古墳時代の社会構造を究明する本質的研究であると考えている。

その意味において森垣外遺跡の発掘調査は、極めて重要かつ示唆に富んだ成果を提示している。今後、周辺域において、同じような集落構造をもつ遺跡が検出され、両者の比較検討が最も重要な検討課題となることは必至である。また、当該地域が、古くから渡来文化と深い関係にあったことは、文献や地名との関係から考慮されてきたが、考古資料によって確実な年代が押さえられたことは、当該地域の歴史的背景を考察する上での基礎的資料となる。

(小池 寛)

最後に、調査期間中、以下の方々から有益な助言と協力を頂いた。芳名を記して感謝の意を表したいと思う。(敬称略・五十音順)

有井広幸・池田 毅・磯野浩光・井上満郎・亀田修一・木原 滋・鐘方正樹・小泉裕司・近藤義行・定森秀夫・杉原和雄・鷹野一太郎・田中清美・土橋 誠・中島和彦・中島 正・鍋田 勇・橋本清一・日野宏・平井敏三・福岡澄男・村川俊行・村田照久・吉村正親・和田晴吾

調査等参加者(敬称略・五十音順)

西根正弘・井ノ口雄三・小松厚子・宮元香織・大坪由美子・大山慶子・野黒雅美・船原佳久・村上雅紀・久田 亨・伊達優子・古賀友佳子・前山華苗子・井上綾子・高橋富子・平林千佳・奥島かおり・高木彩・大田正孝・田畝美紀・生原理恵・山村智美・石堂詩乃・岩下和江・佐伯金子・斉藤和子・小川布子・吉川三子・金戸康子・福岡正春・西置純子・辻 俊佑・小本美穂・高江かおり

- 注1 平良泰久「精華の古墳時代」(『精華町史』本文篇 精華町史編さん委員会) 1996
- 注2 伊賀高弘「北稲・柿添遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注3 有井広幸「柿添遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第72冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注4 引原茂治「柿添遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注5 伊賀高弘「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注6 神戸市教育委員会池田 毅氏のご教示による。
- 注7 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996
- 注8 古閑正浩「京都府乙訓地域の韓式系土器・竈形煮炊具の様相」(『韓式系土器研究VI』韓式系土器研究会) 1996
- 注9 和田晴吾「南山城の古墳—その現状—」(『京都地域研究Vok. 4』立命館大学人文科学研究所) 1988
- 注10 小池 寛「南山城における渡来人集落の様相 —精華町森垣外遺跡の概観と問題点の指摘—」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

※類例として本文中に記載した遺跡の文献は割愛した。

森垣外遺跡出土硬質土器の産地問題について

奈良教育大学 三辻 利一

畿内の5世紀代の遺跡からは、考古学的な観察によって陶質土器と判断される硬質土器がしばしば出土する。一方、大阪陶邑の一角にある大庭寺1・2号窯(TG-231・232号窯)から出土する初期須恵器は、韓国の考古学者からみても、日本の考古学者から見ても、陶質土器と判断する。それにもかかわらず、蛍光X線分析の結果では、大阪陶邑産であることを立証した。このことは朝鮮半島から渡来した工人集団が陶邑の一角で、陶邑内で出土する粘土を素材として製作した須恵器であることを明示する。当然、大庭寺窯以外にも朝鮮半島から渡来した工人集団が操業した窯があることも予想される。

このとき以来、外見上の観察によって陶質土器と判断される硬質土器は胎土分析をすることが必要となった。本報告では、森垣外遺跡から出土した、外見上、陶質土器と見られる6点の硬質土器の蛍光X線分析の結果について報告する。

須恵器小片は表面を研磨し、自然灰釉などの付着物を除去したのち、タングステンカーバイト製の乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リンクを枠にして13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。このように一定形状の試料を調製するのは蛍光X線分析による定量分析は測定される蛍光X線強度の比較に基づくことによるからである。すなわち、相対分析であるからであるため測定条件も全て、統一される。

土器を分析する方法はいくつもある。しかし、古代土器の産地推定法の開発研究にはどの分析法も使用できるという訳にはいかない。須恵器を生産した窯跡は全国各地に数千基はあると言われる。生産地が多だけに、各地の須恵器の科学特性を求めるためには、大量の試料の分析が必要である。万を越える試料の分析が必要である。これらの分析データに基づいて、須恵器の産地推定法は組み立てられる。これだけの試料の分析に耐え得る分析装置は完全自動式蛍光X線分析装置をおいて他にはあるまい。

こうした背景から、筆者はこの研究の当初から、完全自動式蛍光X線分析装置を使用した。現在、48個の試料が同時に搭載できる自動試料交換機に連結して、蛍光X線分析装置を使用している。その結果、年間1万点を越える土器試料が分析できる。

土器中のK・Ca・Rb・Srは蛍光X線分析によって容易に定量分析できる。窯跡出土須恵器はK-Ca、Rb-Srの両分布図で集中して分布することが発見されて、遺跡出土須恵器を窯跡に結びつける考え方で産地推定法は組み立てられた。

筆者の開発した須恵器産地推定法ではまず、分析して得られた生データをK-Ca、Rb-Srの両分布図にプロットし、その分布位置に対応する窯を選び出す。もちろん、遺跡で窯跡は年代から見て同時期である事は必要である。このように、定性的な手法で産地候補となる窯跡又は窯群を選

び出しておき、次の段階で統計学の手法を導入し、2群間別分析を行う。産地候補が3つ以上ある場合には、その中から2群を取り出して、漸次、2群間判別分析をくり返す。そして、各母集団への帰属条件を満足した産地候補が改めて、産地として推定される訳である。

この方法を森垣外遺跡出土の硬質土器に適用した結果を次に説明する。

分析値は表1にまとめられている全分析値は標準試料として使用した岩石標準試料、JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準比した値で示されている。この表示方法は大量の試料の分析データを迅速に処理するための使法として開発されたものである。この値を%やppm濃度表示に変換することは可能であるが、標準比値のyyで使用する方が、両分布図を作成する上にも、また、統計計算をする上にも便利である。

表1のデータに基づいて作成した両分布図を図1に示す。この図には大阪陶邑窯群出土の多数の試料を包含するようにして陶邑領域を、また、高霊の内谷洞窯、昌寧の余草里窯出土陶質土器の分析値を包含するようにして伽耶領域を描いた。釜山周辺には陶質土器の窯跡は見つけられていない。釜山・蓮山洞古墳群から出土した陶質土器が比較的まとまって分布したので、これらを包含するようにして釜山領域とした。

これらの領域は本来、95%の等確立楕円で描かれるべきであるが、手書きで手軽に描けるところから、長方形で描いてある。したがって、その領界は定量的な意味はもたないが、定性的に比較する場合にはこれで十分である。

図1をみると、両分布図で陶邑領域に分布するのはNo5とNo6の試料だけである。表1をみると、No5・6は全因子で類似しており、同一窯の製品とみられる。これら2点は図1から陶邑領域と対応するが、判別分析により陶邑群に帰属するかどうかを調べた。そのために必要な因子はマハラノビスの汎距離の2乗値(D^2)である。陶邑群、伽耶群の重心からの D^2 値を計算した結果は表1に示されている。 D^2 値の計算にはk・Ca・Rb・Srの4因子を使用した。この場合における陶邑群、伽耶群への帰属条件は $D^2(\text{陶邑}) \leq 10$ 、 $D^2(\text{伽耶}) \leq 10$ である。No5・6の2点は陶邑群への帰属条件を十分満足しており、陶邑産と推定される。もちろん、伽耶群への帰属条件を満たしていない。したがって、No5・6は図1に示されている通り、陶邑産の須恵器である。

No1は $D^2(\text{伽耶}) \leq 10$ を満足しており、陶質土器である可能性をもつ。可能性をもつという表現をとったのは、陶邑群と伽耶群は完全に分離せず、陶邑群の資料の中に、伽耶群での領界周辺に分布するものがあるからである。No1は図1ではK-Ca分布図では伽耶領域に分布するが、陶邑領域には分布していないのに対し、Rb-Sr分布図では陶邑領域に分布するが、伽耶領域には分布しない。 D^2 値だけを見てみると、伽耶群と判断されるが、陶邑産である可能性も残されていることを付記しておく。

これに対して、No2・3・4は図1からみてもわかるように、陶邑領域には対応しない。陶邑産の須恵器ではないことはほぼ、間違いない。これらが5世紀代のものであるとすれば、須恵器ではない。朝鮮半島産の陶質土器である。ただ、目下のところ、釜山市周辺地域には窯跡は見つけられてはおらず、蓮山洞古墳群の陶質土器をもって釜山群に代替させるしかない。そうすると、

No 3・4は両分布図で釜山領域に対応しており、金海伽耶の周辺で製作された陶質土器の可能性が高くなる。

No 2は伽耶の磡溪堤窯の領域に分布するのが、陶質土器の可能性が高い。No 2・3・4は対応させるべき窯群が明確でないので、ここでは陶質土器(?)としておいた。ただ、陶邑産の可能性はほとんどないことだけは確かである。

以上の結果、No 5・6は陶邑産の須恵器である。No 1は陶質土器か、陶邑産の須恵器かの判断が難しい資料である。No 2・3・4は陶邑産の須恵器ではない。陶質土器の可能性が高い。もし、陶質土器であれば、No 3・4は金海伽耶の製品である可能性が高い。No 2については伽耶地域内のどこの製品であるかはよくわからない。

<補稿>各分析試料の考古学的所見

試料1は、器表面が暗灰褐色を呈し、器壁中央帯が紫色を呈する甕の頸部である。焼成は極めて堅緻である。試料2は、第17図96に図示した陶質土器(縄文土器)である。試料3は、浅い格子タタキと青海波のナデ消しが観察できる甕の胴部であり、胎土は緻密、焼成は堅緻、器壁中央帯が紫色を呈する。試料4は、第15図51に図示した無文タタキによる成形を施した甕であり、1mm程度の白色砂粒を多く含んでいる。試料5・6は、第15図44および第18図108に図示した土器片と同じ特徴を持つ甕の胴部片である。正格子タタキを有し、外表面は淡黒褐色を呈し、軟質焼成である。

(補稿執筆：小池 寛)

表1 森垣外遺跡出土須恵器の分析データ

| 試料 | K | Ca | Fe | Rb | Sr | Na | D ⁺ (陶邑) | D ⁺ (伽耶) | 推定結果 |
|-------------------------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------------------------|------------------------|------------------|
| No. 1 甕 | 0.619 | 0.097 | 2.47 | 0.706 | 0.253 | 0.165 | 18.3 | 7.6 | 陶質土器(陶邑産の可能性もある) |
| No. 2 縄文土器 | 0.403 | 0.346 | 2.26 | 0.413 | 0.524 | 0.216 | 43.6 | 31.1 | 陶質土器(?) |
| No. 3 甕(格子タタキ) | 0.332 | 0.337 | 2.75 | 0.326 | 0.406 | 0.141 | 64.8 | 61.8 | 陶質土器(?) |
| No. 4 甕(無文タタキ) | 0.383 | 0.194 | 2.97 | 0.334 | 0.302 | 0.144 | 18.7 | 36.1 | 陶質土器(?) |
| No. 5 甕(正格子タタキ) (軟質) | 0.428 | 0.101 | 3.08 | 0.457 | 0.301 | 0.083 | 1.8 | 11.7 | 陶邑 |
| No. 6 甕(正格子タタキ) (軟質) | 0.443 | 0.078 | 2.97 | 0.489 | 0.286 | 0.079 | 1.6 | 10.2 | 陶邑 |

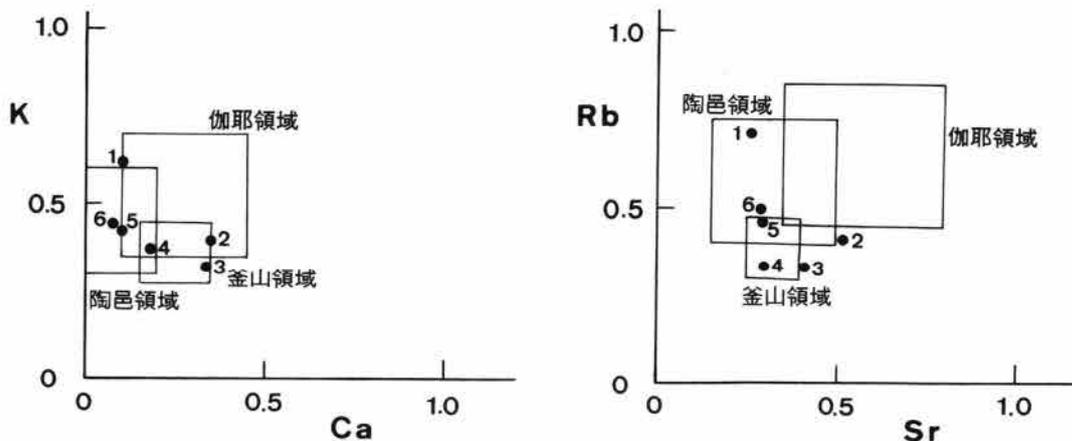


図1 森垣外遺跡出土試料の両分布図

森垣外遺跡の花粉化石

パレオ・ラボ 鈴木 茂

京都府相楽郡精華町に所在する森垣外遺跡において行われた発掘調査で、古墳時代中期の土坑や後期の柱穴などが検出された。以下には、こうした遺構が検出された森垣外遺跡周辺の植生を復原する目的で、これら遺構より採取された土壌について花粉分析を行った。

試料(図版第22) 試料は、各遺構より採取された6点で、以下に各試料について簡単に示す。

試料1(SD10西辺：周溝)は黒灰色の粘土混じりの砂で、時代は古墳時代中期前半である。試料2(SD10南辺：周溝)はやや有機質の黒～黒灰色砂質粘土で、小レキ混じりで砂が多く、粘生が高くなっている。時代は古墳時代中期前半である。試料3((S)P19：柱穴)は黒～黒灰色の粘土質砂で、小レキが少し認められ、粘性が高く、時代は古墳時代後期前半である。試料4((S)P27：柱穴)も黒～黒灰色の粘土質砂で、小レキや土器片が認められ、時代は古墳時代後期前半である。試料5(23bt、北端、4b層下：堆積層)も黒～黒灰色の粘土質砂で、粘性が高く、小レキが認められ、時代は古墳時代後期前半である。試料6(SK131：土坑)は小レキ混じりの黒～黒灰色粘土質砂で、時代は古墳時代中期末である。

分析方法 上記した6試料について、以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約4～5g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

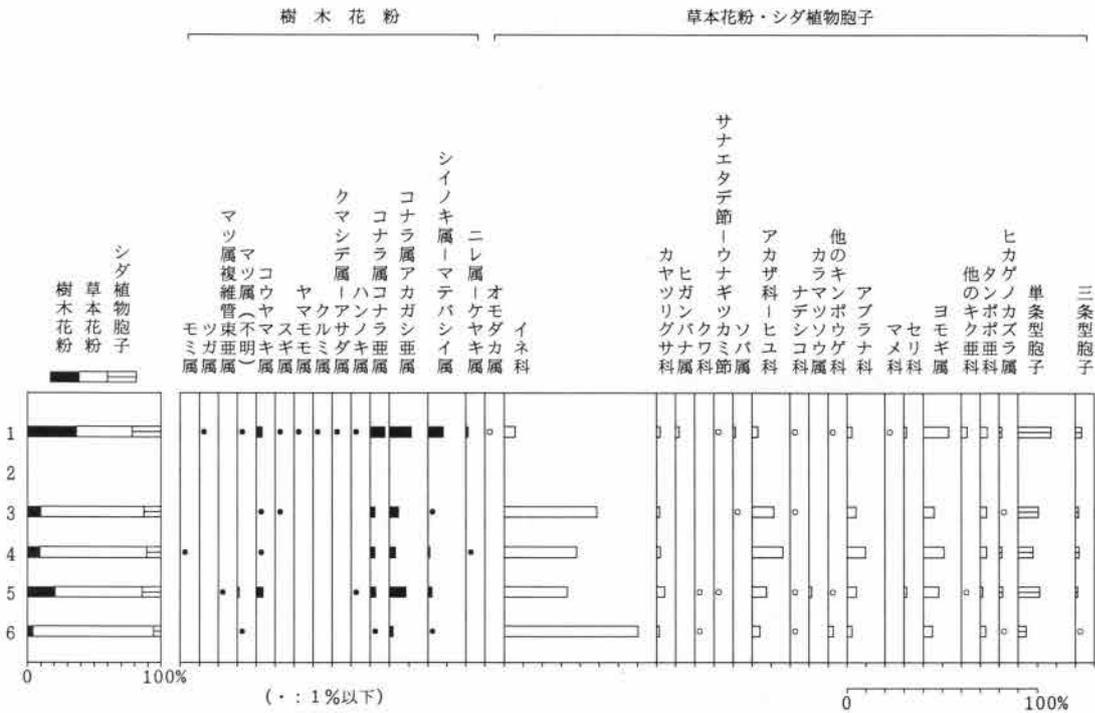
分析結果 検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉14、草本花粉17、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計34である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、花粉・シダ植物胞子の分布を図1に示したが、試料2においては花粉の検出数が少なく分布図として示すことができなかった。なお、分布図における出現率は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括している。また、花粉化石の単体標本(花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート)を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。分布図で示した試料3～6では草本類が圧倒的に多く、中でもイネ科が多く、試料6では出現率が70%に達している。次ぎにアカザ科－ヒユ科が多く、10%前後の出現率を示し、アブラナ科やヨ

モギ属は5~10%を示している。その他、カヤツリグサ科やタンポポ亜科が1%を越えて得られている。樹木類ではコナラ属アカガシ亜属が5%前後の出現率を示し最も多く、その他、コナラ属コナラ亜属・シイノキ属-マテバシイ属(以後シイ類と略す)・コウヤマキ属などが検出されている。試料1, 2についてみると、樹木花粉は先の試料に比べ多く検出されているが、検出分類群およびその量比はほぼ同じで、試料1ではアカガシ亜属が10%を越え最も多く、次いでシイ類・コナラ亜属となっている。草本類ではヨモギ属が最も多く、その他、イネ科・カヤツリグサ科・アカザ科-ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属以外のキク亜科・タンポポ亜科などが5%前後検出された。また、破片や保存の悪いソバ属が少し認められる。

遺跡周辺の古植生 以上が花粉分析の結果であるが、いずれも花粉化石の検出数は少なく、保存状態も悪い状況であった。試料は周溝・柱穴・土坑などを埋積した土壌で、おそらく水成堆積ではなかったものと思われる。花粉の外膜は物理・化学的に比較的強いとされているが、紫外

表1 森垣外遺跡の産出花粉化石一覧表

| 和名 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|----------------|---|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| 樹木 | | | | | | | |
| モミ属 | <i>Abies</i> | - | - | - | 1 | - | - |
| ツガ属 | <i>Tsuga</i> | 1 | - | - | - | - | - |
| マツ属複維管束亜属 | <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> | - | - | - | - | 1 | - |
| マツ属(不明) | <i>Pinus</i> (Unknown) | 1 | - | - | - | 2 | 1 |
| コウヤマキ属 | <i>Sciadopitys</i> | 5 | 1 | 1 | 1 | 6 | - |
| スギ属 | <i>Cryptomeria</i> | 1 | - | 1 | - | - | - |
| ヤマモモ属 | <i>Myrica</i> | 1 | - | - | - | - | - |
| クルミ属 | <i>Juglans</i> | 1 | - | - | - | - | - |
| クマシデ属-アサダ属 | <i>Carpinus - Ostrya</i> | 1 | - | - | - | - | - |
| ハンノキ属 | <i>Alnus</i> | 1 | 1 | - | - | 1 | - |
| コナラ属コナラ亜属 | <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> | 12 | 1 | 3 | 4 | 5 | 1 |
| コナラ属アカガシ亜属 | <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> | 18 | 4 | 6 | 5 | 14 | 3 |
| シイノキ属-マテバシイ属 | <i>Castanopsis - Pasania</i> | 13 | 6 | 1 | 2 | 4 | 1 |
| ニレ属-ゲヤキ属 | <i>Ulmus - Zelkova</i> | 2 | - | - | 1 | - | - |
| 草本 | | | | | | | |
| オモダカ属 | <i>Sagittaria</i> | 1 | - | - | - | - | - |
| イネ科 | Gramineae | 9 | 4 | 60 | 59 | 53 | 102 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 3 | 1 | 2 | 3 | 7 | 2 |
| ヒガンバナ属 | <i>Lycoris</i> | 3 | - | - | - | - | - |
| クワ科 | Moraceae | - | - | - | - | 1 | 1 |
| サナエタデ節-ウナギツカミ節 | <i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i> | 1 | 1 | - | - | 1 | - |
| ソバ属 | <i>Fagopyrum</i> | 2 | - | 1 | - | - | - |
| アカザ科-ヒユ科 | Chenopodiaceae - Amaranthaceae | 5 | 2 | 14 | 25 | 12 | 6 |
| ナデシコ科 | Caryophyllaceae | 1 | - | 1 | - | 1 | 1 |
| カラマツソウ属 | <i>Thalictrum</i> | - | - | - | - | 2 | - |
| 他のキンポウゲ科 | other Ranunculaceae | 1 | - | - | - | 1 | 4 |
| アブラナ科 | Cruciferae | 4 | 1 | 6 | 15 | 8 | 4 |
| マメ科 | Leguminosae | 1 | - | - | - | - | - |
| セリ科 | Umbelliferae | 2 | - | - | - | 2 | - |
| ヨモギ属 | <i>Artemisia</i> | 21 | 6 | 7 | 17 | 13 | 7 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | 5 | 3 | - | - | 1 | - |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | 6 | 1 | 4 | 5 | 2 | 4 |
| シダ植物 | | | | | | | |
| ヒカゲノカズラ属 | <i>Lycopodium</i> | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1 |
| 単条型胞子 | Monolete spore | 27 | 15 | 13 | 12 | 18 | 6 |
| 三条型胞子 | Trilete spore | 5 | 1 | 2 | 3 | 2 | 1 |
| 樹木花粉 | | | | | | | |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 57 | 13 | 12 | 14 | 33 | 6 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 65 | 19 | 95 | 124 | 104 | 131 |
| シダ植物胞子 | Spores | 34 | 17 | 16 | 17 | 23 | 8 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 156 | 49 | 123 | 155 | 160 | 145 |
| 不明花粉 | | | | | | | |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 58 | 17 | 21 | 14 | 27 | 17 |



森垣外遺跡の花化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

線や土壌バクテリアなどで容易に分解されてしまう。今回の試料もこうした影響を強くうけていると推測され、検出数および検出分類群数が少なく、保存状態も悪くなったのであろう。こうした状況のもと、アカガシ亜属やシイ類が全試料から検出され、遺跡周辺丘陵部ではこれらを中心とした照葉樹林が成立していたものと推測される。また、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林、あるいは、針葉樹のコウヤマキ属の存在も予想される。

周溝や住居周辺にはイネ科・カヤツリグサ科・アブラナ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などの雑草類が多く生育したと推測される。また、1点のみであるが水生植物(抽水植物)のオモダカ属が試料1より検出され、SD10周溝の一部に水のついた環境も推定される。また、周辺にヒガンバナ属の生育も予想される。

破片ではあるがソバ属が検出されており、遺跡周辺でソバが栽培されていたことも考えられる。しかしながら、ソバの果実中にもソバ花粉が比較的残っており、遺跡に持ち込まれたソバの実を曳く際に遺構の埋積土に混入した可能性も考えられ、付近で栽培されていたかについては今後の課題であろう。栽培についてはアブラナ科も考えられるが、形態から細かく分類することができず現時点では不明であり、上記したようにここでは雑草類とした。

まとめ 古墳時代中期～後期の森垣外遺跡周辺ではアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が成立しており、落葉広葉樹林もみられたであろう。また、コウヤマキ属の存在も予想される。周溝や、住居周辺にはイネ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などの雑草類が多く、ヒガンバナ属の存在も予想される。

＜補稿＞各分析試料の考古学的所見

各サンプルについての花粉分析の結果は、鈴木 茂氏の報告によるが、各サンプルの採集地点などの基本的事項について、わずかながら補っておきたい。なお、鈴木報告における「1. 試料」についての概観は、分析を委託する際に当調査研究センターから提出した資料をベースに作文されたものであり、特に、年代観については、試料を提出した当時の年代観であり、その後整理作業の進捗を見たため、若干の補稿を必要とした。

○試料1は、調査地北方で検出した方墳10の西辺溝の最下層の堆積土である。また、試料2は、同一遺構の南辺溝の最下層の堆積土で、砂及び粘土を主体とすることから、わずかに堆積環境が異なっていた可能性がある。出土した土器には、須恵器は含んでおらず、また、小型丸底壺の系譜を引く土師器の壺が出土していることから、須恵器出現前後の時期に比定できる。

○試料3・4は、掘立柱建物跡を構成する柱穴において採集した試料である。採集地点は、ピットの中央中間層である。両柱穴からの土器は出土しておらず、考古学的な根拠をもって年代設定はできないが、掘立柱建物跡の棟数が最も多くなる時期に比定できる建物跡を構成する柱穴であることから、陶邑TK47からMT15に比定できる試料と考えられる。

○試料5は、第4b層下の堆積層である。明確な土器資料は出土していないが、第4b層には古墳時代中期末の土器が出土していることから、当初、限りなく第4b層に近い年代を設定したが、当概報作成にあたり検討した結果、弥生時代の堆積層である可能性が高い。本文の「層位」を参照していただきたい。

○試料6は、第17図96に図示した縄文土器が出土した土坑131の最下層の堆積土である。出土遺物から廃棄土坑である可能性を指摘した。土坑の年代は、陶邑TK47型式からMT15型式に比定できる。

以上が、各試料の年代設定における考古学的根拠の提示である。鈴木報告の年代については、補稿を優先して堪案していただきたい。

(補稿執筆：小池 寛)

2. 成勝寺跡・岡崎遺跡発掘調査概要

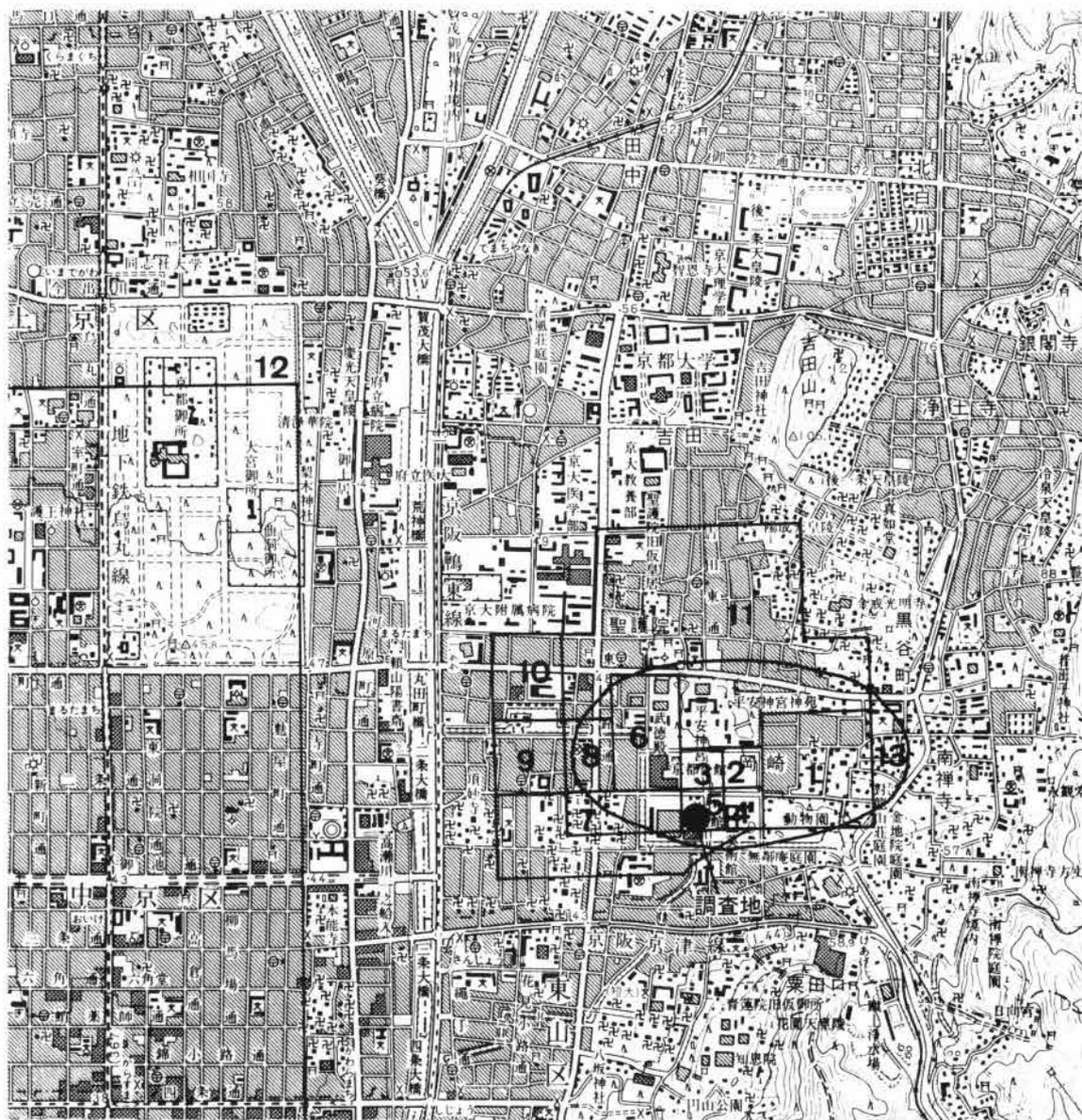
1. はじめに

成勝寺跡・岡崎遺跡の今回の調査は、京都府立図書館の新築工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。調査地は、京都市左京区岡崎成勝寺町9番地に所在し、調査地付近に成勝寺町の地名が残ることなどから成勝寺推定地として調査を行った(第51・52図 図版29・30)。

調査地の所在する岡崎地区は、この付近を北東から南西に流れていた白川の扇状地にあたり、白川が運んできた砂(白川砂)が広く堆積しており、古くから「白河」とも呼ばれている。この砂の上から、縄文・弥生・古墳・平安・江戸時代などの各時代の遺構や遺物が見つかっている(岡崎遺跡)。特に、平安時代の終わりの院政期(11世紀後半～12世紀)には、白河天皇の建てた法勝寺(1077年創立)を始め、尊勝寺(堀河天皇・1102年)・最勝寺(鳥羽天皇・1119年)・円勝寺(待賢門院璋子・1128年)・成勝寺(崇徳天皇・1139年)・延勝寺(近衛天皇・1149年)といった六勝寺と呼ばれる御願寺が造営された。しかし、白川の地は、鎌倉時代、特に承久の乱以降、次第に荒廃し、戦国時代以後は、六勝寺の痕跡はほとんどわからなくなった。現在では、市街地化が著しく、寺院の痕跡は地名として残っているに過ぎない。

多年に及ぶ研究・発掘調査によって、法勝寺は京都市動物園付近、尊勝寺は京都会館付近とほぼ確定しているが、他の寺院の位置は不明な点が多い状況である。ただし、尊勝寺では、当調査研究センターの昭和61年度の発掘調査によって、観音堂に比定される遺構が検出されている^(注1)。成勝寺の推定位置は、尊勝寺の南に位置するとされている。そのため成勝寺跡関連の調査では、今回の調査地南側に当たる、現国立近代美術館建設に伴って昭和57・58年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所によって、平安時代末～鎌倉時代頃の池状遺構、平安時代後期の瓦積み井戸、溝などが確認されている^(注3)。また、今回の調査地西側に当たる、京都市勤業館建て替え工事に伴う調査が平成4年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所によって行われた。その結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての方形周溝墓10基、古墳時代後期の竪穴住居跡2棟・古墳1基、平安時代後期～室町時代の井戸15基・溝、江戸時代の掘立柱建物群・井戸などが確認されている^(注4)。これらいずれの調査でも、成勝寺に直接結び付けられる遺構は見つかっていない。しかし、今回の調査でも調査前の想定では、成勝寺の主要伽藍のいずれかに当たることを期待して着手した。

今回の調査対象地は、旧図書館建物の東と南側に当たる。旧建物の東向きの正面壁を保存しながら解体する工事が同時に進行する状況であった。工事の都合により調査予定地の東側北半部を昨年度(平成10年1月9日～同10年3月18日)に調査し、今年度(平成10年4月22日～同10年6月10日)に東側南半部と南側の調査をおこなった。調査面積は平成9年度が約280m²、平成10年度が約430m²、合計約710m²である。なお、旧図書館の建物本体の地下は、建築時の煉瓦積み基礎工事

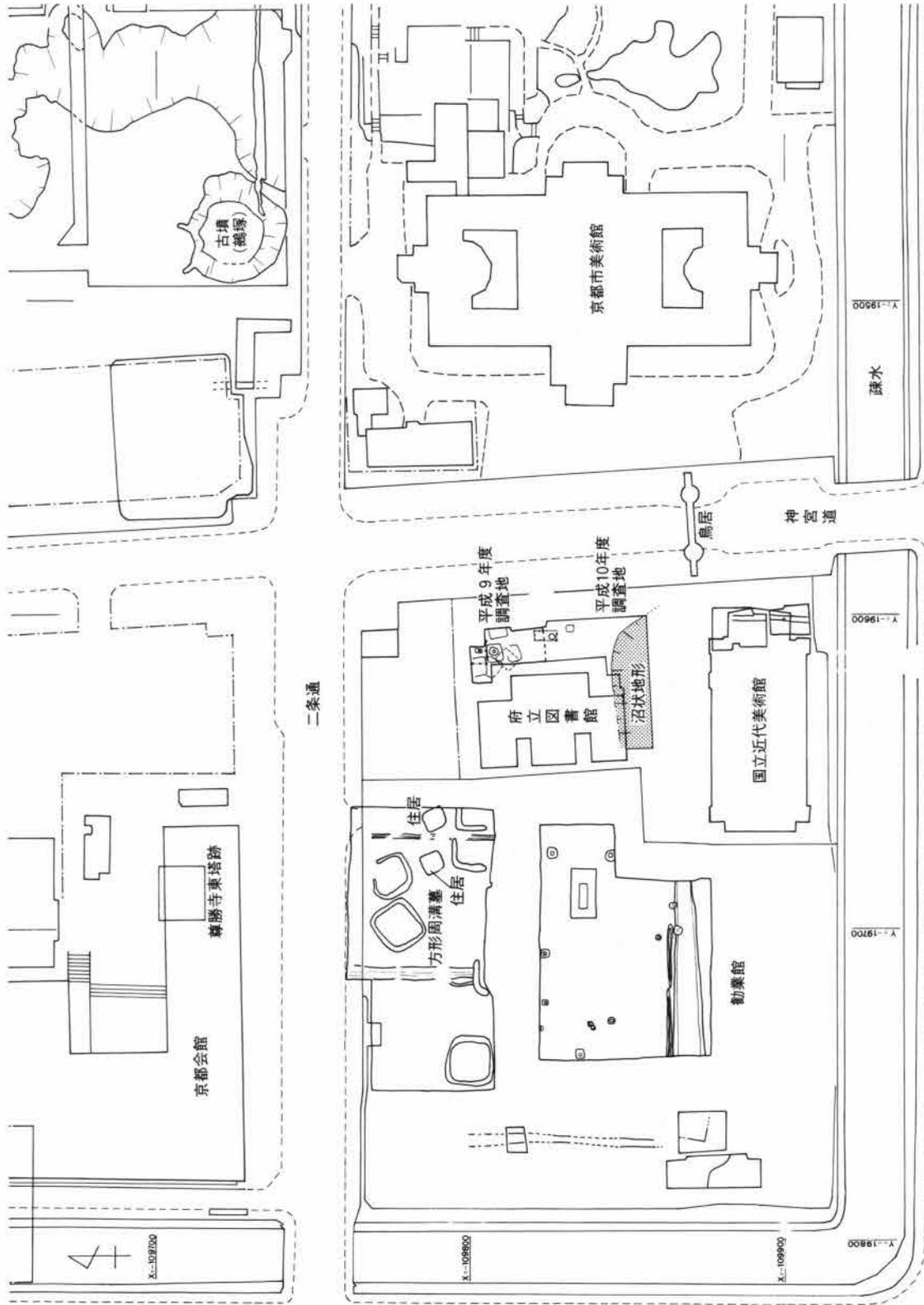


第51図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|-----------|
| 1. 法勝寺跡 | 2. 秘塚・鶴塚 | 3. 最勝寺跡 | 4. 円勝寺跡 | 5. 成勝寺跡 |
| 6. 尊勝寺跡 | 7. 延勝寺跡 | 8. 得長寿院跡 | 9. 白川南殿跡 | 10. 白川北殿跡 |
| 11. 白川街区跡 | 12. 平安京跡 | 13. 岡崎遺跡 | | |

のため、現地表下約3mまで攪乱されており、遺構はすでに消滅していた。

現地の調査は、平成9年度が、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎・同調査員有井広幸、平成10年度は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎・同調査員有井広幸・藤井整、調査第2係調査員野々口陽子が担当し、報告書の作成は、有井が行った。遺構の撮影は野々口、有井が行い、遺物の撮影は調査第1課資料係主任調査員田中 彰が担当した。調査および報告書の作成にあたっては、調査補助員、整理員の方々に大変協力していただいた。^(注5) また、調査期間中には、京都府教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係諸機関をはじめ、さまざま^(注6)な方々から有益な助言・協力をいただいた。感謝いたします。



第52図 トレンチ位置図(1/2,000)

なお、今回の調査にかかった費用は、全額京都府教育委員会が負担した。

2. 調査の概要

(1) 層序(第53図 図版第31・32)

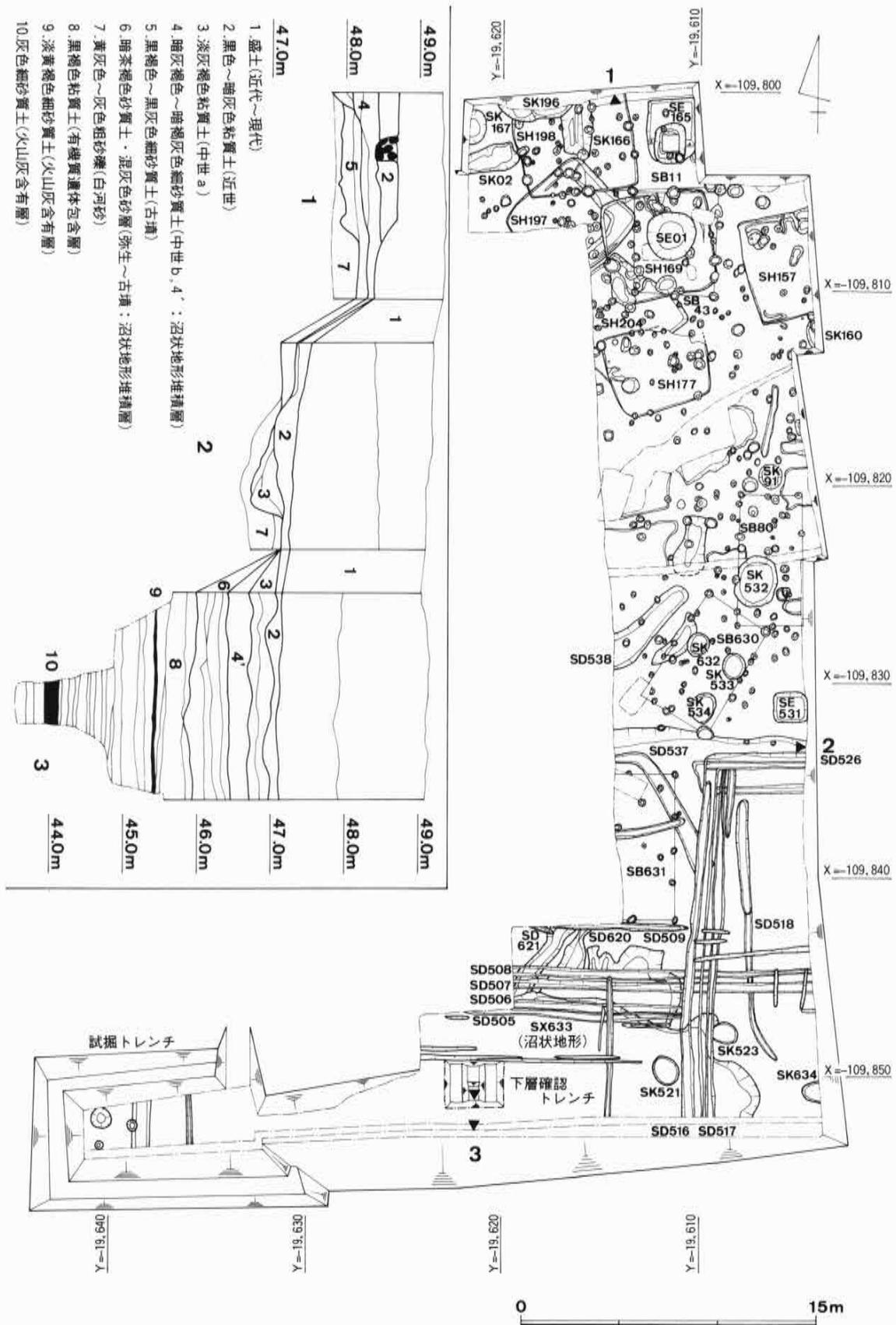
調査地の現在の地表面は、標高49.2m前後の平坦地であるが、調査の結果、旧地形は北が高く南が低い地形であった。調査地東壁の断面観察から土地利用の変遷を考えると、本来、調査地北側の公園付近から琵琶湖疎水の南岸にかけて、ゆるやかに傾斜していたようである。調査地付近は、調査地南端部に湧水が見える沼状地形があることから、白川によって形成された扇状地の扇端部に当たると考える。この地形を利用して、弥生時代後期と古墳時代後期には、北側の微高地に墓地や集落が営まれ(標高約48.2m)、南側には水源池として利用する沼状地形(標高約46.1m)が広がっていたようである。平安時代後期にもこの状況は続き、鎌倉時代から室町時代にかけて沼地は埋まり、この頃から付近に住居が営まれることはなくなり、江戸時代後期まで耕作地(黒色～暗灰色粘質土)となっていたようである。これは、中世後半から近世にかけての遺物がほとんどなく、近世末頃の遺物が急に増加することから言える^(註7)。明治になって琵琶湖疎水開削のときに1～2mの盛り土(灰色～暗灰色粗砂)が行われ、さらに公共の建築物が立ち並んで現在の景観になったのであろう。

調査の実施に当たっては、前述の盛土及び近世の耕作土層を重機で掘削し、遺構面の検出を行った。今回のトレンチ内には、土地利用の影響による3段ほどの段差があり、各段で遺構の検出状況が変わっている。段差自体は、水田耕作等が行われた影響によって生じたものである。

南側の沼状地形は、今回のトレンチ内では最も低い部分で、南側と西側にさらに広がる。この沼状地形は、今回の調査地南側隣接地で(財)京都市埋蔵文化財研究所が検出した池状遺構につながっているものと考えている。この地形は暗灰色粗砂をベースにして、下層から暗褐色砂質土、黒灰色粘質土と堆積し、その中から弥生時代後期の土器や、古墳時代後期の土器などが出土した。沼状地形が最終的に埋まった暗灰褐色細砂質土中からは、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物が出土した。この層の上面に鎌倉時代以降の耕作に関係すると考えている溝群が、沼状地形の上面及びその北東部に東西・南北方向に交差して分布する。

中央付近では、青灰色シルト～微砂をベースとし、平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺構が主に分布する。北側付近では、中央部より、若干の段差をもって高くなり、黄灰色～灰色粗砂をベースとし、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が分布する。中央から北側にかけて弥生時代後期の竪穴式住居跡1棟、古墳時代後期の竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物1棟ほかピット群、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡4棟とピット群・井戸3基(瓦積み1・木組み2基)・土坑類、江戸時代後期の土坑1基などを確認した。

また、下層確認のため調査池南端中央付近に約9㎡のサブトレンチを設け、標高約43.7mまで掘削した。その結果、青灰色シルト～粗砂の水平堆積層内から、弥生時代包含層の下層(標高45.6m前後)で、植物遺体を多量に含む黒褐色粘質土層を、さらにその下層で2層(標高約45.4m・



第53図 遺構配置図(1/300)・土層柱状図(1/80)

約44.0m)の火山灰層を確認した。^(注8)

(2) 検出遺構と出土遺物

a. 弥生時代後期の遺構・遺物(第54・55図 図版第33・40)

この時期の遺構は、竪穴式住居跡1棟を確認した。この住居跡は、中間報告では、掘削前の判断で古墳時代のものとして報告したが、完掘後の遺物内容から弥生時代後期のものと確認した。そのほか、平成10年度に確認したS D537・538・S K634なども埋土が黒色粘質土が堆積しており、同時期の遺構と考えているが、遺物は出土していない。

S H197 調査地北側の西端付近に位置する一辺約4.5mのやや隅丸方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡の南側は調査地外にあり、全体の規模は不明である。北端側はS H198に切られ、東側はS H169に切られており、南側は、全体に削平を受けている。確実な炉跡は確認できていないが、住居跡中央部調査区外に続くピット状遺構から土器片とともに炭が出土しており、付近に炉跡があった可能性がある。埋土は、黒灰色粘質土に粗砂が混じり、周壁溝は南西辺を除く3辺で確認し、溝幅は最大約0.9m・深さ約0.3mと規模が大きい。周壁溝の埋土は黒色粘質土である。床面は、黄灰色砂質土で貼り床などは確認していない。柱穴は、3か所確認し、直径0.2～0.3m・深さ0.15～0.2mの浅いものである。

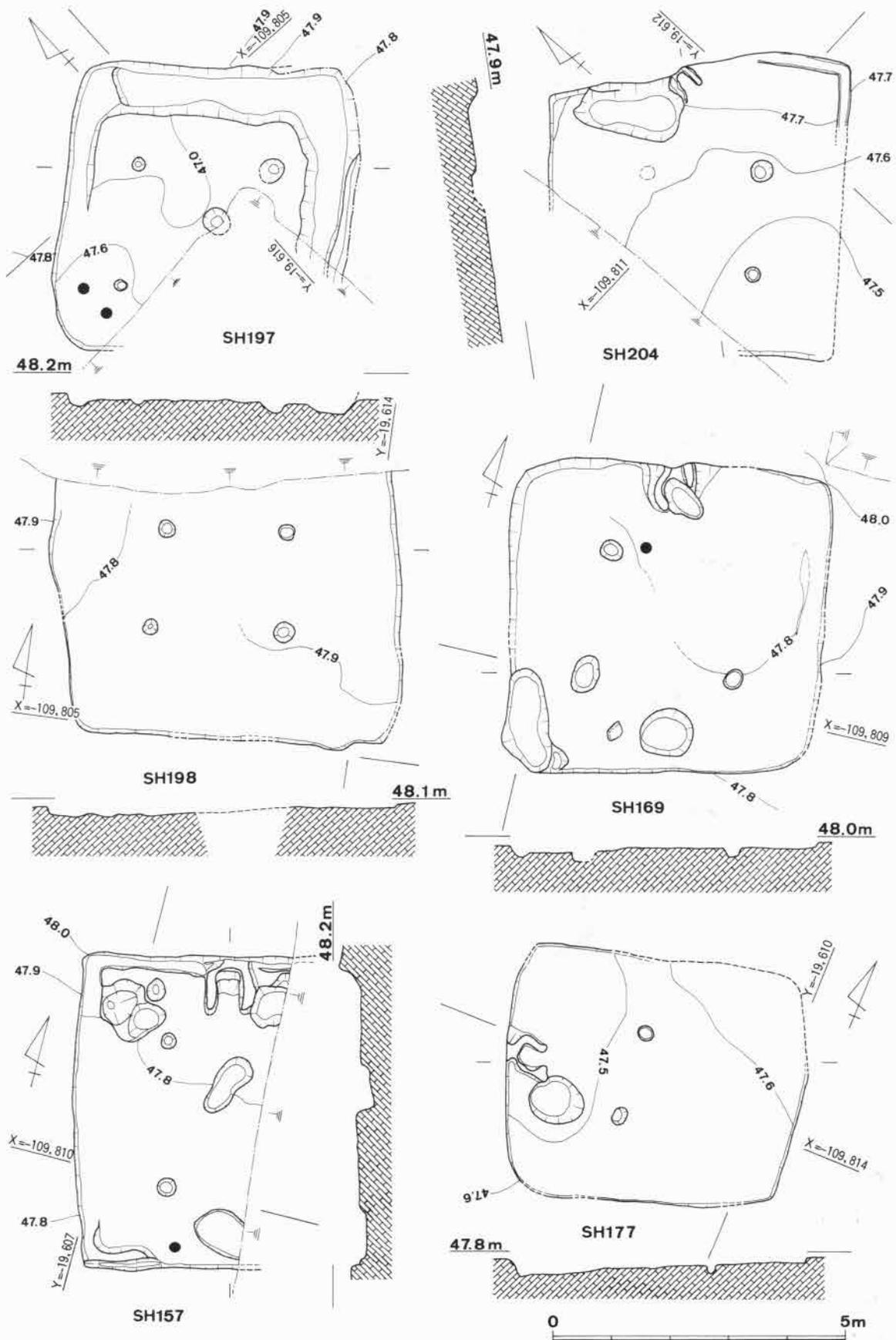
遺物は、高杯・壺・甕など(1～10)が床面付近で出土している。6・9は住居内西隅からややまとまった状態で横たわって出土した。時期は弥生時代後期と考えている。

b. 古墳時代後期の遺構・遺物(第54・55図 図版第33・34・40)

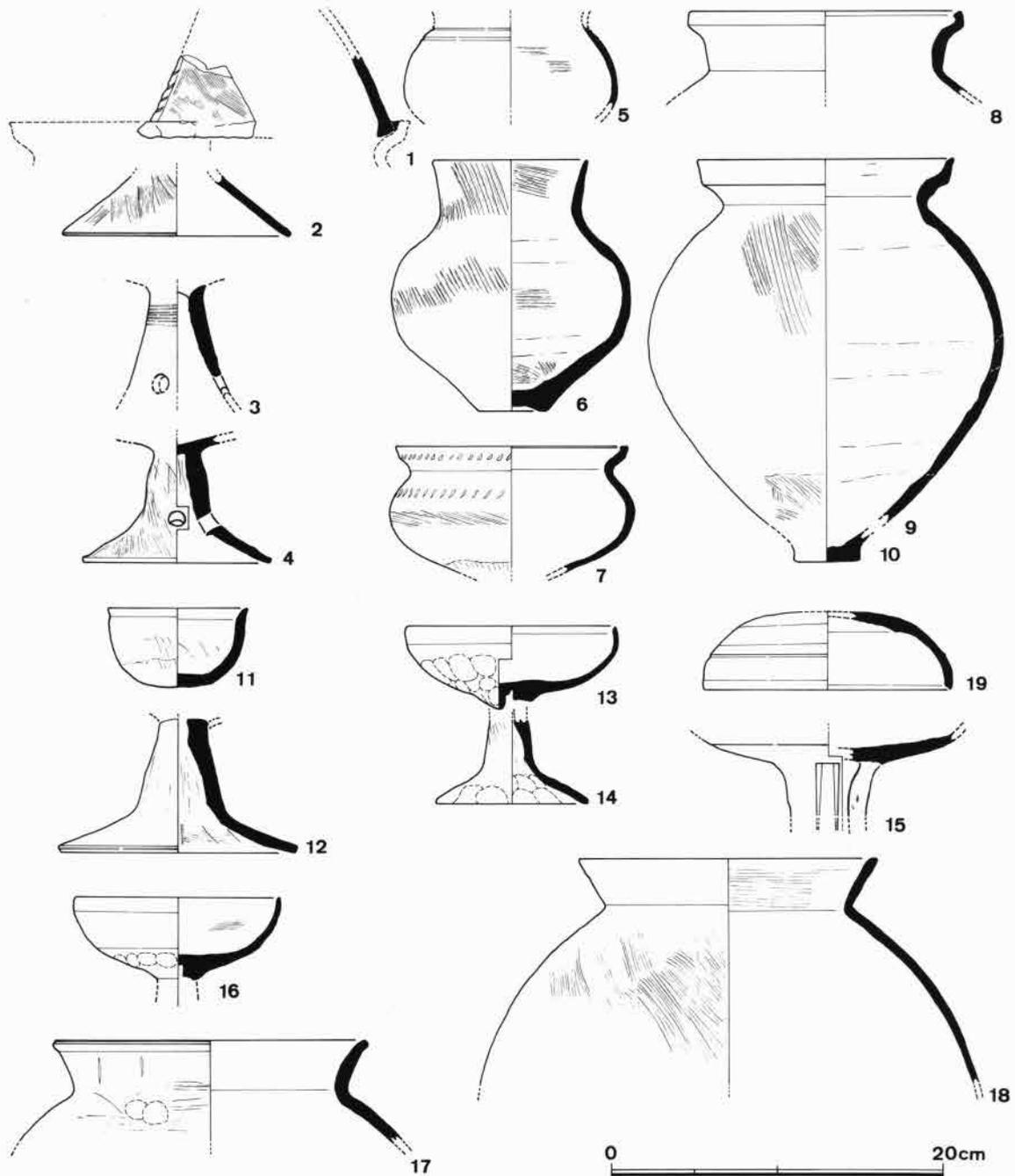
古墳時代の遺構は、竪穴式住居跡5棟と掘立柱建物1棟他ピット群を確認した。この時期の遺構は、調査地の東側北半部にまとまって確認できた。

S H204 住居跡群の西端で検出した一辺約5mの方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡の西端部は調査地外に広がり、全体の規模はつかめなかった。住居跡の北東はS H169に切られ、南側はS H177に切られ、全体の削平が激しく、残りは悪い。S H169の南端床面付近で、竈跡を検出して、住居跡と確認した。埋土は黒灰色粘質土に粗砂が混じる。柱穴は2つ確認した。ピットの直径は約0.3m、柱間は約1.7mである。周壁溝は東隅付近に痕跡が残る程度である。竈は粘土を積み上げた両側壁が0.1m残る程度で、赤橙色の焼土および土師器片・炭片が混じって出土した。土師器片の大半は、竈の底に近い部分から出土した。竈の西側には隅丸長方形の土坑が設けられていたが、遺物は若干の土師器片および製塩土器の小片である。遺物が小片のため遺構の時期決定が難しいが、古墳時代後期前半頃と考えている。

S H177 住居跡群の南西端で検出した南北4m・東西約5mの長方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡は全体に削平が激しく、残りは悪い。特に北東隅は、削平されて残らない。住居跡西辺中央で竈跡を検出して、住居跡と確認した。柱穴は2つ確認した。ピットの直径は約0.2m、柱間は約1.5mである。周壁溝は確認できなかった。住居跡の埋土は黒灰色細砂質土に粗砂が混



第54図 遺構実測図(SH157・169・177・197・198・204)



第55図 出土遺物実測図

(SH197 : 1~10 SH169 : 11~14 SH157 : 15~18 SH198 : 19 15・19は須恵器)

じる。床面は、この付近では、暗緑灰色微砂～シルトである。竈は粘土を積み上げた両側壁が0.1m残る程度で、赤橙色の焼土および土師器小片・炭片が混じって出土した。竈の南側には不整形の土坑が設けられていたが、遺物は若干の土師器片のみである。遺物がほとんどないため遺構の時期決定が難しいが、SH204に続く時期の住居跡と考えている。

SH198 住居跡群の北端で検出した東西約5.5mの方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡の北辺部は調査地外に広がり、全体の規模はつかめなかった。住居跡の中央・北西端はそれぞれSK166・196に切られている。全体に削平が激しく、深さは、10cm程度しか残らない。埋土は黒灰色細砂質土、竈跡・周壁溝は確認していない。柱穴は4つ確認した。ピットの直径は約0.2~0.3

m、柱間は東西が約2m・南北が約1.7mである。

遺物は須恵器杯蓋(19)のほか、土師器片が若干出土している。

S H169 住居跡群の中央で検出した南北約5.2m東西約5.5mのほぼ方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡は南側ほど削平が激しく、残りは悪い。特に南東隅は、削平されて深さ約5cmしか残らない。住居跡北辺中央で竈跡を検出した。砂地の壁と床に付近でとれた粘土を積み上げて作られた竈の中央部は、平安時代末期のピットにより壊されていたが、両側壁はよく残っており、床面から高さ約0.3mを測る。焚き口付近から住居跡北東部分はS E01により壊されて残らない。竈の外表面は、暗緑青灰色を呈し、内表面は赤橙色に焼けている。柱穴は3つ確認した。ピットの直径は約0.3~0.5m、柱間は南北約2.2m・東西約2.5mである。周壁溝は東側と南西端で一部確認した。住居跡の埋土は黒灰色細砂質土に粗砂が混じり、床面は、この付近では、黄灰色粗砂である。このほか、南辺中央付近に直径約0.8m・深さ0.3mの土坑があり、炭片とともに土師器片が出土している。この土坑の西には、この住居跡に削られたS H204の竈があり、その上面に人頭大の扁平な石が置かれていた。石は焼けた痕跡はなく、S H169内で作業台ないし砥石として使用していたと考えている。

遺物は竈の東側の側壁外面中位の部分に添えられたようにして、小型の丸底鉢(11)と高杯(13・14)が出土した。高杯は杯部と脚部が別々になって重なって出土した。この2つは直接は接合しなかったが同一の個体であろう。また、竈周辺では製塩土器片が出土している。このほか、竈の南西側約0.8mで高杯の脚部(12)が床面に座った状態で出土した。

S H169の時期は、切り合い関係から住居跡群内では、最も新しいものとなる。

S H157 住居跡群の東端で検出した南北約5.4mを測る竪穴式住居跡である。東半分は調査区外に続く。住居跡は南側の削平が激しいが、北側は、壁高が床から約0.4mまでよく残る。竈は北辺で確認した。竈が他の住居跡のように一辺の中央に設けられていると仮定すると、この住居跡の東西幅は、約5mとなる。柱穴は2つ確認した。ピットの直径は約0.2m、柱間は約2.5mである。周壁溝は北辺沿いと、南辺の西側で極浅いものを確認した。住居跡の埋土は黒灰色細砂質土に粗砂が混じる。床面は、この付近では、黄灰色粗砂である。竈は粘土を積み上げた両側壁が約0.4m残り、外面は暗緑灰色を呈し、内側は赤橙色の焼土及び土師器小片・炭片・拳大の円礫2個などが中央から混じって出土した。石は焼けており、支柱などの用途に使われたと考えている。焚き口付近は赤褐色に焼け締まっていた。竈の東側及び西側には不整形の土坑が設けられていた。東側の土坑は、床面からの深さ約0.2m、炭混じりの黒灰色砂質土がつまり、中から土師器甕(18)や、製塩土器片が出土した。床面中央付近には長楕円形の土坑があり、黒灰色粘質土が堆積していたが、遺物はほとんどなかった。

住居跡内の遺物では、竈周辺で製塩土器が目立ったほか、土師器高杯が中央部で床からやや上の層から、土師器甕が南側のやはり床面からやや上層で出土した。

S B630 2間(約3.4m)×4間(約6m)の東に棟筋が傾く南北棟の掘立柱建物跡になると考えている。ピットの大きさは直径約0.3~0.5mと不揃いで、ピット内には柱痕跡が残る例もあり、

何れも径0.2m前後である。埋土は、黒灰色粘質土が主である。遺物はほとんど出土していない。古墳時代と判断した理由は、埋土の状況が竪穴式住居跡と類似すること、方位がSH204と同方向であり、平安時代末期の建物と比べて、ピットの間隔、形状が不揃いなことから判断した。

竪穴式住居跡5棟は、重なり合いがないものが1棟だけで、他の4棟は造られた前後関係がわからなかった。造られた順に、SH204→SH177・169・198となる。SH157はSH177・169・198とほぼ同じ方向を向いているので、同じ頃に造られたと考えている。ただ、かなり近接して建っているので、屋根を葺くことを考えると空間が足りないと思われる、若干時期がずれていたと考えられる。住居跡は、一辺4～5mの正方形に近い平面形で、トレンチの南側のものほど残りが悪くなる。住居跡177・169・157には竈跡があるので、残りの住居跡にも竈が設けられていたと考えている。なお、SH157の北側の部分は、直径2mを超える銀杏の木が立っており、平成9・10年度の間に移植が行われたが、その際の立ち合い時に根の下に土師器高杯片と共に竪穴式住居跡状の遺構がある模様であった。付近にはさらに住居跡が増える可能性がある。

c. 平安時代末期から鎌倉時代の遺構と出土遺物(第56～76図 図版35～39・41～53)

この時期の遺構は、掘立柱建物跡4棟とピット群・井戸3基(瓦積み1・木組み2基)・土坑類、溝などを確認した。

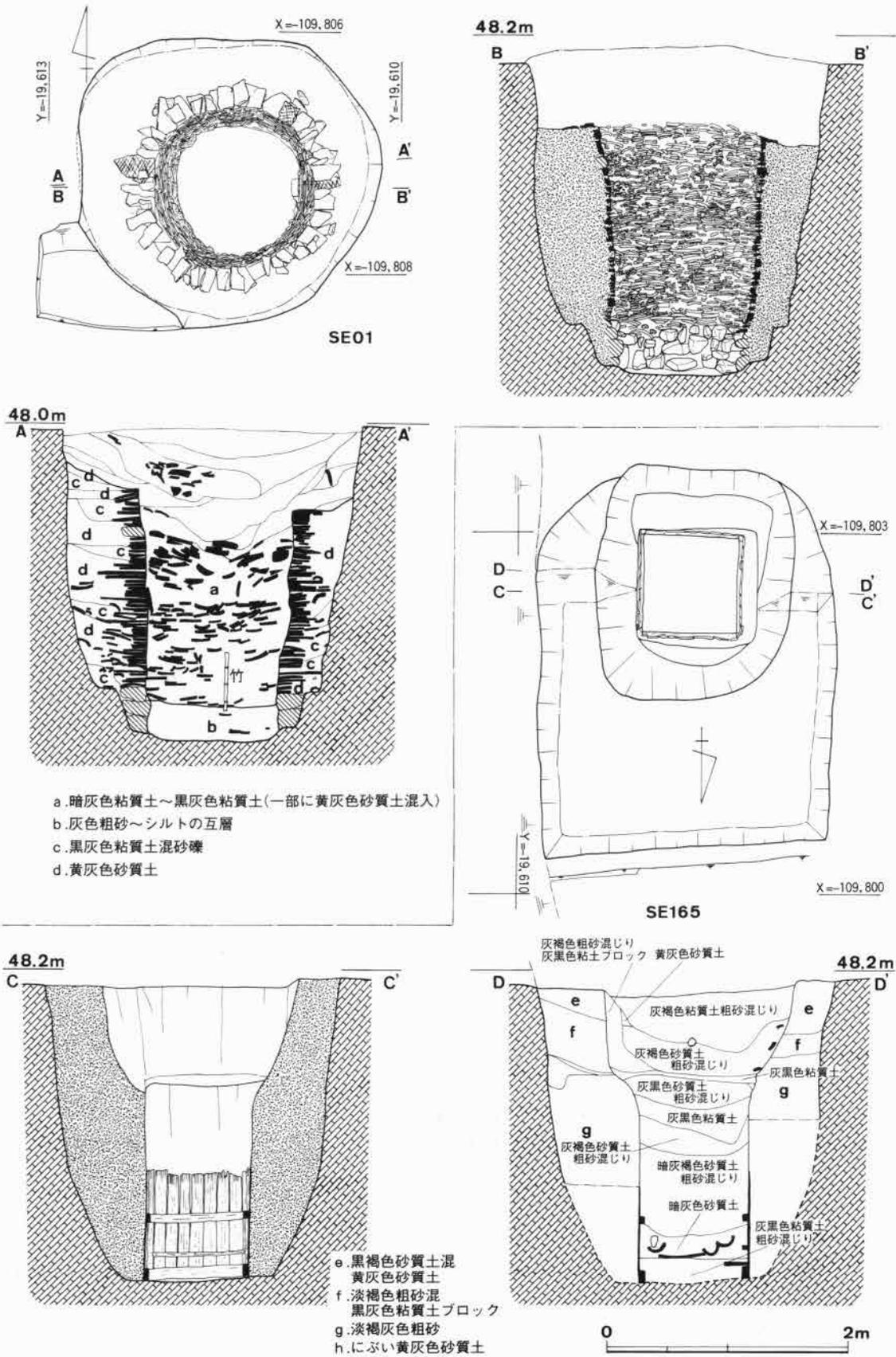
SB11 3間(約6.9m)×3間以上の南北棟の掘立柱建物跡になると考えている。トレンチの北端で確認した。建物の主軸は座標方向に乗っている。ピットの形状は円形で、直径約0.5～0.6m、深さ約0.4m前後の規模である。埋土は、黒灰色細砂質土に粗砂が混じる。遺物は、ピット内から布目瓦などが出土している。

SB43 SE01に重なるように建ち、2間(約4.2m)×3間(約5.1m)の規模の掘立柱建物跡である。井戸の覆屋になる可能性がある。建物の主軸は座標方向に乗っている。ピットの形状は円形で、直径約0.3～0.4m・深さ約0.4m前後の規模である。埋土は、黒灰色細砂質土に粗砂が混じる。遺物は、ピット内から布目瓦、土師皿片などが出土している。

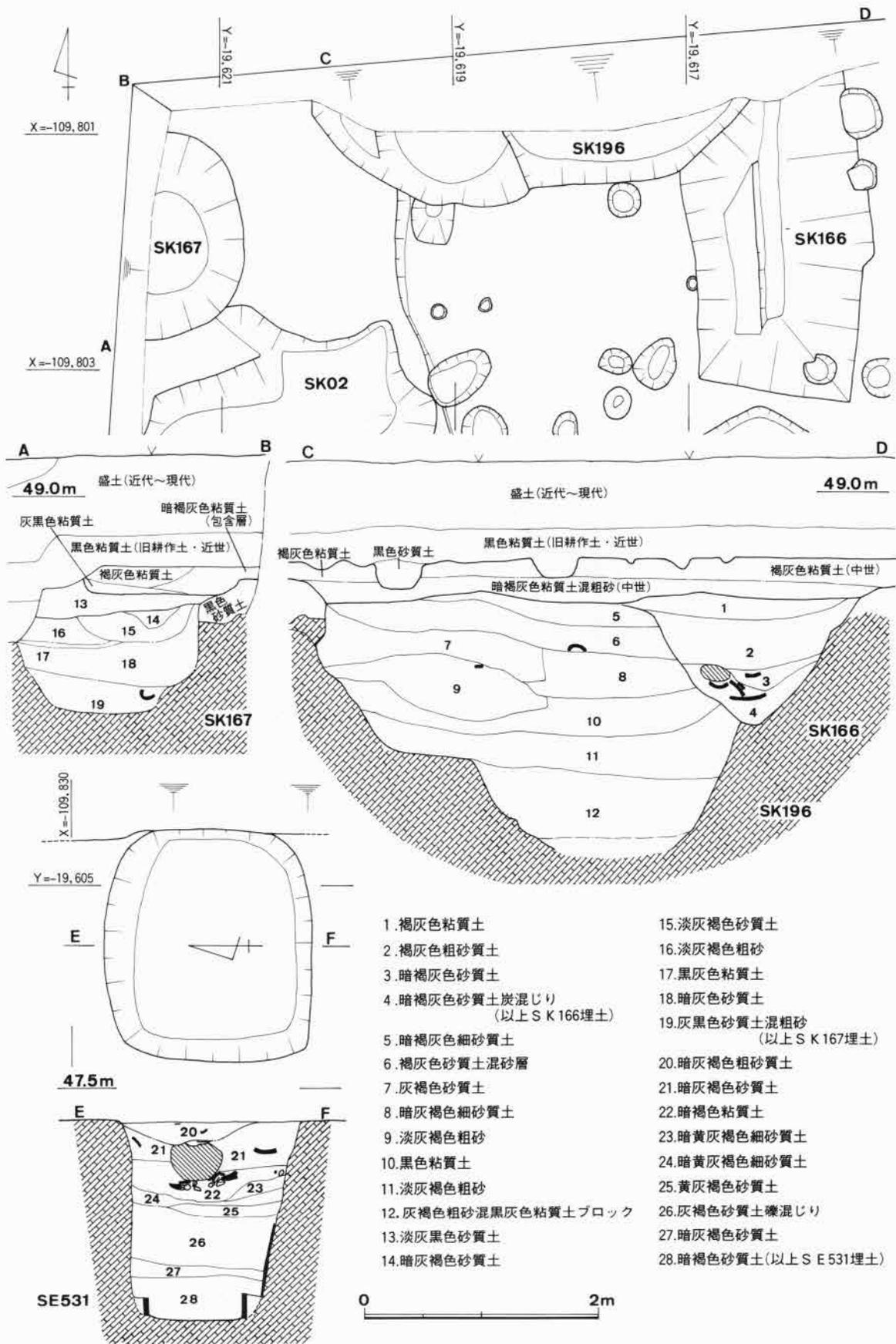
SB80 2間(約3.0m)×4間(約6.0m)の規模で、南北棟の掘立柱建物跡になると考えている。トレンチの中央、平成9～10年度の調査にまたがって確認し、建物の南東端ピット2か所はトレンチの東壁内に当たり未検出に終わった。建物の主軸は座標方向に乗っている。ピットの形状は円形で、直径約0.3～0.4m・深さ約0.3m前後の規模である。埋土は、黒褐色細砂質土に粗砂が混じる。遺物は、ピット内から土師皿・布目瓦などが出土している。

SB631 2間以上(1柱間約2.4m)×4間(約7.2m)の規模で、南北棟の掘立柱建物跡になると考えている。トレンチの南半部西側、沼状地形の北側で確認し、建物の西側ピット列はトレンチの西壁内に当たり未検出に終わった。建物の主軸は座標方向に乗っている。ピットの形状は円形で、直径約0.3～0.4m・深さ約0.3m前後の規模である。埋土は、黒褐色細砂質土に粗砂が混じる。遺物は、ピット内から土師皿・布目瓦などが出土している。

この時期の掘立柱建物はいずれも主軸を座標方向に向けており、ピットはSB11を除いて小ぶ



第56図 遺構実測図(S E01・165)



第57図 SE531・SK166・167・196平・断面図

りのものである。建物群全体の配置に計画性はうかがえるが、散在的である。

S E 165 縦板横棧組みの木枠が残る井戸で、木枠は一辺約0.9m・残存高は約0.8m、検出面から深さ約2.5mのほぼ正方形のものである。掘形は、南北約3.1m・東西約2.5mの長方形をしている。掘形の北側は、深さ約1.0mで止め、南側を井戸本体とするために掘り下げている。砂地を深く掘るための工夫と考えている。

木枠の構造は、縦板を互いに接するように立て、井戸底には横棧を組む。横棧は井戸底から0.5mにもう一段分残るだけで、部材は底部のものより幅が狭い板を使う。また、南辺にのみ上下段の中間に幅2cm・厚さ1cmの板材を渡しており、部分的な補強を行っていた可能性がある。四隅には一辺約5cmの角材を棧木間に立てて、棧木が上下にずれるのを防いでいる。縦板は1辺に約9枚並べるが、背後に井戸底側壁補強用のためか前後2重に板を並べる。

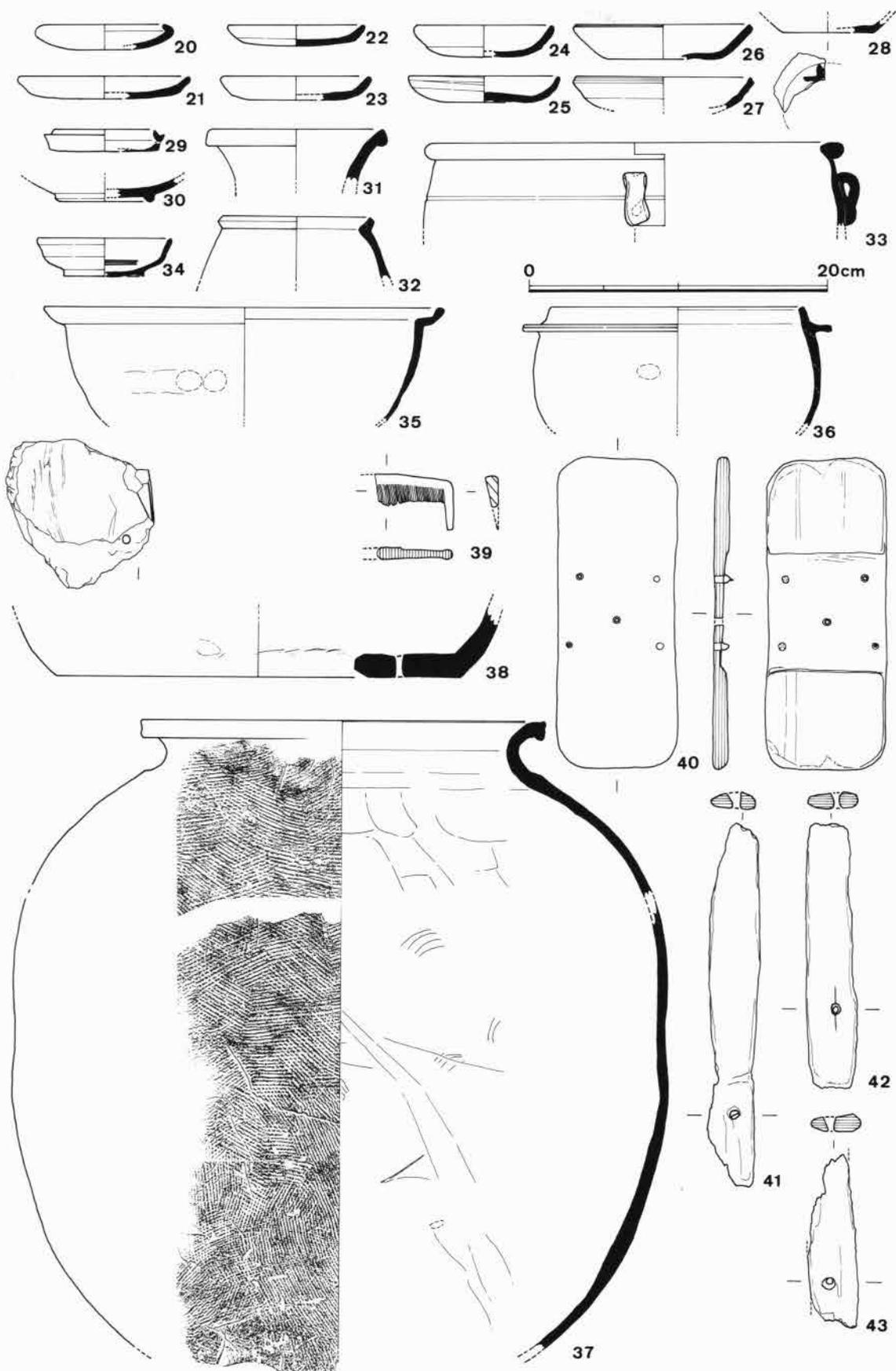
縦板は幅9cm前後、厚さ2cm前後の縦矧ぎ未調整の板を用いる。上端部分はいずれも腐朽が激しく、全長は不明である。横棧の板は底用が幅約10cm・厚さ約5cm、上段分が幅約5cm・厚さ約5cmの板材で平滑に調整され、各々両端を凸ないし凹形の同形に整形し組み合わせる。隅木は、建具などの転用材らしく、南西端の下段の部材には、古い柄穴が残る。

遺物(第58・59図、図版第41・42)は、井戸枠内から、完形の丸・平瓦のほか、白磁碗、白磁合子(29)、陶器片(31~33)常滑焼大甕、土師皿、井戸枠関連の木材と、下駄大の井戸の釣瓶部材片と考えている木製品(40)、櫛片(39)、扇の一部になる可能性がある板片のほか、果核(桃?)が数十点出土した。なお、この井戸から出土した果核(桃?)の半数は、その一部を小刀のようなもので削っていた。板材(40)には中央部分に5か所穴が開けられており、一部には木釘が残っていた。常滑焼大甕は、この井戸のすぐ西にある土坑S K 166出土の破片と接合関係があり、廃棄時期が同じ頃といえる。白磁の合子は、側面に直径約2mmの穴が外側から内側に向かって、焼成前に貫通している。土師皿(28)の底の部分には、墨で文字が書かれており、「大?」の一部のようにもみえる。石鍋(38)は、割れた後底部の破片が再利用されており、一部を擦り削って面取りし、直径約5cmの穴を開けている。

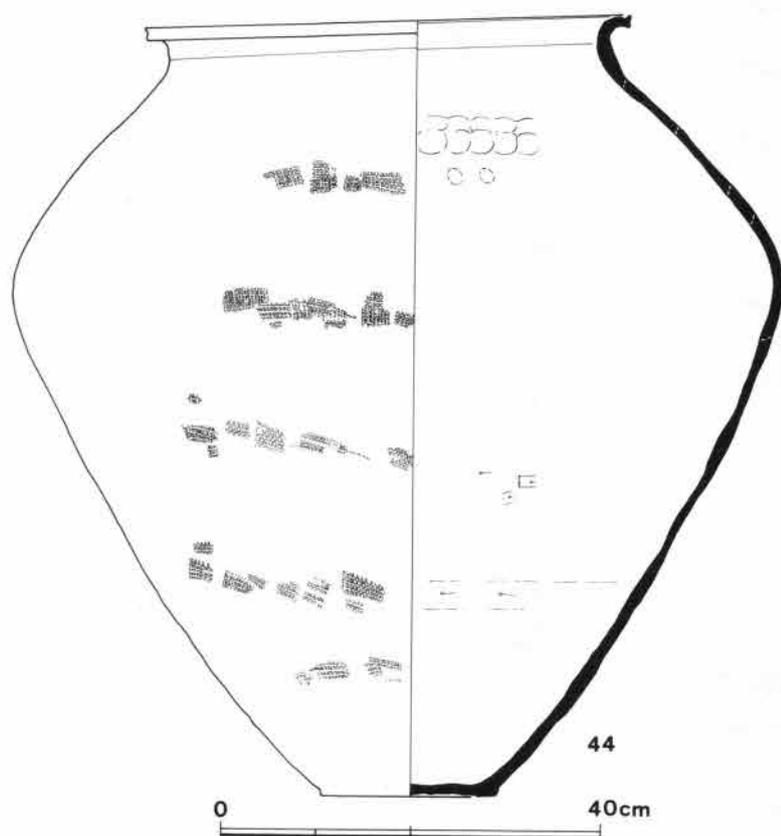
掘形からの遺物の出土量がS E 01に比べ少なく、切り合い関係はないが、S E 01に先行して作られたと考えている。また、稼働時期は出土遺物の内容からは差が見られない。

S E 01 瓦を割って円形に積み上げた残存井戸枠最大直径約1.5m・深さ約2.8mの規模である。最下段は石積みになっている。石積みは、人頭大の河原石を主に用い、2~3段に積み上げる。石の背後の掘形は、瓦積みの部分より、一回り小ぶりになっている。掘形は上端直径約2.4mの円形である。井戸枠の瓦の中には、軒平瓦が何点か井戸の内側に向けてはめ込まれていた。掘形の埋土は、黄灰色砂質土と黒灰色粘質土が交互に埋め込まれており、構造上の意図と共に、作業単位がわかると考えている。この埋土中からは、土師皿片なども出土している。

井戸内の埋土は大きく上下2層に分けられる。上層は、大量の瓦片や土師器片を含んだ暗灰色~黒灰色粘質土で、井戸の廃棄時に井戸枠を崩したり、周囲の土を集めて埋めた土と考えている。下層は、井戸の使用時に堆積したと考えており、灰色粗砂~シルトの互層内から少量の瓦片、若



第58図 出土遺物実測図(S E 165 20~28:土師皿, 29:白磁合子, 30:白磁碗, 31~33:陶器, 34:瓦器皿, 35:瓦質鍋, 36:瓦質羽釜, 37:須恵器甕, 38:石鍋, 39~43:木製品)



第59図 出土遺物実測図(S E 165 常滑焼大甕)

干の木片と果核(桃?)が数十点の他、曲げ物の底板(109)などが出土している。

この層の上面のほぼ中央から竹が1本立って出土した。竹は現在の湧水ラインより上端は朽ちており、残存長約50cm・口径約4cmのもので、内部の節は残らない。井戸埋設時に竹を意図的に立てたと考えられ、現在も風習として残る、井戸の廃棄時の「息抜き」例と考えている。

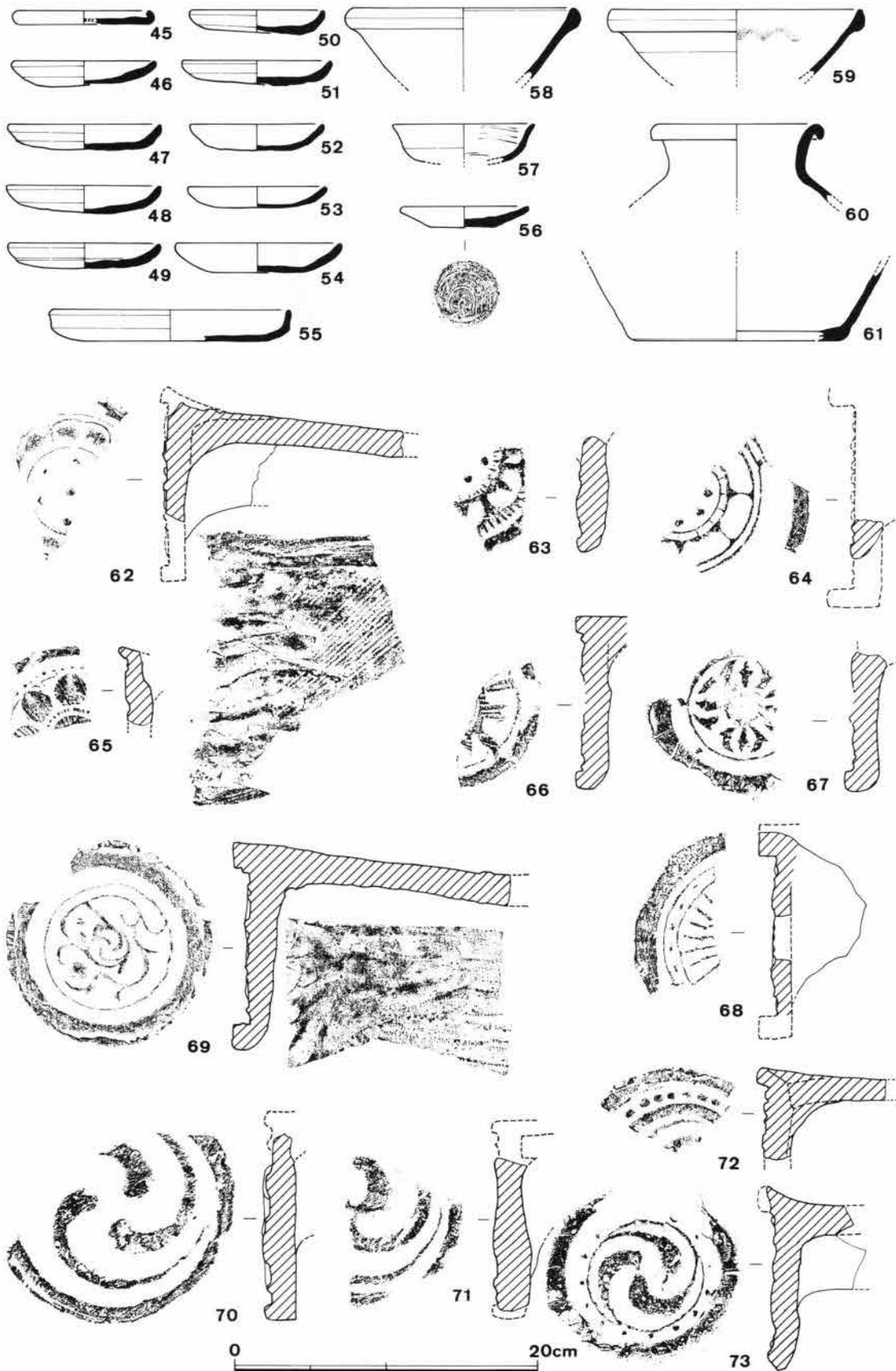
出土遺物(第60~72図 図版第43~49)の大半は井戸枠関連の瓦片で、上層から多量の平・丸瓦に混じって軒丸瓦(62~73)・軒平瓦(74~

106)・鬼瓦(107・108)が出土した。井戸枠および掘形埋土中からも同様の瓦類が出土しており、今回の調査での出土遺物の大半をこの井戸関連の遺物が占めた。軒瓦類は、種類が多く同タイプのはほとんど出土していない。基本的に出土した遺物のうち紋様のわかる軒瓦はすべて掲載した。軒平瓦には、ベンガラの付着したものもあり、建物に葺かれていたものが再利用されたことが窺える。基本的に尊勝寺跡出土の軒瓦と同じ種類のものが多く、何らかの関係が窺える。^(注9)軒丸瓦は、69を除いて小片のものが多く、また瓦当部分自体が小さいものが多い。73は楕円形の瓦当である。焼成は、69が須恵質に焼かれ、瓦当面に離れ砂が多く付着しているのが特徴的で、他の例は黒く焼けている。

軒平瓦は瓦当面の制作技法別に、第61図に半折曲げ・折曲げ技法によるものを、第62・63図に一部を除いて包込技法によるものを、第64図にその他の技法のものそれぞれ主にまとめた。

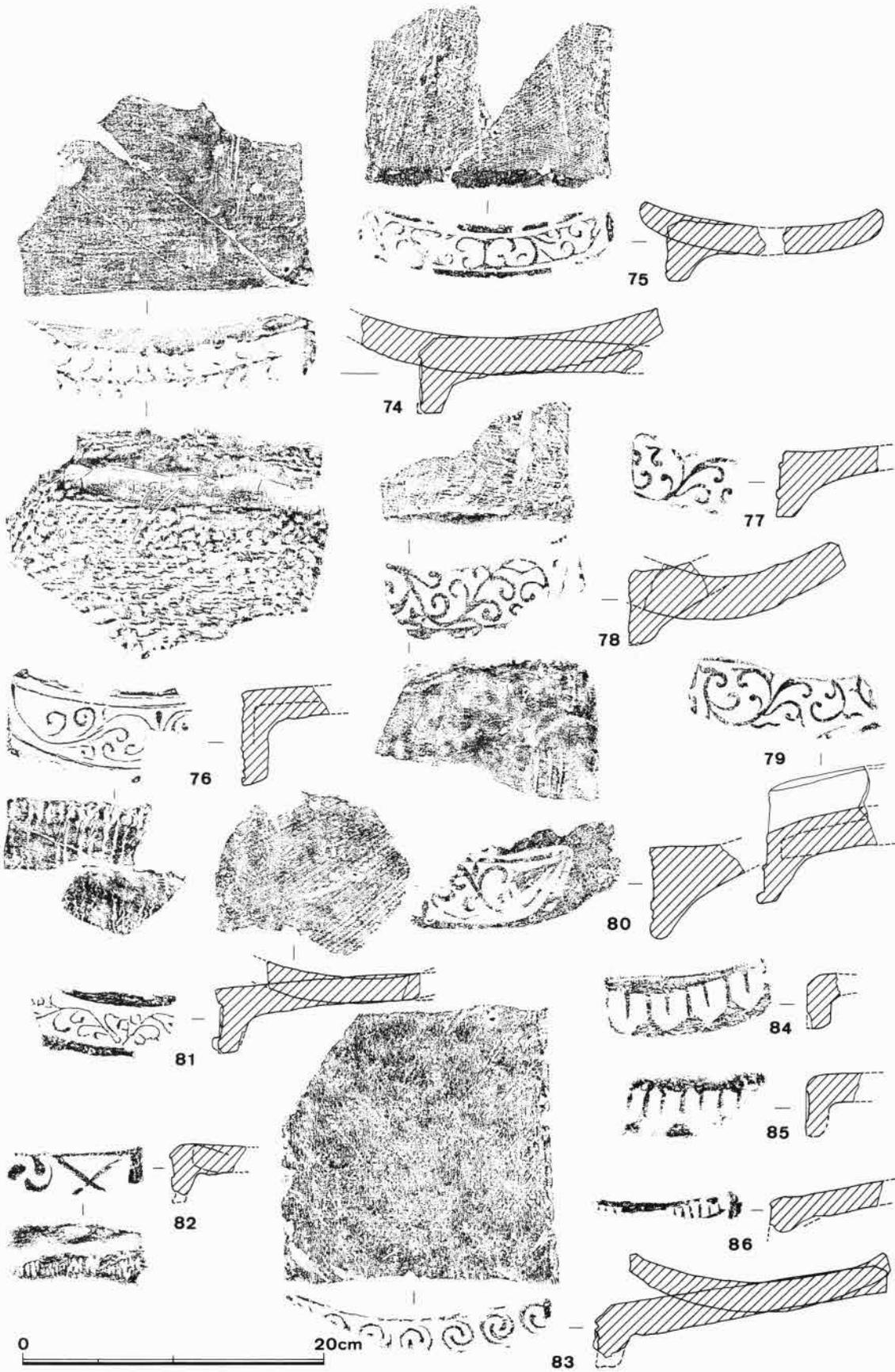
第61図(図版第44)の例は、焼成が軟質のものが多く、凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る例が多い。74では、布目痕の残る凹面の瓦当端付近を削り、凸面の縄目の単位が大きい縄叩き痕が明瞭に残る。83は、全体の大きさがほぼわかる全長約20cm、瓦当面幅約18cmの小型の軒平瓦である。凸面の瓦当裏面に、粘土板を折曲げたしわが明瞭に残る。主に京都産であろう。

第62・63図(図版第44~46)の例は、須恵質のものが多く、凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る例が多い。瓦当付近は凹・凸両面とも粗いナデ調整を行う。主に播磨産であろう。102の例

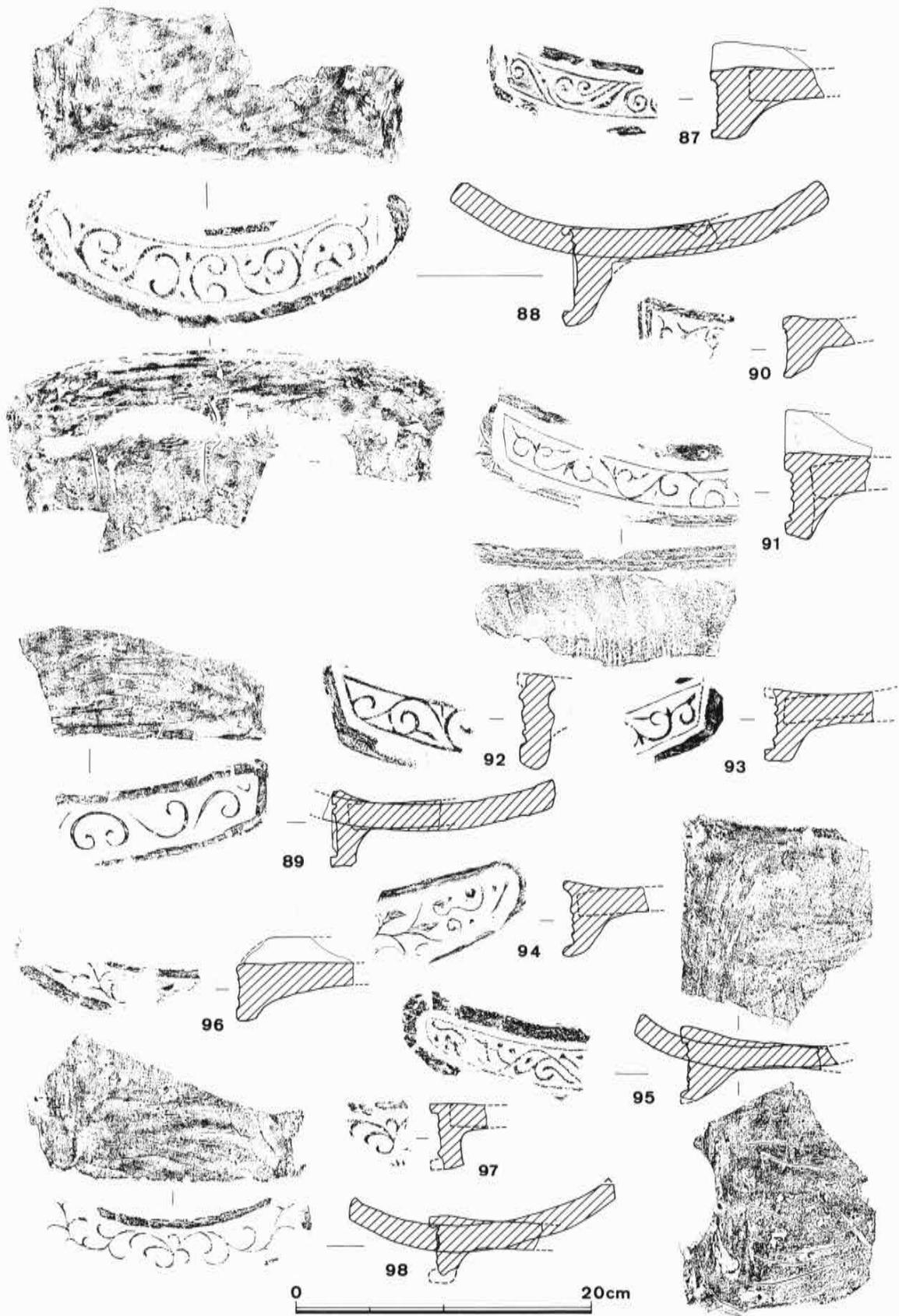


第60図 出土遺物実測図

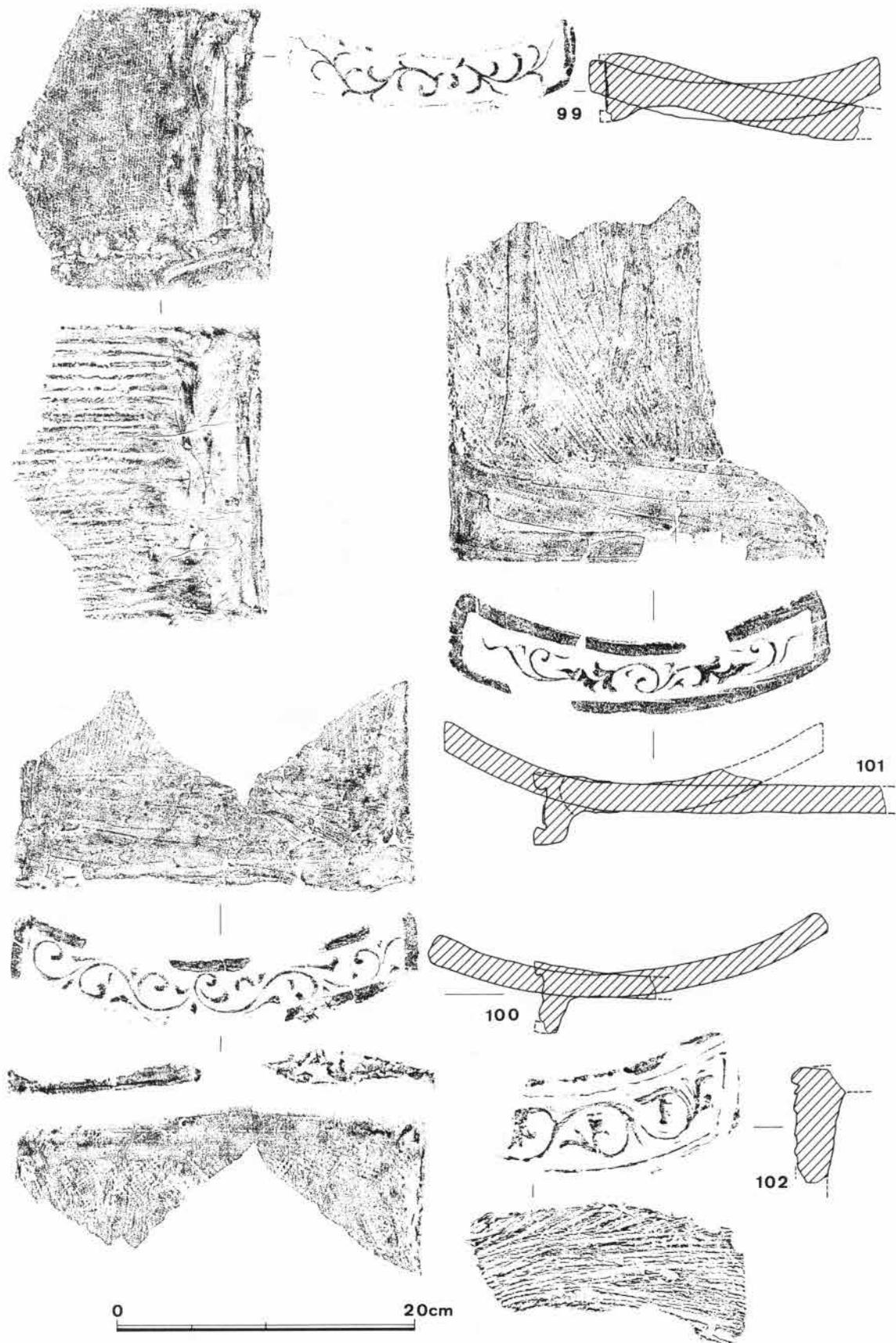
(S E01 45~56:土師皿, 57:瓦器皿 58・59:白磁碗, 60・61:褐釉壺, 62~73:軒丸瓦)



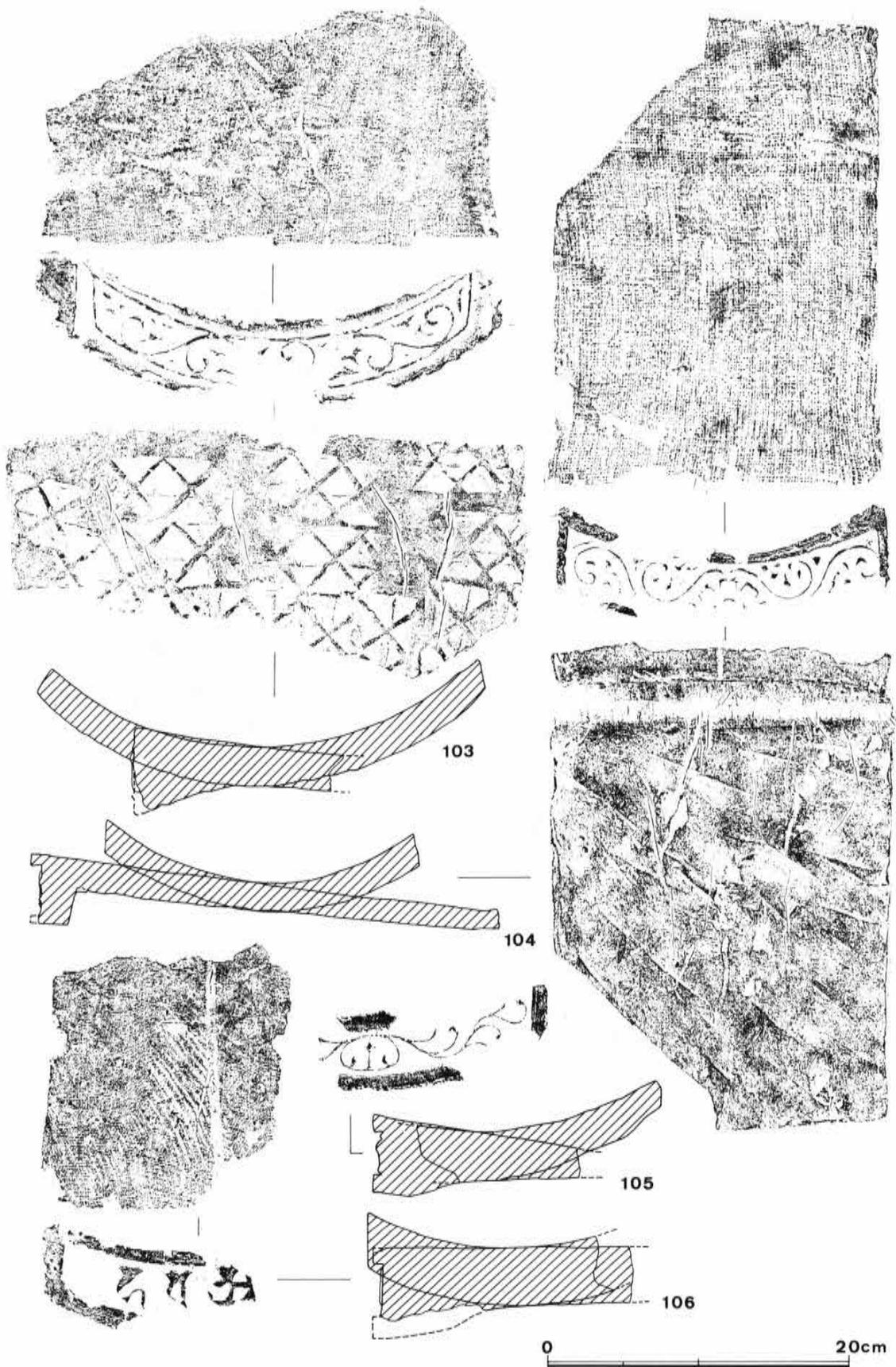
第61図 出土遺物実測図(S E 01 軒平瓦)



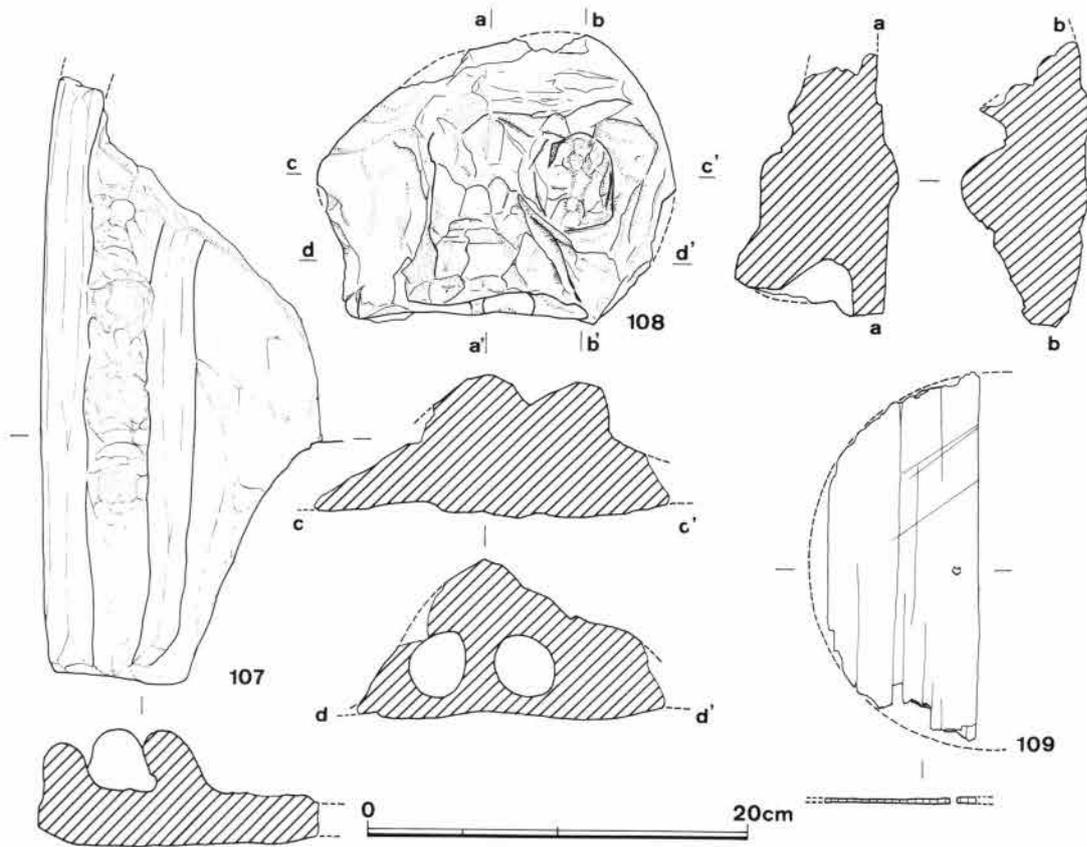
第62図 出土遺物実測図(S E01 軒平瓦)



第63図 出土遺物実測図(SE01 軒平瓦)



第64図 出土遺物実測図(S E01 軒平瓦)



第65図 出土遺物実測図(S E01 107・108:鬼瓦, 109:木製品)

は、瓦当部分に別の粘土板を張り付けている様子があり、紋様からも丹波産が想定できる。

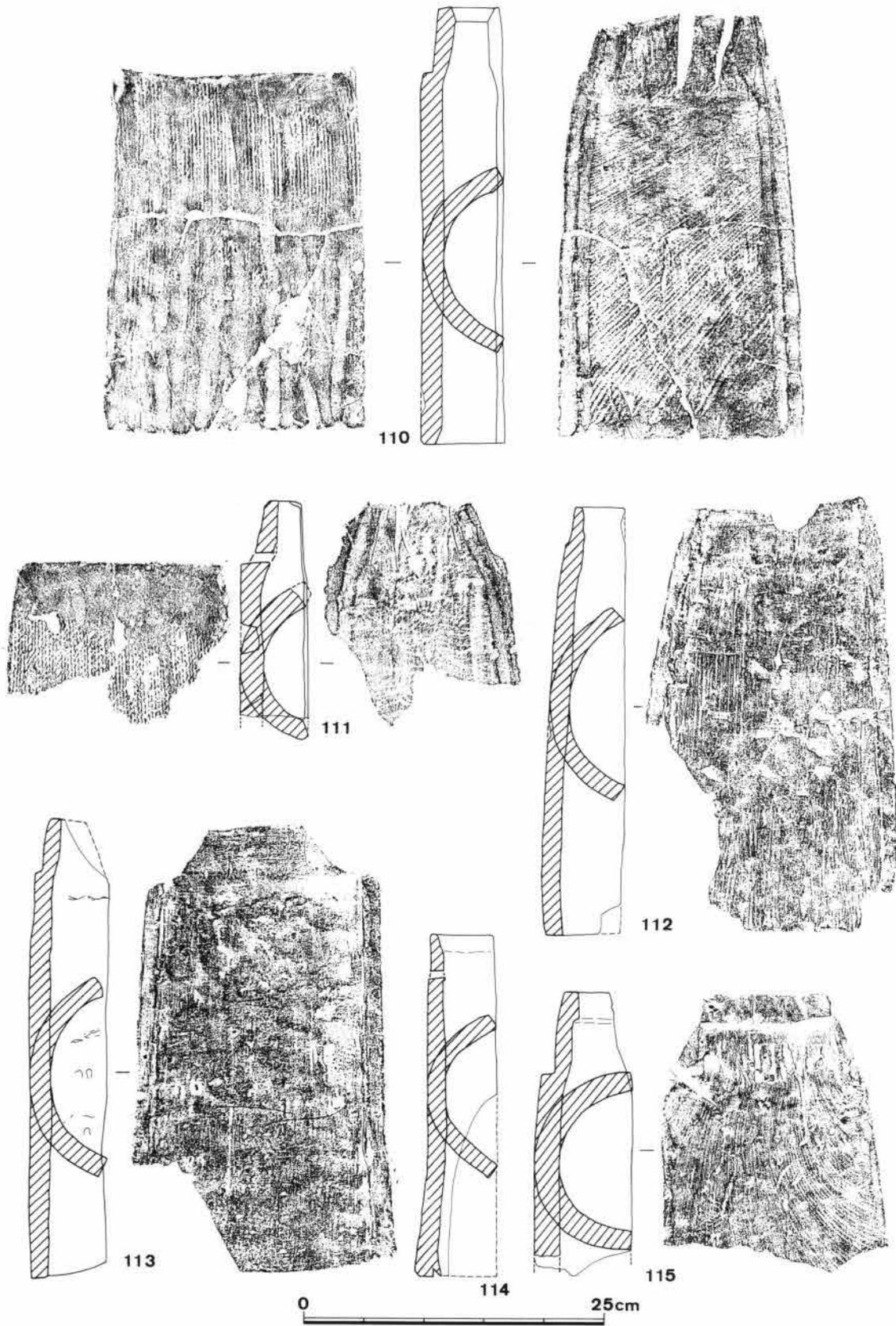
第64図(図版第46)の例は、前述の例以外の特徴をもつものである。103は凹面に布目痕、凸面に正格子の叩き痕が残る例である。粘土板の厚い大振りの瓦で、産地は特定できなかった。

104は凹面に布目痕、凸面に板状工具による叩き痕が斜めに残り、焼成は良好である。尊勝寺観音堂跡に出土例があり、吉備産であろう。106は梵字をあしらい、類似品が尊勝寺観音堂跡の調査で出土しているが、105とともに産地は特定できなかった。

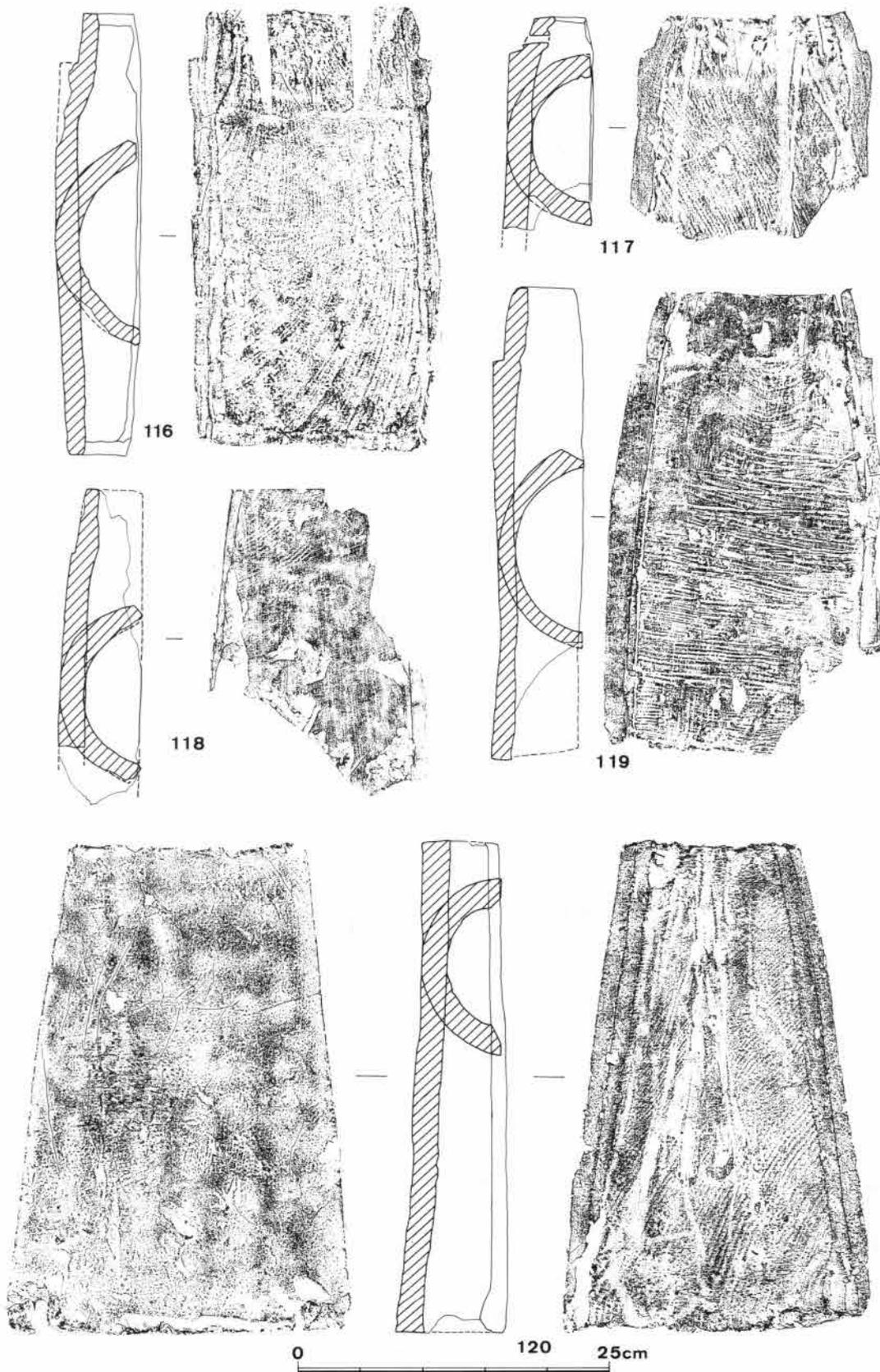
第65図(図版第47)の107・108は暗灰色を呈し、焼成良好な鬼瓦片である。ともに粘土板に粘土を付加して指ないしヘラ状工具で、立体的に表現する。107は外縁に沿って2条の丸みをもった突帯を巡らし、その間にややいびつな半球形突起を互いの裾が接するように密に配する。

第66・67図(図版第47)は丸瓦の例で、110・111はやや軟質の小型丸瓦で、凸面に縦位の縄目叩きを施し粗くスリ消す。京都産であろう。112～114は粘土紐桶巻作りの可能性がある例で、外面スリ消し、内面ナデないし布目が残る。離れ砂が両面に付着する例があり、成形台使用も想定できる。玉縁の端部は丸みがあり、本体との段差は浅くナデによる形式的なものが多い。播磨産であろう。118～120は行基葺きの丸瓦で、118・119は玉縁を削り出している。

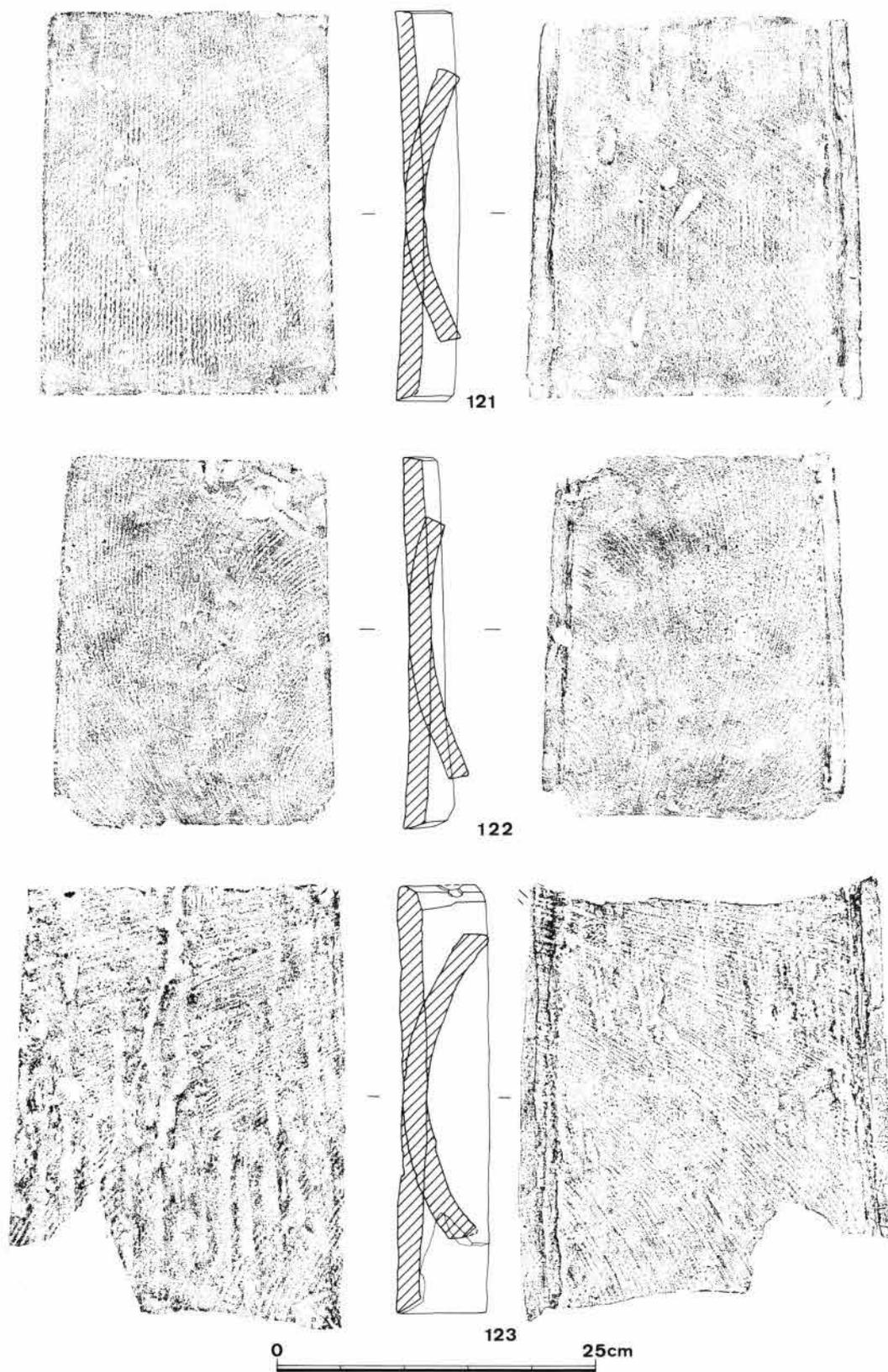
第68～72図(図版第48・49)は平瓦の例で、121～123は凸面に粗い縄目叩き、凹面に不明瞭な布目痕が離れ砂とともに残る。焼成はやや軟質で、京都産であろう。124は須恵質に焼け、凸面中央付近に段差をもち、砂粒多い胎土で、凸面は離れ砂と粗い縄目叩き、凹面は布目痕が残る。



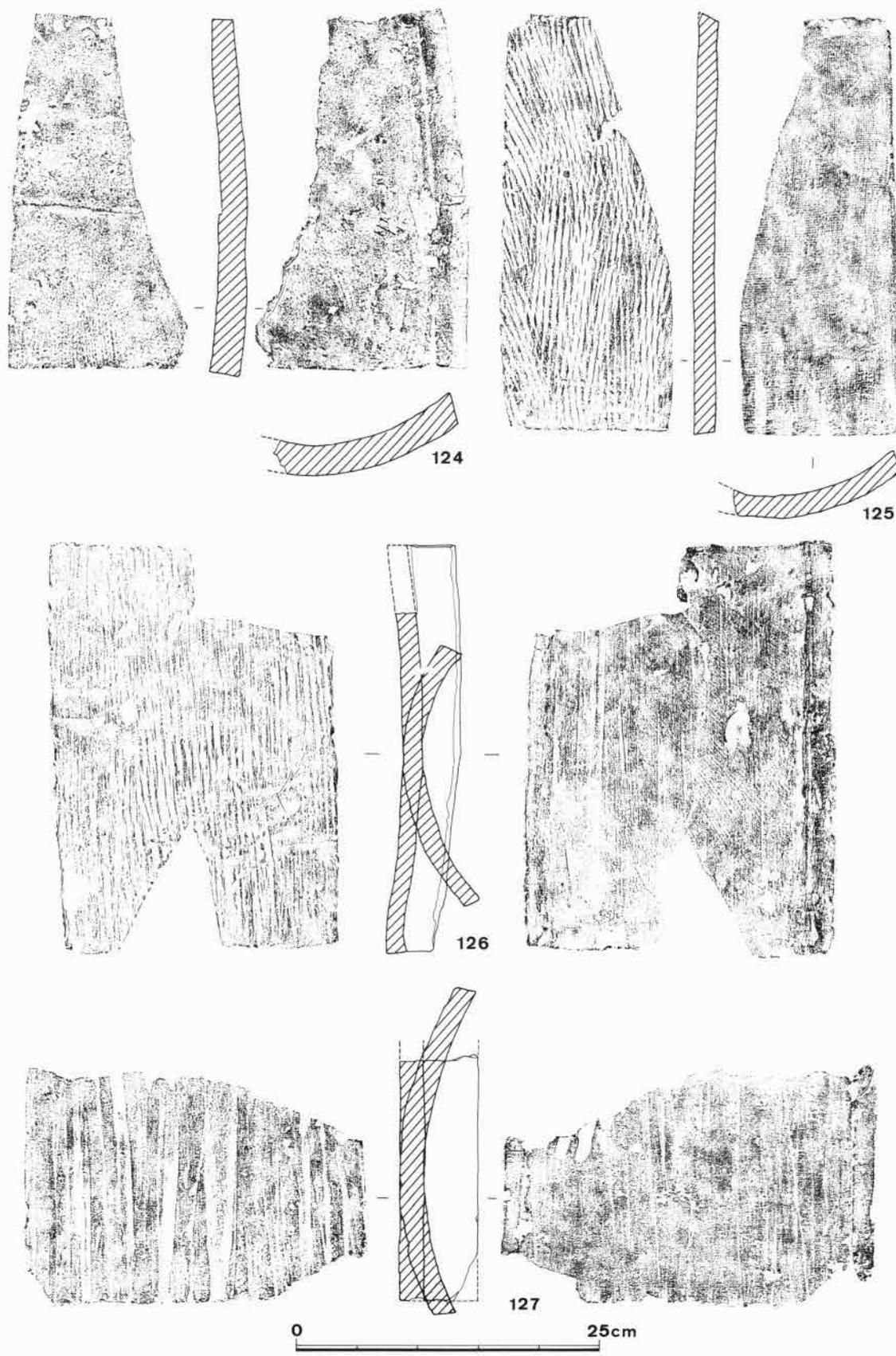
第66図 出土遺物実測図(S E01 丸瓦)



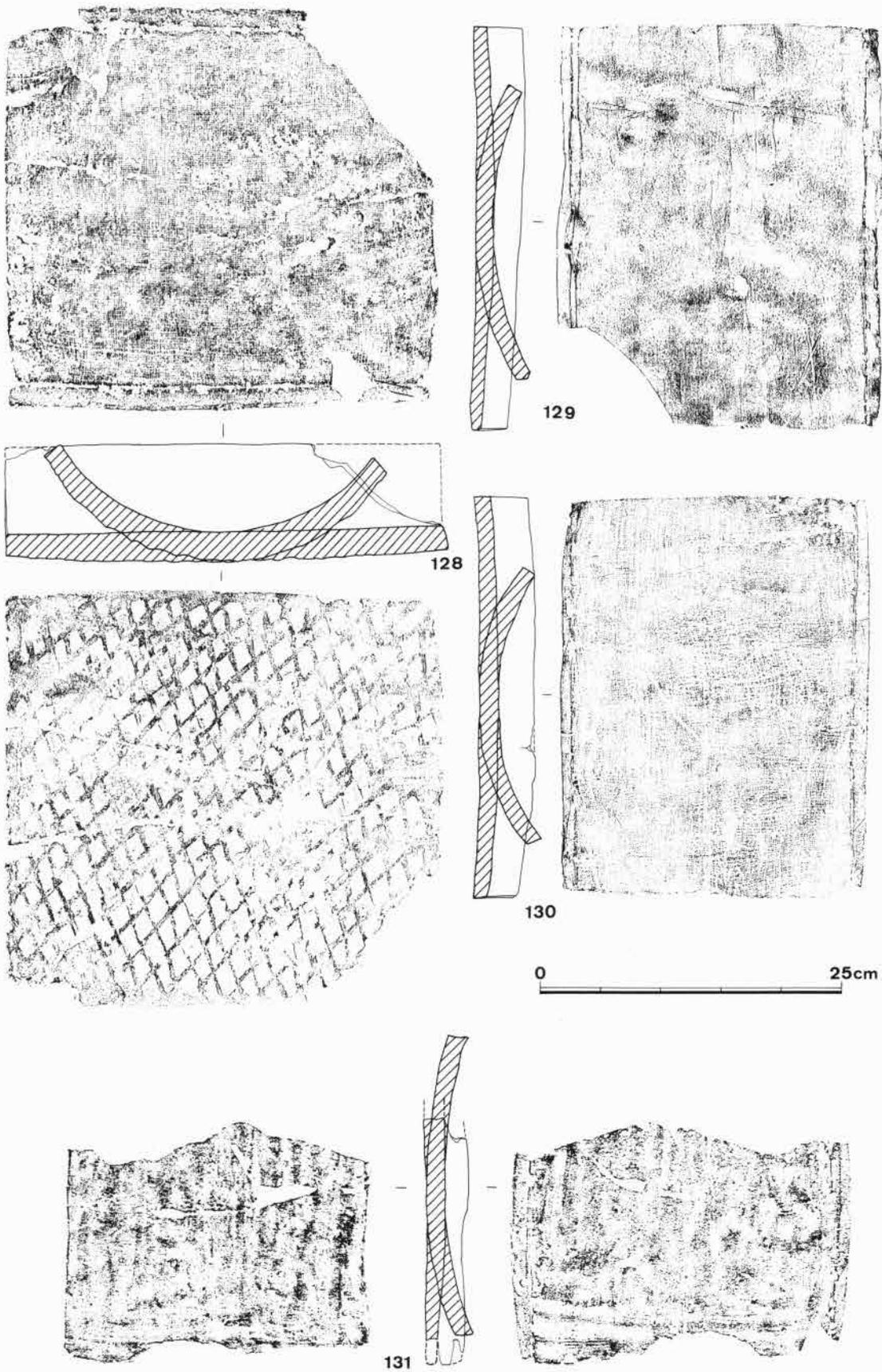
第67図 出土遺物実測図(S E01 丸瓦)



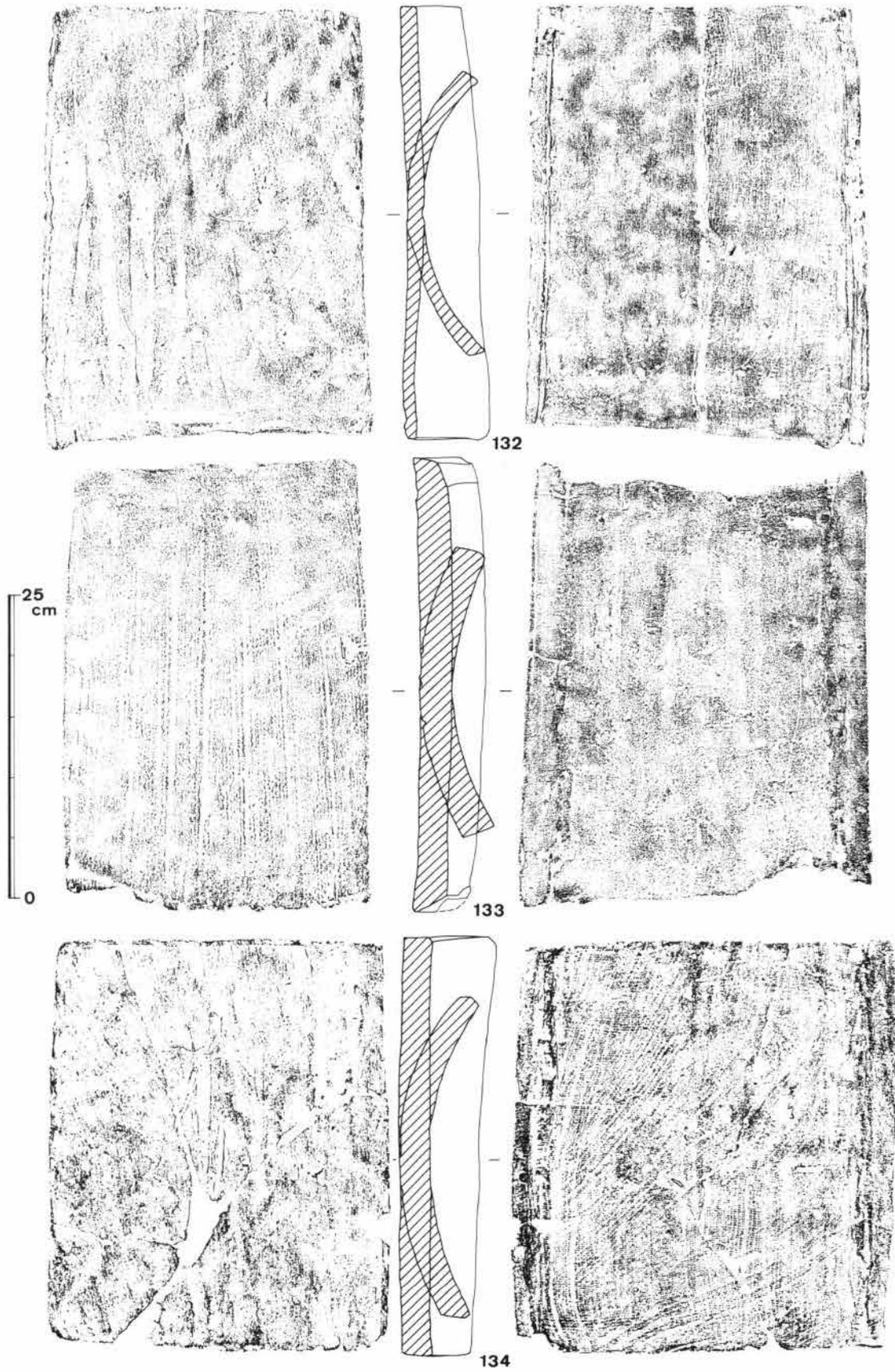
第68図 出土遺物実測図(S E01 平瓦)



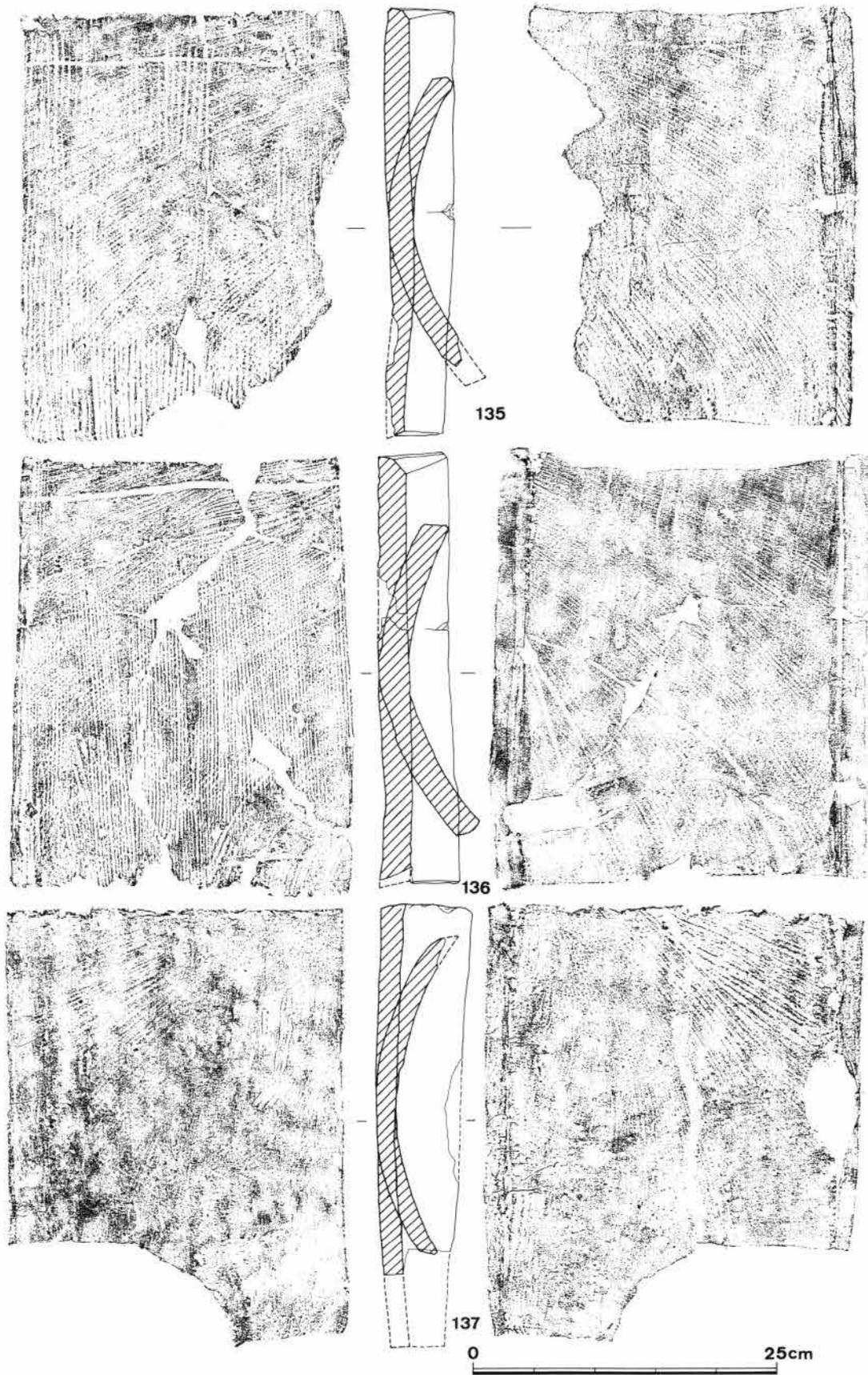
第69図 出土遺物実測図(S E01 平瓦)



第70図 出土遺物実測図(S E01 平瓦)



第71図 出土遺物実測図(SE01 平瓦)



第72図 出土遺物実測図(S E01 平瓦)

125～127は凹面に布目、凸面に平行条線の叩き痕が残り、比較的薄い瓦である。焼成、胎土とも良好。128は凹面に布目、凸面に格子の叩き痕が残る例で、格子の大きさは大小数種類確認している。同様の叩きをもつ丸瓦片も出土している。焼成はやや軟質で、粘土板桶巻の可能性が有る。129～132は凸面スリ消し、凹面布目ないしスリ消しで離れ砂を使用する薄い平瓦で、広・狭端面が丸みを帯びる例が多い。焼成、胎土とも良好で、丸瓦の112～114とともに播磨産であろう。133～137は、凸面縄目叩きないしナデ、凹面布目の平瓦例である。

その他では土師皿が多く、そのうち56は、底部に回転糸切り痕の残る白色の土師皿である。埋土の上層から1点だけ完形で出土した。白磁碗(58・59)、青磁碗、褐釉壺(60・61)、瓦器皿(57)、瓦質羽釜なども数点出土している。

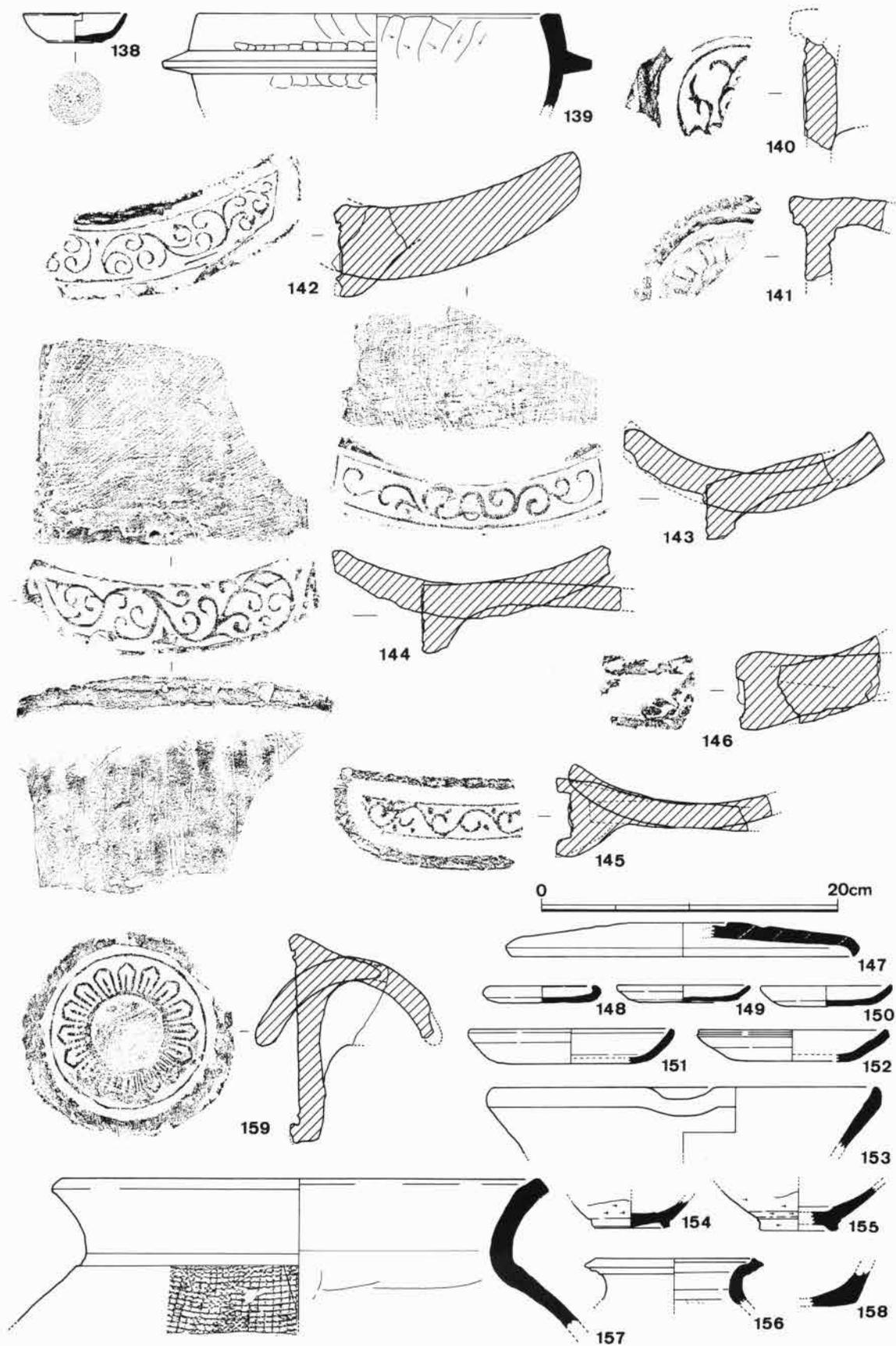
S E 531 調査地中央部東端に位置し、一辺約1.7mの隅丸方形の平面形掘形で、深さ約1.7mの規模の木組井戸である。井戸枠は、おそらく縦板横棧組の構造であったと考えているが、底部分の横板4枚と、位置がずれたと考えられる縦板が2枚出土した程度で詳細はわからない。縦板は抜き去られた可能性がある。埋土のうち、検出面より約1mまでの上層は、暗褐色粘質土とともに、瓦片や人頭大の石が数個まとまって落とし込んであり、この層から遺物の大半が出土した。下層は灰褐色系砂質土が堆積する。井戸の廃棄時にかなり崩しながら埋めたものと考えている。底の部分からは曲げ物片が出土しており、井戸底に置かれていたものであろう。底に組んでいた板は、長さ約1m・幅約20cm前後・厚さ約3cmの板材で、端部は組み物の加工を行っていない。縦板は残りが悪く判然としない。

遺物(第73図 図版第50)は、土器では端部に注ぎ口状の小さな凹みをもち、底部外面に糸切り痕が明瞭に残る陶器質小皿(138)が完形で1点出土したほか、土師皿片、須恵器片が出土した。このほか、口縁部付近が残る石鍋(139)、多数の丸・平瓦片、軒丸瓦(141・142)、軒平瓦(142～146)が出土している。

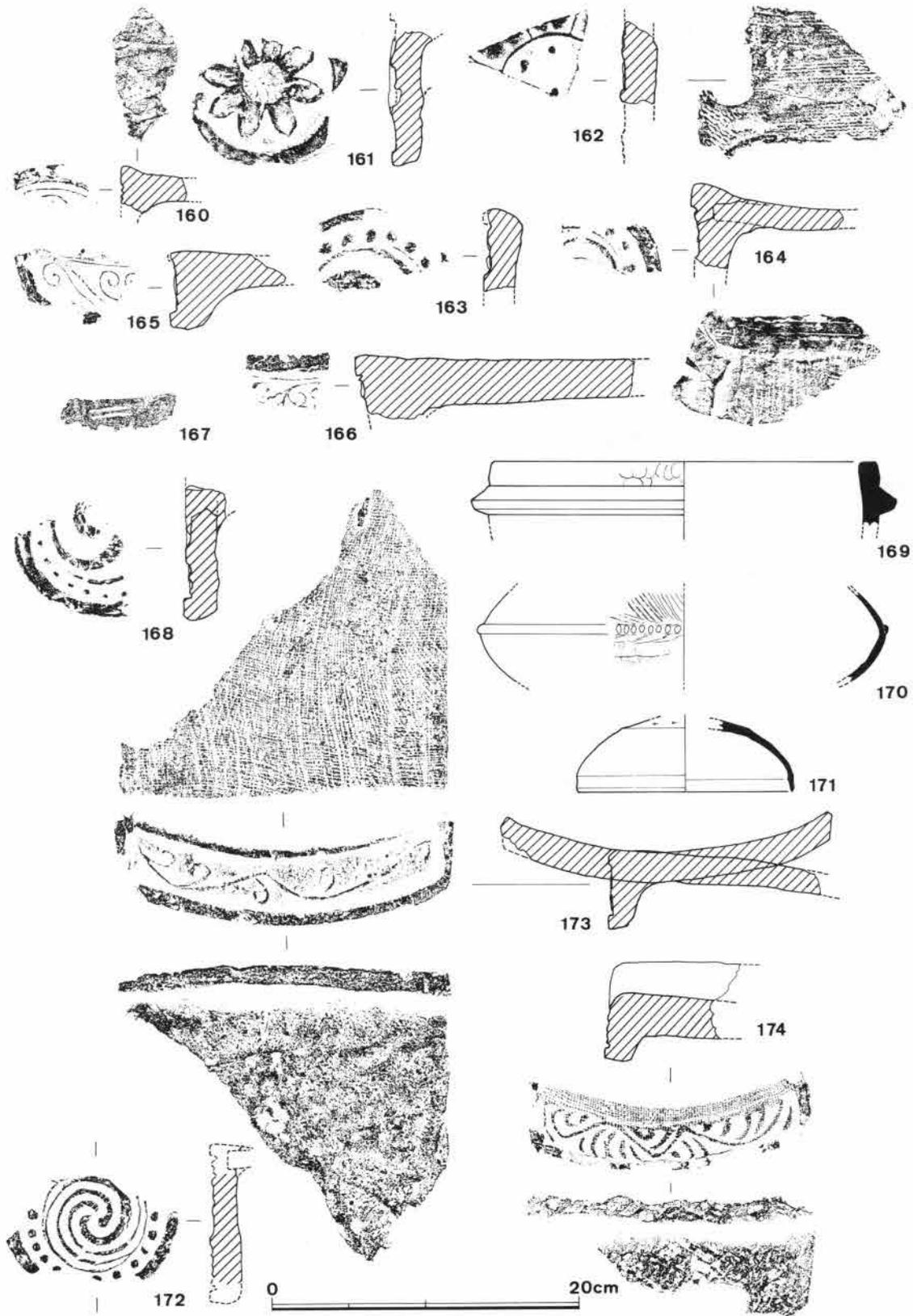
S K 166 調査区北端部中央に位置し、南北検出長約2.7m・東西幅約1.5m・深さ約1.0mの規模で、断面逆三角形のものである。底部は幅約0.2mと狭く、西側の一部に1段高いテラス状部分がある。この遺構の北側はS K 196を切って調査地外へ延びるため、溝の端部になるかもしれない。埋土は、褐灰色系の土が堆積しており、拳大よりやや大きい河原石や瓦片が多く含まれていた。遺物は、西側壁面から底部にかけて張り付くように出土するものが多く、東側から捨てられた可能性が高い。性格としては瓦溜まりとするより、一般的な廃棄土坑と考えている。

遺物(第73図 図版第50)は、瓦片が多く、常滑焼大甕(44)や須恵質の大甕(37)なども出土した。常滑焼の大甕と須恵器大甕は、S E 165から出土したのと同じ個体で、この土坑とS E 165は同じところに埋まったと考えられる。このほか、軒丸瓦(159)、土師皿・青磁碗(154・155)・石鍋(158)などが出土している。

S K 196 S K 166の北西に位置し、東西幅推定約4m・深さ2.5m以上の規模で、大半は調査区外に続く。S K 166により東端が壊されているので、S K 166より古いものである。掘形は、東西方向が長い長楕円形に見え、西側を一段高く掘り残す。掘形の一部を掘り残して一部を深く掘り



第73図 出土遺物実測図(S E 531:138~146 138.陶質小皿, 139.石鍋, S K 166:147~159, 147~152.土師器, 153.揺り鉢, 154・155.青磁, 156・157.須恵器, 158.石鍋)



第74図 出土遺物実測図(S K196:160~167 P17;168 S D104:169 包含層:170~174
169. 石鍋, 170. 縄文土器, 171. 須恵器杯蓋)

進む状況は、S E 165と同様であり、規模もまた似た状況であることから、S E 165と同じタイプの井戸になる可能性が高い。そう考えると、土層の上部2層(5・6)は廃棄時の埋め土で、更に下層の部分は井戸枠外側の埋め土と考えられる。

遺物(第74図 図版第51)は軒丸瓦(161~164)、軒平瓦(166)のほか丸・平瓦片と土師皿などが出土している。なお167は平瓦端部に線刻を施している例である。

S K 167 調査地北西端に位置し、南北幅約1.7m・深さ約1.1mの規模で、西側が調査区外に続く円形の土坑である。遺物は底付近に多く、廃棄土坑の可能性が高い。遺物は、瓦片、土師器片が出土している。

S K 91 調査地中央部東よりに位置し、幅約1.2m・深さ約0.5mの規模の円形の土坑である。埋土は灰褐色砂質土が堆積していた。遺物は少量の土師器片が出土している。この西隣りのやや規模の小さい土坑S K 26も同様な状況である。

S K 160 調査地東壁付近の、S H 157の南側に位置し、幅約1.2m・深さ約0.4mの規模の楕円形の土坑である。埋土は褐灰色細砂質土が堆積していた。遺物の半分は調査地外に続くため全体の規模は不明。この土坑からは土師皿4枚が斜め下向きに重なりあって出土した。地鎮などの祭祀との関連があるかもしれない。

S K 532 調査地中央部東よりに位置し、直径約2.2m・深さ約0.5mの規模の円形の土坑である。土坑の中央部分の底が1段高く残されて、壁面に沿って溝がまわっているような掘形をもつ。埋土は灰褐色砂質土が堆積していた。遺物は少量の土師器片が出土している。

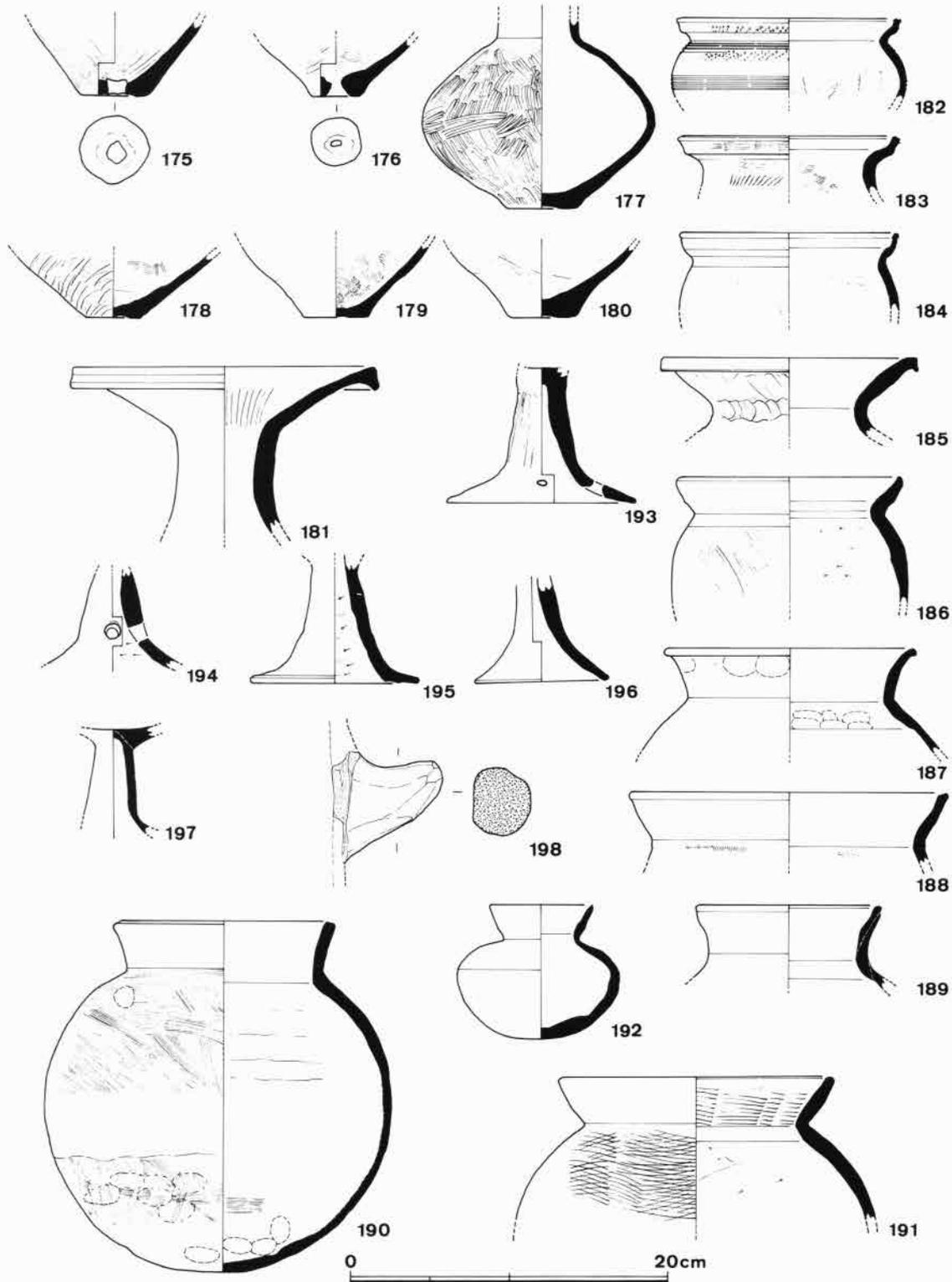
S K 533 調査地中央部S K 532の南西に位置し、幅約1.2m・深さ約0.5mの規模の円形の土坑である。埋土は暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は少量の土師器片が出土している。

S K 534 調査地中央部S K 533の南に位置し、幅約1.6m・深さ約0.1mの規模の不整形の土坑である。埋土は暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は少量の土師器片が出土している。

S K 632 調査地中央部S K 533の北西に位置し、直径約1.1m・深さ約0.3mの規模の円形の土坑である。埋土は灰褐色粘質土が堆積していた。遺物は少量の土師器片が出土している。

S X 633 調査地南側に広がる沼状地形である。今回のトレンチ内では最も低い部分で、南側と西側にさらに広がる。この地形は暗灰色粗砂をベースにして、下層から暗褐色砂質土、黒灰色粘質土と堆積し、その中から弥生時代後期の壺・高杯・器台などや、古墳時代後期の土師器甕・壺・高杯・甑、須恵器杯身杯蓋・無蓋高杯・甕などが出土した(第75・76図 図版51~53)。遺物の出土場所は、沼状地形の北岸付近に多い傾向がある。この層からは常時水が湧き出ており、平安時代末期以前には滞水状態であったと考えている。また木の根なども出土しており、弥生~古墳時代にかけて付近に森林が広がっていたと思われる。

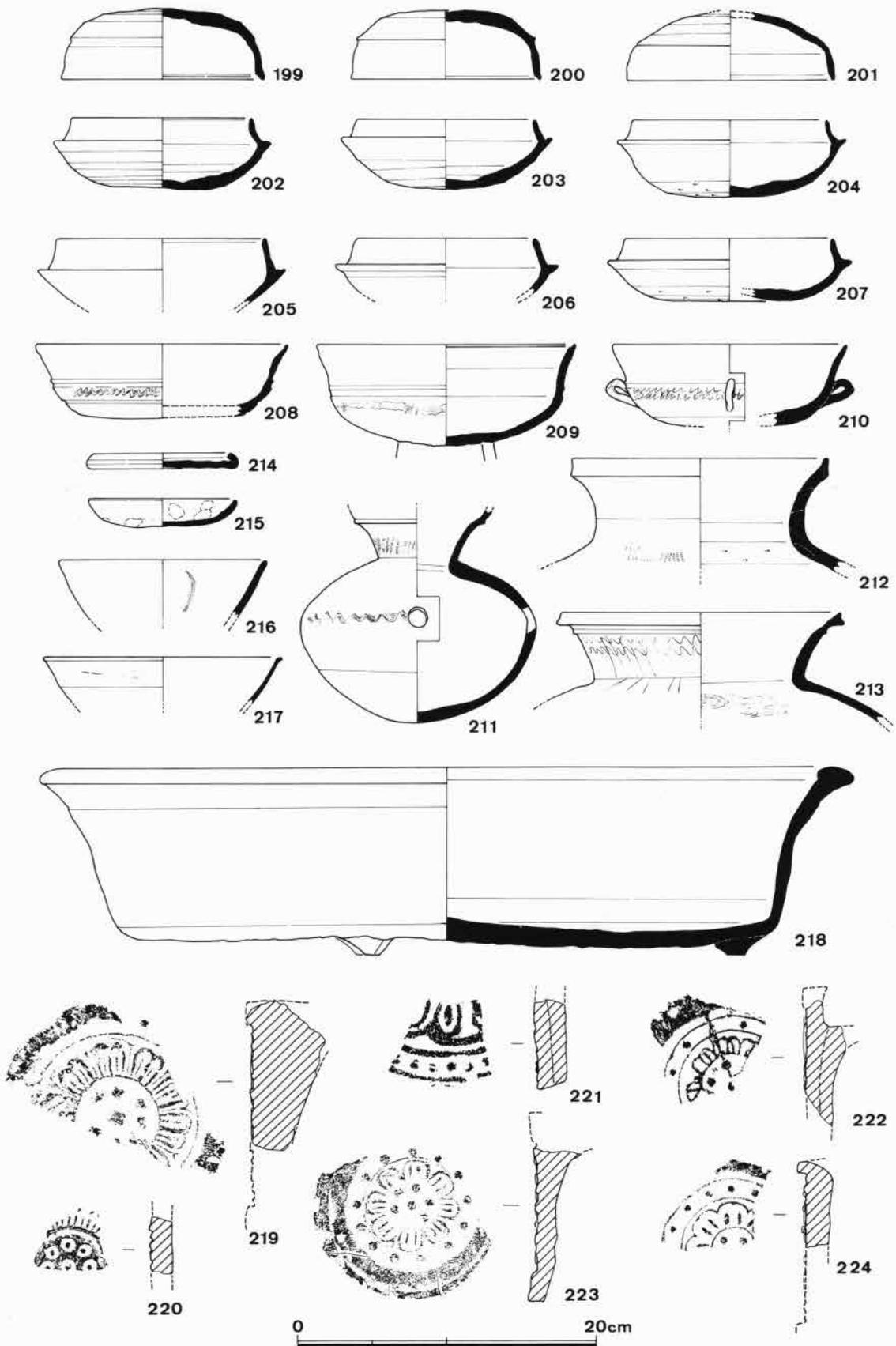
沼状地形が最終的に埋まった暗灰褐色細砂質土中からは、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物が出土した(第75・76図 図版第51~53)。主に、ほぼ完形の瓦質盤(218)、土師皿、白磁・青磁碗、軒瓦類などの破片がある。瓦質盤の底部外面には、製作時に付着した刳圧痕が多く観察できる。沼状地形は、これらの遺物が示す年代頃に完全に埋り、その後耕作地として利用される



第75図 出土遺物実測図(S X 633 175~187. 弥生土器 188~198. 土師器)

ようになったようである。

この地形に北側から続く溝 S D 620・621は自然の流路跡で、S D 538なども同様のものと判断している。埋土は、黒色粘質土で遺物はほとんど出土していない。時期は埋土の状況から弥生時代から古墳時代頃のものであろう。



第76図 出土遺物実測図(S X 633 199~213.須恵器, 214・215.土師皿, 216.青磁碗, 217.白磁碗
218.瓦質盤, 219~224.軒丸瓦)

d. その他の時期の遺構

暗灰褐色細砂質土層の上面には鎌倉時代以後の耕作に関係すると考えている溝群(S D505～509・516・517・526)が、沼状地形の上面及びその北東部に東西・南北方向に交差して分布する。また、S K521・523は溝群と同様に同時期の耕作に関係する遺構であろう。

S D505～509 東西方向の溝群である。S D505・506、S D507・508はそれぞれセットで機能していたと考えている。S D505は幅約0.5m・深さ約0.15mで南側が深さ約5cm・幅約0.2mとテラス状に浅く2段に掘られている。S D506は幅約0.4m・深さ約0.25mとやや深い。埋土はともに灰色砂質土である。埋土の状況から、水が流れていたと考えている。

S D507・508 S D505・506と同様の規模・埋土で、S D507がS D505と同じく2段に掘り下げられている。S D509も同じ埋土である。いずれからも遺物は、土師器片が若干出土している。

S D516・517・526 一連の溝と考えている。S D516と526はL字に続く溝と考えており、ともに2段に掘られている。幅は最大約1.1m、深さは約0.4mを測る。埋土は灰褐色粘質土と砂質土の互層になっており、掘削時にも水が湧くなど、かつて水が流れていたと考えている。底のレベルは南に向かって徐々に下がっており、水は東から西へそして南へ流れていたと考えられる。S D517は同様の埋土で、深さ約0.3m。東西方向の溝と同様に、S D516と2本セットで機能していたと考えている。出土遺物も他の溝と同様である。

このほかの溝はいわゆる鋤溝と判断した、幅・深さとも約0.1m前後のものである。

S K521 一辺約1.5mの隅丸方形、深さ約0.2m断面逆台形の土坑である。埋土は上層に灰褐色細砂質土、底付近には淡灰褐色砂質土が堆積しており、底部には若干の凹凸がある。S D516と関連する水利関係の施設と考えている。遺物は土師器片が少量出土している。

S K523 一辺約1.2m・深さ約0.2mの規模の土坑で、埋土はS K521と同様で、S D517と関連する水利関係施設であろう。

これら溝群と土坑は、溝の区画された4筆の水田で、鎌倉時代以後に付近の建物が廃絶した跡に営まれていたと考えている。溝群は検出時には切り合い関係が見えたが、時期差はほとんどないと考えている。また、試掘トレンチで確認した南北方向の溝も同様のものと考えている。

江戸時代の遺構として、土坑1基(S K02)をトレンチ北西端で確認した。S K02の中からは陶磁器類、伏見人形片、泥面子、窯道具などのほか、貝殻も多く出土した(図版第54)。なかにはヨーロッパ製の磁器片と考えられるものも出土している(図版第54)。磁器の破片には、当時の飲食店名や人名なども見え、何となく時代の雰囲気を感じさせる遺物類である。先述したとおり江戸時代末にこの辺りに加賀藩の屋敷があったという地図があり、その関連も考えられる。また、試掘トレンチで土坑1基とピットも確認している。

3. ま と め

平成9・10年度と2年次にわたって行った調査の概略を簡単にまとめておきたい。

岡崎遺跡内の弥生時代後期の集落位置が推定できる資料が得られた。今回の調査地西側の京都

市勤業館の調査で方形周溝墓群が見つかっており、今回見つかった住居跡がその周溝墓群を営んだ集落の南端の一部と考えられる。同様に古墳時代後期の集落位置のうち、勤業館の調査結果により西端が確定していたのに続いて、今回の調査で南側もほぼ確定できた。弥生時代後期と古墳時代後期の集落がほぼ重なる場所にあることは、この場所が扇状地形内でも扇端付近の湧水点に近く、水場や耕作に適す場所であったからと言えよう。

成勝寺跡については、瓦積み井戸や木組み井戸と掘立柱建物群を検出したが、残念ながら成勝寺と直接に結び付く施設とは考えにくいものである。地割に当たるような溝類も確認できなかったこともあり、今後の付近の調査例の増加を待ってこの付近の性格を再検討したい。

(有井広幸)

- 注1 上村和直「2院政と白河」(『平安京提要』(財)古代学研究所) 1994
- 注2 竹原一彦ほか「4. 尊勝寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注3 菅田 薫・吉川義彦「26 成勝寺跡」(『京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1979
菅田 薫「18 成勝寺跡」(『京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1980
- 注4 網 伸也ほか「16 成勝寺跡」(『京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1992
- 注5 奥村茂輝・山本佳子・青木政幸・佐伯光祥・奥村有貴子・松下泰治・江下光幸・高木 彩・大田正孝・庄司友明・田鍬美紀・藤木旬子・熊崎 司・大西美智子・近藤奈央・加藤理子・北川あづさ・山本鶴子・中島恵美子・長谷川マチ子・田中美恵子・伊達優子・古賀友佳子・及川あや子(敬称略・順不同)
- 注6 網 伸也・上村和直・津々池惣一・上原真人(敬称略・順不同)
- 注7 江戸時代の絵地図資料に描かれた調査地付近は、幕末直前までは水田風景ないし空白地であるが、幕末時には加賀藩邸が設けられていた様子が窺える。(足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社) 1994
- 注8 黒褐色粘質土層は花粉分析中であるが、植物遺体の内容から現在よりかなり寒冷な時期の堆積層である可能性があるとの指摘を受けた。火山灰層については、上層が大山系のもの、下層が始良火山系との分析結果を得ている。火山灰層は、周辺での検出例も多く、勤業会館の調査(注3文献参照)では動物の足跡も確認されている。また、1989年の岡崎遺跡の調査(内田好昭「法勝寺・岡崎遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994でも確認されている。
- 注9 瓦の産地及び時期については、注2文献のほか以下の文献を参考にして判断した。
上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代学研究13・14』(財)元興寺文化財研究所) 1978
寺島孝一ほか『法住寺殿跡 平安京跡研究調査報告第13輯』(財)古代学協会 1984
吉村正親「平安京出土瓦とその生産」(『中近世土器の基礎的研究』Ⅲ 日本中世土器研究会) 1987
瓦の産地別では、京都産、播磨産が多く、丹波産や吉備産その他の物が少量ある程度である。
- 注10 注7文献参照

3. 畑ノ前遺跡発掘調査概要

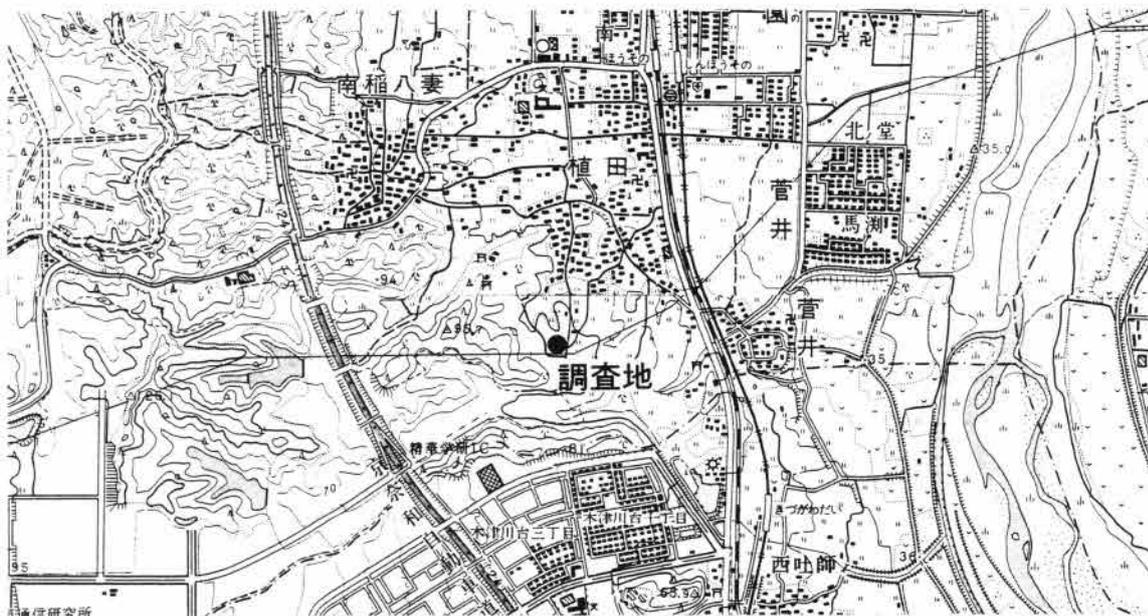
1. はじめに

畑ノ前遺跡は相楽郡精華町大字植田地内に所在し、精華町の南西部の丘陵上に位置する(第77図)。この遺跡の立地する丘陵上及び周辺は関西文化学術研究都市の精華・西木津地区にあたり、ニュータウンの建設が計画され、昭和59・60年度に(財)古代学協会によって畑ノ前遺跡の発掘調査が実施された。この時の調査では丘陵上のほぼ全域が調査され、弥生時代中期の竪穴式住居跡・土坑、横穴式石室を有する7基の古墳、奈良時代の掘立柱建物跡群などが見つかった。この時の畑ノ前遺跡の調査では、弥生時代と奈良時代の遺構がまとまって調査されたため、南山城地域の代表的な遺跡の一つとして周知された。

京都府は、南山城地域の西部における交通路の整備のため、府道山手幹線の建設を計画・着手しており、その計画路線内に畑ノ前遺跡の一部がかかることになった。今回の調査はその事前調査で、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査対象地点は、(財)古代学協会が調査した丘陵に隣接した北側の谷部にあたり、集落の中心部からはややはずれた地点にあたる(第78図)。

調査は、調査第2課主幹調査第3係長事務取扱平良泰久と同主任調査員岩松 保が担当した。調査期間は、平成10年5月1日から6月24日までを要し、調査面積は約350㎡である。

調査に際しては、京都府教育委員会・精華町教育委員会・京都府木津土木事務所の関係各機関、精華台ニュータウンJ Vには便宜を図っていただいた。また、調査に参加していただいた調査補助員・整理員にも多大な協力を得た。ここに記して、感謝申し上げる次第である。



第77図 調査地位置図(1/25,000)

2. 調査の概要

(1) 調査経過

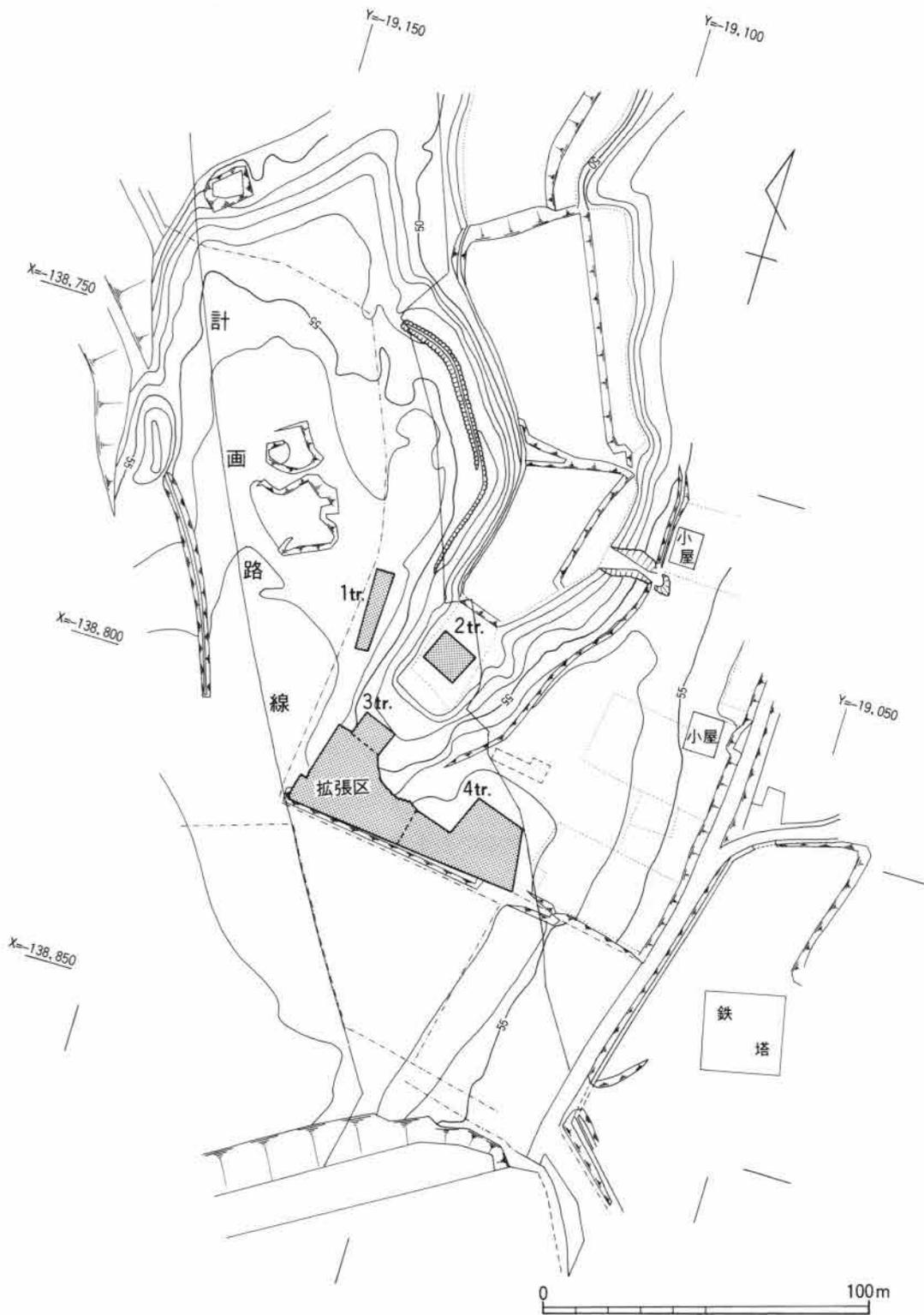
調査対象地は、(財)古代学協会が調査を行った丘陵の北側に位置する谷部とその両側に広がる平坦部の一部である(第78図)。この周辺は、先述のように、関西文化学術研究都市の精華・西木津地区にあたり、畑ノ前遺跡の所在する丘陵より西側は、広大な範囲にわたって精華台ニュータウンの造成工事が進められており、旧来の地形は一変している。今回の調査対象地は、その造成地の東端にあたり、造成工事が現出しつつある新たな景観と、旧来の景観との境界に位置している。調査着手時の対象地の現況は、竹が生い茂って、鬱蒼としたところであった。

調査は、谷部に2つのトレンチ(2・3トレンチ)、谷を挟んで東西の平坦部に2つのトレンチ(1・4トレンチ)を設定して、遺構の有無を確認することから開始した(第79図)。西側の平坦部に設定した1トレンチでは、現代の地境溝と数基の土坑を確認し、弥生土器を中心とした土器片が出土した。2トレンチは谷部に設定した2つのトレンチのうち、北側のもので、下位の平坦部に設定したトレンチである。このトレンチは、現地表下約2.5mまで、盛り土と谷内自然堆積土が厚く堆積していた。1・2トレンチでは、顕著な遺構や遺物を認めなかったため、当初に設定した範囲以上の拡張は行わなかった。

3トレンチは、谷部の高所に設定した5×6.5mのトレンチで、斜面地に位置する。このトレンチでは、地表下約1.8mで地山を確認したが、その形状が溝状の凹地を呈し、しかもその直上約50cmの土層中では比較的多くの弥生土器片が出土した。最終的には、雨水の流れによって、自然に挟られた流路と判断したが、この時点では、人工の溝であるか自然の溝であるかどうかは、決定しがたかった。一方、谷の東側の平坦面に設定した4トレンチでは、地表下30~50cmの地山面で、溝や土坑状の土色の違いを認め、弥生土器片や須恵器片の出土をみた。これらのことから、3トレンチの南側の谷部斜面全域と、4トレンチの西側に拡張区



第78図 調査地位置図 (『京都府 (仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』第32図を一部改変)

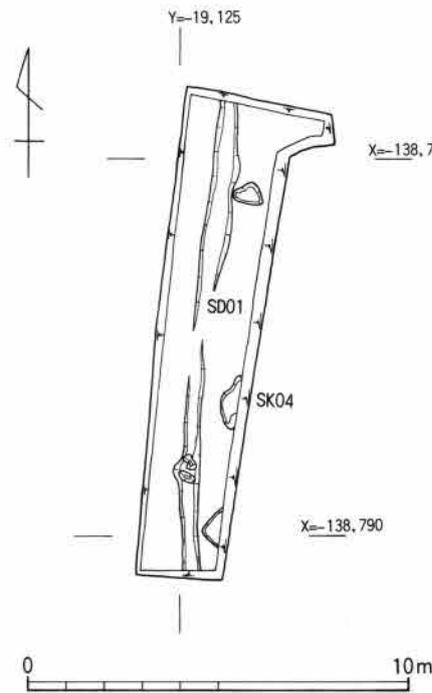


第79図 調査トレンチ位置図

を設定し、結果的には3・4トレンチをつなげて1つの調査トレンチとして調査を行った。

(2)各トレンチの調査

a. 1トレンチの調査(第80図・図版第55-(1)) 谷部の西側にある平坦地に13×3mのトレン



第80図 1 トレンチ検出遺構平面図



第81図 2 トレンチ土層柱状図

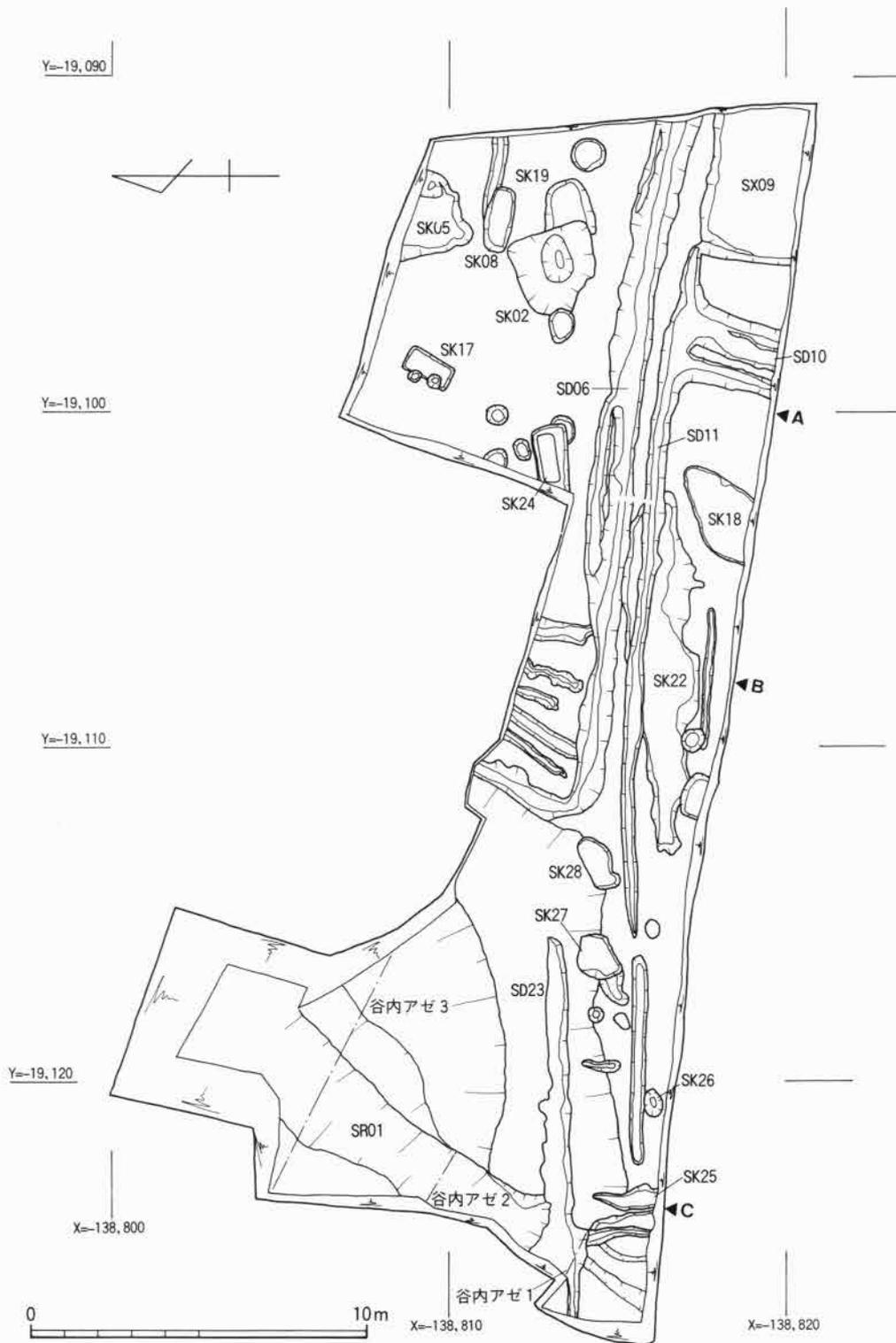
チを設定し、遺構・遺物の分布の有無を確認した。このトレンチでの土層は、表土—淡黄褐色土—黄褐色土(地山)であり、地山面は地表下約20~50cmの深度である。地山上では、現地表面でも確認できる南北地境溝SD01と数基の土坑を検出した。土坑SK04は、トレンチの東辺にかかった不整形な平面形で、調査地内では南北1.4m・東西0.4m・検出高15cmを測り、内部からは弥生土器片が30点程度出土している。その他の土坑からも数点の弥生土器が出土したが、これらは不整形で、検出高も10cm内外と浅い。

SK04は、比較的掘形がしっかりしており、弥生時代に遡る可能性があるが、他の土坑は、現生の竹の抜き取り痕とも考えられるようなものであった。(財)古代学協会の調査でも、1トレンチを設定した付近では顕著な遺構を確認しておらず、周辺には重要な遺構が包蔵されている可能性が低いと推定されたため、これ以上の拡張は行わなかった。

b. 2 トレンチの調査(第81図・図版第55-(2)) 谷部に設定した2つのトレンチのうち、北側に位置する6×6mのトレンチで、地表下2.5mまで掘削した。予想以上に掘削深度が深くなったため、堆積土層を確認しただけであった。北壁での土層の観察によると、堆積層は大きく10層に分けられるが、その堆積状況によって大きく上下に2分される。下層は第6層の明褐色砂以下第10層の淡灰色砂にいたる約1.5mの厚さで、還元状態の灰色を基調とした粘土~砂がレンズ状に堆積しており、谷の内部で自然に堆積した土層と判断された。それに対して第5層の暗灰色粘質土より上位の層は、黄色~褐色を基調とし、水平に近い堆積

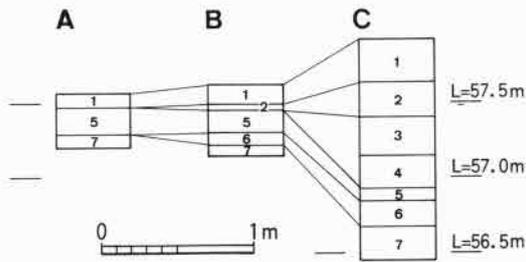
をなしている。さらに、土質は砂と土の塊が混在した状況を呈していたことなどから、下位の層とは違って、人工的に盛り土された土層と判断された。上位・下位の層中ともに、弥生土器片・土師器片の小片がわずかながら出土したが、上位の層中には染め付け片が混じっていた。このことから、近世のある時点で、この谷を大きく盛り土したものと判断され、現況では谷内に棚状の平坦面が連なっているので、おそらく、水田や畑作のための耕地を確保するために造成されたのであろう。

c. 3・4 トレンチの調査(第82図・図版第55-(3)・56-(1)~(3)) 先述のように、谷部上位の3トレンチと丘陵平坦部の4トレンチとは、その間の谷部の斜面を掘削して一つの調査地とした。ここでは両トレンチと拡張部を一括し、3・4トレンチとして概述する。



第82図 3・4トレンチ検出遺構平面図(A～Cは第83図土層図位置・谷内アゼ1～3は第84図土層図)

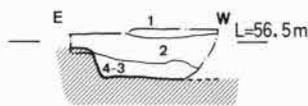
第83図は3・4トレンチの南壁、すなわち平坦部の東西方向の土層柱状図である。地山の黄褐色土はAからB(東から西)に向けて徐々に低くなっており、特にSK22の西端付近で急激にその傾斜を大きくして、C点へと至る。また、図上では、C地点で地表面が異様に高くなっているが、これは、トレンチの南辺に沿って作られた東西方向の土手を調査トレンチが分断したため、S



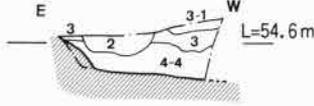
第83図 3・4トレンチ南壁土層柱状図

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 暗褐色土 | 5. 淡黄茶色土 |
| 2. 黄色混淡黄灰色土 | 6. 黄褐色砂混じり土 |
| 3. 淡灰色混茶褐色土 | 7. 黄褐色土(地山) |
| 4. 淡茶褐色土 | |

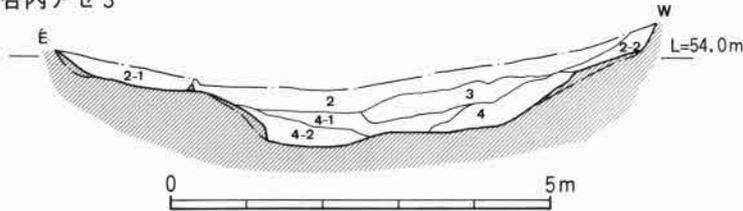
谷内アゼ1



谷内アゼ2

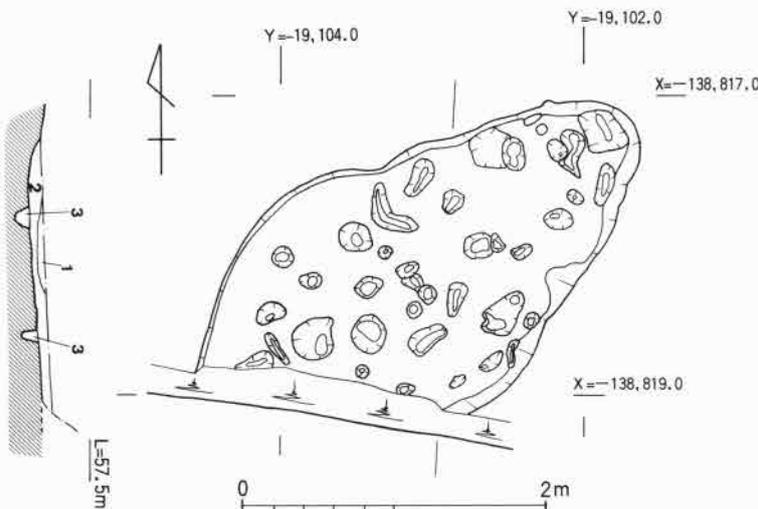


谷内アゼ3



第84図 谷内土層実測図

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. 淡黄褐色土(やわらかい) | 4. 淡黄褐色土 |
| 2. 淡黄茶色土 | 4-1. 茶色混礫黄褐色土 |
| 2-1. 淡茶灰色土 | 4-2. 淡黄灰色砂 |
| 2-2. 褐色礫混まじり砂(硬い) | 4-3. 黄色混じり茶褐色土 |
| 3. 暗茶褐色土 | 4-4. 灰色混じり |
| 3-1. 淡茶褐色土 | |



第85図 SK18実測図

- | | | |
|----------|--------------|---------|
| 1. 暗茶褐色土 | 2. 淡茶褐色混黄茶色土 | 3. 黄茶色土 |
|----------|--------------|---------|

K22の西端付近より西でこの土手は高く盛り上げられていたからである。土層図では、第1層から第4層が土手の盛り土に当たり、それ以前の堆積層のレベル(第5層の上面)を見ると、ほぼ地山面の傾斜と合致している。第79図で現地形にトレンチの配置を記した図に現れているように、点Aのあたりが最も高く、拡張区の西半部は谷筋に位置し、点Cが最も低い位置にあることと合致する。

この調査区の平坦面では、土坑や溝など多くの遺構を検出した。近代～現代のものと判断される

地境溝や奈良時代の土坑、弥生時代の土壇墓・土坑・溝などを検出した。

谷・流路SR01(第84図・図

版第56-3) 3トレンチおよびその南側の拡張部分にあたる。

谷内の堆積土は大きく4層に分かれ、上から、淡黄褐色土(や

わらかい)―淡黄茶色土―暗褐色土―淡黄褐色土となってい

る。最も上位に位置する淡黄褐色土(やわらかい)には染付の破片や土師器皿(第87図1)が含ま

れている。2トレンチの状況より、近世以後に谷部を盛り土した際の整地土と推定される。その

下位の淡黄茶色土には平瓦(第91図69～第92図77)が混じり、奈良時代の堆積土層と判断

される。暗褐色土層には弥生時代中期の土器が多く混じり、この土層を除去すると、斜面を下

る溝状の地形が検出され、その内部からも多くの弥生土器片が出土した。谷内部に流れ込む雨

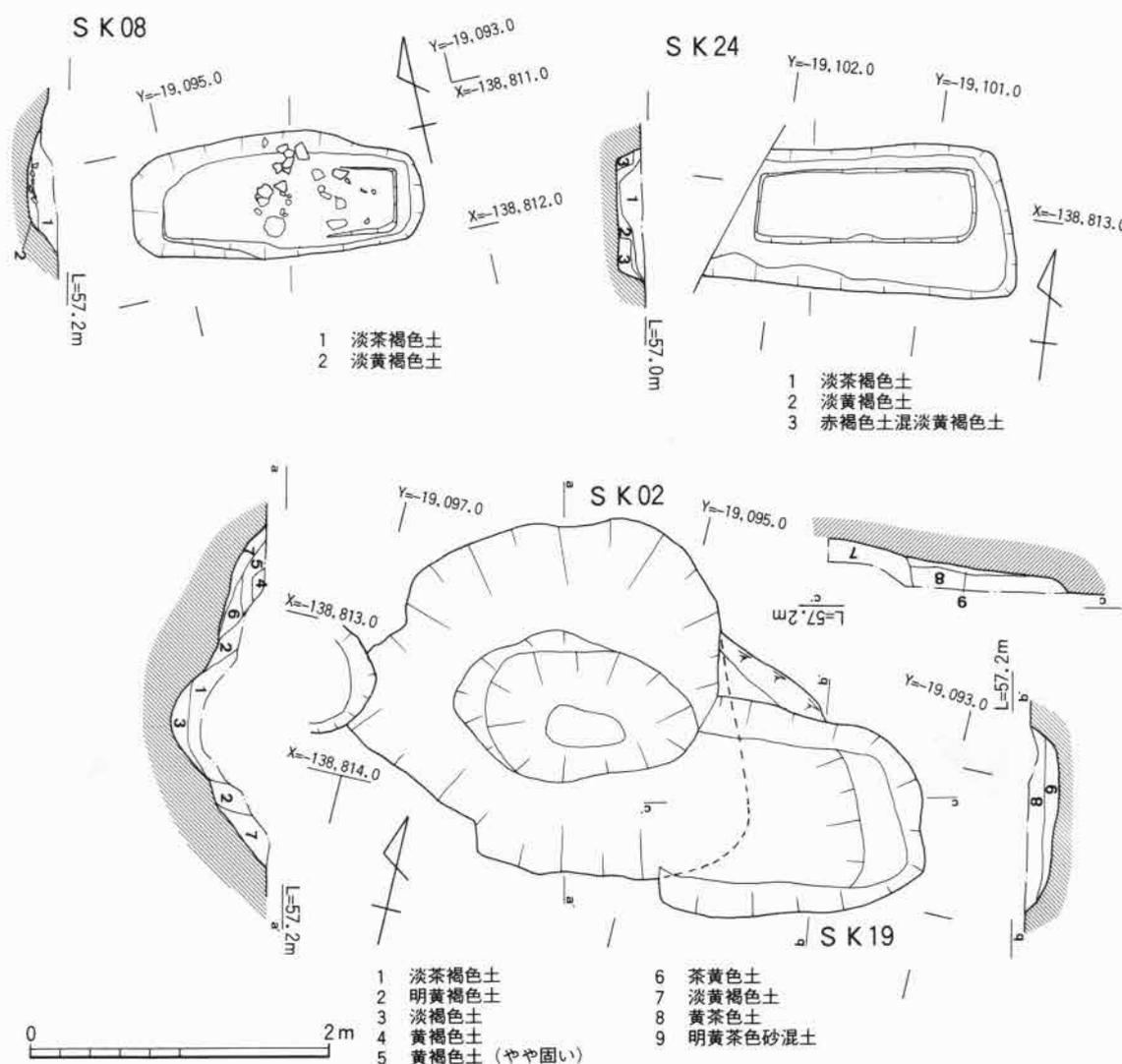
水により抉られた小流路と判断される。

区画S X 09 東南隅で検出した4.5×2.5m、検出高約20cmで底面が平坦な落ち込みである。埋土からは、弥生土器に混じって近世・現代の陶磁器片が出土している。現況ではこの東の斜面に畑地が作られており、それらに連なって作られた畑の区画の一部と判断される。

地境溝S D 06・10・11 トレンチの東半で検出した東西・南北方向の溝で、現地表面でもかすかな痕跡が判断できる。出土遺物には、弥生土器の他に、近世陶磁器・瓦片・ガラス片・土師器が出土しており(第87図2)、近世以後の地境溝と判断される。S D 06・11の中央部やS D 10は、重なって数条の溝を検出しており、同じ位置で何度も掘り直している。検出した深さは、最深部で約30cmである。S D 06が北に屈曲する北東部には、幅30~50cm程度の小溝を5条検出した。この溝からは、羽釜と判断される瓦質の小片や近世陶磁器片が出土している。

土坑S K 05 調査地の北東部で検出した不定形の土坑で、2.2×2.4m、検出高約20cmである。内部からは近世陶磁器片が数点出土している。

土壌墓S K 08(第86図・図版第57-(3)) 平面形は、長辺1.9m・短辺1.1mの長方形を呈し、深



第86図 土坑・土壌墓実測図

さは、約20cmを測る。土壌の東半部では、弥生土器の甕の破片を検出した(第89図32・37・40)。形状や規模から、弥生時代の土壌墓あるいは木棺墓と推定される。

土坑S K 02(第86図・図版第57-(1)) 土坑S K 03や土坑S K 09と重複している土坑で、内部から奈良時代の須恵器杯身(第87図4)が、完形で出土している。

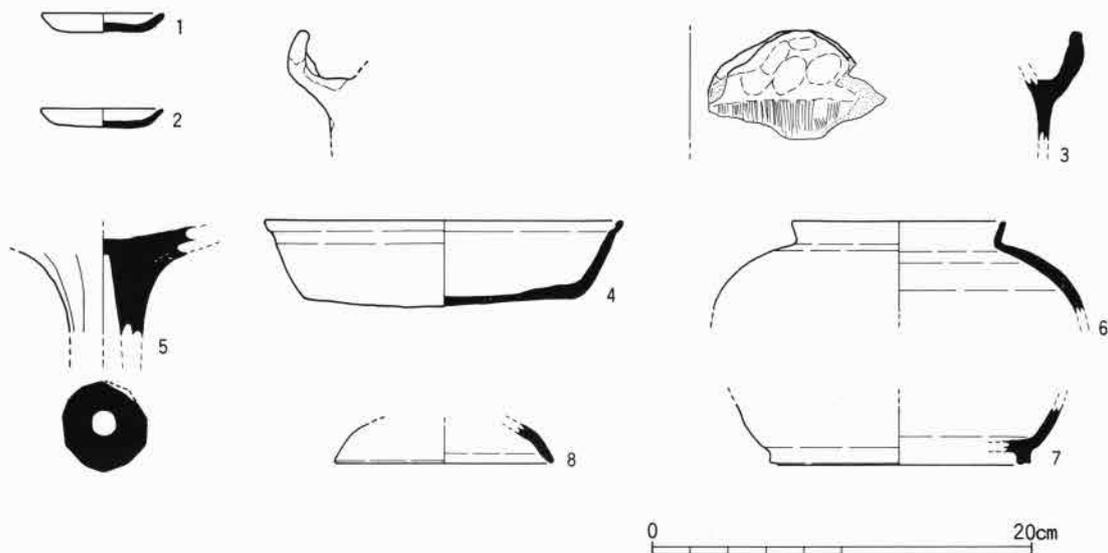
不明土坑S K 18(第85図・図版第58-(2)) 昭和59・60年度の調査でも同様の遺構が確認されている。平面形は不定形な形状をなしており、底面では多くの小ピットを検出した。その用途などは不明である。検出長は3.2mで、最大幅2.0m、検出高は10~15cmである。第90図59の壺・甕の底部や甕の口縁部などの弥生土器片が出土している。

溝状土坑S K 22(図版第58-(1)) 現代の地境溝によって分断されているが、13×3 m程度の溝状を呈する不定形な土坑で、内部からは弥生土器片とともに奈良時代と判断される須恵器が出土している。坑の掘り方はなだらかに落ち込んでおり、検出高は最深部で約40cmを測る。

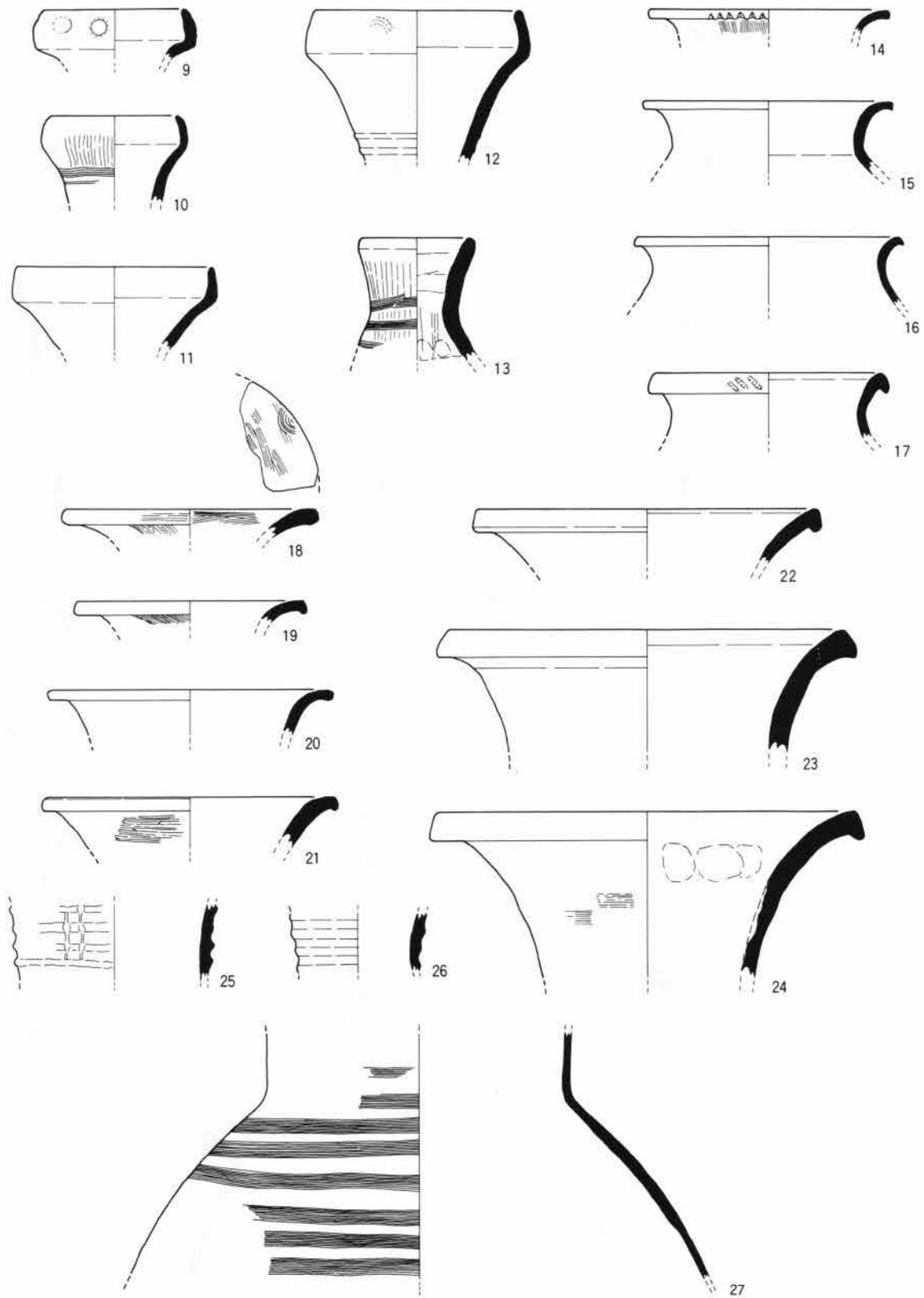
木棺墓S K 24(第86図・図版第57-(2)) 土坑内に木棺を取めたと推定されるが、遺物が全く出土しておらず、その時代は不明である。長辺2.1m以上×短辺1.0m、検出高は約20cmである。

段状遺構S D 23(図版第59-(1)・(2)) 谷部の斜面地に、等高線に沿って掘削された溝状の遺構で、斜面を高さ40cm程度にカットした段状を呈し、底面が平らになるように掘削されている。全長8.5mにわたって検出した。底面は幅40~60cmの平坦面をなしている。内部からは、弥生土器の小片が出土している。その性格は不明であるが、形状から人工的なものであることは間違いなく、“通路”的なものとも推測される。

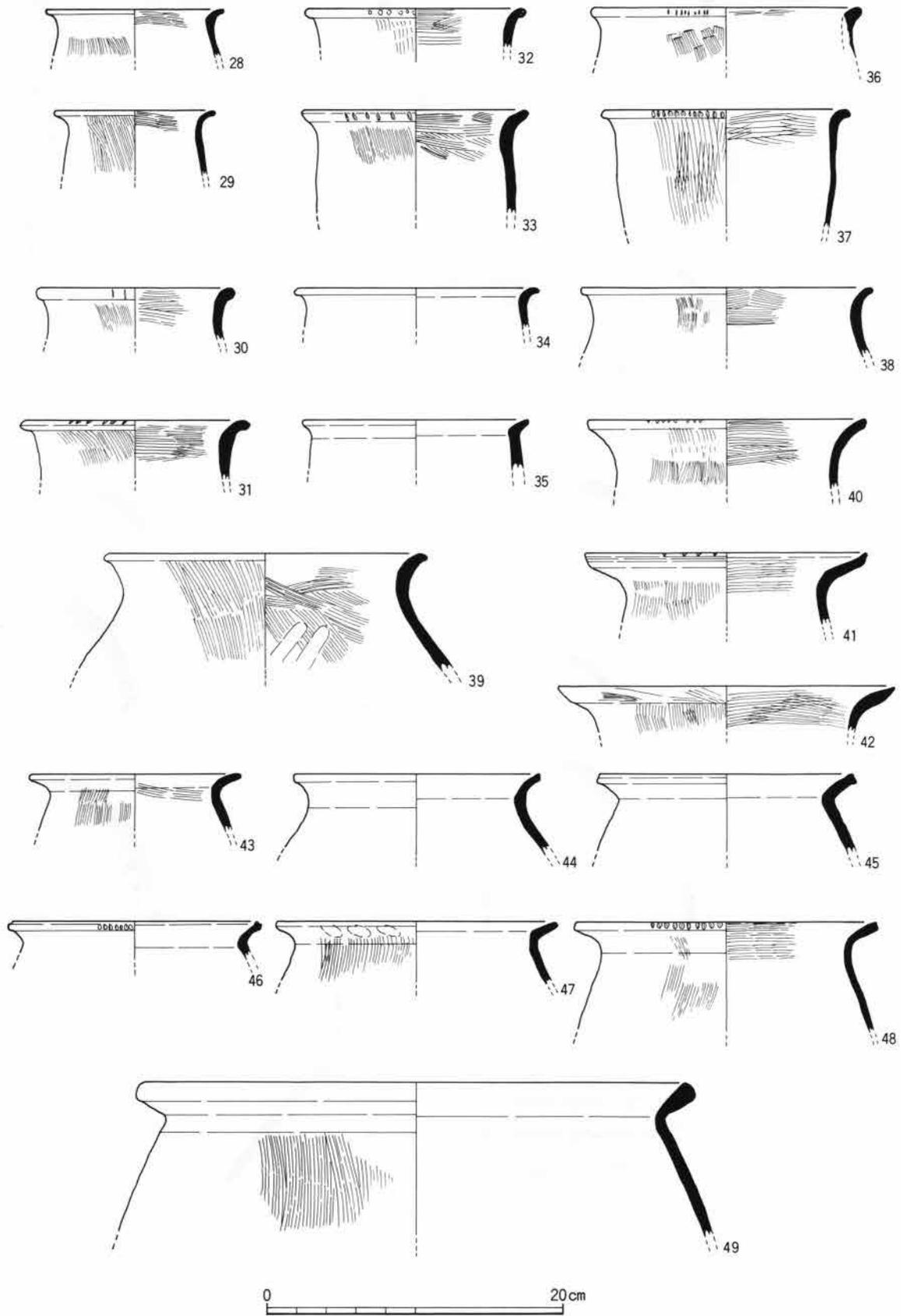
その他、調査地の西南部で、S K 25~28の不定形の土坑を検出したが、弥生土器の小片をわずかに含むだけで、その性格等は不明である。また、北東部のS K 17・19・24の周辺で検出した径1 m程度の円形を呈する土坑は、検出高が約10cm程度と浅いことや、遺物を含まないこと、現地表面から検出面までが浅いことなどから、竹等の抜根痕跡と考えられる。



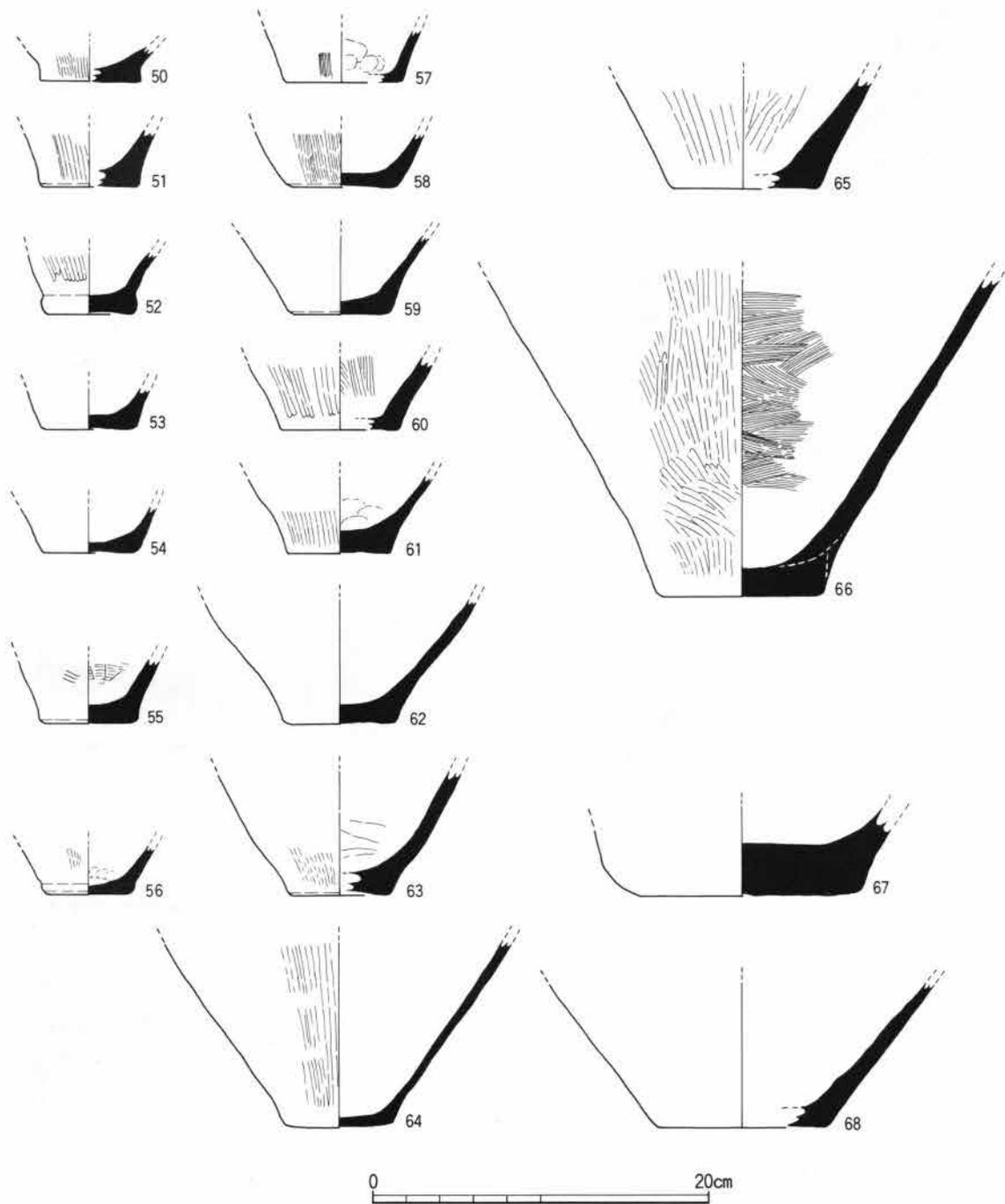
第87図 3・4トレンチ出土遺物実測図(1)



第88図 3・4トレンチ出土遺物実測図(2)



第89図 3・4トレンチ出土遺物実測図(3)

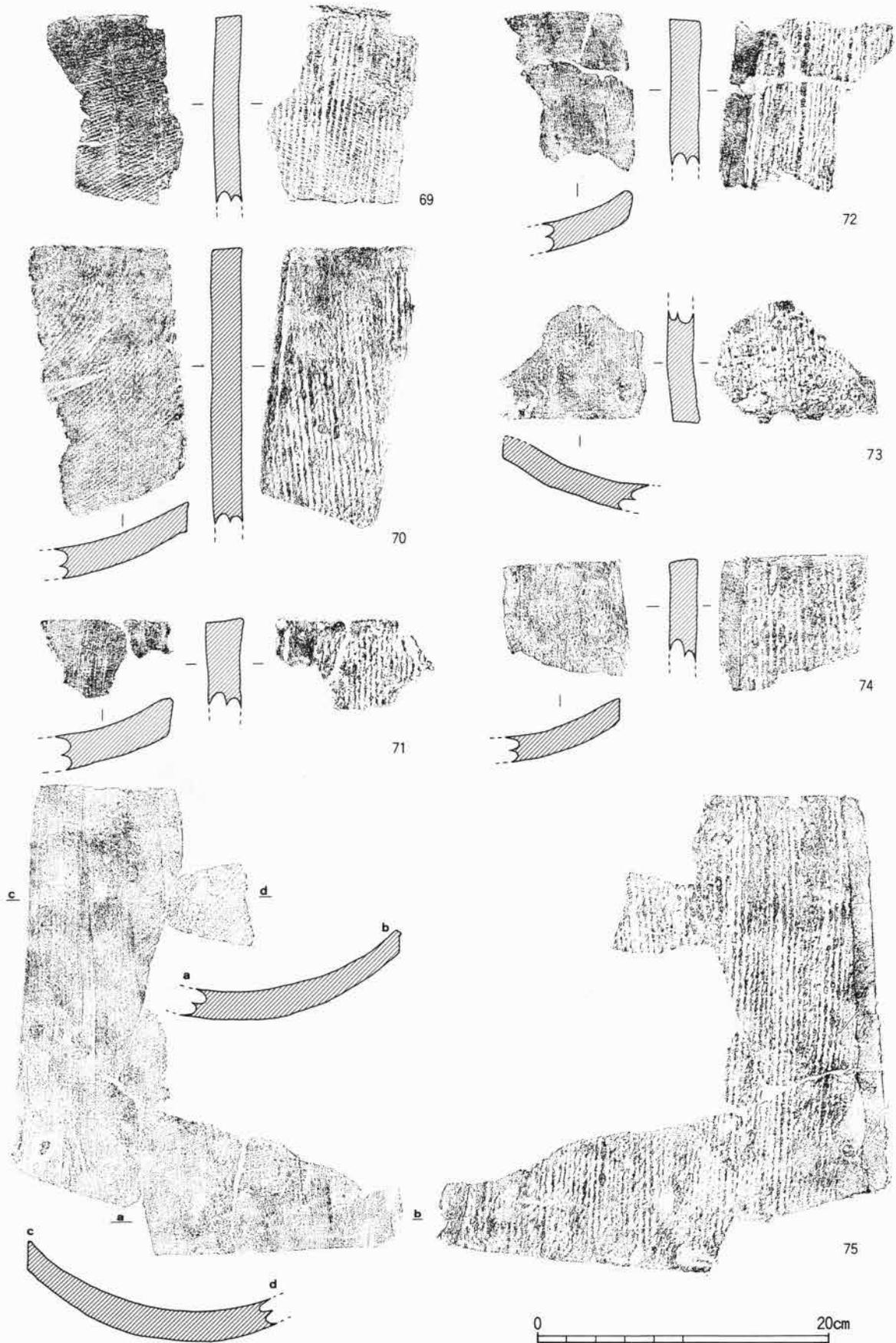


第90図 3・4トレンチ出土遺物実測図(4)

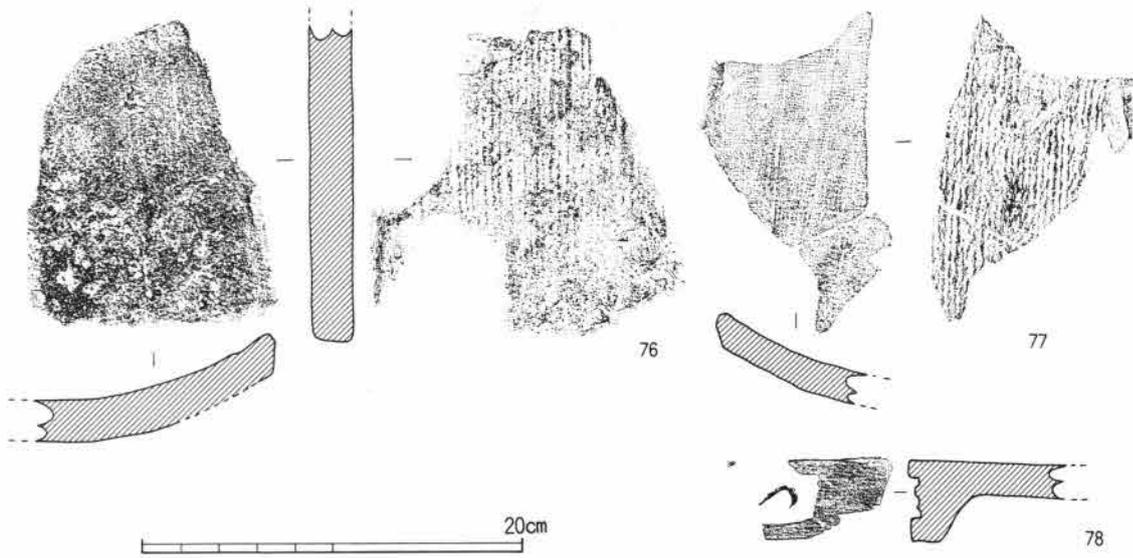
(3) 出土遺物(第87~94図・図版第60)

出土遺物は主として、3トレンチと4トレンチの拡張部——谷部の斜面地から出土した。ここからは、整理用のコンテナで、約10箱分の土器や瓦が出土している。これらの土器片は、丘陵の上に住まう人がごみとして谷部に捨てたものと考えられ、完形に近いものは全く認められなかった。また、3・4トレンチの平坦面で検出した各遺構からは、主として奈良時代と弥生時代の土器片が出土しているが、その絶対量は少ない。

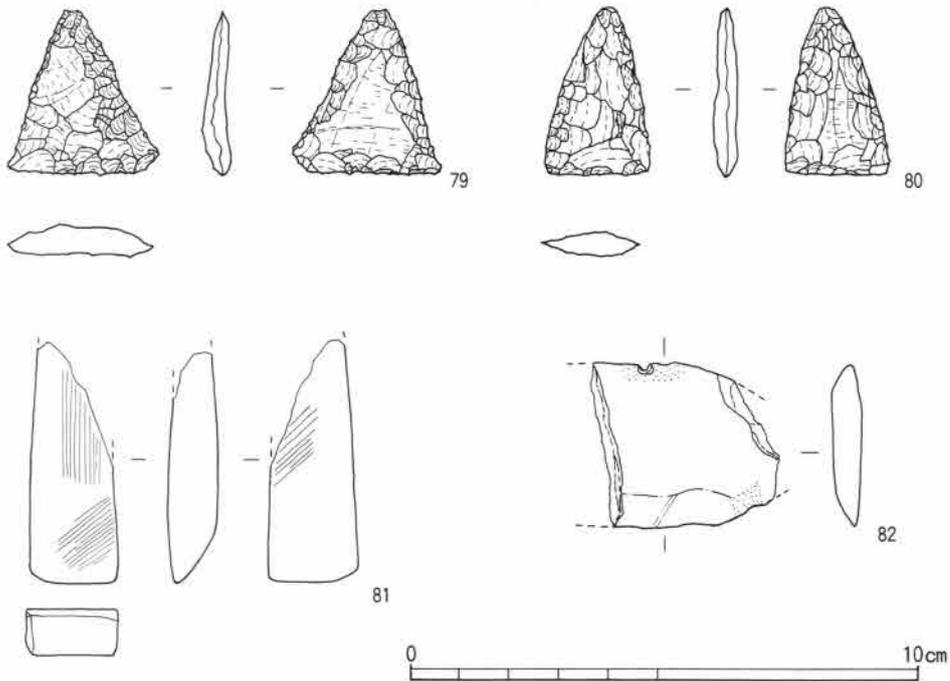
第87図は、3・4トレンチの弥生時代以外の遺構から出土した遺物の実測図である。1・2は、



第91図 3・4トレンチ出土遺物実測図(5)



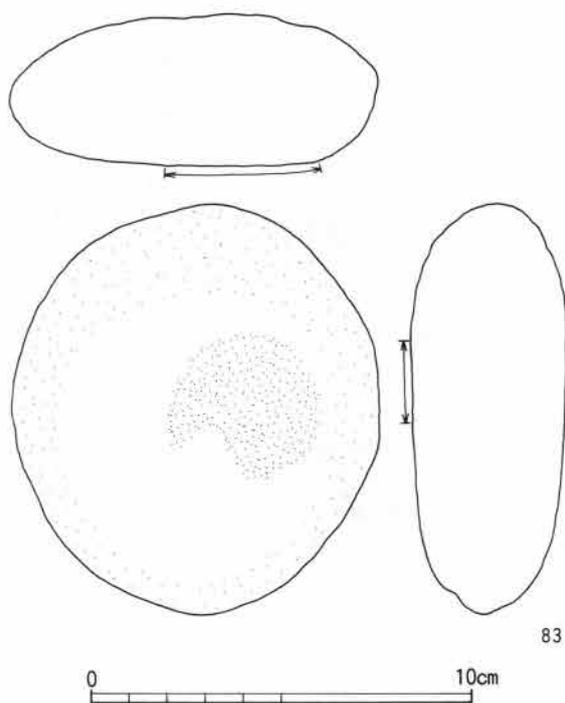
第92図 3・4トレンチ出土遺物実測図(6)



第93図 3・4トレンチ出土遺物実測図(7)

土師器皿で、1は谷部の淡黄褐色土内、2は地境溝S D06の掘削土中から出土した。3・5・6は谷部の淡黄茶色土から出土しており、第91・92図69～77の瓦片も谷内の上部でのこの層に対応する土層から出土している。8も谷内の埋土から出土したが、今回の調査で確認できた唯一の古墳時代の遺物である。4は、土坑S K02出土の杯身で、土坑底に置かれた状態で出土した。

第88～90図は弥生土器で、第88図は壺形土器である。すべて3・4トレンチ拡張区にあたる谷内の堆積土中から出土している。9～12は、受け口状の口縁を有し、いわゆる「伊勢湾系」の土器である。25・26は頸部で、ともに貼付突帯が施されており、25には縦方向の棒状浮文が施文されている。第89図は甕形土器の実測図である。37・40がS K08から出土した他は、すべて谷内の



第94図 3・4トレンチ出土遺物実測図(8)

堆積土から出土した。40～42は近江型甕と判断されるものである。28～39、43～48は、外面タテハケ、内面ヨコハケの、いわゆる大和型甕の範疇で捉えられるもので、43～48は口縁部と体部の屈曲が強いもので、28～39はそれが弱いものである。

第90図は弥生土器の壺・甕の底部である。底部のみでは厳密に壺と甕を分類しがたいので、一括して掲載してある。59がS K18から出土した他は、すべて谷内斜面の埋土中から出土した。底部の径の大きさにより、小型4.5～6.0cm(50～56)、中型6.0～7.0cm(57～64)、大型9.0～10.0cm(65・66)、特大10.0～11.3cm(67・68)に四大別できる。

第91・92図は瓦の断面実測と拓本である。布目瓦はすべて、谷部の淡黄茶色土層から出土している。

93・94図は石器の実測図で、79・80が石鏃、81が石斧、82が石包丁、83が凹み石である。すべて谷内の堆積土から出土した。

3. ま と め

今回の調査では、平坦部で弥生時代の土坑、奈良時代の遺物を含む土坑、近世以降の地境溝を確認したが、墓と推定されるS K08や地境溝を除き、その性格はよく分からない。谷部では弥生土器や瓦などが多く出土し、丘陵の上に住まう人々が、この谷にごみを廃棄したものと推測される。また、谷部の丘陵斜面には、水平方向に段状の溝を確認したが、その用途は不明である。

以上のように、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡といった遺構は検出できなかったが、これは今回の調査地は、畑ノ前遺跡の所在する台地の縁辺部に位置したために、集落の中心からははずれていたためと考えられる。

(岩松 保)

この調査の参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)

調査補助員 澤井亮祐・山口良太・坂手華子・竹村広美

整理員 山中道代・関野雅子

参考文献 『精華町史』本文篇 精華町 1996

『精華町史』史料篇I 精華町 1989

『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書——煤谷川窯址・畑ノ前遺跡——』 精華町教育委員会・(財)古代学協会 1987

付表1 畑ノ前遺跡3・4トレンチ出土土器観察表(※は復原径あるいは現存高)

| 番号 | 種別 | 器形 | 口径 | 器高 | 調整(外) | 調整(内) | 焼成 | 胎土 | 色調 | 残存率 | 備考 | 出土層位 |
|----|----|------|----------|-------|-------|---------|-----|-----|------|--------|----------|----------------|
| 1 | 土師 | 皿 | 6.5 | 1.0 | ナデ | ナデ | 良 | 密 | 淡茶褐色 | 全体1/3 | | 谷内 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |
| 2 | 土師 | 皿 | 6.4 | 1.1 | ナデ | ナデ | 良 | 密 | 淡茶褐色 | ほぼ完存 | 口縁部スス附着 | 地境溝 S D06 |
| 3 | 土師 | 甕 | ※37.0 | ※5.7 | タテハケ | ユビオサエ | 良 | 密 | 淡茶褐色 | — | | 谷内 淡黄茶色土 |
| 4 | 土師 | 杯 | 18.8 | 4.6 | ロクロナデ | ロクロナデ | 良 | 密 | 淡灰褐色 | 全体95% | | S K02 |
| 5 | 土師 | 高杯柱部 | — | ※5.8 | 磨き | — | 良 | 密 | 赤褐色 | — | | 谷内 淡黄茶色土 |
| 6 | 須恵 | 壺 | ※11.2 | ※4.8 | ロクロナデ | ロクロナデ | 良 | 密 | 淡青灰色 | 口縁1/4 | | 谷内 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |
| 7 | 須恵 | 壺底部 | ※13.8 | ※3.3 | ロクロナデ | ロクロナデ | 良 | 密 | 淡青灰色 | 高台1/6 | | 南辺部精査中 |
| 8 | 須恵 | 杯蓋 | ※11.4 | ※2.1 | ロクロナデ | ロクロナデ | 良 | やや粗 | 青灰色 | 口縁1/16 | | 谷内 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |
| 9 | 弥生 | 壺 | ※9.0 | ※3.3 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 淡明褐色 | 口縁1/8 | 円形浮文 | 谷内 淡黄茶色土 |
| 10 | 弥生 | 壺 | ※8.4 | ※5.8 | 磨き | 磨減 | 良 | やや粗 | 淡明褐色 | 口縁1/4 | 櫛描文 | 谷内 暗褐色土 |
| 11 | 弥生 | 壺 | ※12.8 | ※5.5 | 磨減 | 磨減 | やや軟 | やや粗 | 淡明褐色 | 口縁1/12 | | 谷内 暗褐色土 |
| 12 | 弥生 | 壺 | ※13.5 | ※9.9 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 黄褐色 | 口縁1/8 | 貼付突帯・扇形文 | 谷内 灰色混淡黄褐色土 |
| 13 | 弥生 | 壺 | 7.0 | ※8.1 | 磨き | ナデ | 良 | 密 | 黄褐色 | 口縁完存 | 櫛描文 | 谷内 暗褐色土 |
| 14 | 弥生 | 壺 | ※15.8 | ※1.5 | ハケ | 磨減 | 良 | 密 | 暗黄褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 暗褐色土 |
| 15 | 弥生 | 壺 | ※16.3 | ※5.0 | 磨減 | 磨減 | 良 | 粗 | 淡明褐色 | 口縁1/5 | | 谷内 暗褐色土 |
| 16 | 弥生 | 壺 | ※17.2 | ※4.4 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 黒褐色 | 口縁1/6 | | 谷内 暗褐色土 |
| 17 | 弥生 | 壺 | ※14.8 | ※4.6 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 淡赤褐色 | 口縁1/8 | 列点文 | 谷内 暗褐色土 |
| 18 | 弥生 | 壺 | ※16.3 | ※1.9 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | やや粗 | 淡褐色 | 口縁1/3 | 扇形文 | 谷内 暗褐色土 |
| 19 | 弥生 | 壺 | ※14.8 | ※1.5 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 濃褐色 | 口縁1/5 | | 谷内 暗褐色土 |
| 20 | 弥生 | 壺 | ※18.4 | ※3.4 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 灰白色 | 口縁1/5 | | 谷内 淡黄褐色土 |
| 21 | 弥生 | 壺 | ※18.6 | ※3.4 | 磨き | 磨減か | 良 | やや粗 | 淡黄褐色 | 口縁1/4 | | 谷内 暗褐色土 |
| 22 | 弥生 | 壺 | ※22.2 | ※3.6 | 磨減 | 磨減 | 良 | 密 | 濃褐色 | 口縁1/6 | | 谷内 暗褐色土 |
| 23 | 弥生 | 壺 | ※26.0 | ※8.2 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 淡茶褐色 | 口縁1/3 | 生駒西麓 | 谷内 暗褐色土 |
| 24 | 弥生 | 壺 | ※27.3 | ※11.0 | 磨減 | 磨減オサエ | 良 | 密 | 暗茶褐色 | 口縁1/8 | 櫛描文・生駒西麓 | 谷内 暗褐色土 |
| 25 | 弥生 | 壺頸部 | ※6.2~6.8 | ※5.0 | 磨減 | 磨減 | 良 | 密 | 黒褐色 | 径1/6 | 貼付突帯棒状浮文 | 谷内 暗褐色土 |
| 26 | 弥生 | 壺頸部 | ※7.8 | ※3.8 | 磨減 | 磨減 | 良 | 密 | 赤褐色 | 径1/8 | 貼付突帯 | 谷内 暗褐色土 |
| 27 | 弥生 | 壺頸部 | 頸部※20 | ※16.3 | ナデ | ナデ | 良 | 密 | 茶褐色 | 頸1/4 | 櫛描文 | 谷内 暗褐色土 |
| 28 | 弥生 | 甕 | ※12.0 | ※3.3 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 暗赤褐色 | 口縁1/6 | 外面スス | 谷内 暗褐色土 |
| 29 | 弥生 | 甕 | ※10.8 | ※4.3 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 暗茶褐色 | 口縁1/4 | | 谷内 暗褐色土 |
| 30 | 弥生 | 甕 | ※13.0 | ※3.5 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | やや粗 | 暗黄褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 暗褐色土 |
| 31 | 弥生 | 甕 | ※14.8 | ※3.9 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 口縁1/4 | | 谷内 淡茶褐色土 |
| 32 | 弥生 | 甕 | ※14.4 | ※2.7 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 暗褐色 | 口縁1/14 | 刺突文 | S K08 |
| 33 | 弥生 | 甕 | ※15.0 | ※6.9 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 暗黄褐色 | 口縁1/4 | | 谷内 淡茶褐色土 |
| 34 | 弥生 | 甕 | ※16.2 | ※2.7 | 磨減 | 磨減 | 良 | やや粗 | 暗赤褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 暗褐色土 |
| 35 | 弥生 | 甕 | ※15.2 | ※3.3 | 磨減 | ナデ | 良 | 密 | 黒褐色 | 口縁1/10 | | 谷内 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |
| 36 | 弥生 | 甕 | ※18.2 | ※3.3 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 淡褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 暗褐色土 |
| 37 | 弥生 | 甕 | ※16.4 | ※7.9 | タテハケ | ヨコハケ+ナデ | 良 | 密 | 暗黄褐色 | 口縁1/3 | 外面スス附着 | S K08 |
| 38 | 弥生 | 甕 | ※20.0 | ※4.8 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | やや粗 | 淡褐色 | 口縁1/5 | | 谷内 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|-----------|-------|-------|--------------|------|-----|-----|--------------|-----------|------------|-------|-------------|
| 39 | 弥生 | 甕 | ※21.2 | ※8.0 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 頸1/4 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 40 | 弥生 | 甕 | ※18.8 | ※4.7 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 暗黄褐色 | 口縁1/5 | | S K08 | |
| 41 | 弥生 | 甕 | ※19.0 | ※5.0 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 頸1/4 | 外面スス | 谷内 | 暗褐色土 |
| 42 | 弥生 | 甕 | ※22.8 | ※3.2 | タテハケ ヨコハケ | ヨコハケ | 良 | やや粗 | 淡褐色 | 口縁1/6 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 43 | 弥生 | 甕 | ※14.2 | ※4.0 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | やや粗 | 淡灰褐色 | 頸1/5 | 外面スス | 谷部 | 淡黄褐色土・淡黄灰色砂 |
| 44 | 弥生 | 甕 | ※17.0 | ※5.7 | 磨減 | 磨減 | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 45 | 弥生 | 甕 | ※17.2 | ※5.6 | 磨減 | 磨減 | やや軟 | やや粗 | 淡黄褐色 | 口縁1/6 | | 谷部 | 淡黄褐色土・淡黄灰色砂 |
| 46 | 弥生 | 甕 | ※16.7 | ※2.7 | ナデ | ナデ | 良 | 密 | 明褐色 | 口縁1/8 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 47 | 弥生 | 甕 | ※19.0 | ※4.2 | タテハケ | ヨコナデ | 良 | やや粗 | 淡灰褐色 | 口縁1/4 | | 谷内 | 淡黄褐色土・淡黄褐色砂 |
| 48 | 弥生 | 甕 | ※20.4 | ※7.4 | タテハケ | ヨコハケ | 良 | 密 | 淡褐色 | 口縁1/3 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 49 | 弥生 | 甕 | ※36.6 | ※10.6 | タテハケ | 磨減 | 良 | 密 | 淡赤褐色 | 頸1/12 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 50 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※5.8 | ※2.2 | ハケ | ナデ | 良 | やや粗 | 淡褐色～ 黒褐色 | 底1/2 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 51 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 5.6 | ※3.5 | ハケ | ナデ | 良 | やや粗 | 淡褐色 | 底1/3 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 52 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 5.0 | ※3.7 | 磨き | ナデ | 良 | やや粗 | 淡黄褐色 | 底完存 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 53 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 5.0 | ※2.5 | ナデ | ナデ | 良 | 粗 | 淡茶褐色 | 底ほぼ完 存 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 54 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 5.2 | ※2.7 | 磨減 | ナデ | 良 | 粗 | 淡褐色～ 黒褐色 | 底3/4 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 55 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※6.0 | ※3.9 | ハケ | ハケ | 良 | 粗 | 濃赤褐色 | 底4/5 | 外面二次 焼成 | 谷内 | 暗褐色土 |
| 56 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※4.5 | ※2.9 | ハケ | ナデ | 良 | 密 | 淡茶褐色 ～黒褐色 | 底1/2 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 57 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※6.7 | ※3.2 | ハケ | 磨減 | 良 | 密 | 淡赤褐色 ～黒褐色 | 底1/2 | | 谷内 | 淡黄褐色土・淡黄褐色砂 |
| 58 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 6.0 | ※3.3 | タテハケ | ナデ | 良 | 密 | 黄褐色 | 底ほぼ完 存 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 59 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 6.0 | ※4.7 | 磨減 | 磨減 | 良 | 粗 | 茶褐色 | 底ほぼ完 存 | | S K18 | |
| 60 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※7.0 | ※4.5 | 磨き | タテハケ | 良 | 密 | 灰褐色 | 底1/2 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 61 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 6.0 | ※4.6 | ハケ | ナデ | 良 | やや粗 | 暗黄褐色 | 底完存 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 62 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※7.0 | ※7.6 | 磨減 | 磨減 | 良 | 密 | 赤褐色 | 底完存 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 63 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※6.0 | ※7.4 | ハケ | ナデ | 良 | 密 | 淡褐色 | 底1/2 | | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 64 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※6.5 | ※11.3 | 磨き | 磨減 | 良 | やや粗 | 暗褐色 | 底1/4 | 内面スス 付着 | 谷内 | 暗褐色土 |
| 65 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※9.0 | ※6.7 | 磨き | 磨き | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 底1/3 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 66 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 10.0 | ※19.0 | ハケ+磨 き | ハケ | 良 | 密 | 淡黄褐色 | 底完存 | | 谷内 | 暗褐色土 |
| 67 | 弥生 | 壺・甕 底部 | 11.3 | ※5.3 | 磨減 | 磨減 | 良 | 粗 | 淡黄褐色 | 底完存 | | 谷内 | 淡黄褐色土・淡茶褐色土 |
| 68 | 弥生 | 壺・甕 底部 | ※10.0 | ※9.7 | 磨減 | 磨減 | やや軟 | やや粗 | 淡黄褐色 | 底1/4 | | 谷内 | 暗褐色土・淡黄褐色土 |

付表2 畑ノ前遺跡3・4トレンチ出土瓦類・石器観察表

| | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------|----|--------------|----|-----|-------|----|-----------|
| 69～77 | 平瓦 | | 谷内 | 淡黄茶色土 | 81 | 石斧 | 粘板岩 | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 78 | 軒平瓦 | | 谷内 | 淡黄褐色土(やわらかい) | 82 | 石包丁 | 片岩か砂岩 | 谷内 | 淡黄褐色～茶褐色土 |
| 79 | 石鏃 | サヌカイト | 谷内 | 淡黄褐色土 | 83 | 叩き石 | 砂岩 | 谷内 | 淡茶褐色土 |
| 80 | 石鏃 | サヌカイト | 谷内 | 淡黄褐色土・淡黄褐色砂 | | | | | |

圖 版

図版第1 森垣外遺跡第2次



(1)調査地遠景（空中写真、南から）



(2)調査地遠景（空中写真、南西から）

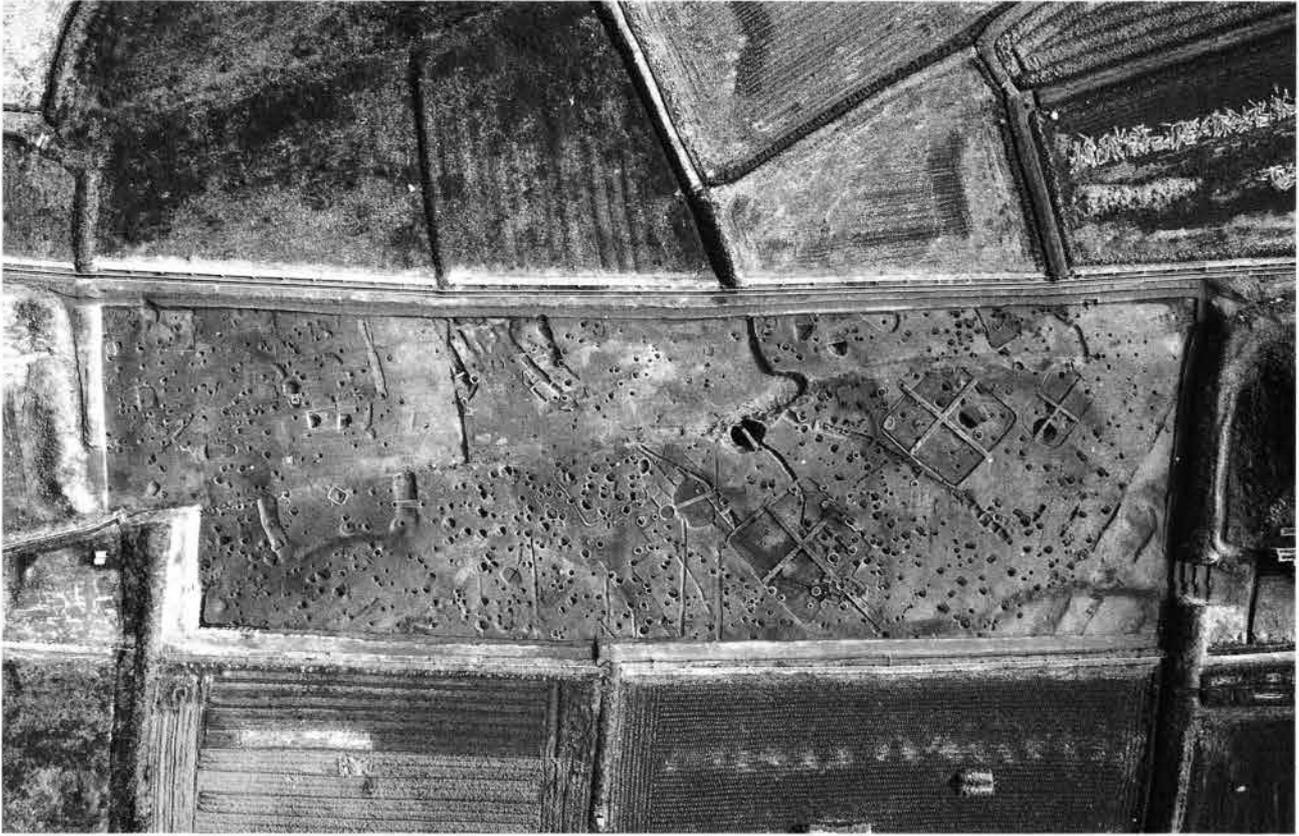
図版第2 森垣外遺跡第2次



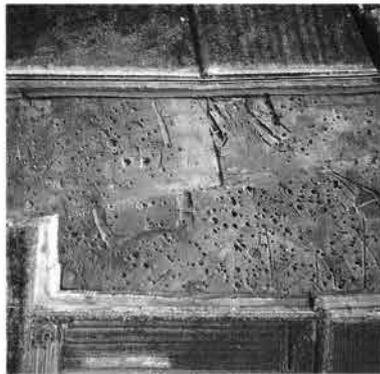
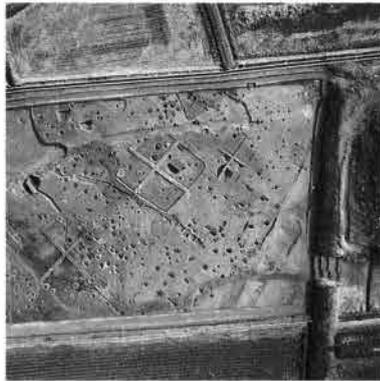
(1)調査地遠景（空中写真、東から）



(2)調査地遠景（空中写真、西から）

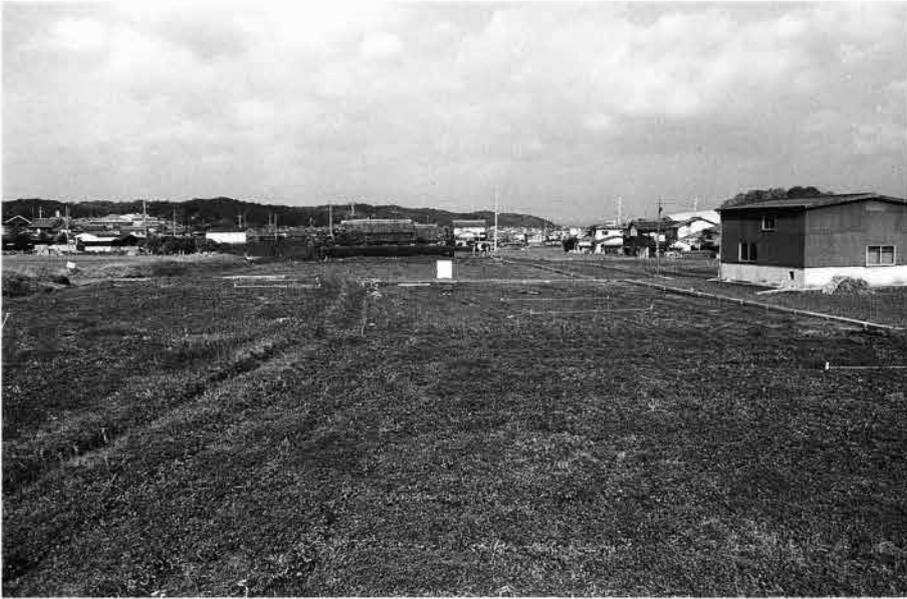


(1)調査地全景（空中写真、上方が東）



(2)検出遺構立体視画

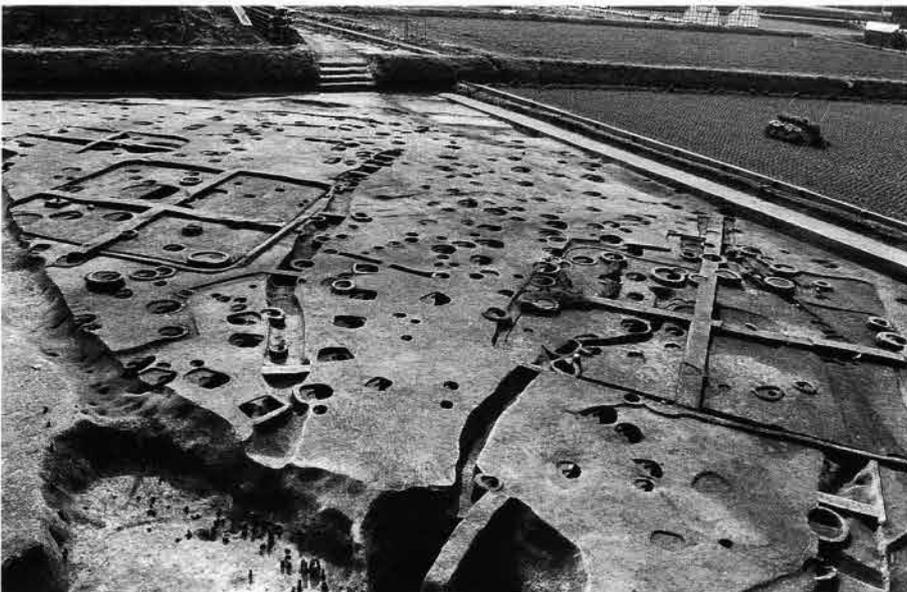
図版第4 森垣外遺跡第2次



(1)調査地全景（西から）



(2)調査地南半全景（北東から）



(3)調査地南半全景（北東から）



(1)方墳10完掘状況(南東から)



(2)方墳10西辺南壁土層堆積状況
(北から)



(3)方墳10北辺東壁土師器出土状況
(西から)

図版第6 森垣外遺跡第2次



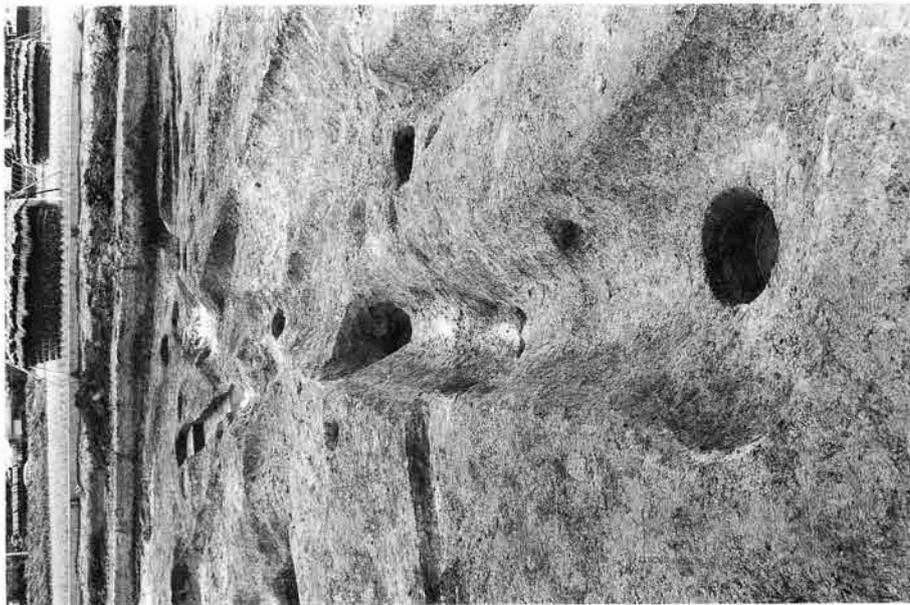
(1)大壁住居跡639完掘状況
(南から)



(2)大壁住居跡639
北辺柱穴完掘状況(東から)



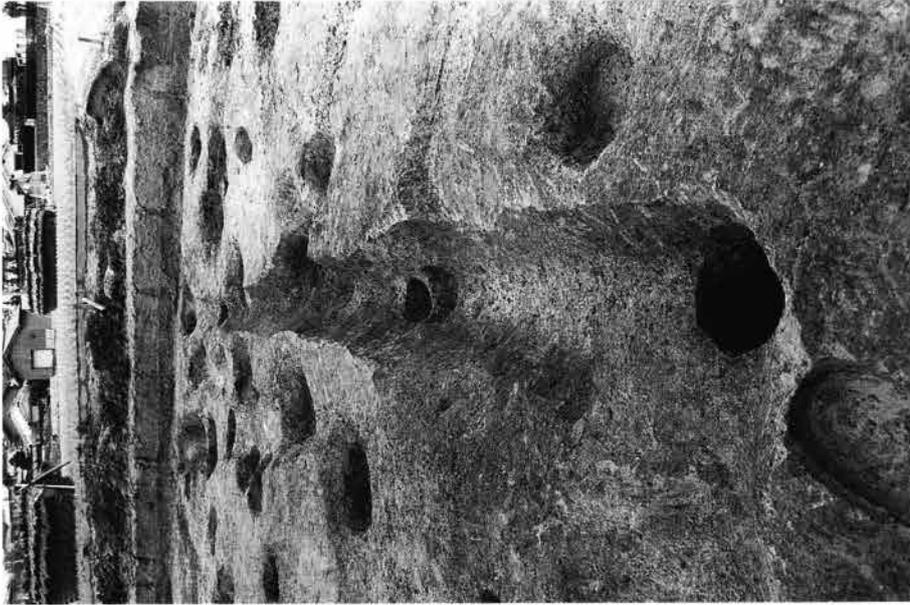
(3)大壁住居跡639
北東隅柱穴完掘状況(南西から)



(1)大壁住居跡639
南辺柱穴完掘状況（東から）

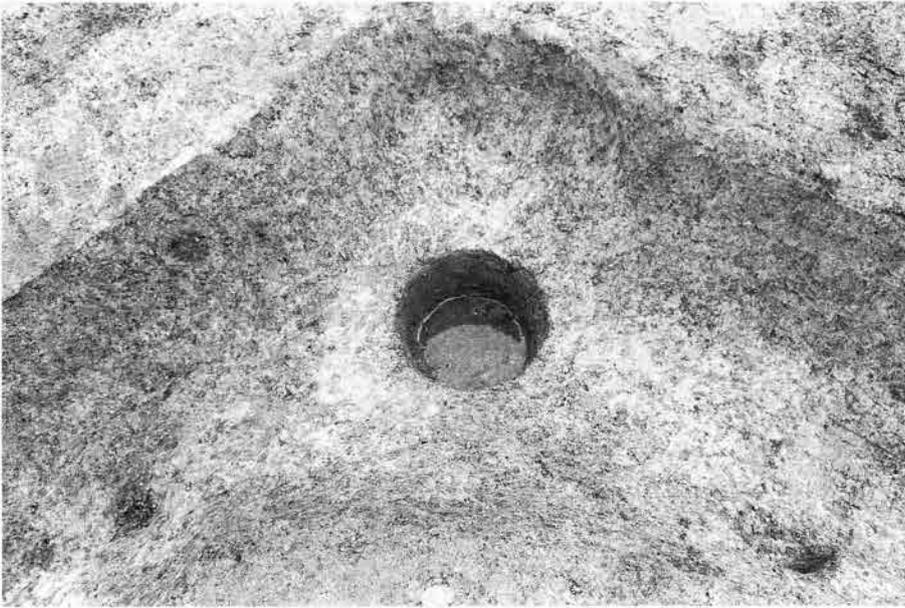


(2)大壁住居跡639
北辺柱穴完掘状況（西から）



(3)大壁住居跡639
北辺柱穴完掘状況（東から）

図版第8 森垣外遺跡第2次



(1)大壁住居跡639
南東隅柱穴完掘状況（北西から）



(2)大壁住居跡639
北東隅柱穴完掘状況（南西から）



(3)大壁住居跡639
北東隅西側柱穴完掘状況
（南から）



(1)土坑204土層堆積状況
(北西から)



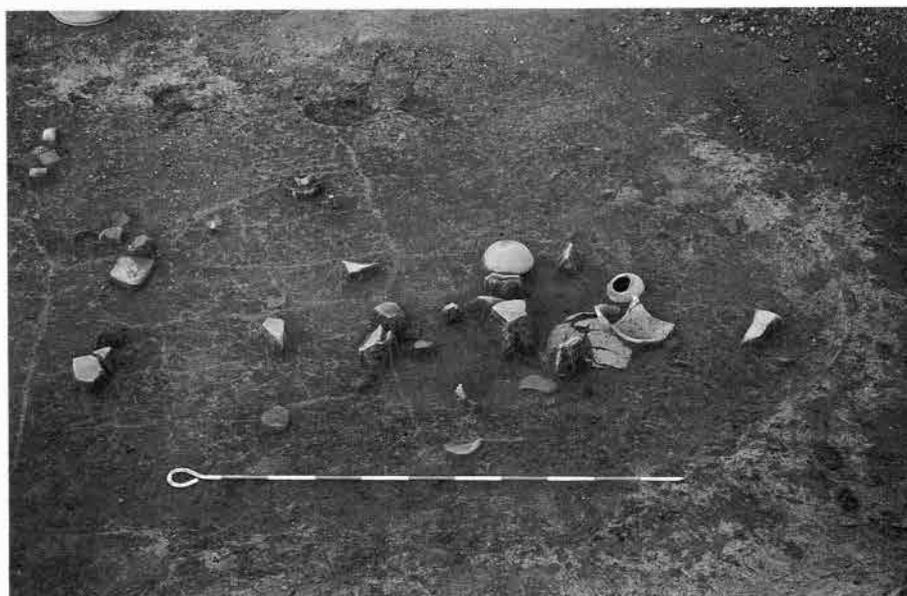
(2)土坑196土層堆積状況 (西から)



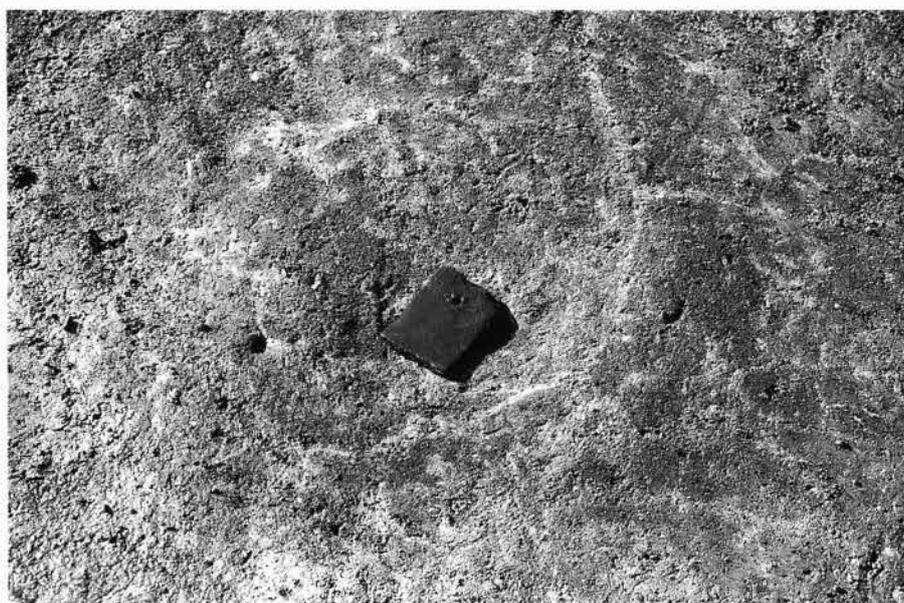
(3)土坑206土層堆積状況
(南西から)



(1)土坑131遺物出土状況
(南東から)

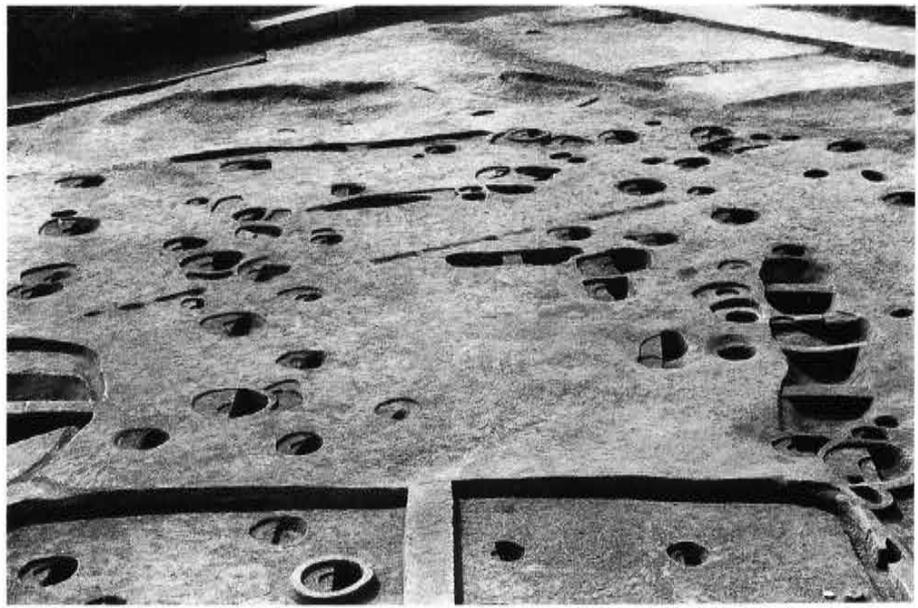


(2)土坑131遺物出土状況
(南西から)

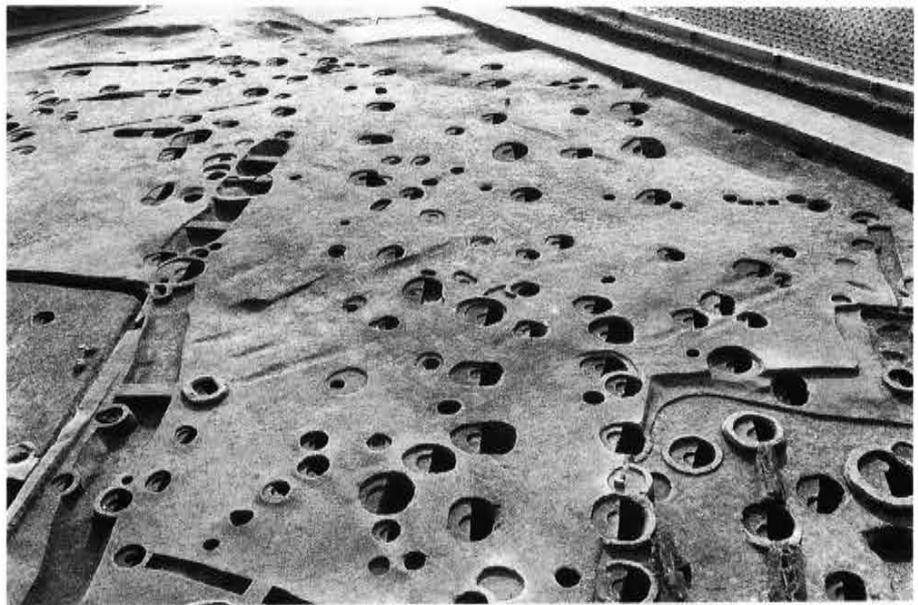


(3)土坑131砥石出土状況
(北から)

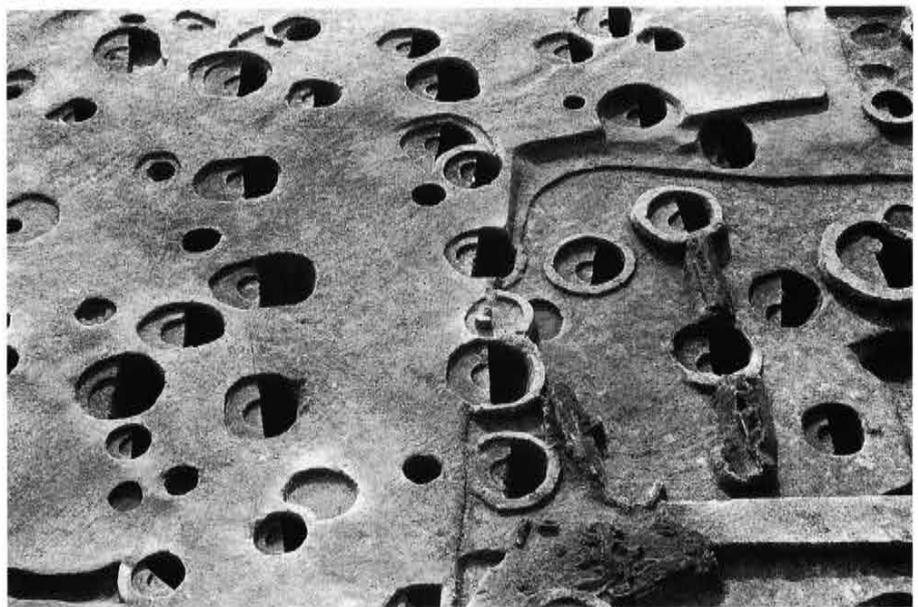
(1)掘立柱建物跡4・5及び
溝127・129・130検出状況
(北東から)

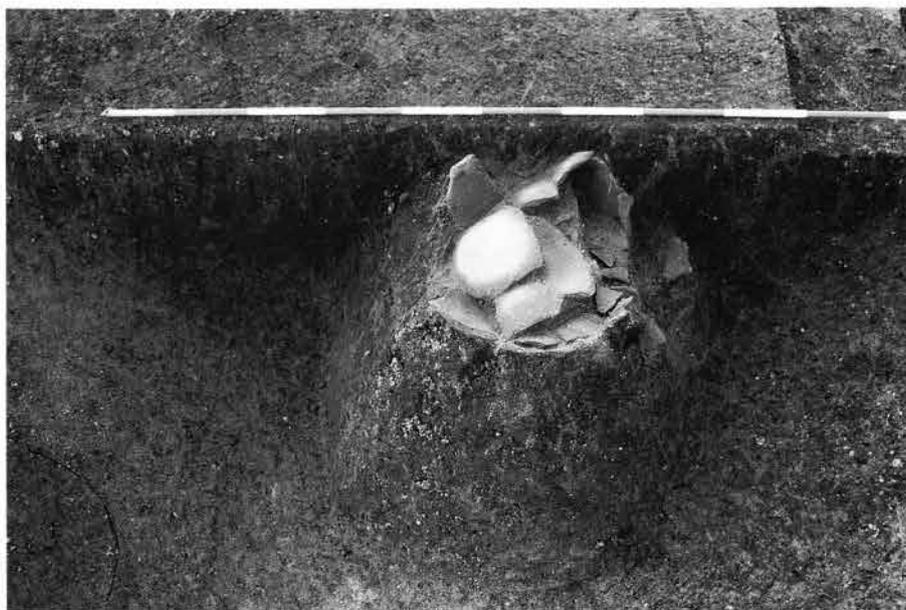


(2)掘立柱建物跡1～4検出状況
(北東から)



(3)掘立柱建物跡3検出状況
(北東から)





(1)土器埋納土坑116
須恵器・甕出土状況（東から）



(2)土器埋納土坑116
須恵器・甕出土状況（東から）



(3)柱穴58土師器埋納状況
（西から）

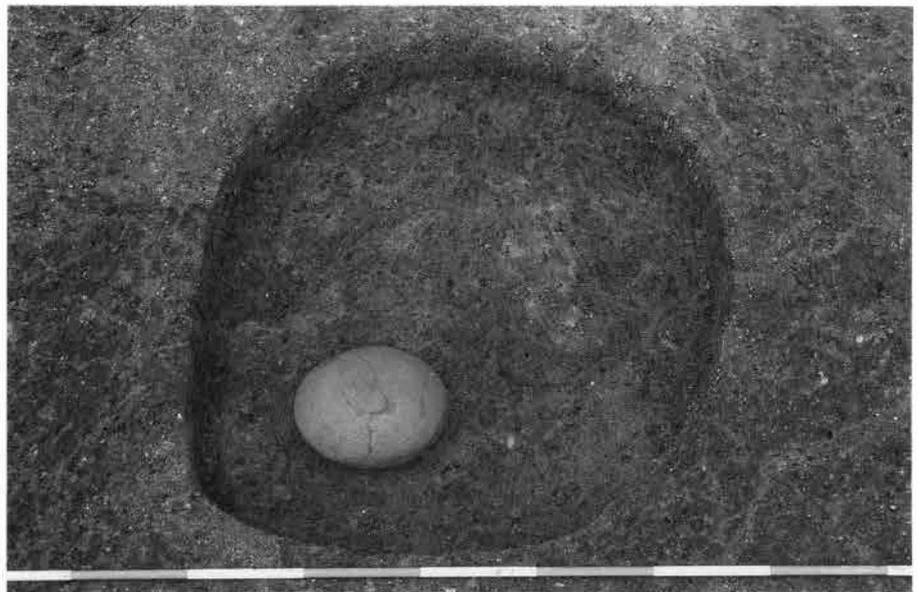
(1)馬歯埋納坑8 検出状況
(北から)



(2)馬歯埋納坑8 馬歯接写

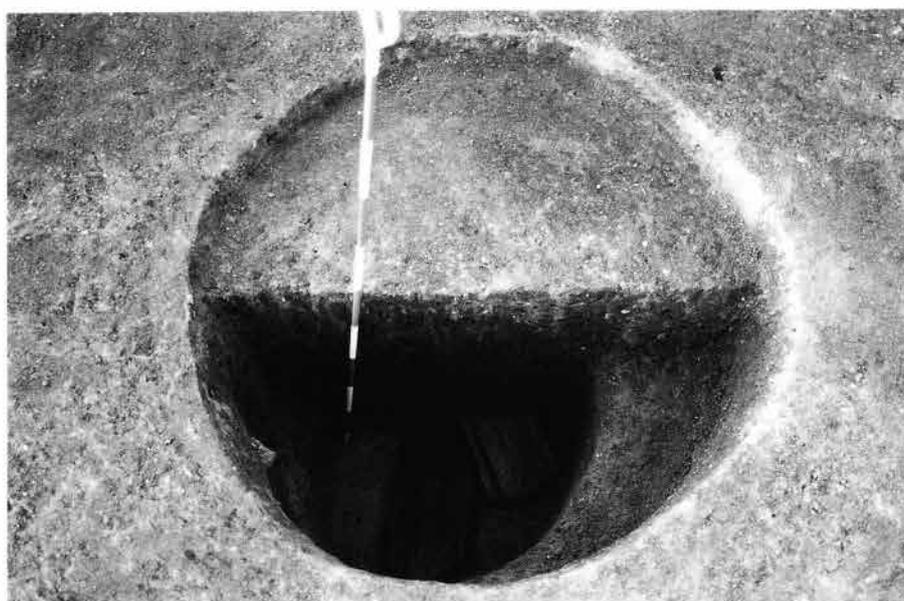


(3)柱穴155土師器・壺出土状況
(西から)

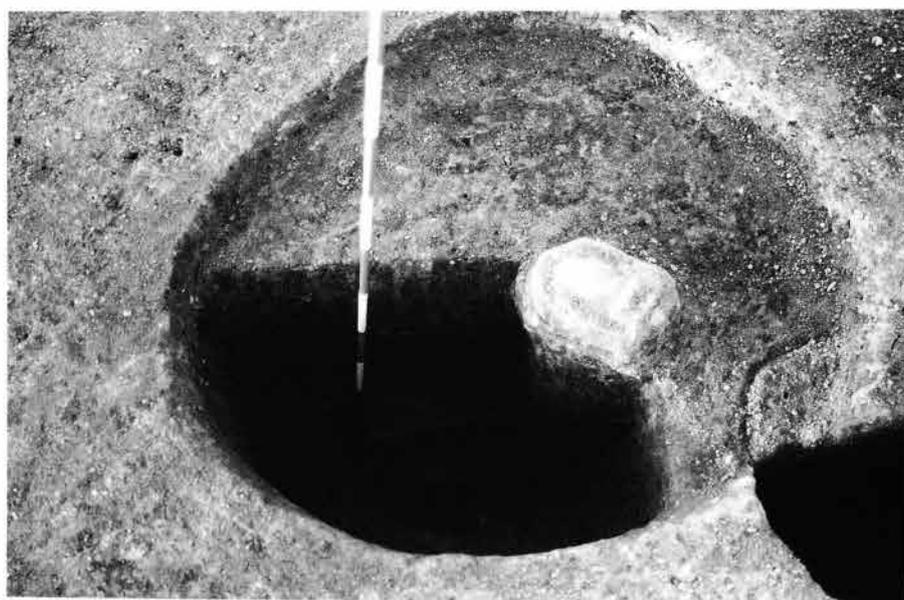




(1)柱穴154柱根検出状況



(2)柱穴63礎板検出状況（南東から）



(3)柱穴64礎板検出状況（南東から）



(1)柱穴653竪出土状況（東から）



(2)柱穴653高杯出土状況（東から）



(3)土坑132遺物出土状況（東から）



(1) 竪穴式住居跡17・18・171・656
検出状況（北東から）

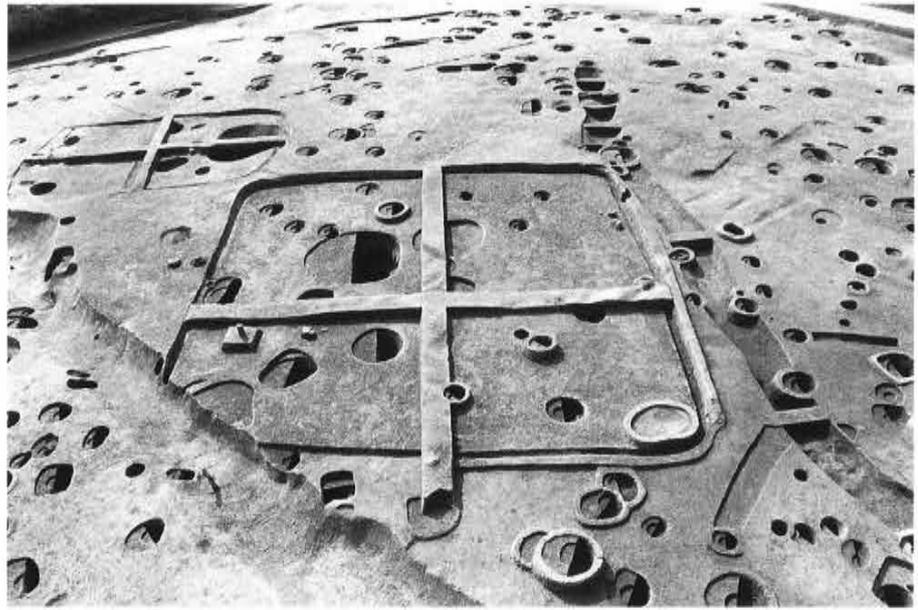


(2) 竪穴式住居跡17検出状況
（北西から）

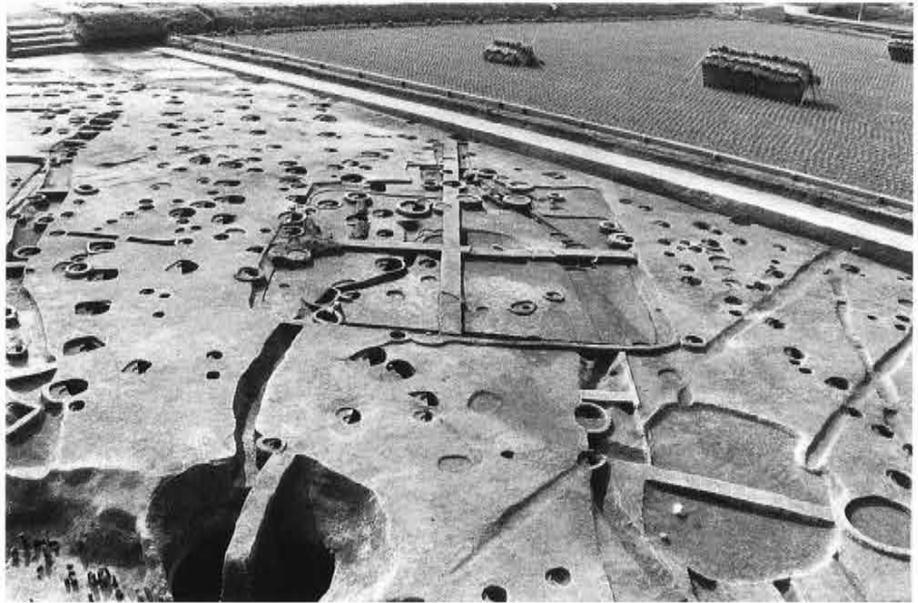


(3) 竪穴式住居跡17遺物出土状況
（南西から）

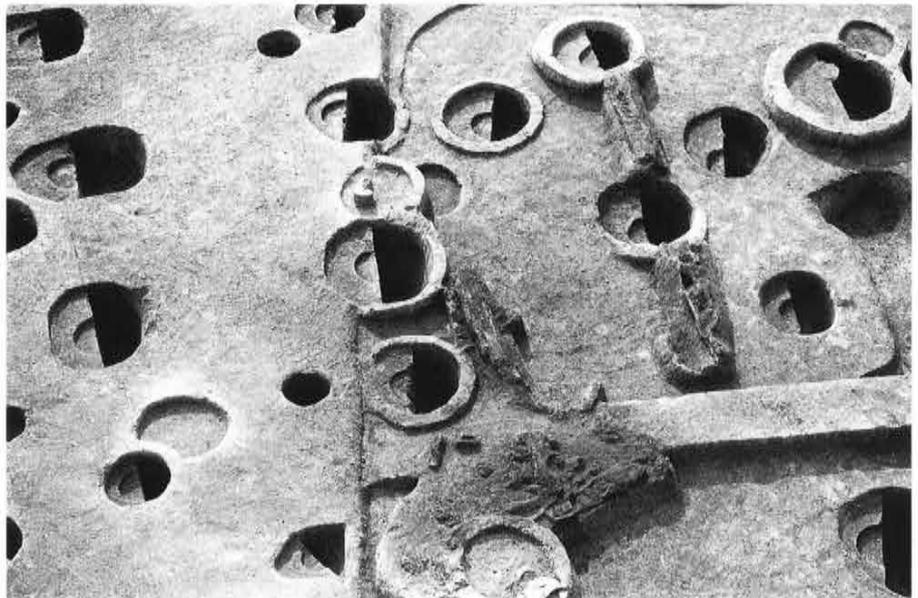
(1) 竪穴式住居跡18検出状況
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡171・656検出状況
(北東から)

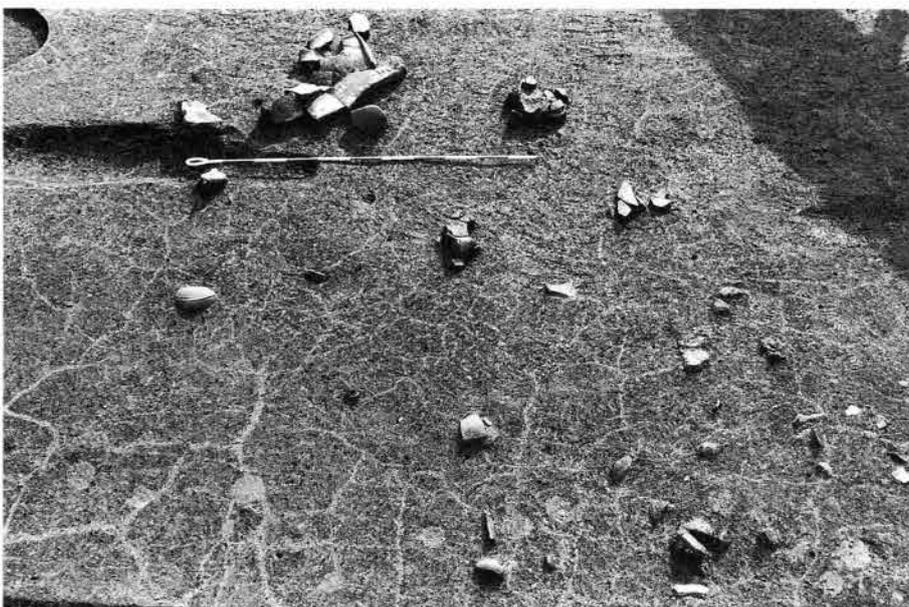


(3) 竪穴式住居跡171炭化材
出土状況 (北東から)





(1) 竪穴式住居跡120・205検出状況
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡120
南西突出部遺物出土状況
(北東から)



(3) 竪穴式住居跡120
南西突出部移動竈出土状況
(北東から)

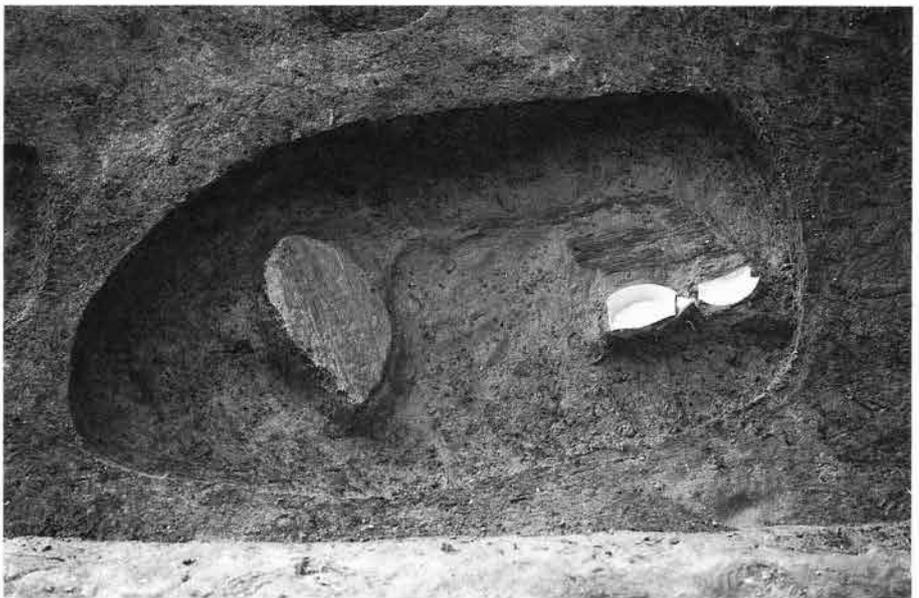
(1)掘立柱建物跡30検出状況
(北から)



(2)土坑145磔検出状況 (東から)



(3)土壙墓192遺物出土状況
(東から)





(1)試掘1 トレンチ遺構検出状況
(西から)



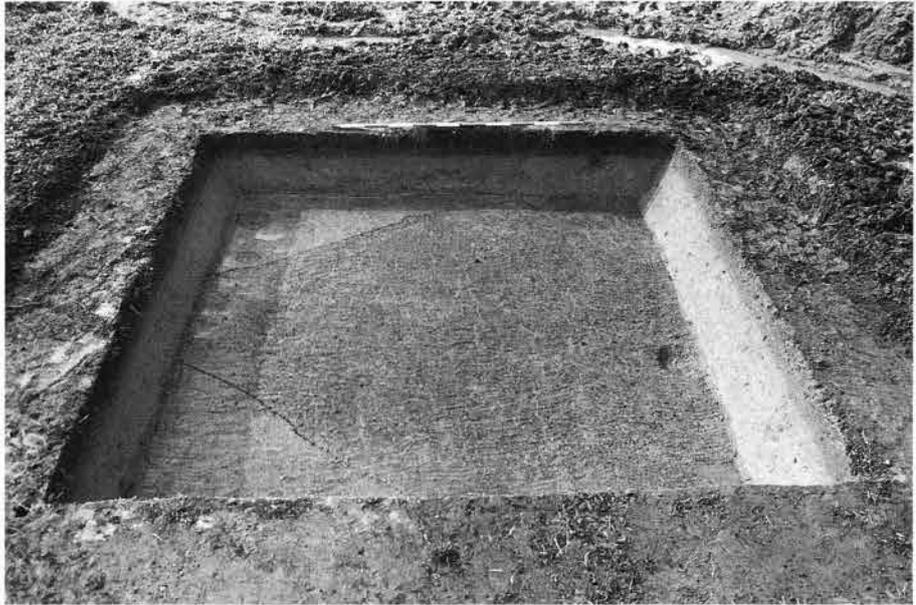
(2)試掘5 トレンチ遺構検出状況
(西から)



(3)試掘6 トレンチ遺構検出状況
(東から)

図版第21 森垣外遺跡第2次

(1) 試掘7トレンチ遺構検出状況
(東から)

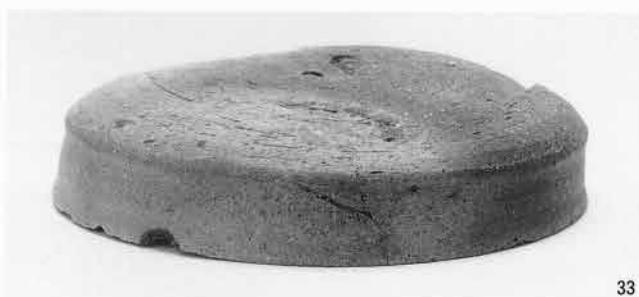


(2) 試掘9トレンチ断ち割り状況
(東から)



(3) 試掘11トレンチ
第4層南限検出状況 (北東から)







93



94



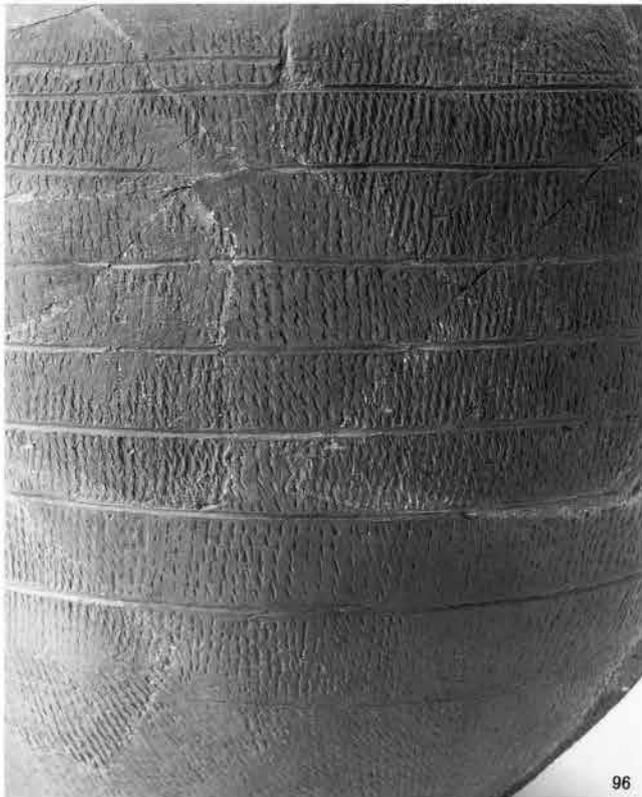
96



97



103



96



135



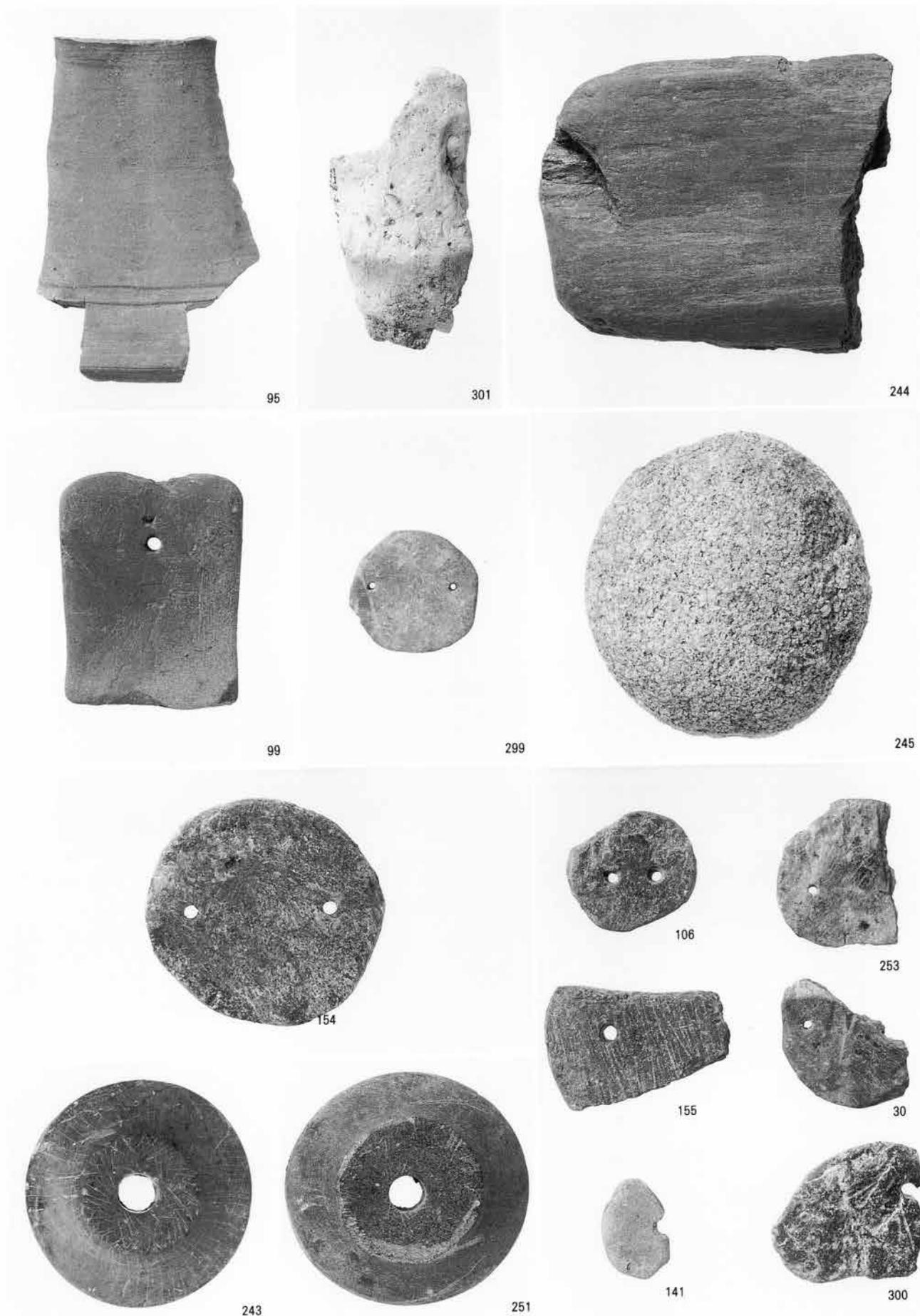
123



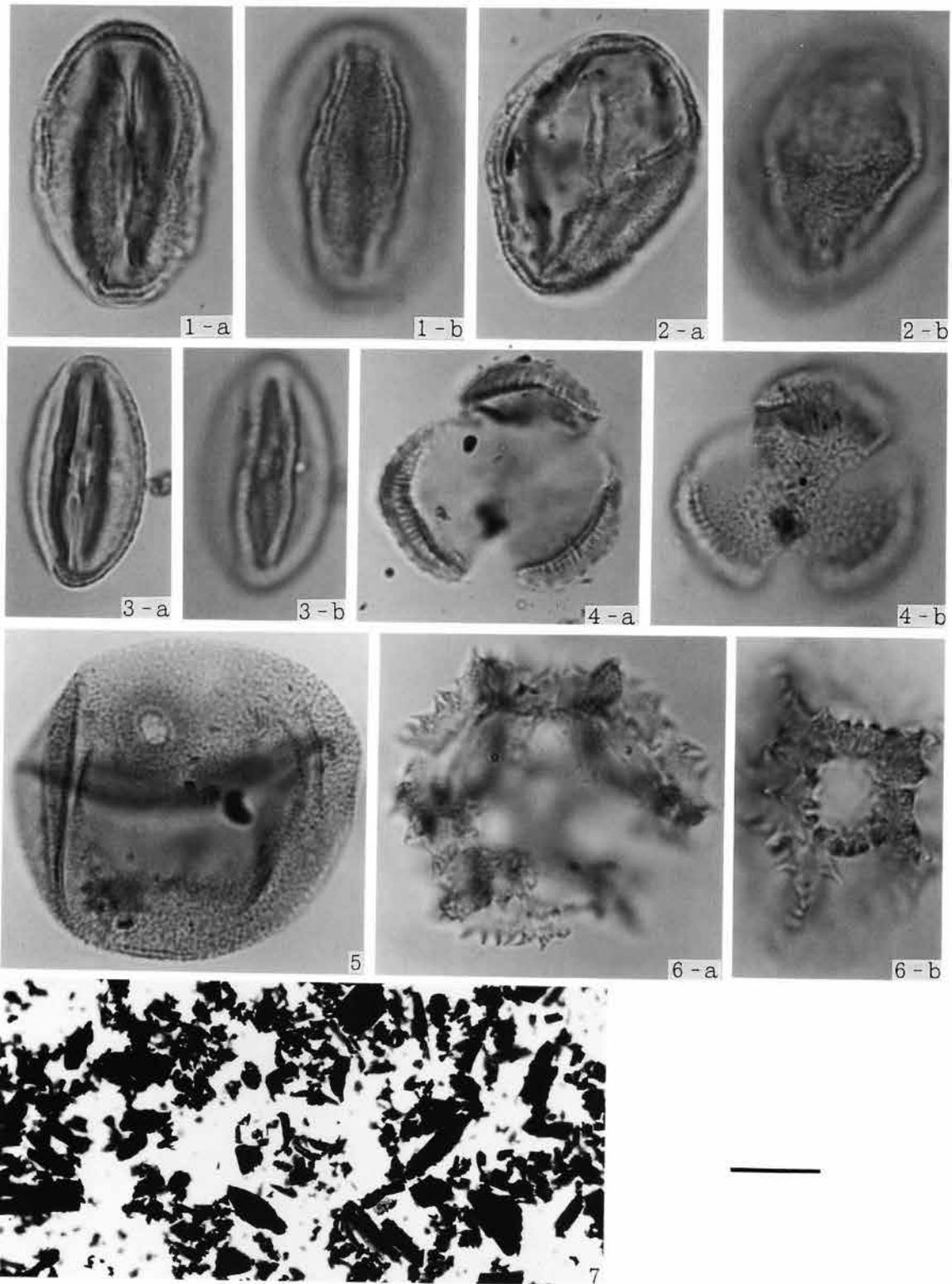




出土遺物(5)



出土遺物(6)



森垣外遺跡の花粉化石 (bar 1~6 : 10 μ m, 7 : 100 μ m)

1 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 2237 No.1

2 : コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 2236 No.1

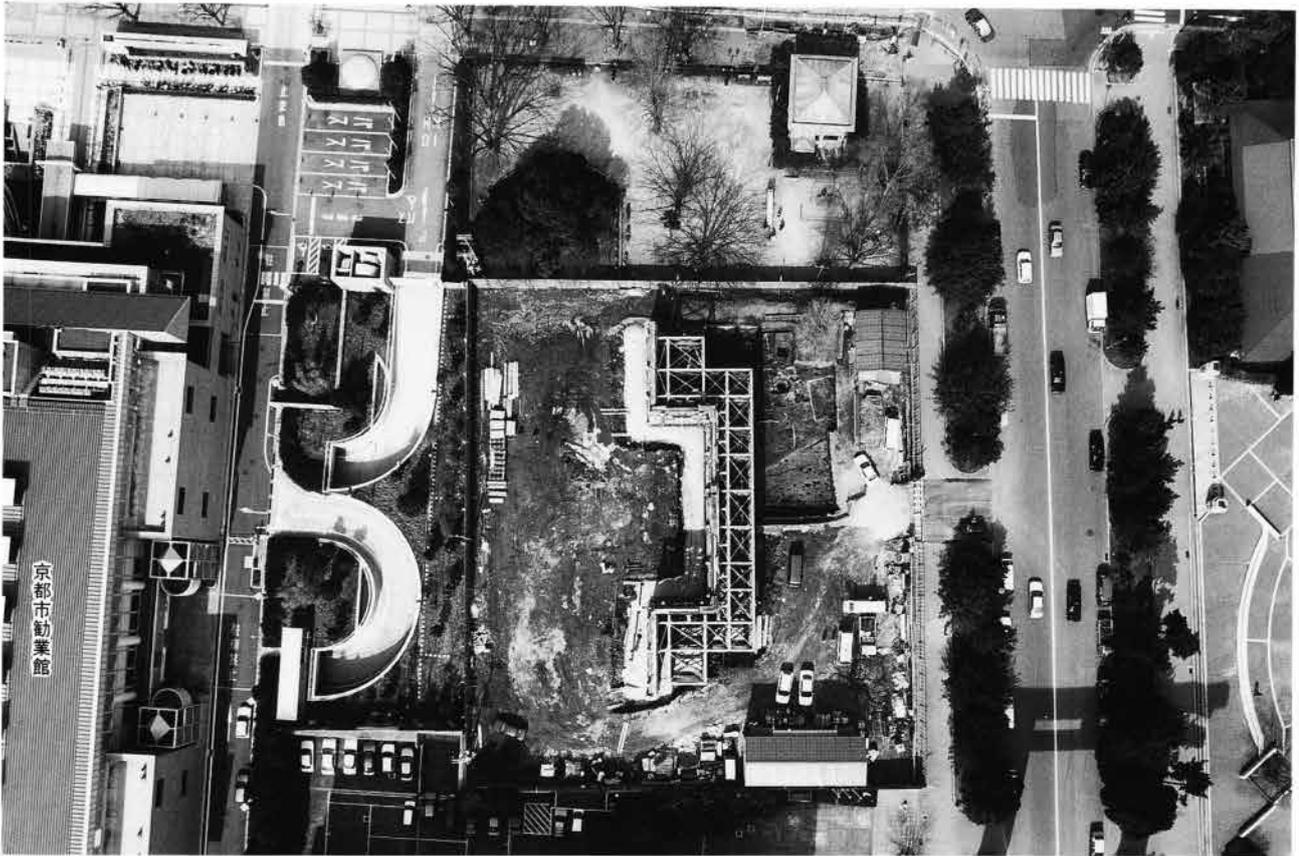
3 : シイノキ属マテバシイ属 PLC.SS 2234 No.1

4 : ヨモギ属 PLC.SS 2235 No.1

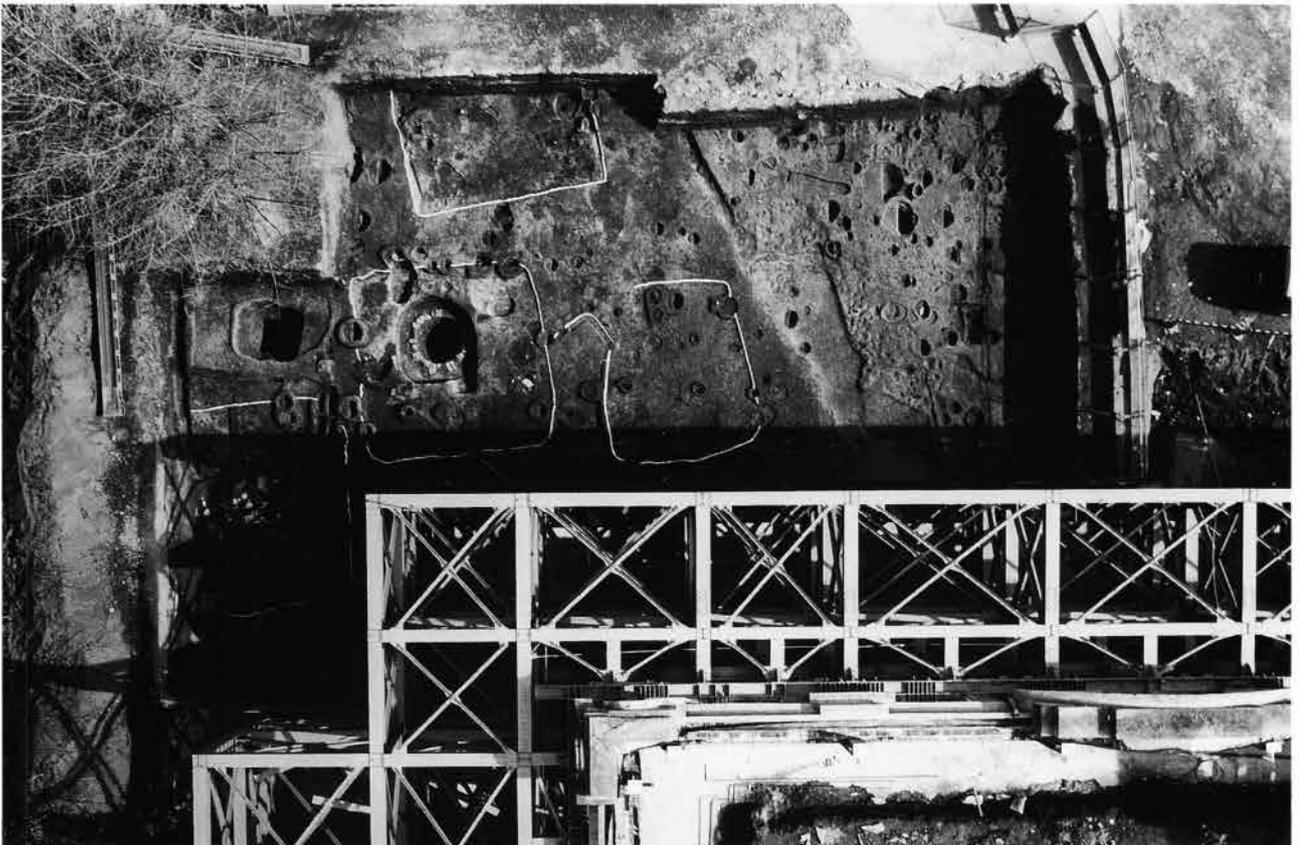
5 : イネ科 PLC.SS 2239 No.6

6 : タンポポ科 PLC.SS 2238 No.1

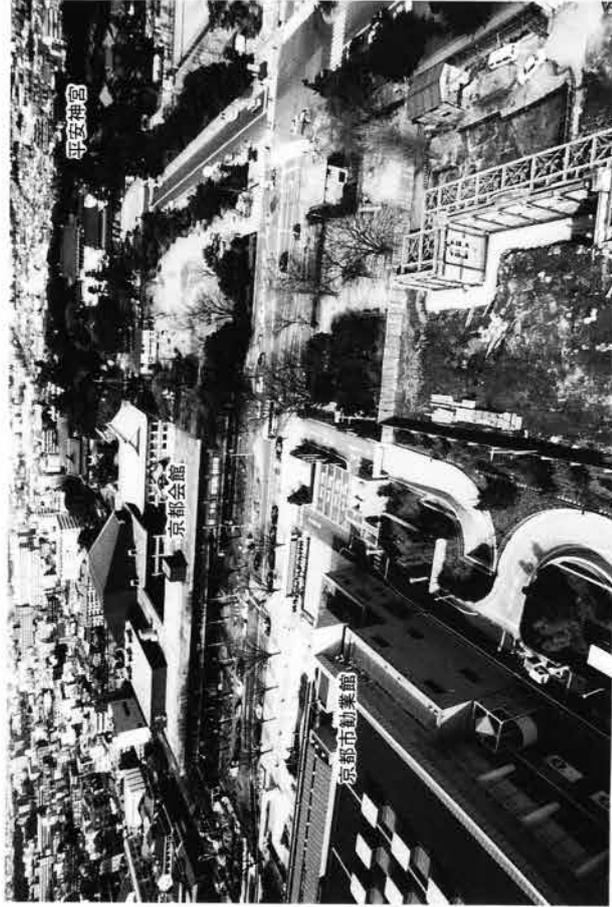
7 : プレパラートの状況 No.2



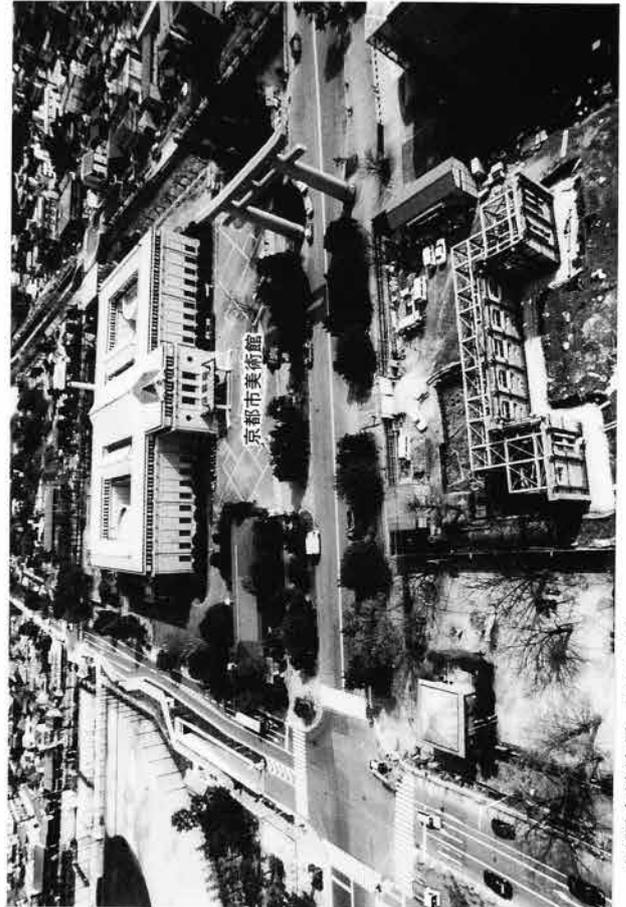
(1)調査地周辺 (上が北)



(2)トレンチ全景 (平成9年度、上が北)



(3)調査地遠景 (南から)



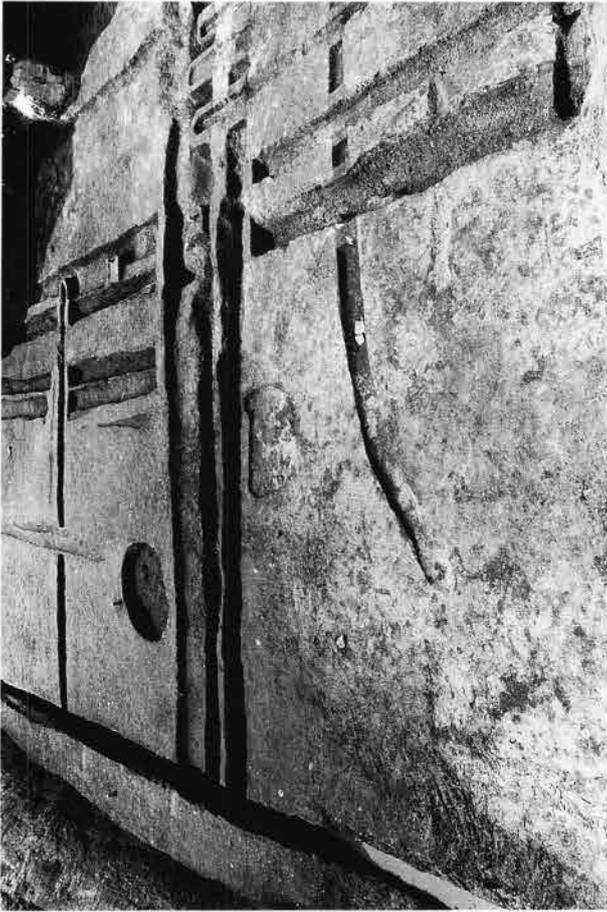
(4)調査地遠景 (西から)



(1)調査前風景 (平成9年度、東から)



(2)調査前風景 (平成10年度、東から)



(3)平成10年度全景(南部分、東から)



(4)平成10年度(北部分、東から)



(1)平成10年度全景(東部分、北から)



(2)平成10年度全景(南東部分、南から)



(3) S H204掘削状況 (南西から)



(4) S H198完掘状況 (西から)



(1) 竪穴式住居跡群全景 (南から)



(2) S H197完掘状況 (北東から)



(3)平成10年度南壁中央上層（北東から）



(4)平成10年度南壁中央下層（北から）



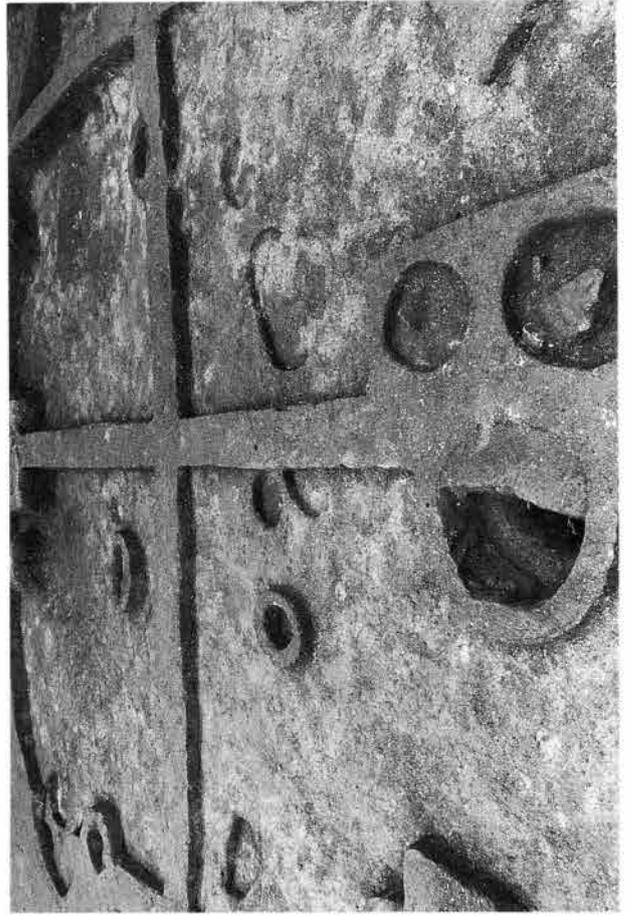
(1)平成9年度北壁東側（南西から）



(2)平成10年度東壁中央（南西から）



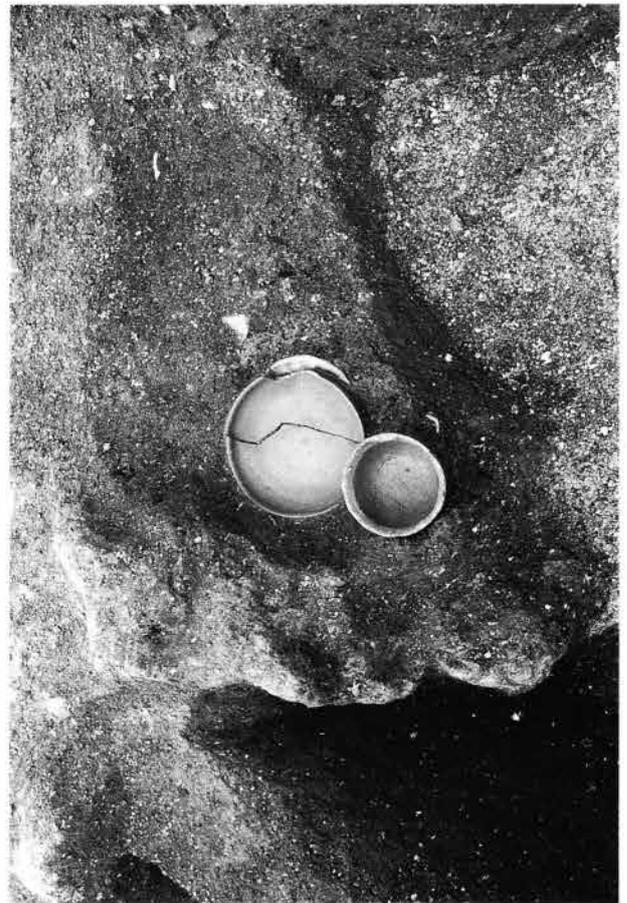
(3) S H157掘削状況 (南から)



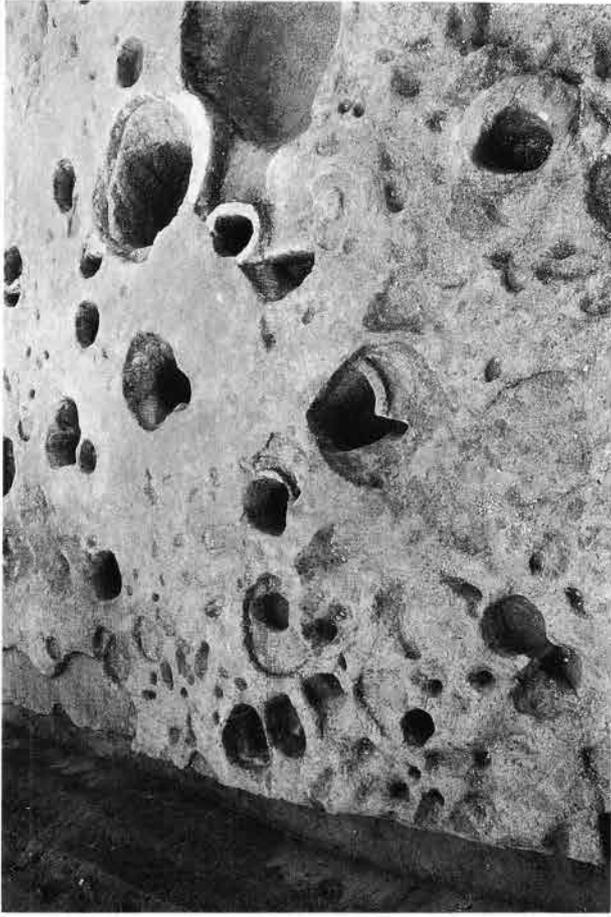
(4) S H177掘削状況 (東から)



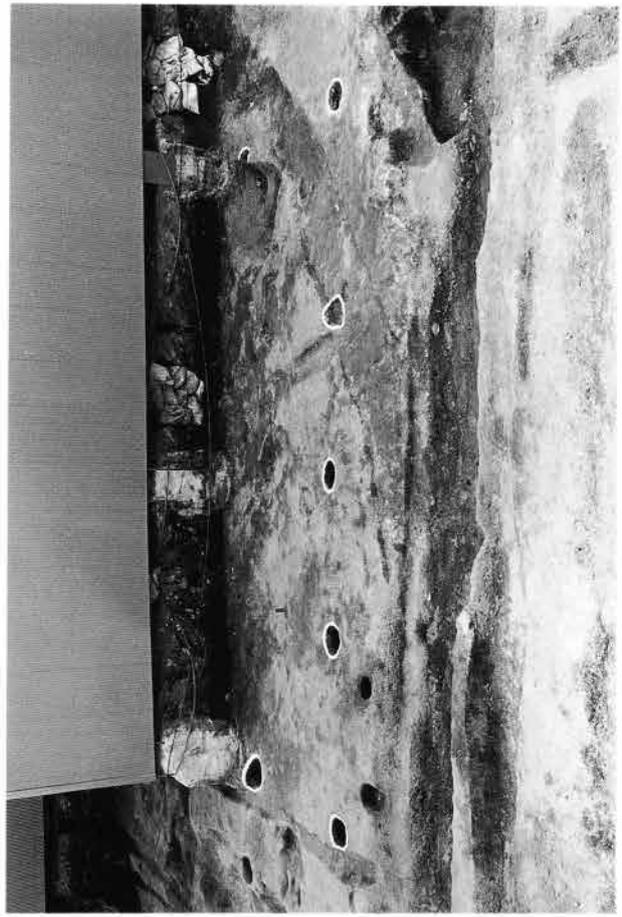
(1) S H169完掘状況 (南から)



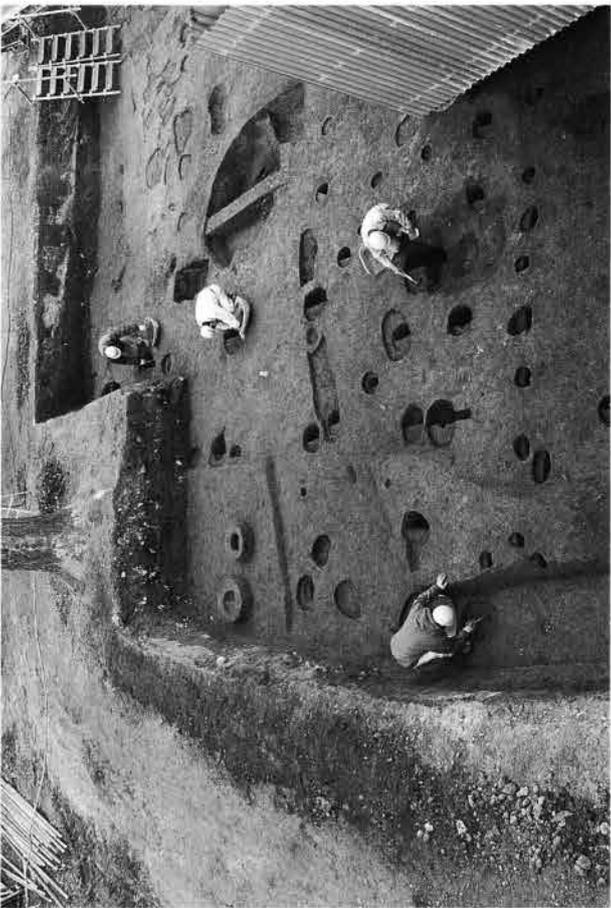
(2) S H169竈東側遺物出土状況 (南から)



(3) S B 80全景 (東から)



(4) S B 631全景 (東から)



(1) S B 11掘削状況 (西から)



(2) S B 43全景 (南から)



(3) S E 01完掘状況 (南から)



(4) S E 01底付近竹出土状況 (南から)



(1) S E 165完掘状況 (東から)



(2) S E 165井戸枠出土状況 (西から)



(3) S K166掘削状況 (東から)



(4) S K160遺物出土状況 (西から)



(1) S E01井戸枠断面 (南から)



(2) S E531完掘状況 (東から)



(3)沼状地形遺物出土状況(南東から)



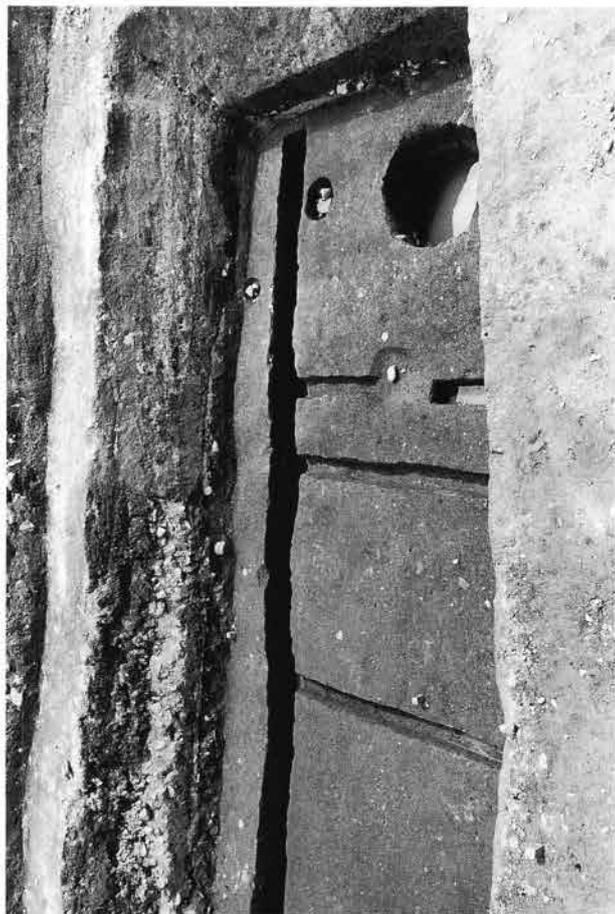
(4)沼状地形遺物出土状況(南から)



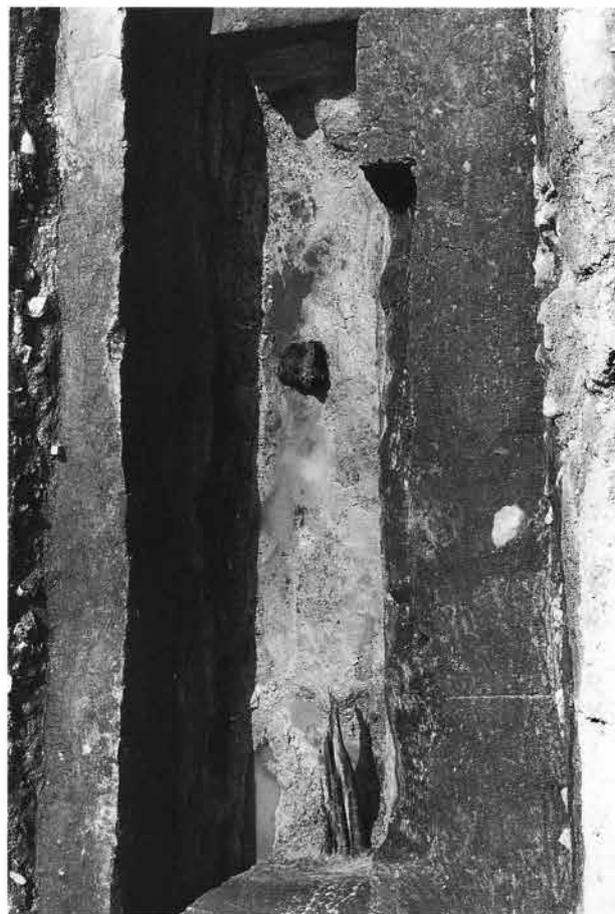
(1)沼状地形全景(南から)



(2)沼状地形断面(北西から)



(3) 試掘トレンチ全景 (北から)



(4) 試掘トレンチ完掘状況 (北から)



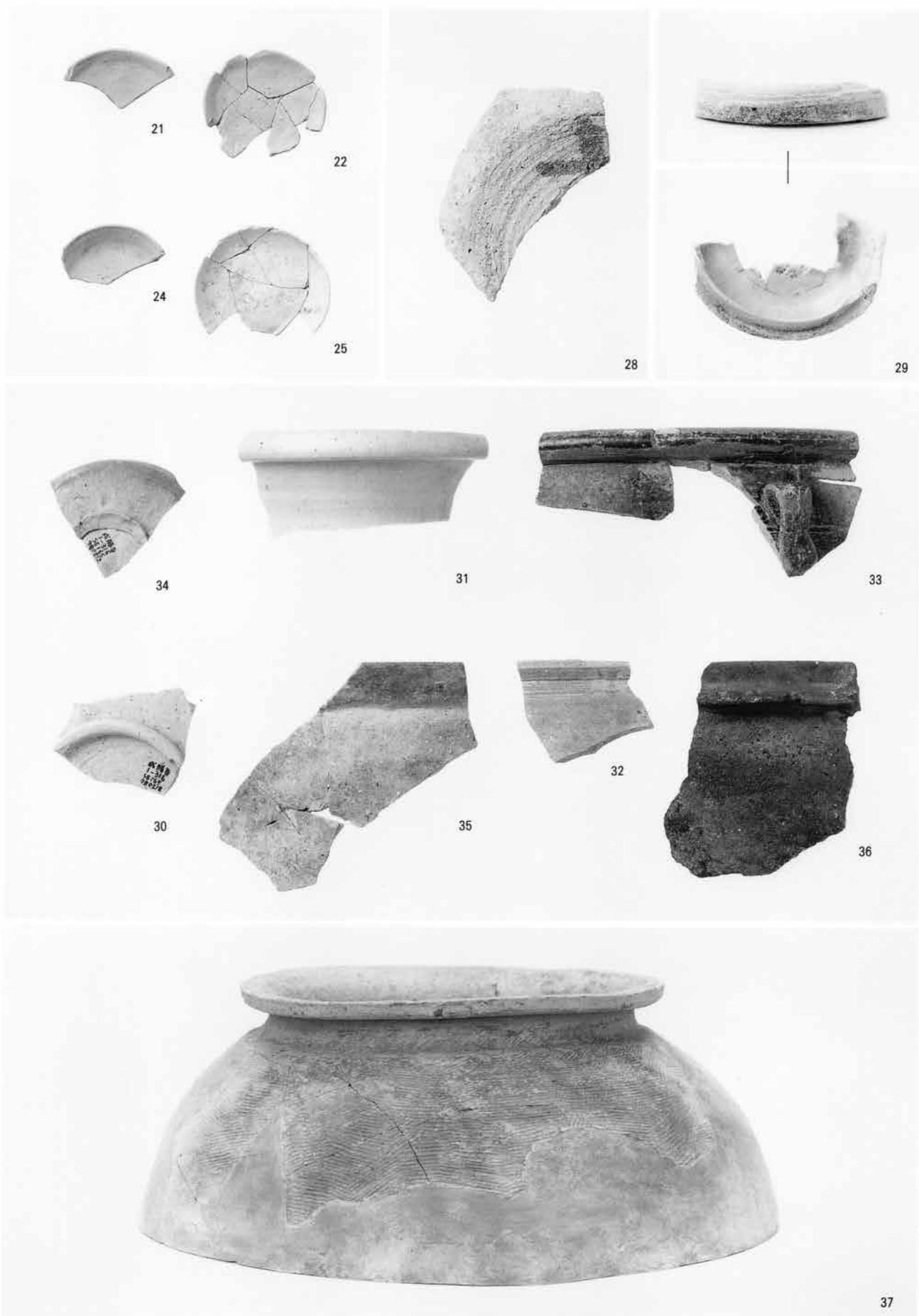
(1) S K532完掘状況 (南から)



(2) S D516・517断面 (南から)



出土遺物(1)





40



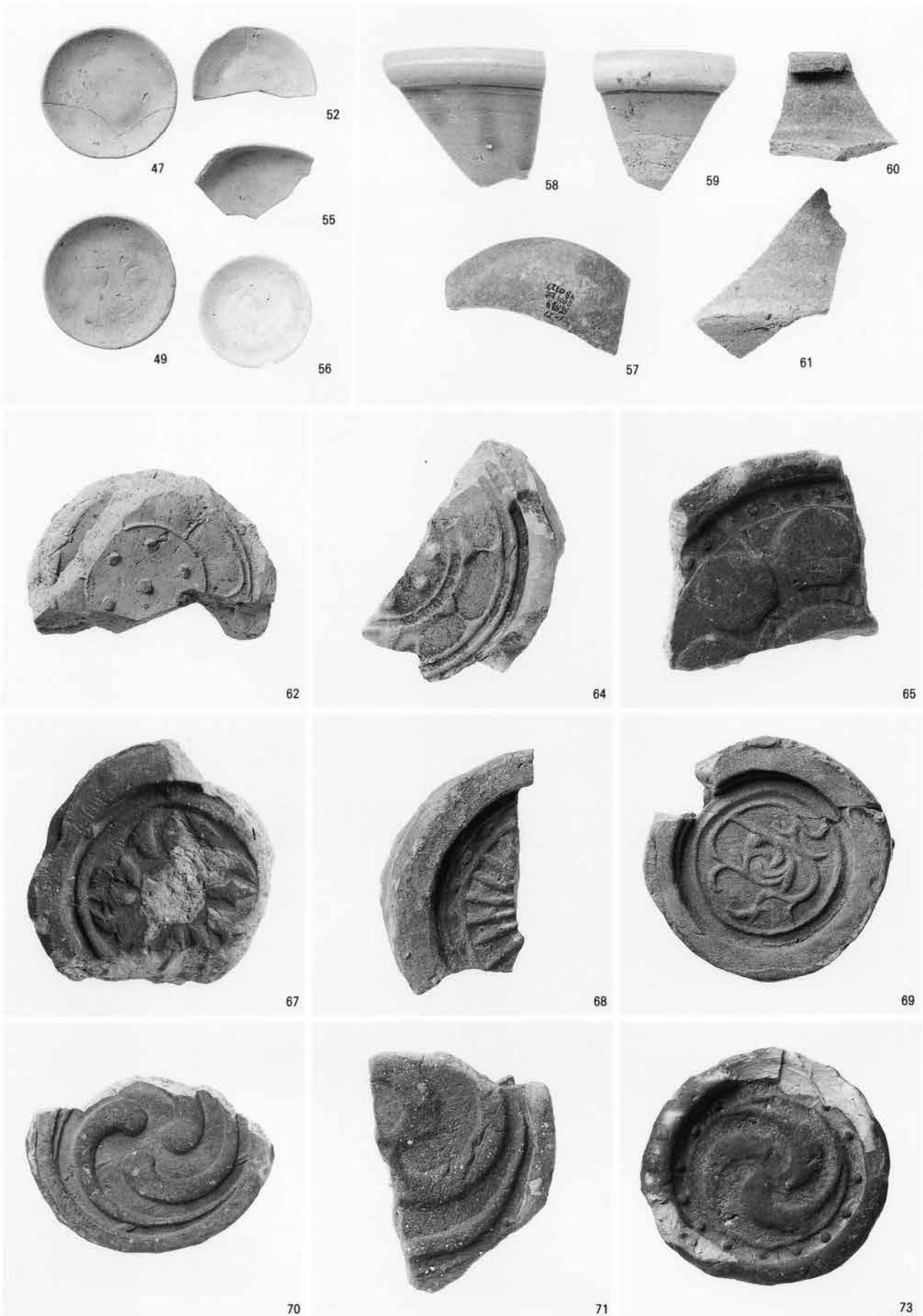
39



38



44





75



74



76



79



80



78



83



86



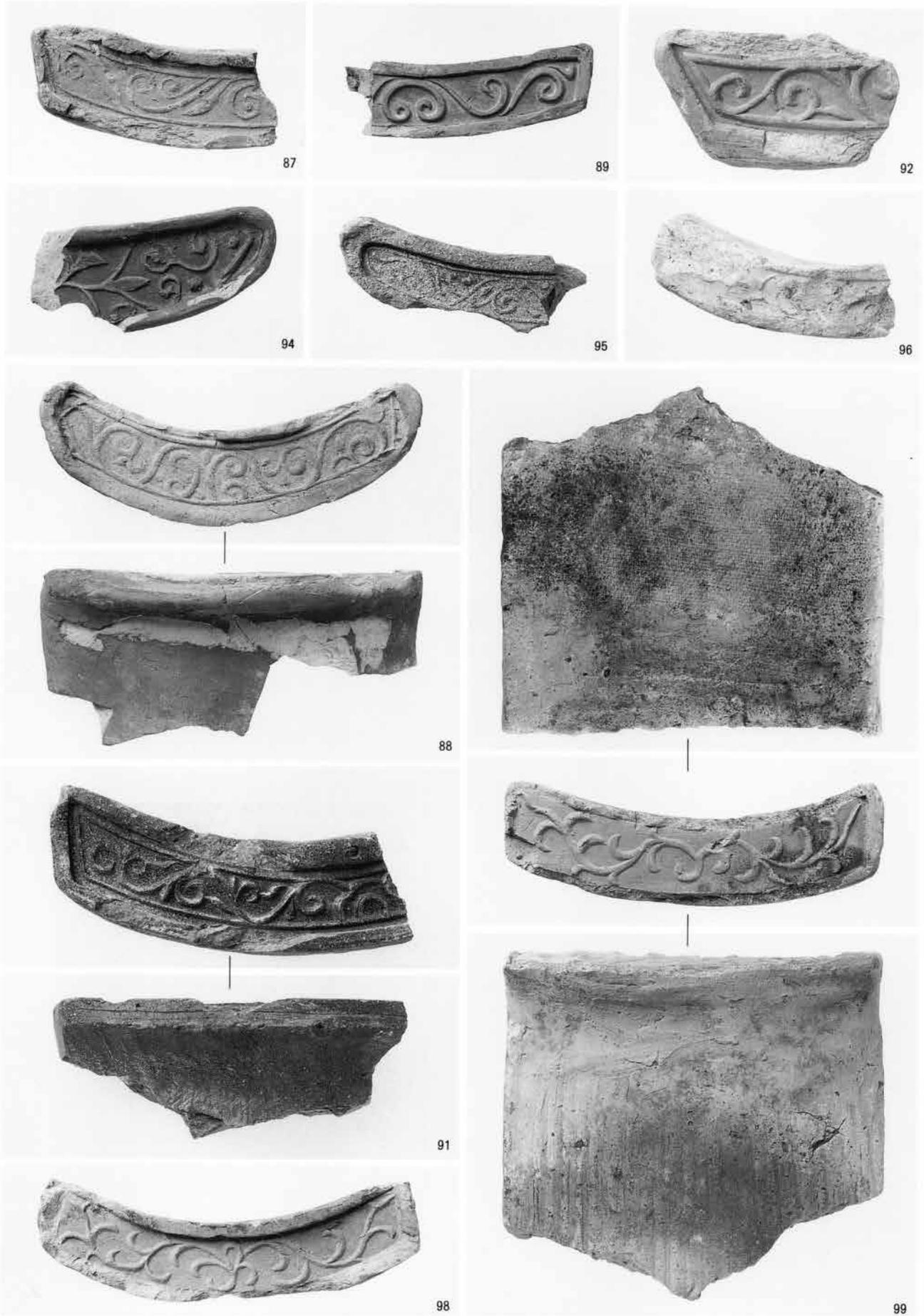
81



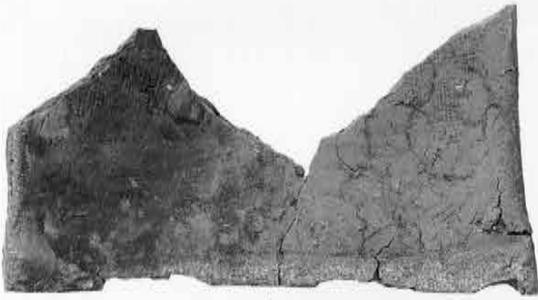
82



84



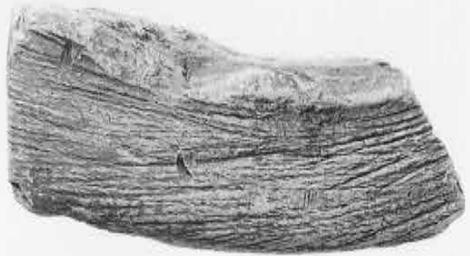
出土遺物(6)



100



101



102



103



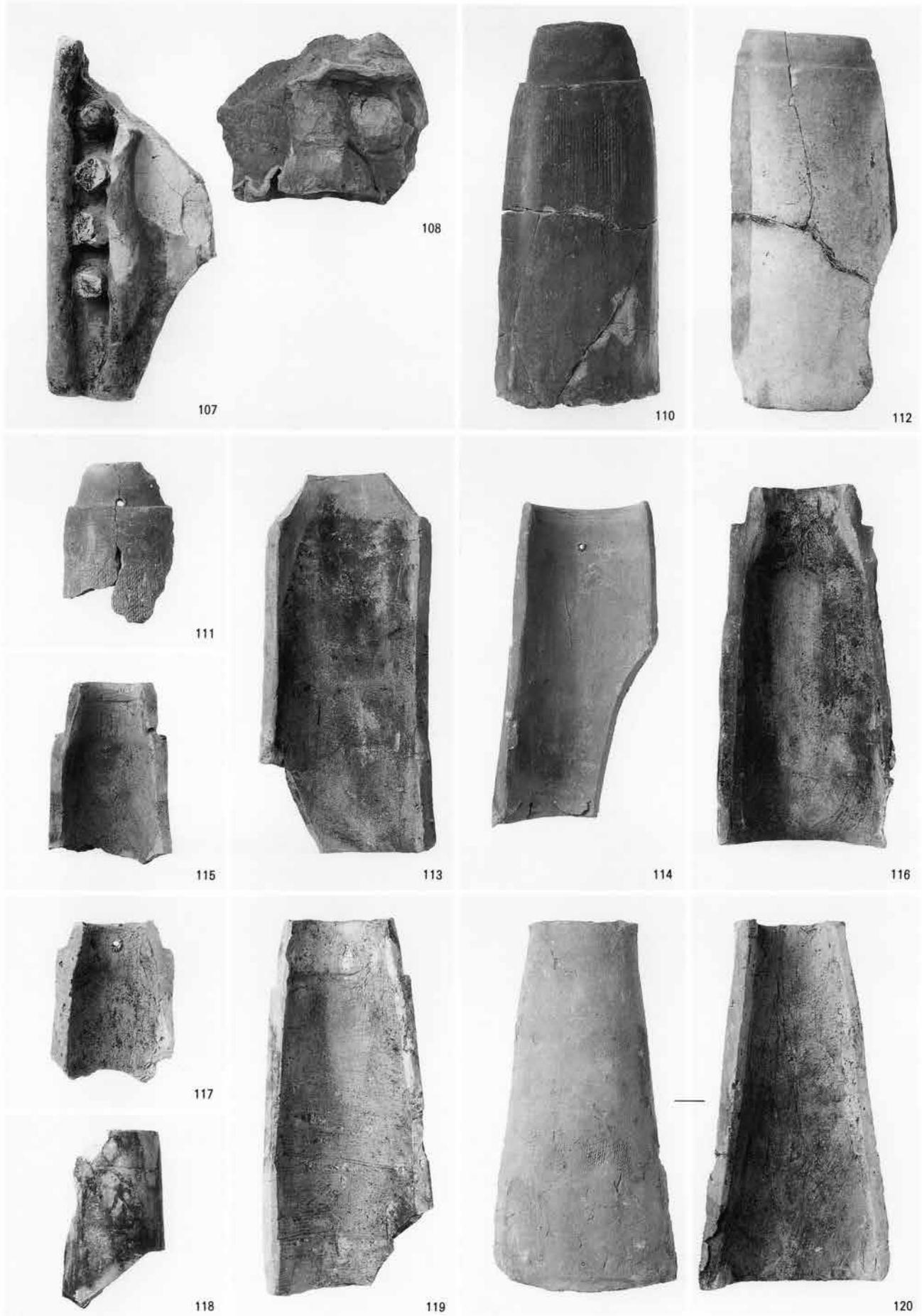
104



105



106





121



122



124



126



129



128



130



132



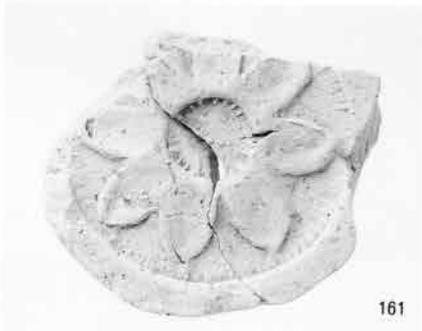
133



134



出土遺物(1)





182



185



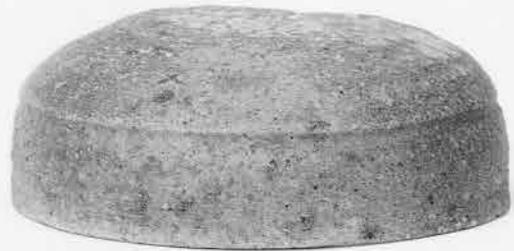
187



186



191



199



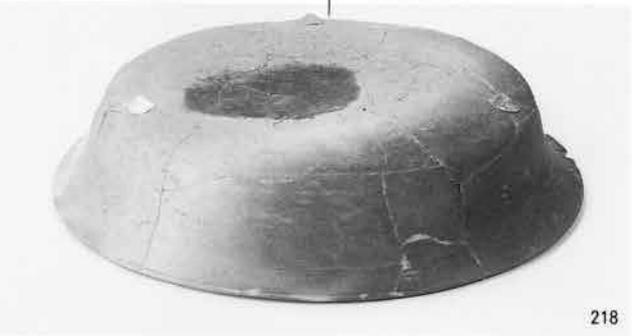
190



200

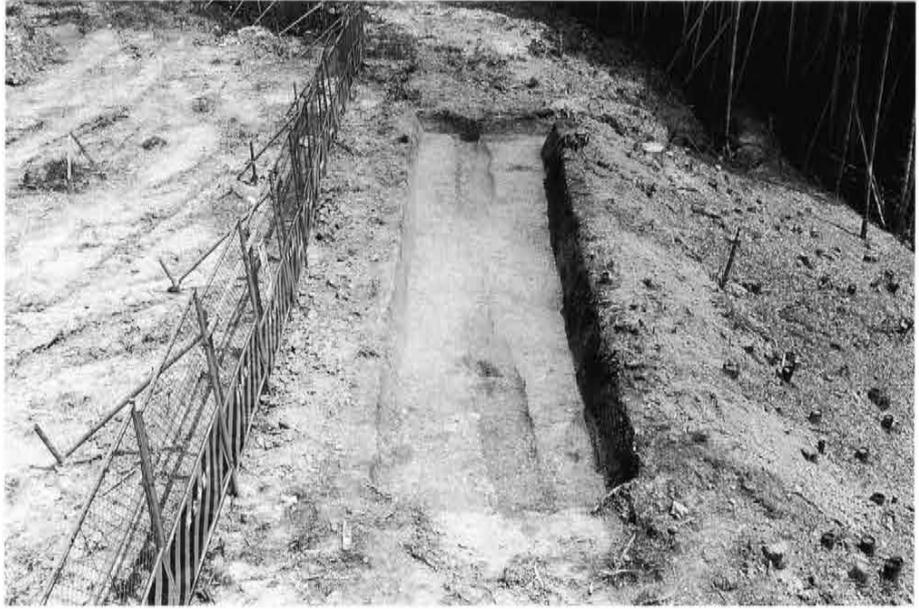


201





(1) 1 トレンチ全景 (南から)



(2) 2 トレンチ北壁土層 (南から)



(3) 3 トレンチ内検出流路 (南から)





(1) 3・4トレンチ全景（東から）



(2) 3・4トレンチ全景（北西から）



(3) 3・4トレンチ谷部全景
（北北東から）

図版第57 畑ノ前遺跡

(1) 3・4トレンチ S K02検出状況

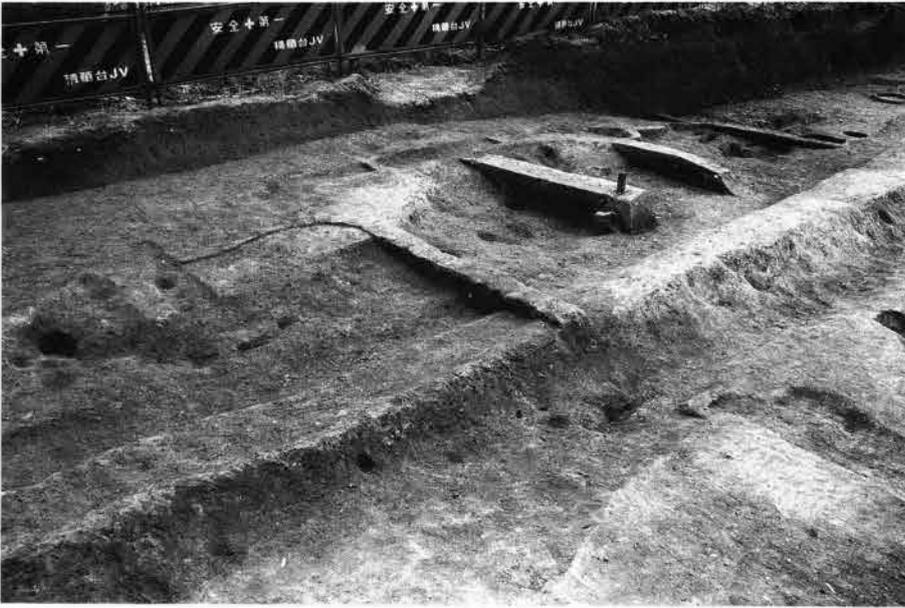


(2) 3・4トレンチ S K24検出状況
(南南東から)



(3) 3・4トレンチ S K08検出状況
(北から)





(1) 3・4トレンチSK22検出状況
(北東から)



(2) 3・4トレンチSK18検出状況
(北東から)



(3) 3・4トレンチ平坦部西半遺構
出土状況

図版第59 畑ノ前遺跡



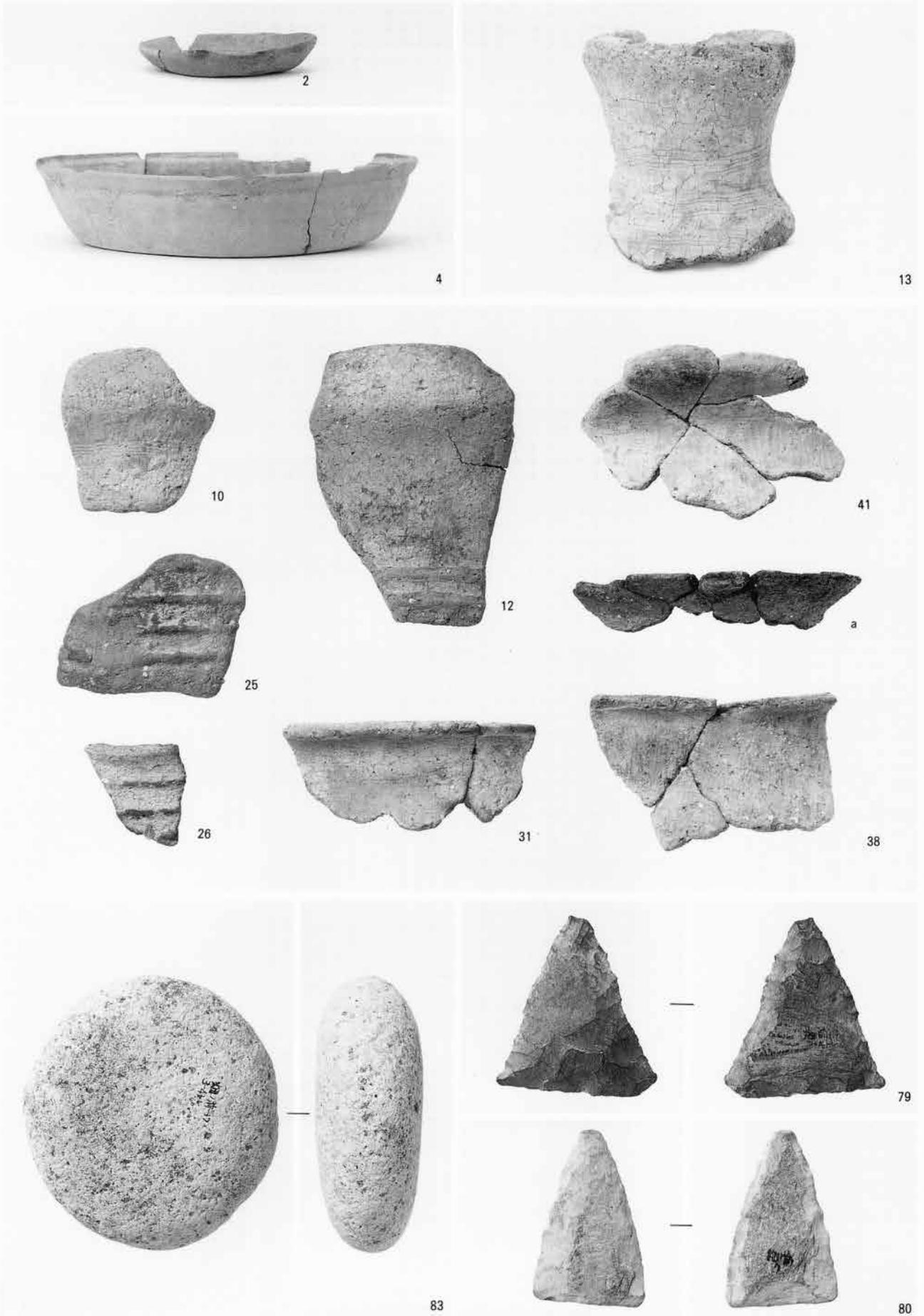
(1) 3・4トレンチ S D23検出状況
(北西から)



(2) 3・4トレンチ S D23検出状況
(東から)



(3) 3・4トレンチ谷部上端部
(北東から)



畑ノ前遺跡出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | | | | | | | | |
|--|---|-----------------|------|--|--------------|--|------------------------|-------|
| 書名 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査概報 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第86冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 小池 寛・中村周平・野島 永・有井広幸・岩松 保 | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1999 年 1 月 26 日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| もりがいと せきだい2じ 森垣外遺跡 第2次 | そうらくぐんせいか ちようみなみいなや づま 相楽郡精華町南稲 八妻 | 366 | 26 | 35° 45' 19" | 135° 47' 21" | 19971111 ～ 19980311 | 1,800 | 道路建設 |
| じょうしょう じあと・おか ざきいせき 成勝寺跡・ 岡崎遺跡 | きょうとしさきょう くじょうしょうじち よう9ばんち 京都市左京区岡崎 成勝寺町9番地 | 103 | 49 | 35° 0' 34" | 135° 47' 6" | 19980109 ～ 19980318 19980422 ～ 19980610 | 710 | 図書館新築 |
| はたのまえい せき 畑ノ前遺跡 | そうらくぐんせいか ちようおおあざうえ だちない 相楽郡精華町大字 植田地内 | 366 | 51 | 34° 44' 54" | 135° 47' 28" | 19980501 ～ 19980624 | 350 | 道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 森垣外遺跡 第2次 | 集落・古墳 | 古墳 鎌倉～江戸 | | 大壁住居跡・竪穴式住居跡・ 掘立柱建物跡・溝・方墳 掘立柱建物跡・土壇墓・溝 | | 陶質土器・須恵器・ 土師器・石製品 青磁・瓦器 | | |
| 成勝寺跡 ・岡崎遺跡 | 集落 寺院 | 弥生～古墳 平安～鎌倉 | | 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡 井戸・掘立柱建物跡・土坑 | | 弥生土器・土師器 須恵器・白磁・青磁 ・瓦器・瓦 | | |
| 畑ノ前遺跡 | 集落 | 弥生 奈良 | | 土壇墓・段状遺構・土坑 土坑 | | 弥生土器・石器 瓦 | | |

京都府遺跡調査概報 第86冊

平成11年1月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)